

幼なじみがくる！

荒川^{あらかわ}

産^{うぶ}土^な 瀬^み都^つ土^ち







プロローグ「雨の中、くる！」	5
第一章「心を、かさねる！」	12
第二章「技を、きたえる！」	52
第三章「過去をよびさます！」	136
エピローグ「幼なじみがくる！」	216

プロローグ 「雨の中、くる！」

激しい雷雨の夜のことだった。

俺は一昨日からずっと降り続けている大粒の雨が窓を叩く音を聞きながら、何となしにテレビのニュースを見ていた。

『依井塚二丁目で発見された男女の死体には、野生動物に噛まれたような痕が無数にあり、そこから血を抜き取られた形跡が――』

ここから一キロも離れていない場所で発生したその猟奇的な事件を説明するアナウンサーの声に、夏の夜の嵐の騒擾がおどろおどろしく雰囲気添える。

家には俺一人だった。

唯一の家族にして同居人は、長期外出中だ。

まあ、だから何だというわけでもないのだが。今さらこういうのを怖がる年でもあるまいし

……

しかしその時、不意にチャイムが「びんぼーん」と鳴らされ、その音が思いがけず大きく響いたものだから、俺はビクツ、と肩を跳ね上げてしまう。

今は長期不在中であるこの家の主が、いいかげん年を食って耳が遠くなっているので、音量は最大に設定してあるのだ。

「……はいはい。どちらさーん？」

肩をぐるぐると回して、それを誰にともなく誤魔化しながら、畳に手をつき、座布団から腰を上げる。

チャイムが鳴ったのは勝手口の方だ。

暗く長い廊下を小走り気味に駆け抜け、錆びの浮き始めたノブに手をかける。

ぎい、と古びたドアが軋み音を立てて開いた。

その瞬間、巨大な雷光が迸って、田舎特有の真っ黒な夜闇を真昼のように明るく染め上げた。同時に白い光の中に浮かび上がった影を見て、俺は目を見開く。

「……天野？」

それは幼なじみであり、高校の同級生でもある少女の姿だった。

学校から帰ってきてから着替えてもいないのか制服を着たままだ。

そして傘も差さずにここまで歩いてきたらしく、夏服のセーラー服やスカートの生地がべったりと体に張り付いている。

トレードマークであるポニーテールの黒髪も、大量の雨水を吸ってぼたぼたと水滴を滴らせていた。

「し、信ちゃんん。わ、わた、わたし――」

やがて、その少女がぼろぼろと涙をこぼしながら顔を上げ、

「わたし、吸血鬼になっちゃったよぉ!!」

小さな口から、彼女には似つかわしくない鋭い犬歯を覗かせながら、こちらに飛び掛かって

きたのだった。

「ふええーん、お腹が満ちていくよおー。信ちゃん、ありがとー!」

居間で女の子座りをして両手に豚の血のソーセージを握った天野が泣きじゃくりながら、もっ、もっ、もっ、とそれを口の中に押し込んでいく。

俺は壁際で畳の上に尻をついてへたり込み、肩で息をしていた。

噛まれこそしなかったが、鋭い爪で引っかかれたTシャツはあちこち破れ、皮膚が裂けて血が滲んでいる。さすが吸血鬼の膂力は凄まじく、取り押さえるのに少し手間取ってしまった。結束バンドで一時的に動けなくなった後、台所から山盛りのブラッドソーセージを持ってきて口の中に突っ込むと天野はおとなしくなった。

ジジイがスペイン土産を送ってきてくれていて本当に良かった……

「それで、天野」

「ほえ？」

ようやく呼吸が整い、声をかけると、自制心を取り戻したので今は拘束を解かれている天野が、口いっぱい腸詰めを頬張った姿で振り返る。

「いったい何でそんなことになったんだよ」

「えっと……」

「そういえば今週ずっと学校休んでたな。ひょっとしてそのせいで家に籠ってたのか？」

「……うん」

天野は口からソーセージを離すと、こくりとうなずき、ぼつりぼつりと話し始めた。

彼女が言うには、先週の水曜あたりから体調の異変を感じていたらしい。

はじめは口の中が妙に落ち着かない程度。だが翌日には太陽の光をひどく疎ましく感じるようになり、犬歯が急激に成長し始めた。そして繰り返し繰り返し、自分が人を襲って血を吸うイメージが頭の中に浮かび上がり、猛烈な飢餓感にも襲われるようになった。

恐ろしくなった彼女は金曜からはずっと自宅を閉ざし、雨戸を閉め切った部屋でガタガタと震えながらじっとうずくまっていたそうだ。

幸か不幸か、天野もまた両親が出張中で、今の俺と同様、家に一人きりだった。

家から出ない限り誰も襲う心配はないが、誰にも相談できない、助けを求めることもできない状況で、彼女はひとり恐怖と戦い続けた。

「でもずっとがまんしてたんだけど、お腹は空くばかりで、どんどん意識が遠くなって、そしてたら信ちゃんの顔が浮かんできて——」

「俺の血を飲めばいいと思ったってか!？」

「——信ちゃんなら何とかしてくれるかも、って思ったの」

「あ、ああ、そう……」

目を剥いて詰問したところ、思ったよりもしおらしい返事がかえってきて、俺はバツの悪さを感じながら顔を逸らした。

遂に限界に達した天野は夜雨に紛れて町に出て、薄れゆく意識の中で何とかここまで辿り着き、そして冒頭に至るというわけだった。

「思ったとおりだった」

安堵のような、信頼のような感情の滲む声で天野は続けて、牙が生えていること以外はひどく女の子らしい口で、またちびちびと腸詰めをかじり始める。

「ありがとう、信ちゃん。もぐもぐ……わたしを……もぐもぐ……助けてくれて……ん、このソーセージおいしい……」

食べるか、お礼を言うかどっちかにしろ。

いや、やっぱ食べ続ける。また我を失って暴走されたら困る。

俺は頭の中で突っ込みと翻意を入れた後、ふう、と息をついた。

何にせよ当面の危機は乗り越えた。

俺は結局襲われたわけだが、天野も途切れそうな理性を奮い立たせ、ここまで辿り着いたわけだ。相当辛かっただろうに、大した根性だ。

であれば幼なじみのよしみもある。俺も手を差し伸べないわけにはいかない。

「あのな、天野」

「うん」

「服、脱げ」

「え、信ちゃん、それってそう——」

何か勘違いしたらしい天野が急に頬を紅潮させてもじもじし始める。

「わ、わたし、信ちゃんとならないよ？ でもね、こういうのはもっとお互いの気持ちを伝え合ってから——」

「違えよ！ 体に噛み痕がないか調べるの！ 誰かがお前を吸血鬼にしたなら噛んだ痕があるだろう!？」

「あ、ああ！ そういうこと！」

俺が思わず叫ぶと、天野も顔を真っ赤にして恥ずかしさを誤魔化すように大声で得心を告げた。

そして躊躇なくすると制服を脱いでいく。

いかん、無駄に疲れた。

だが天野が幼なじみで良かった。ちょっと前までしょっちゅう二人で風呂入ったりしてたもんだから、裸なんぞお互いもう見慣れてる。

少なくともこっちは、今さら照れたり欲情したりなんかするわけが——うわつ、何だ、こいつ……いつの間に——が、こんなに大きく……

「……信ちゃん？」

思わず頭が真っ白になって凝視してしまっていた俺は、天野の声ではっと我に返った。その不安そうな声と、気弱に揺れる瞳——

「……」

バシバシと自分の両頬を叩く。

よし、気合が入った。

ふざけてる場合じゃない。俺がこいつを助けなきゃいけないんだ。

「診察するぞ、天野」

「うん。お願いします……」

一糸纏わぬ姿で、いつの間にか女らしい——どころではない——大きさと形になってしまった乳房を腕で隠しながら、心細げに天野は言った。

……あー、緊張した。

背後で天野が服を纏っていく衣擦れの音が響く。

本当に今さらなんだが、彼女の全身を検め終えた俺は、着替えの間、背を向けていることにした。

ずぶ濡れの制服をまた着せるのも何なので俺のシャツとズボンを適当に持ってきた。

すまんが男所帯なので、女物の服は何一つ置いてないのだ。家業の方も、普段は外来しか受け付けてないしな、うちは。

「信ちゃん、もう大丈夫よ」

「うん」

声をかけられて振り返る。

胸以外だぶだぶのワイシャツを着た天野が、袖を余らせながらこちらを見ていた。

「それで、どうだった？」

「……噛み痕はなかった」

全身くまなく、それこそ天野が自分では見づらいようなところも確認したんだ。

それでも『普通の人間』が吸血鬼に噛まれて吸血鬼になったなら必ずあるはずの一对の吸血痕はどこにも見つからなかった。

顔を上げる。

「つまりな、天野。お前は生まれつきの吸血鬼なんだ」

彼女の不安げに揺れる大きな透き通った瞳。それをまっすぐ見つめながら、俺は告げた。

この世ならざる者どもがいる。

鬼や悪魔、妖怪と呼ばれる人に仇為す連中のことで、吸血鬼もその一種だ。

神や仏、天使といった人間を護ってくださる存在もいるにはいらっしやるのだが、彼らは代償を差し上げないとこの世で力を振るうことができない。

だから必然的に、化け物の討伐費用をなるべく安く上げるため、人間の自助努力による様々な活動が行われ、その技術と経験が太古の昔から連綿と受け継がれていくことになる。

この阿曇内科診療所も、そういった人間側の拠点の一つだ。

「それは？」

アンブルに注射器を刺し、薬液を吸い上げる。

診察台に横たわった天野が不安そうにこちらを見上げながら言った。

「異化抑制剤。吸血衝動を少しの間だが抑えられる」

俺は彼女の腕を取り、きめ細やかな肌に注射器の針を当てた。

「ちく、とするぞ。ちょっとだけ我慢してくれ」

「ん」

天野が静かに目を閉じたのを視界の隅で見ながら白くてやわらかい腕に針を刺し、無色透明な薬液を注入していく。

きっちり二秒で針を引き抜き、アルコールで刺し痕を消毒していると、彼女がふたたび顔を上げて尋ねてくる。

「わたし、治るの？」

「……」

俺は一瞬黙り込んだ後、首を振った。

「そいつは無理だ。一代目——吸血鬼に噛まれて吸血鬼になった奴なら、噛んだ奴を早めに殺せば元に戻ることもあるんだが」

彼女に向き直って、力なく縋りついてくるような瞳をまっすぐ見つめ返しながら言う。

「お前は生まれた時から吸血鬼なんだ。誰かを殺したところで戻す先がない」

「でも、わたし、お父さんもお母さんも普通の人間なのに——」

「ああ、知っている」

俺はうなずいた後、言わなくてはいけない罪悪感でちよつとうつむいた。頭の中に、子どもの頃から何度も見た仲良し三人家族の姿が浮かんだ。

自分の手の甲に目を逸らし、そこを無意味に見ながら続ける。

「先祖の誰かが吸血鬼なんだろう。だが遺伝子を受け継いでいても、必ずしもそれが発現するわけじゃない。ごく普通の人間として暮らしていける奴が大半だ。お前に兄弟がいたとして、そいつも吸血鬼になるかもしれないし、ならないかもしれない。このあたりは完全に運任せな

んだ」

本当は、ならない可能性の方がずっと大きい。

ちょっと同情するような視線になってしまったが、ふたたび天野の瞳を見ながら告げる。

「お前は運がなかった。——こうなった原因は、それだけだ」

ある意味、一番残酷な理由なんだろう。誰が悪かったわけでも、何かが問題だったわけでもない。不摂生のせいとかじゃないから、生活を改めて予防することもできない。

ただ運が悪かった。

強いて言えば何代か前、おそらく何百年も前に余計なことをした奴が悪いということになるが、そんなことを今さら言ってもどうにもならない。当人もとくに死んでしまっているだろう。

吸血鬼は人間よりも長命だが、それでも三百年以上生きる奴は稀だ。人間の巻き狩りから逃れることはもっと難しい。そしてそれがごく最近の出来事なら——『混ざった』のがこいつの曾爺さんやそのまた曾爺さんぐらいまでの代なら——うちで捕捉できている。

捕捉できていれば、もう少しやりようもあっただろう。

それも、今さら言ってもどうしようもないことの一つだ。

天野はそれきり何も言わなかった。

もはや状況に感情と理解が追いつかず、何を訊けばいいかも分からないのだろう。

ただうつろな目で診察台の上に横たわり、天井を見上げ続けた。

……問題はもう一つある。

ひどく疲れていたのだろう。薬の副作用もあり、不安そうな表情のままだが、すーすーと寝息を立て始めた天野に背を向け、俺は診察室に隣接した居間の襖を開け、睨むようにテレビを見下ろしていた。

点けっぱなしにしていたその小さな古びた画面に映る、凄惨な殺人現場の光景を。

『遺体の状況から、事件があったのは昨夜深夜と考えられ、当局はその前後の時間帯での目撃情報の提供を——』

被害者の男女は全身の血を抜き取られていた。

天野は吸血鬼因子が発現してからずっと家に閉じ籠っていたと言っていた。

……本当だろうか？ 吸血衝動はかなり強い。たとえ自分では耐えていたつもりでも、気がつかぬうちに外に飛び出し、意識のないまま人を襲っていた可能性は残る。

もし天野がこれをやってしまったのなら、『駆除』を免れることは難しい。

そうでないことを証明するために、俺は犯人を探し出さなくてはならないのだ。

第一章「心を、かさねる！」

『おー！　そうかそうか、信之介！　よく一人で対処できたな！　成長したもんだ。えらいぞオ!!』

朝方になってようやく国際電話に出たジジイは電話口の向こうでガハガハと豪快に笑った。体は齢七十を超えてなお壮健そのものなんだが、耳が若干遠くなり出しているものだから本人の声も実にうるさい。

俺は顔をしかめて耳から受話器を離しながらこちらの状況とこれからの方針を伝えた。

「そういうわけで俺はこれから吸血事件の犯人を探しに行くぜ」

『おう、それがいい。ヤエちゃんのこと、しっかり守ってやれよ。お前が守るんだ。俺も来週には日本に帰れるが、もしうまく行きそうだったらそれまでに自分で片付けちまえ』

「……はいよ」

やかましいジジイだが、こちらの実力を信頼して仕事を任せてくれるのは悪い気分じゃない。「信ちゃん」

電話を切ったところでパジャマ姿の天野が台所に顔を出した。

昨日はあれからいったん天野を起こし、風呂に入れてからまた寝かせた。夜遅くだったのでそんなに長くは寝れなかったはずだが、顔色はだいぶ良くなっている。パジャマは、俺が小学生の頃に着ていたやつを押し入れから発掘してきて着せたら、胸以外はまあまあいい感じの大ききだった。

それを着た彼女が寝つくまで、俺は頼まれて手を握り続けていた。

その照れくささが残っているのか、あるいは短い間にがらりと変わってしまったお互いの関係性のためか、しばしの間二人して台所のテーブルを挟んで無言で見つめ合った後、俺は何かを変える必要などないのだと気づいて笑いかける。

「……おはよ、天野。腹減ってるだろ？　飯できてるぞ」

「うん！」

天野もまた以前の通りに微笑み、嬉しそうに駆け寄ってきた。

雨は夜明け前には止んでいたが、引き続き空には厚い雲が垂れ込めているので、天野がいても雨戸を開けていて問題はない。

ひんやりとした湿度を伴って曇りガラスから差すおぼろげな朝の日差しは、台所の中を穏やかな光で照らし、いくつもの皿が並んだテーブルの上に淡い影を落としていた。

たとえ吸血鬼化しても、人間の体は日光を浴びて覚醒し、体内時計を合わせ、ビタミンDを合成するようになっていく。日差しが嫌だからといってずっと閉め切った部屋に籠もっているのは厳禁だ。それで心や体の調子を崩せば、飢餓感はより強まり、理性による抑えも効きにくくなる。

生活習慣は吸血鬼として覚醒するのに関係なく、完全に運次第だが、覚醒後に自分を抑えら

れるかどうかには大いに影響するのだ。

快晴であれば火傷したり、体が燃え上がったりしてしまうので仕方ないが、これぐらいの曇り空ならしばらく外の光を取り込んだ方がいい。

「うわっ、このソーセージ美味しい」

昨日食わせたやつを残りをスライスして軽く炙ったそれを一口頬張るなり、天野は目を丸くして、口元に手を当てながら歓声を上げた。

「血のソーセージだな。モンゴルやヨーロッパではよく食われてるらしい」

俺はぱくぱくと飯を口に運び、目玉焼きの半熟の黄身を箸で割って飯に乗せ、また口に入れないながら答える。

「ちなみに卵も吸血衝動を緩和するのに効く。なるべく血に近い食材がいいんだ。このソーセージみたいに動物の血そのものを加工して固めたやつがあれば一番だが、それが手に入らなければほかにはレバーとか、牛乳やチーズ、ヨーグルトみたいな乳製品とか。もちろんそれ以外の食品もバランス良く摂るのが肝心だぞ」

「……！」

自分が具体的に何をすればいいのか分かり、これからのことに希望が持てたのだろう。

天野の双眸に目に見えて生気が漲り、張り切った様子で俺の用意した朝食を平らげていく。言われた通りに肉と血と卵だけでなく、サラダもほうれん草のおひたしも、味噌汁も飯も。これが吸血鬼化のせいでなければ気持ちのいい食べっぷりだ。

通常の食品では人血ほど効率良く吸血鬼にとっての栄養を摂取できないので、代用にするにはそれなりの量が必要になる。

食事が不足した時の空腹も大きい。

結局、天野はそのごく一部を除いてか細い体に、大人の男三人前ぐらいの量を収めて食事を終えた。

学校には電話でしばらく休むと伝えておいた。担任はうちの家業を知っているのであれこれ詮索することなくすぐにそれを許してくれた。

患者のプライバシーを守ることも重要なのでこういう理解の早さはありがたい。

「昼にはいったん戻るから、それまで家に籠もっていてくれ」

外出のため家中の雨戸をふたたび閉めた後、玄関で靴紐を結びながら俺は言った。

「雨戸は閉めたままにしておいた方がいいな。急に天気が変わったら、たぶん自分じゃ閉められないだろ。腹が減ったら冷蔵庫の中のもんは好きに食っていいからな。後、誰か来ても出るな。吸血衝動は抑えてあるから大丈夫なはずだが、数日は様子を見るために念のためだ」

「うん」

後ろで見送りに出てきてくれている天野がうなづく。

一人にされるのが心細いのだろう。その声はどこか沈みがちだった。それでも出かけないわけにはいかない。

「何だか、子どもの頃に戻ったみたいだね」

リュックサックを手に立ち上がると、天野は少しさみしげに微笑みながらそう言った。

「ああ、そうだな」

その表情がふと陰る。

「本当に、昔のままだったら良かったのにね。わたし、こんなになっちゃって、何もかも変わっちゃ——」

「天野」

俺は思わず彼女の体を抱きしめた。

「し、信ちゃん？」

「天野は何も変わってない。ただちょっと味覚が変わって、食欲が増えて、レバーとかが好きになっただけだ」

「……うん」

腕の中で天野が小さくうなずいた。少しは安らいでくれたような表情で。

「それじゃあ、行ってくる」

「うん、行ってるっしょい。信ちゃんが帰ってくるの、ここで待ってる」

俺と天野は手を振って別れた。

玄関をちよつと離れたところで立ち止まり、自分の左右の腕を見下ろした。

天野の体は小さくて、やわらかかった。

まずいな、必要以上に情が移ってしまいそうだ。

本当は気休めなんぞ言うつもりじゃなかった。

もし本当に、天野がそうなってしまうていたなら、この手で彼女を——そうしないといけないに。いつてのに。

首を振った。歩き出す。

悩んでいても仕方がない。今はできることをやるだけだ。

昨日のソーセージはまだ残っている。夜のうちに通販で売っているところを見つけて、追加で注文もしておいた。

昨日の天野は何日も飢餓を耐えた後だったから食欲が異常増進していたが、これからは血のソーセージだけであそこまで食うことはないだろう。

だがそれでも、一応知り合いの畜産家に頼んで、肉を出荷する時に抜いた血を残しておいてくれるよう話をつけておくべきかもしれない。このあたりには精肉も自分でやっている家がいくつかある。最近はネット通販が盛んなので、一部の肉は加工業者に流さず、農場直販の形で売るのがそうだ。

吸血事件の犯人も気になるが、まずは天野の生活の基盤を整えることが優先だ。

せつかくほかに吸血鬼がいたのに、そいつを追っている間に天野が飢餓に陥って人を襲ってしまったんじゃない。

『ヤエちゃんのこと、しっかり守ってやれよ。お前が守るんだ』

ジジイはそう言った。向こうも同じことを考えたからだろう。

「……ああ、もちろんだ」

頭の中でそう答え、俺は車庫へと急いだ。

農家に話をつけるのはすぐに終わり（みんな吸血鬼の脅威は知っているし、天野は昔から地域の人気者なので協力的だった）、俺は彼女の家に向かった。

当面の着替えや日用品を回収するためだった。本人が来るわけにもいかない——何しろ途中で急に晴れ始めたりでもしたら一大事だ——ので鍵を預かっている。制服のポケットに入ればなしになっていたというもののだが、家を出る時、ちゃんと戸締まりをしたかは覚えていないらしい。人生最悪レベルで切羽詰まっていただろうから無理もない。

愛車のヤマハWR・オフロードバイクで、このあたりでは比較的住宅（大半は戸建てだ）の密集している地区に乗り入れ、何度か実には他人行儀な態度で訪ねた覚えのある家の前で停める。ブロック塀の格子扉を押し開けて敷地に入り、玄関のノブを回すと、案の定鍵はかかっていなかった。

「お邪魔しまーす」

誰もいないはずだが一応あいさつをして玄関に入る。

その瞬間、人の家の懐かしい匂いが体を包み込んだ。

勝手に入っているいいと言われているが、やはり同い年の女の子の家となると若干気後れしないでもない。幼なじみなら気にならないなどという幻想は昨晚崩れ落ちた。

だがまあ、言っている場合ではないだろう。

昔はもっと気安い関係だった。だが、彼女の家がこの地区に引っ越してから少し距離ができしまった。引っ越す前はほとんど毎日のようにお互いの家に入り浸っていたのに、引っ越した後はここに来たことは数える程しかない。

学校はずっと一緒だったのにおかしな話だ。

どうしてそうなってしまったのだろうか。俺が変に意識するようになったからか？

家の中の明かりはついていなかった。ずっと消しっぱなしにしていたのだろう。吸血鬼化すると夜目も効くようになるので大して困らなかったに違いない。

玄関から差し込む曇り空の外光だけで照らされた、薄暗く人の気配のしない廊下を抜け、ダイニングキッチンの手前の狭い階段を上って、記憶を辿りながら二階のあいつの部屋の前に立つ。

ドアのノブを掴み、回して、開いた。
懐かしくて、切なくなる程の香りがふわりと溢れた。

その香りの中に、最後にこの部屋を訪ねた時に見たあいつの心底嬉しそうな顔が浮かんだ気がした。

俺はよそよそしかったのに、あいつはいつも嬉しそうに迎えてくれた。

女の子らしい明るい色合いで、枕元やタンスの上にたくさんの人形やぬいぐるみが飾られている部屋。ここで、どうにかしてこっちにも、自分と一緒にいることを喜んでもらおうと一生懸命だったように思う。当時の俺は気づきもしなかったが。

ふわふわな可愛らしい鳥のヒナの絵柄のカーテンはぴたりと閉ざされていた。窓に近づき、少しめくってみると、シャッター式の雨戸も下ろされている。

だが、それ以外に吸血鬼化を印象づける兆候はない。

この大切な部屋に恐れていたような荒廃の様子がなかったことに俺は思わずほっとしていた。ぐると周りを見回し、息をつく。

感傷に浸るのは終わり。仕事の時間だ。

まずは衣類タンスの前にしゃがみ込み、下から順に棚を引き出しては、持参した鞆に中身を放り込んでいく。

スカートに上着、ショーツ、そしてブラ——いや、でかいな、おい。何だこれ、爆弾か？

前一緒に風呂入った時は子ども用のやつすら付けてなかったくせに……

それらの布切れをなるべく見ないように、かつしわになって後で文句を言われない程度に気をつけながら押し込み、ほかに目についた小物も適当に回収する。何か足りなければまた後で再訪すればいいだろう。

机の上に置きっぱなしになっていたデコりまくりなスマホのバッテリーは切れていた。俺はそいつも鞆に放り込んだ。

一通りの荷造りを終わると、俺は鞆をそこに残して部屋を出た。

あらためて家の中を見て回る。天野には言っていないかったもう一つの目的のために。

二階のほかの部屋。一階に降りて、キッチン、リビング、洗面所や浴室、トイレまで、隅々まで確認した。籠に入れっぱなしになっていた洗濯物も一つく取り出して検める。壁や床、戸棚にその中身もつぶさに検証した結果、分かったことがあった。

家の中に血痕は一つもなかった。

仮に天野が吸血鬼化してから、どこかで人を襲って、またここに戻ってきていたなら、壁なり床なりに被害者の血がついているはず。

ニュースで見たような殺し方では返り血も大量に浴びる。着替えたなら脱ぎ捨てた服がどこにあるはずだし、血というものはたとえ洗濯してもなかなか落ちない。

それがないというのは、とても明るい材料だ。

二階に戻る。

鞆を手にしち上がり、もう一度、天野の部屋の中を見回した。

カーテンと雨戸は閉めたままにしておいた。おそらく彼女が発現してから一週間の間、ひとり飢餓と恐怖に耐え続けた場所――

天野が吸血鬼になったのは誰のせいでもない。

だが彼女の異変に気づいてやれなかったことに關しては、ほかの誰でもない、勝手に妙な距離を作ってしまった俺に責任があると思う。

最悪の事態は避けられたが、そのせいで天野は無駄に長く一人で苦しむことになった。同じ間違いを繰り返すことは、もうできない。

その後、俺はホームセンターに立ち寄り、緊急時に天野に着せるための遮光性の高い雨合羽とフルフェイスヘルメット、そこにつけるスモークシールドなどを買って家に帰った。

気休めではないが、何の弾みで日中に天野を移動させなくてはいけない事情ができるか分からない。何もないよりはずっとマシなはずだった。

WRを車庫に入れ、荷物を担いで母屋に向かう。

「帰ったぞー」

「おかえり、信ちゃん！」

太陽はまだこちらを氣遣って、分厚い暗灰色の雲の後ろに隠れてくれたので、玄関の戸を開けるなり、天野がまるで元氣いっぱいな子犬のような勢いで飛び出し、首根っこにしがみついていた。

――大丈夫だろうか？ 無理に明るく振る舞おうとしてないか？

俺が前にあの家を訪ねた時のように――

一瞬心配になるも、それを指摘したところで何かが良くなるわけじゃない。

だから俺は天野の華奢な肢体を抱き返し（やわらかかった）、こちらに押し当てられている胸のサイズと裏腹に小さな背中を落ち着かせるようにぽんぽんとしてやる。

「ただいま、天野。俺のいない間に何もなかったか？」

「うん、大丈夫。誰も来なかったし、何もなかったよ」

「そりゃ良かった。何もないのが一番だな」

少なくとも見た目には、天野の表情は出かける時よりも明るくなったように感じた。

俺が戻ってきたからというのも当然あるんだろうが、待っている間に、いろいろ感情の整理がついたのかもしれない。

少なくとも吸血衝動を抑制剤や食事療法で抑えられて、何時間経ってもそれがぶり返してこないと分かっただけでも、気分は相当良くなったはずだ。

――なら、彼女の問題をもう一歩前へ進めることもできるかもしれない。

「一つ、話しておかなきゃいけないことがあるんだ。どうか落ち着いて聞いてほしい」
昼飯を食い終えた後（天野は大人五人前程食った）、俺はそう切り出した。

いっそ黙っておこうかとも思った。無理に不安がらせることもないのではないかと。

だが天野は抜けているようにでいて、昔から妙に勘の鋭いところがあった。今にして思えば吸血鬼特有の超感覚だったのかもしれないが——俺が隠し事をすれば、たぶんすぐに気づいてしまうだろう。それは彼女をより深く傷つけることになる。

そして帰った時の様子を見て決意が固まった。

無理をしていないわけではないだろう。だがそれでも明るく元気に振る舞おうとしている。怖いに決まっている。でも本来の自分を見失うまいと抗い続けている。

昔から、天野は強い奴だった。

のんびりしているようにでいて、心に決して折れるのことはない芯を持っていた。

彼女が、自分を襲った運命に立ち向かう決意を固めているなら、俺はただそれを支えるだけだ。

「昨日、この町で死体が二つ見つかった。その時点で殺されてから丸一日経っていた」

俺が何の話をしているのかすぐには分からなかったのだろう。天野は食後の湯呑みから顔を上げて、戸惑ったように目を瞬^{またた}かせる。

「死体からは血が抜き取られていた」

「——！」

天野が目を見開き、バン、とテーブルに手をつきながら勢い良く立ち上がる。

「信ちゃん、わたしは——ッ!!」

「俺はお前じゃないと思っている」

それを手で制止しながら俺は言った。

天野は固まった後、呆然と口を開く。

「……信じてくれるの？ どうして——」

「お前の家に血痕がなかった」

俺は端的に答えた。

「お前が理性を失って人を襲ったなら、吸血するのに牙を使うだろう？」

自分の犬歯を剥いて、それを指さしてみせながら説明する。

「だがそのやり方だと顔は血まみれ。手も、服も、動脈から噴き出した血でどろどろになるのが普通だ」

だから吸血鬼のほとんどは、成長するにつれてそれを嫌い、せっかく長くなった犬歯を使わずにナイフやメスのような刃物で犠牲者の動脈を切り裂いて、バケツやコップに汲み取るという方法で血を採取するようになっていく。犬歯で直接かぶりつくような「お行儀の悪い」飲み

方をするのは、そうすることによほど強い拘りを持つ変態か、手元にナイフがなくて切羽詰まっていた時ぐらいだ。

吸血鬼として覚醒したばかり、しかも吸血衝動で我を失いかけていたこいつがそうした可能性は、まずないと言っている。

「ところが昨日うちに転がり込んできた時のお前には血がまったく付着していなかった。手や口元はまだしも、服や髪に沁み込んだ血なんて、少しばかり雨に打たれたぐらいで綺麗さっぱり落ちるものじゃない。昨日は隅々まで確認させてもらったがな。お前が被害者を襲って血を吸った後、その足でここに来たと考えるのは不自然だ」

手のひらを返して広げてみせながら続ける。

「ではいったん家に帰って、着替えるなり、髪を洗うなりしていたのか？ それなら家に痕跡が残っていないとおかしい。脱ぎ捨てた服は当然として、家に入るために血濡れの手で玄関のノブを握めばノブに、壁に触れればそこにも血がつく。シャワーを浴びるまでは体から滴り落ちた血が廊下の床にも点々と残る。そういう血痕が一切なかったんだ」

天野を見つめながら、テーブルの上で左右の指を絡める。

「服は丁寧に漬け洗うするか、どこかに埋めて、ドアや壁、床の汚れはきれいに拭き取って隠蔽した？ そりゃやろうと思えばできるだろう。だが吸血鬼になりたての、自分の生態すら良く分かっていない、しかも迫りくる猛烈な飢餓感に混乱し切ってる奴が、そんな手際のいい工作をする可能性は0に近い。つまりな、天野——」

ルミノール反応など見るまでもない。

こちらに向かって見開かれた透明な瞳を覗き込み、結論した。

「お前は殺^やってないんだ」

彼女が息を呑む音が聞こえた。

「もちろん確定じゃない。今後お前は、吸血殺人事件の被疑者として扱われる」

椅子から立ち上がり、テーブルを回り込んで側に立つ。

目をまん丸にして見上げてくる少女の双眸をじっと見つめ返しながら告げた。

「だから俺がこれから本当の犯人、この町に潜むもう一人の吸血鬼を探し出す。そいつを見つけて、始末すれば——晴れてお前は無罪放免だ。すぐには終わらないかもしれないが、必ず見つけてみせるから、それまで待っていてほしい」

話しているうちに天野の両目は次第に涙ぐんでいき、俺が言い終える頃にはぼろぼろと泣き出していた。

やはり気づいていたのだろう。自分が、自分では耐えていたつもりでも、本当は既に人を殺しているかもしれない可能性に。

天野が何より恐れていたのはそのことだったのだ。

胸の中に飛び込んできた彼女を、俺は帰った時よりもきつく抱きしめた。

「信ちゃん。わたし、わたしね――」

今まで耐えてきた不安が一気に溢れ出したように声を詰まらせて泣きじゃくる。

「俺なら何とかしてくれると思ったんだろ？」

その頭をぼんぼんと撫でてやりながら、俺はなるべく優しい声で言った。

「何とかしてやるから、大船に乗ったつもりでいろ。な？」

「うん、ありがと。よろしくお願いします」

「そろそろ来る頃だと思っていたぞ」

街の警察署を訪ね、捜査状況の公開請求を出すと、別室に案内され、やがて顔見知りの刑事が顔を出した。分厚い書類綴じを何冊も抱えている。

スチール机の上にプラスチック製の書類綴じがドサツと置かれ、中身の調書や現場写真を広げながら、ざっと死体が発見された時の状況を確認する。

しばらくそれが続けた後、俺は切り出した。

「うちで吸血鬼に覚醒したばかりの娘を一人保護している」

「そいつは白、というわけか」

さすがベテラン刑事だ。話が早い。

俺はうなずいた。

「だがな、見ての通りこっちも牙で直接被害者^{ガイシヤ}を噛んで雑に血を吸っている。ほかに死体も何方不明者も出ていない。これが初仕事というわけだ」

死体の写った写真を一枚、こちらに向けて机の上に放り出してみせながら、刑事さんは言った。

「同じ地域で、ほとんど同じ時期に、二体もの吸血鬼が覚醒する。そんなことがあり得るのか？」

「可能性としてはそりやあり得るが……まあ、滅多にないだろうな。だから困ってるんだ」

スチール机に片肘をつき、現場写真の一つを見ながら続ける。

「時期がズレていれば、天野を殺人事件の被疑者扱いする必要なんてなかった。タイミングが悪すぎる。犯人を見つけない限り警戒を解いてもらうことはできないだろうな」

「ふむ。その娘っこ、お前のこれか」

刑事さんは揶揄するように小指を立ててみせた。

「……違うよ。ただの幼なじみだ」

「嘘つけ。憎からず思っているんだろう」

まあ、胸はかなり成長したと思うが。もはや俺もあいつを子ども扱いすることはできない。本人は自覚がないのか無邪気、無防備そのものだが。

それが実に困る。

「ガキがガキ同士、誰と乳繰り合おうと俺は構わんがな」

刑事さんは資料を片付け、ふたたび書類綴じを小脇に抱えて立ち上がりながら続けた。

「私情を挟んでいると見なされたら、弁護は通りにくくなるぞ」

「うん、そうだよな……」

「とりあえず姦^ヤるのはこの事件が終わってからにしておけ。若気のいたりで暴発するなよ」

「いや、やらんがな」

「どうだかな」

ふん、と小馬鹿にするように鼻を鳴らし、踵を返す。

「署長に話はつけておいてやる。今日からこの町の警官はお前の味方だ。銃が必要な時は、適当な奴に声をかけて連れていくといい」

「いつもいつもありがとうございます」

俺は無骨なスチール机に手について人生の先達に深々と頭を下げた。

「吸血鬼を助けるために吸血鬼探し、ですか。お優しいことですね」

警察署を出た俺は学校に立ち寄った。

既に放課後だったが、あらかじめ連絡していたので、そのクラスメートは教室で待っていてくれた。

だいぶ傾いてきた夏の日差しが差す、開けっ放しにされた窓の外から、校庭を走り回る運動部の掛け声が響いてくる。

「連中なんぞ、人を襲っていようといまいと、見つけ次第皆殺しでいいでしょうに」

物騒な発言に、俺は顔をしかめた。

「別にどう思われようと構わないけどな、うちにはうちのやり方がある。余計な口出しは無用で頼むぞ」

「化け物だろうと、人間を害するまでは同胞として扱う、というわけですか。いえ、失礼。わたしたちのやり方を押し付けようというわけではないのです。単に感心しただけで」

アルミの窓枠に腰掛けたショートカットの金髪の少女、ニナはその毛先とセーラー服の控えめな胸元のリボンを微風に揺らし、表情の読みにくい夏の空のような青い瞳をこちらに向けながらそう言った。

ニナは『教会』関係者だ。表向きは学生としてこの町で一人暮らしをしながら、ひそかに吸血鬼に関する情報を集めている。

平たく言えばスパイというわけだ。

この町にキリスト教の教会はない。何百年か前、町がまだ村だった頃に一度建ったことはあったらしいんだが、すぐに焼き討ちに遭って、それっきりだ。

だからニナが留学生という名目で送り込まれた。教会の連中はよくそういうことをする。教会が建っている地域では基本的にその神父なりシスターなりがこの手の仕事を担当することが多いが、こいつのように本当の身分を隠して活動している奴は日本中——否、世界中に大勢いる。

ほかの妖怪変化には（大昔はさておき、少なくとも今は）ほとんど関心を示さないのに、唯一吸血鬼にだけは病的な執着を見せるこいつらは、吸血鬼を討伐したいと思っている人間にとっても非常に使いでのある存在だ。

もつともこの国の警察と政治家は外国の宗教勢力が国内で好き勝手に吸血鬼狩りをするのをあまり喜ばない。だからこいつらも直接手は出さず、ただ疑わしい人間の身辺を調査して、それとなく監視もして、情報を必要とする相手が現れた時に気前良く提供する。少なくとも表向きはそういう活動に留まっている。実際に退治するのは俺のような専門業者の役目だ。

利用するつもりで自分から声をかけたことを思い出したのと、それなのに相手に謝らせてしまったことへの氣まずさで、俺はちょっと顔を逸らした。

氣がつかないうちに神経が高ぶっていたらしい。こいつは鳥居を破壊して現地の農民の怒りを買う、虐殺された戦国時代のいけ好かない宣教師じゃないってのに。

「幼なじみなんだ」

俺はちよつと躊躇った後、口を開いて、少し言い訳がましく言った。

「昔から知ってる奴がそう、なったら……何とかしてやりたいって思うだろう？」

「わたしなら吸血鬼化した時点で死んだものと思います。——まあ、ここでお互いの価値観の違いを論じたところで詮ないことですね」

青空の色をした目を一瞬閉じ、ふう、と息を吐いた後、ふたたび開いてまっすぐ見つめてくる。

「いいでしょう。事情は分かりました。わたしたちから見て怪しい奴らの一覽を本部から取り寄せておきます」

「ああ。ありがとう、恩に着る」

「いいですよ。大事な友だちの頼みですから」

ニナはそう言って、夏の空を背に、珍しくにこりと微笑んだ。

夕暮れ前に家に帰り、玄関に近づいたところで俺は良い匂いがすることに気づいた。

台所の窓からかすかな鼻歌もこぼれてきている。

戸を開けると匂いは一層強くなった。

「信ちゃん！ おかえり！」

既に大分日差しが傾いていたのと、ふたたび雲が出ていたので、エプロン姿の天野が飛び出してくる。彼女の家から俺が回収してきたスカートとブラウスを着ていた。

「飯、作ってくれてたのか？」

「わたしも、少しでも信ちゃんの助けになりたいの。ごはん作ってあげたら元気出るかな、って思ってる」

二人で食卓につき、味噌汁に口をつける。

思わず目を丸くした。

「……うまい」

「ほんと？ えへへ、よかったあ」

心底嬉しそうに笑う天野に、俺は黙然といささか複雑な思いでうなずいた。
ちよつと傷つくぐらいうまいな。

ばあちゃんが死んでから大抵飯の支度は俺の仕事だったので、それなりに料理ができる男のつもりでいたが、男所帯が長いとそこらへん気づかないうちに細かいところが雑になってしまっていたらしい。愛情というか、遊び心の欠如というか。栄養があればいいだろう、ぐらいの気持ちになっていたというか。

なるほど、女たちが男を厨房から追い出したがるわけだ。

「買い物に行けないから全部ありものだけ——」

「明日にでもバイクで二人でスーパーに行こう。日が暮れてからなら、天野も防護服なしで後ろに乗っていけるだろう？」

田舎だからといってすべての店が日没とともに閉まるわけではない。JRの駅に程近い中心部には夜の十時までやってるスーパーマーケットがあるし、今日日ドラッグストアやコンビニもある。

吸血鬼だからといって夜の暮らしまで常人の時から変えてしまわなくてはいけないわけではないのだ。人間だった頃と同じようにできるところはそうした方が断然いい。

外出していいと言われるなんて思ってもみなかった、といった様子で、天野は一瞬目を丸くした後、ぱあっと顔を輝かせる。

そしてうちに転がり込んでから見える最高の笑顔で、元気良いうなずいたのだった。

「……うん！」

ジーンズを履いた天野をWRの後ろに乗せて、街灯に照らされた夜の道を滑るように進んでいく。

このあたりでは数少ない片側二車線の大通りだ。

夜なのでヘルメットも先日買ったスモークシールドではない。俺が予備に持っていた普通の透明シールドのフルフェイスヘルメットだ。

この時間帯はもうバスもほとんど走っていない。こういう時、単車を持っていた本当に良かったと思う。仕事で必要だったので、免許は高校に上がってすぐに取った。

原付ではなく普通二輪だ。化け物退治ではカブでは厳しい山奥に入っていくこともよくある。おかげで天野を後ろに乗せてやれる。

四輪だったらもっと良かったんだが（荷物もたくさん積めるし）、そっちは後一年待たないと免許を取れる年にならない。

この地域では、農家の子どもだったら自分家の畑の敷地内ではトラクターや軽トラをもう普通に運転してるし、俺も山で化け物の死骸を運ぶのに何度か使わせてもらったことがあるが、公道を走るには免許がないとな……。

天野も、単車のケツよりは自動車の助手席の方が乗り心地はいいのではなからうか。後ろからぎゅっとしがみついてくる時に特大サイズの胸が背中当たる感触で俺は気持ちいいが。

「何を買うんだ？」

店に着き、入り口でカートにカゴを一つ載せながら尋ねた。

天野は形の良い顎先に人差し指を当てて視線を上に向ける。

「んー、広告では鶏肉とホタテが安かったんだけど……信ちゃんは明日の献立、なに食べたの？」

「何でもいいぞ」

「それ一番困るやつだろう」

天野が情けなさそうな声を出して笑うのでちょっと考えて答える。

「ならシチューは？」

天野はぱっと明るい顔になった。

「あ、いいかも。鶏肉とホタテのシチューね。台所に玉ねぎはあったから、ジャガイモとニンジンだけ野菜買っていい」

「ジャガイモも納屋に残ってたはずだよ。帰ったら台所に持っていくておくよ」

「ならニンジンだけで大丈夫だ」

天野はにこっとしてそんなことを言いながら、ほかにも明日の朝食や明後日以降の食材を目にした端から籠に放り込んでいく。手際がいい。

「あらあ、八重香ちゃん、いらっしやい。隣の人、八重香ちゃんのボーイフレンドお？」

知り合いらしい。展示販売のコーナーに立ち寄ると、緑の頭巾をつけた店員が小さく切った試食用のソーセージを焼きながら気安げに話しかけてきた。

吸血鬼化のことは当然知らないのだろう。その表情は、普通の人間がごく普通の友人に向けるそれと同じものだった。

「ふえ!? え、えっと、その……!」

天野は顔を真っ赤にしてあわあわと狼狽えた後、ソーセージの袋を掴んで突き出す。

「こ、これください!」

「はあい、毎度ありがとうございます♪」

まんまと買わされてその場で金を払った天野は、にこにこ顔の店員に見送られ、逃げ出すように踵を返してこちらに戻ってくる。

「さ、行こ！」

前に立ち、カートに乗せた買い物かごの端を掴んでぐいぐいと引っ張っていく。

左右にふりふりと可愛らしく揺れるポニーテールの両側で、彼女が耳まで赤くなっているのが見えた。

「こ、困っちゃうよねえ。わたしと信ちゃんが恋人同士なんて――」

買い物を終えて、店を出てからもまだ天野は照れていた。

俺の自惚れかもしれないが、心なしか喜んでいるようにも感じた。

「まあ若い男女が夜中に仲良く二人で買い物してたらな」

「信ちゃんは嫌じゃなかった？ わたしと、その……間違えられて」

「いや、全然？ むしろちょっと嬉しかったぞ」

嘘をついてしまった。

本当は「ちょっと」どころではなく、「かなり」とか「とても」ぐらいだ。「有頂天になるぐらい」と言ってもいいかもしれない。表情筋は平静で通したが。

本当にそうだったらどんなにか、と思ってしまう。

「そっかあ」

天野は紅潮した表情で嬉しそうに笑った。

「えへへ、そうなんだ」

「おう」

彼女の手を取る。

「ほら、行くぞ」

「うんっ」

昔のように二人手をつないで駐車場まで駆けていく。

手のひらを通して伝わってしまうのではないかと思う程、胸の鼓動は高まっていた。

その夜。

「ねえ、信ちゃん」

「？」

明かりを落とした自分の部屋で布団に寝転がり、暗い天井の木目を見上げながら考え事をしていると、声が出て、首だけで振り返ると髪を下ろしたパジャマ姿の天野が枕を抱きしめて入り口に立っていた。

「今夜、一緒に寝てもいいかな？」

俺が無言で布団をめくると、天野は嬉しそうにいそいそと入り込んでくる。

そしてこっちの腕をぎゅっと抱きしめてご機嫌な子犬のような満足げな表情を浮かべた。

「えへへ、懐かしいなあ。昔よくこうして一緒に眠ったよね」

「もう何年前なんだか」

腕に無防備に押し付けられるその当時は絶対になかった凶悪な感触を努めて気にしないようにしながら俺は息を吐いた。

「って、お前まだそのバジヤマ着てるのか？ お前ん家から持ってきたのあるだろ」

「だってこれ着心地良かったんだもん」

そうか？ 胸まわりがかなりきつそうなんだが。まあそれを指摘するとまるで俺が天野の胸が気になってるみたいだから言わないが。

「ねえ、覚えてる？ わたしがお化けの話を聞いて、怖くて眠れなくなっちゃった時、信ちゃん、わたしが寝つくまでずっとこうしてくれたよね」

うん、でも、今はもうちょっと警戒心を持った方がいいと思うぞ。俺だっていつ狼男に変身するか分からないだからな？

「今はわたしがお化けだけど、不思議と怖くないんだ。きつと、信ちゃんの側にいたら大丈夫って、そう思えるから……」

そんなことを話しながら天野はすーっとすぐに眠ってしまった。

ひどく良い匂いがした。

その安らぎ切った寝顔を横目に見て、俺はため息をついた。

一つ分かったことがある。

体はずいぶん成長したが、天野の心はたぶんまだ、少なくとも俺に関する部分では子どものままなのだ。

たぶんそれは俺のせいなのだろう。俺が勝手に離れていったから、彼女にとって俺との時間はずっと止まったままになってしまった。

おかげで今こうして拷問めいた責め苦を味わう羽目になっているのだから、まったく因果応報と言うほかない。

まあ、これが罰だというなら甘んじて受け入れよう。

それよりも今は吸血鬼探した。

俺はかすかな寝息を立てる天野のやわらかそうな桜色の唇から苦勞して視線を引き剥がし、最初のように天井を見上げた。

今日一日の出来事を思い出していた。

今日の日中は遺体が発見された場所を調べて過ごした。

それはこの近くの町外れにある休耕地の、今は使われていない農具小屋の中であり、警察の現場検証も終わった今遺体は既に撤去されていたが、周囲に飛び散った血の痕は生々しく残っ

ていた。

被害者二名は事件のあった夜、付近のあぜ道を通りがかったところを殺害され、小屋に運び込まれて、血を吸われたらしい。

問題は吸血鬼の姿を見た者が誰もいないことだ。小屋の内部および付近には防犯カメラのようないな設備もない。これでは犯人の吸血鬼を探し出すことができない。

だが警察は一つ有用な情報を掴んでいた。

この地域は事件のあった前日の夕方から死体が見つかった日の夜までの間、二日間程大雨だった。そのため地面がぬかるみ、小屋の周囲には足跡が無数の小さな水たまりとなってくっきりと残っていた。

その中に、被害者のものでも、吸血鬼のものでも、遺体の第一発見者のものでもない足跡があったのだ。

そして吸血鬼の足跡の一つは、その正体不明の誰かの足跡の上に重なってついていた。

さらにそのすぐ近くには、何者かがかなりの勢いで突き飛ばされ、尻もちをついたような跡も残っていた。

警察はその時の状況をかなり詳細に検証して、何があったかを解き明かしていたが、俺は念のため自分でも現場を調べてみた。

間違いなかった。

吸血鬼が小屋に死体を運び込んだ後、誰かがそこを訪れ、食事を目撃されたと思った吸血鬼はそいつを突き飛ばして逃亡したのだ。

その誰かが吸血鬼の姿を見ているかは分からない。夜間、それも雨天。近くに街灯も何もない場所での出来事だ。常識的には懐中電灯か何かを持っていたと想像できるが、それが照らす範囲外から突然飛び掛かれたら何も見えないうちに逃げられてしまうだろう。

また、少なくともそいつはそのことを警察に通報していない。その時は死体に気づかず、妙な生き物に飛び掛かれたらと思うてすぐに立ち去ったのだとしても、後日そこで死体が見つかったことはニュースか何かで知ることができたはず。面倒ごとに巻き込まれることを嫌ったのか、新聞もテレビの電波も、狭い田舎町のうわさ話も届かない場所にいるのか。それとも既に死んでいるのか。

刑事さんは被害者のほかに行方不明者はいないと言っていた。

まだ誰も気づいていないだけかもしれない。だがいずれにせよ、現時点でもまだ名乗り出ていないとなると、今後もそいつから情報を得る望みは薄そうだ。

なら、別の方法を試す必要がある。

そんなことをつらつらと考えているうちに、いつの間にか俺も眠ってしまった。

朝目を覚ました時、俺と天野は互いを抱きしめていた。

子どもの頃そうしていたように。

「警察から話は伺っています。こちらへどうぞ」

翌朝県立の総合病院を訪ねると、眼鏡をかけた若い医師が俺を迎えてくれた。後ろについていってエレベーターに乗り込み、降りた先で霊安室に通される。

扉が開いた瞬間、ひやりとした空気が漂い出してきて床を這った。

霊気の類ではもちろんない。霊安室全体が冷蔵庫になっていいるのだ。壁の操作盤に目をやると室温3℃と表示されている。

温度を下げると、この世ならざる者の力に起因する肉体の変容も抑えることができる。化物といっても結局は生き物だから、気温の変化の影響は受けるのだ。だから吸血鬼に限らず、妖怪変化に襲われた死体は冷蔵ないし冷凍保管するのが基本だ。

もっともすべての病院が死体用の冷蔵庫や冷蔵・冷凍庫を備えているわけではないし、発見が遅れば冷蔵庫に移す前に既に怪物に変化してしまっていることも多い。

吸血鬼に噛まれた者が自分も吸血鬼となつて復活するにはタイムラグがある。全体の5パーセントは死後五時間以内に立ち上がるが、大半は数日以内であり、一週間以上かかるケースの割合も20パーセントだ。これは噛まれただけで被害者が死ななかった場合も変わらない。

つまりこの二人は運が良かったのだ。殺された日の翌日には発見され、近くには設備の整った病院があった。吸血鬼に襲われて死んだ時点で運がいいも何もないだろうが、少なくとも人間として生涯を終え、葬られることはできる。

後は事件が終わるまで——解決するか、迷宮入りして捜査が打ち切られるまで——待って、火葬されれば、最後まで化け物になることはない。

魔王クラスの吸血鬼になると灰からでも復活した事例があるが、今回は考慮する必要はないだろう。

医師が貸してくれた、病院のマークの入った厚手のジャケットを羽織り、霊安室の中央に並んで置かれた安置台、その側に立つ。

男女の死体は病院衣に着替えさせられ、顔の上に白い布をかぶせてあったが、その陰から覗く青白い皮膚には端々にどす黒い傷が穿たれているのが見えた。

医師の許可を取って、男の方の左腕を取り、軽く持ち上げてみる。
手にずしりと重みを感じた。

やはり、かなり血が残っている。

「被害者の血をもらってもいいですか？」

医師は戸惑ったように眼鏡の奥で目を瞬いた。

「それは構いませんが……理由を伺っても？」

「警察で調書を見て、犯行現場も確認しました。問題の吸血鬼はこの二人を殺害した後、食事

中を何者かに目撃され、現場から逃げ出しています」

遺体の腕を下ろしながら俺は説明した。

「その何者かはなぜか死体を警察に通報しませんでした。が、吸血鬼もその後現場には戻らず、翌日彼らとは別の第一発見者によって死体が発見され、警察に回収されています」

安置台を見下ろしたまま続ける。

「つまり吸血鬼は獲物を横取りされたと感じているはず。生まれたばかりの吸血鬼は特に、一度捕らえた獲物への執着が強い」

「ふむ。ヒグマのようなもの、ということですか」
うなづく。

「もちろん人間だった頃の理性も残っているので、必ずしも奪い返そうとするわけではありません。人間に回収された死体は危険だと理解しているからです」

医師の方を振り向く。

「しかし空腹が強まれば理性も薄れます。その時、以前自分が仕留めた獲物の血の臭いを嗅げば、おそらく耐えることはできないでしょう」

これが今回俺が立てた作戦だった。

犠牲者の遺体から取った血を使って吸血鬼をおびき寄せ、仕留める。

遺体に残った血の量から、俺は吸血鬼が空腹に耐えられなくなり、次の狩りを始める時期を今から三日後と見積もった。

あいにくジジイが帰ってくる日の前日だ。やはり自分で仕留めるしかない。

残された時間は少なかった。チャンスも。

既に人間側の警戒が強まっていることを吸血鬼も理解している。もし奴がこの町でこれ以上の狩りを諦め、正体を隠したまま別の場所に移ってしまったら、おそらく二度と捕捉することはできない。そうなれば天野の嫌疑を晴らすことも不可能になる。

目撃者が名乗り出て、天野とまったく違う犯人の吸血鬼の背格好でも証言してくれればとも思うが……ただでさえ視界の悪い雨の夜だ。しかも動きの早い吸血鬼がおそらくいきなり暗闇の中から飛び出してきている。人間とイノシシの区別をつけることも難しい状況だったと見なされる可能性が高い。

遺体に残った歯形は証拠として扱ってもらえない。再生能力の高い吸血鬼は、自分で顔をコンクリート壁に強くぶつけて粉砕するなどして顎の形を変えてしまうことがあるからだ。以前それである吸血鬼にまんまと逃れられてから警察も警戒するようになっていた。残念なことに犬歯自体の大きさも天野とほとんど変わらないようだった。本体を捕まえてはならない。

説明を聞いて納得した医師は上の階からメスやビーカーなどの器具を取ってきてくれた。

俺は彼とともに遺体の動脈を開き、中に残った血液を搾り取って、順に容器へと移していった。

翌日、俺は一日家で過ごすことになった。

外でできることはあらかたやり終えてしまっていたのもあるが、天野の体調が悪かったことが最大の理由だ。

朝起きた時（昨日に続き二人で寝ていた）から元気がなく、朝食の時も食が進まない。

それどころか青い顔で口元を抑えてトイレに駆け込みさえした。

はじめは吸血鬼になってからこっち、さすがに食わせすぎたのかと思って焦ったのだが、かすかに漂った血の匂いと、天野の言葉で知らされた。

生理だった。

どうやら予定よりも一週間も早く、ひどく重いものが始まってしまったらしい。

病院での用事を終えた後で良かった。一日中天野を診ていられる。

もっともうちに産婦人科はないし、女の体のことは（まったく知らないわけではないが）文字通りの門外漢なので、診たところで何ができるというわけでもないのだが……

「うう、お腹痛いよう。いつもとなんか違う気がする」

天野はそう言って、しくしくと泣きながら布団の中で体を丸めていた。

今暮らしてもらっている部屋は家の二階の一室で、通気性のいい楕円形の絨毯を敷いた畳の上に、古いアンティーク風のベッドを置いて寝床にしている。子どもの頃からうちに来た時はよくここに泊まっていた、彼女が俺の部屋に来るのでなければ、ここで一緒に寝ることが多かった。

俺は水を用意して、そこで服と一緒に天野の家から持ち出してきた薬を飲ませたり、背中をさすったり、腰を揉んで温めてやったりしながら過ごした。

ほかにも自分で分かる範囲で天野をお腹の上から触診して異常がないか調べ、血を採らせてもらい、東ソーの化学発光酵素免疫法式全自動分析器の小さいやつにかけて、ガラスシャーレに載せたサンプルを診察室で吸血鬼の血液細胞顕微鏡画像集と見比べつつ、血液細胞の急激な妖化反応が進んでいないか確かめる。

結果は白。下腹を指で圧迫しても妙なしこりができている感触はなく、血液の妖化も予想の範疇に収まる。

血液からは念のため卵胞ホルモンや黄体ホルモンも調べておいた。うちでは普段あまり見ないやつなので、対応する試薬の蓄えが分析器になかった（これは俺のミスだ。若い女の子を保護する以上こういう問題が起きることも考えて事前に準備しておくべきだったのだ。犯人を追いかけることにばかり夢中になっているからこういうことになる）が、出入りの医療系商社の営業に連絡して、他の検査をしている間に急ぎでメーカー在庫を持ってきてもらった。それを使って、初日に抑制剤を打った時ついでに採って保管しておいた血液サンプルと今日の採血分とを比較。両ホルモンの血中濃度の急落を認めた。

女性の生理では、排卵前に卵胞ホルモン、排卵直後に黄体ホルモンの濃度の上昇が起こり、子宮内膜の剥離——つまり月経——を前にどちらにも急激に低下する、という手順を取る。

それが見られたということは、つまりは普通の生理だ。

天野は、吸血鬼化してから極度の不安に晒され続けていた。……今もそうだ。吸血鬼にとってストレスの大きい飢餓も一時は経験している。その影響で周期が早まったり、生理痛が一時的に悪化したりしたのだろう。

ひとまずは安心と言ったところだが——もともと、吸血鬼の女性と人間の体の仕組みが同じだという確証は実はあまりない。吸血鬼化した女性の生理なんて症例も分かっていることも少なくすぎて、正直何を診るにも手探りだ。

だから、ここでの診断結果は、あくまでそれを「人間と同じとするなら」という但し書き付きのものになる。

専門の産婦人科医に見ればもう少し何か分かるのかもしれないが、昼間に天野を他院に動かすことはできない。

たとえ日差しを避けられる移動手段を使っても、日中の移動は今の天野には大きなストレスがかかる。それで他院まで辿り着いても、今度は通常の医療機関に吸血鬼のために日光を遮断する備えがない。満足な診療を受けられないかもしれない。

それに痛みは吸血鬼の理性が弾ける原因にもなる。天野がどこまでそれに耐えられるのかは、まだ十分に確認が取れていない。抑制剤を増やせばいいのだとして、どの程度増やせばいいのか、あるいはある量以上は逆効果だから増やしてはいけないのかも今は分からない。

たとえ夜でも、この状態の天野を、人間の血の臭いがそれなりに沁みついた他院に連れ出すことを正当化できるかはかなり微妙なところだ。産婦人科の先生にこっちに来てもらうのも——来てもらえるならだが——できれば避けるべき状況と言える。俺が専門家にテレビ電話か何かで指示してもらいながら、自分で内診もするのが一番リスクは少ない。

人間と吸血鬼では命の重みが違う。人間の安全と、吸血鬼のそれを天秤にかけなくてはいけない状況では、当然人間を優先するべきなのだ。……天野自身が、『駆除』を免れるためにも。

それで先日の若い医師に渡りをつけて、県立病院の産婦人科の先生を紹介してもらい、今後痛みが続くようなら、と診る上で注意すべきことなどを相談する。とても熱心な先生で、良ければ先方でも血液を調べてくれるとのことだったので、お言葉に甘えてダブルチェックの形でお願いくことにした。

人間と吸血鬼の血液では試薬に対する反応も違っている可能性がある。その違いに、人間の女性を診慣れた向こうの技師なら気づくかもしれない。逆にこっちと向こうとで診断結果に違いがなければ安心だ。電話でいろいろ教わりながらカルテを書き、俺の所見を添えて、不活性化処理を施した血液サンプルの輸送を手配した。

一応、卵巣がんやチョコレート嚢胞などの腫瘍、類腫瘍の可能性も疑って、CA125やC

A19-9といった腫瘍マーカーの血中濃度の測定もしてくれるとのことだったが、こちらはあくまで参考程度だ。

いくつかの腫瘍マーカーは、吸血鬼では普段から人間より高い値が出る傾向にある。そういう研究成果が報告されている。仮に今の天野のそれが人間として、通常よりも高レベルだったとして、吸血鬼にとっても異常と言えるのか判断がつかない。

腫瘍の類があるなら初日にも同レベルのマーカー反応は出ていたはずなので、今日の採血分との比較ができないからだ。おそらく先方の技師にも意味が分からないだろう。

後は、天野の部屋に戻り、額に脂汗を浮かべながらうんうんと苦しげに唸り続ける彼女を、ただ見てることしかできないうちに昼になった。

せめて昼飯には今の天野にも食べやすいものを出してやりたいと思いつきながら台所に立つ。

今朝はパンに乗せたバターの匂いでトイレに駆け込んだようだった。今は脂っこいものは受け付けないのだろう。

だからといって食べないわけにもいかない。特に吸血衝動の抑制にも重要なたんばく質や鉄分を不足させるのは厳禁だ。

それなら、と決めて、鍋にうちで汲んだ井戸水をみなみと満たし、一度沸騰させた後、沸騰しない程度の湯温まで冷ましたそこで昆布の出汁を引いた上で、土地の牛の切ったばかりの赤身の薄切り肉をそーっと潜らせていく。

生食用ではないので生ではよろしくない。当たり前だ。

だが加熱しすぎてもいけない。肉が硬くなる。今の天野には特にまずいだろう。火加減は丁寧、丁寧に――だ。

そして火が通りすぎず、通らなすぎず、適度に通った頃合いの桜色の肉をどんぶりにたっぷりと盛り付け、出汁を注ぎ、最後にネギと刻み生姜をばらばらと散らす。

砂糖もみり人も醤油も使わない。出汁、そして肉自体の味と温度管理だけで勝負する。

昨晚天野が作ってくれた鶏肉とホタテのシチューはともうまかった。本人にとっても会心の出来だったらしく、俺と一緒に五杯も六杯も食べていた。だからはじめはそれ――食

いが、素材の味をそのまま引き出す腕に関しては、まだ俺の方が上だと思う。

出来上がったものを軽くレモンを絞った常温の水のコップと一緒にお盆に乗せて、部屋に戻った。

「天野、飯できたぞ。食べるか？」

「うう、食欲ないかも……」

そう言いながら億劫そうに布団から顔を出す。

しかしどんぶりから立ちのぼる匂いを、ひく、と鼻で一嗅ぎした瞬間、ぱっと目の色が変わり、掛け布団を跳ねのけて体を起こした。

そして俺の差し出したどんぶりを掴むや、箸を握る手ももどかしげに、ぱくぱくと勢い良く肉を口の中にかき入れ、咀嚼し、飲み込んでいく。

最後に出汁まですべて飲み干すと、どんぶりを下ろして、ぷはっ、と息をついた。

「——おいしいッ！」

目を丸くした天野が叫ぶように感想を言った。

「そりゃ良かった」

予想以上の好評っぷりに内心ほっとしながら、きれいに空になったどんぶりを受け取る。

「おかわりもあるぞ？ 食うか？」

「うん！」

赤身のたんぱく質を摂ると急激に気分が良くなったらしい。一度快方に向かう弾みが得られればさすがは吸血鬼の回復力といったところか。天野は肉だけでなくほうれん草のおひたしやひじきの煮物といったほかのおかずや、鰹節の出汁醤油を効かせて海藻の佃煮を添えた卵かけご飯も何杯もぺろりと平らげてみせた。

「ジジイの好物なんだ」

何杯目かの牛肉をどんぶりにどっさりと装いながら俺は説明した。

「二日酔いで気持ち悪いような朝にもするする食えていいって言うから、ひよっとしたら今の天野にも、って思ったんだが……正解で良かった」

言ってみればこれは、関西の肉吸いをさらにシンプルにした料理だ。

湯洗いはいらぬ。切ったばかりの牛肉の表面は酸化してはいないからだ。

合わせ出汁の定番の鰹節もいらぬ。卵かけには使うが。どんぶりの方は大量の肉から大量のイノシン酸が出ている。昆布のグルタミン酸と合わせるのとはそれで十分だ。

アクは出ない。水の硬度と温度管理が完璧なら、だ。だからアク取りもいらぬ。肉を潜_くませた出汁をそのまま飲ませてしまえばいい。肉のあらゆるうま味がそこに溶け出している。

医食同源とは言うが、確かにうまい飯には人間を健康にする力がある。吸血鬼になってもそれは変わらない。

「えへへ、いっぱい食べちゃったよう」

食べてるうちにすっかり顔色の良くなった天野がにこにこしながら言った。

「おう、食べ食え。吸血鬼化で筋力も代謝も上がってるから、食わないと逆にガリガリになるぞ」

はじめはそれに胃や腸の強化が追いついてなかったのかと不安になったが、食欲があるなら大丈夫だ。

もう脂肪分も大丈夫そうだったので、デザートに一昨日シチューの具材と一緒に買っておいしたクリームたっぷりのいちごのショートケーキ（今はどうだか知らないが、昔のこいつはこれが大好きだった）を出した後、例のごとく俺の昔のパジャマを着ている華奢な背中を支えてや

りながら食後の菓を飲ませ、体力が完全に回復するまでふたたび横になる彼女を、ベッドサイドの椅子に腰を下ろして見守る。

「ううー、信ちゃん、ごめんねえ。信ちゃんも忙しいのに——わたしのせいで忙しくさせてるのに、わたしのお世話ばかりさせちゃって……」

体調が良くなると周りに気を回す余裕も出てくるのか、小さな左右の手で布団の端をちょこんと掴んでこちらを見上げながら、急にしおらしいことを言い始めた。

「別に俺一人で何から何までやらないといけないわけじゃない。刑事さんたちも動いてくれる。だからこれぐらい大丈夫さ」

むしろこんなことしかできなくて申し訳ないぐらいだ。

生理も、吸血鬼化のことも。天野の苦しみの種は何でもぱっと解決して解消してみせるスーパーマンのような男でありたいところだが、現実はそのなに甘くはない。

専門であるはずの怪異についてさえ、知っていることより知らないことの方が多いのだと、こうして患者と実際に向き合っていると思ひ知らされる。

とはいえ、療養中の天野にそんなことを言って困らせたところでどうしようもないので、俺は内心の葛藤はおくびにも出さず、彼女の目を見てなるべく優しく微笑みながら、その少し汗ばんではいる、だがとてもきれいな黒髪を撫でてやった。

「今は天野が安心して生きていけるようにすることが最優先だ。そのためなら俺は何でもするから、遠慮するな」

「う、うん……」

照れてしまったらしい。天野は焦ったような声を出して、布団を引き上げ、顔を覆った。

「あのね、信ちゃん。それなら、お世話されついでに、わたしから信ちゃんに一つお願いがあります」

急にあらたまってどうした。

「眠るまで手を握っていてください」

頭に布団をかぶったまま、にゅっ、と隠れんぼをしている猫のように横から手を飛び出させてくる。

何だそんなことか。初日もやったじゃないか。

そんなことを思いながら、俺は求められるまま、小さくやわらかいそれを両手で包み込んだ。生理中は吸血鬼でも基礎体温は下がるはずなんだが……天野の手のひらは、いつもより温かく感じた。

「うへへ……」

嬉しいのか、丸まった布団の塊が謎の生き物のようにもぞもぞと蠢き、中からそんな声がした。

天野は一眠りすると夜には元気になった。

生理の出血はまだ続いているが、もう痛みはないらしい。

元々軽い方だったそうなので、やはり吸血鬼化による急激な環境の変化で一時的に調子を崩したただだったのだろう。

これ以上休むよりも体を動かしたそうにしていたので、俺と一緒に家の周りを散歩することにした。

夜空は晴れていた。

ちよっと前までの雷雨と曇天が嘘のように頭上は澄み渡り、星々が鮮明に輝いている。

草木を揺らす夜風が心地良い。

夏場とは言え、この辺りは田舎というだけあって日が落ちるとすぐ気温が下がるので、夜は過ごしやすかった。

ショートパンツを履いた天野は、軽やかにステップを踏んだり、ぴょんぴょんと跳ねたりしながら、瑞々しい草地の感触を楽しんでいた。

「あつ、信ちゃん、見て！ ホタルだ！」

その彼女が不意に道端を指して歓声を上げ、しゃがみ込んだ。

俺も隣にしゃがんで草むらの中を覗き込む。

「……ほんとだ。とつくに時期終わってるのに。こいつだけ羽化するのが遅かったのかな」
近くに小川があるので、そこで去年越冬した個体だろう。六本の脚で草の茎に掴まって、ぽう、ぽう……と腹節を静かに明滅させていた。

ゲンジボタルの幼虫は春に川から上がった後、浅い地中に潜って土繭を作って、その中で蛹になる。羽化するのには、この辺りでは通常六月初旬から中旬までだ。

「えへへ、寝ぼすけさんだねえ。繭の中が気持ち良くてついつい寝過ぎしちゃったんだね」

天野が心から共感するような笑顔で蛭を見ながら言った。
うなづく。

時期外れの蛭だが、その美しい翠色の輝きを見るのは楽しかった。

そのまましばらく二人で眺めていると、ふと心配そうな表情になって尋ねてくる。

「この子、お嫁さん見つかるかな？ 一人でさみしくないかな？ ほかのみんなは、とつくに交尾をすませちゃってるのに……」

「寝過ぎして婚活パーティー会場に遅れるようなまぬけな雄がいるなら、同じように寝過ぎすうっかり者の雌も一匹ぐらいいるだろ。きっと大丈夫さ」

「そっか。うん、きっとそうだね」

こてん、と肩に頭を預けてくる。

ぴたりと密着した腕から伝わってくる彼女の体温と体のやわらかさに、俺は必死に気にならないふりを続けた。

「……わたし、信ちゃんがいてくれてほんとよかった」

そんなこっちの気も知らずに、天野は安らぎ切った声で言った。

「吸血鬼になってから、信ちゃんに助けてもらうまで、ずっと不安で不安で仕方なかったのに、こうしているうちとも怖くないの」

心地良さに目を閉じ、頬をすり寄せてくる。

そういえば、一昨日の夜もそんなことを言っていた。

自分の存在が天野の心の支え、その一部にでもなれているなら喜ぶべきだ。

彼女にしてみれば、多少なりとも埋め合わせができたような感覚もあるのかもしれない。自分分は吸血鬼になってしまったが、そのおかげでずっと疎遠になっていた薄情な幼なじみが戻ってきた。

彼女のような人付き合いを大切にする優しい人間にとっては重要なことだ。

——だが、そうであるがゆえの問題もできた。

先の犠牲者の血の臭いで吸血鬼をおびき出す作戦だが、誰かが生餌になる必要がある。飢餓でほとんど獣同然に知能が低下しているとはいえ、獣だって馬鹿ではない。案山子^{かかし}に血をまぶして立てておく程度では警戒して身を隠すだろう。

確実にこちらの間合いに入ってきてもらうために、俺は囃役の人間に犠牲者の血を染み込ませた外套を纏わせて、吸血鬼が出そうな地区を歩かせるつもりだった。

怪異に対する知識や経験を考えたと、それができるのは今この町には俺しかない。

つまり、俺が囃になる必要があるということだ。

そのことを天野に伝えるべきか、ずっと迷い続けていた。

俺も、同じことで迷ってばかりだ。

だが黙っていなくなるわけにはいかない。

そう考えて、俺は結局、決意を固めた。

「きつと信ちゃんが……信ちゃんのことか——」

「天野」

何も知らずに続けようとした天野を遮り、立ち上がる。

「明後日、吸血鬼相手に一戦仕掛けるつもりなんだ」

戸惑ったように見上げてくる視線を振り返り、まっすぐ見つめ返しながら告げる。

「犠牲者の血が手に入った。そいつを使ってこの町のどこかに隠れている吸血鬼をおびき出す。

囃役には俺なるつもりだ」

彼女は一瞬その意味が分からず、しかしやがて理解したのだろう。悲鳴を上げて胸に縋りついてきた。

「だめ！ 危ないことはしないでッ!!」

こちらを押し倒しかねない程の勢いで訴える彼女を押し留め、なだめる。

「囧と言っても、別にそこまで危険なわけじゃないんだ。落ち着いてやれば、怪我をする可能性もごく小さい——」

「ゼロじゃないんでしょ!? 信ちゃんにもしものことがあったら、わたし、わたし——ッ」

「必要なことなんだ」

天野の肩を掴み、じっと目を覗き込んで説得する。

「吸血鬼を放置すればまた新たな犠牲者が出るかもしれない。一度で仕留めないと、もし遠くに逃げられたら厄介なことになる。……天野の容疑も晴らせない」

「でも、信ちゃん——」

泣き出しそうなその唇に、俺は自分のそれを重ねた。

天野が目丸くする気配がした。

「信、ちゃん……?」

唇を離し、呆然とそうつぶやく天野に言う。

「好きだ」

伝えずにはいられなかった。

思えば上がりかもしれないが、相手も求めているという予感があった。

「だから必ずここに、天野の下に帰ってくる。それまで待っていてくれ」

天野はぼうつとこちらを見つめ、次いで涙ぐみ、やがてこくりとうなずいた。

「……うん、分かった。待ってる。絶対、無事に帰ってきてね」

そして胸の中に飛び込んでくる。

その小さく華奢な体を強く抱きしめ、俺はしばらく立ち尽くしていた。

一匹だけ遅れて目覚めた季節外れの蛍が、物音に促されたように草むらの中から飛び立ち、淡い翠の光を明滅させながら俺たちの周りを数周して、やがてどこかに飛び去っていった。

いるかもしれない雌を探して。

雨戸の隙間からこぼれたわずかな朝の陽光が、ちゃぶ台の上で水晶のように弾けている。

俺はそこにこの町の地図——駅周りの盛り場から新興の住宅地、田畑や牧場の中に農家の一軒家の点在する郊外から山の裾野まで、差し渡し二十キロ程の範囲が描かれたそれを広げ、これまで集めた情報を色ペンで書き込んでいった。

遺体の発見現場。

そこから消防が県立病院までそれを運んだ経路。

吸血鬼かどうかは分からないが、警察に寄せられた不審者情報。

そして今朝二ナから届いた、教会から見た『怪しい奴』リスト。

すべて書き終えると、ちゃぶ台の側に立ち上がり、当初よりもずいぶんとにぎやかになった

地図を見下ろす。

どこで吸血鬼を待ち構えるか。それを考えなくてはいけない。

市街地で殺し合いはしたくない。逃げられやすいというのもあるし、吸血鬼が住人のいる家屋に入り込めば厄介なことになる。犠牲者を減らしたいのに戦闘で巻き添え被害が出たら目も当てられない。

となると郊外だ。

吸血鬼は鼻が効く。血の臭いならば数キロ先からでも嗅ぎ取れるだろうが、とはいえ奴の寝床か、少なくとも行動圏内の近くで罠に張るに越したことはない。移動距離が短ければ、途中で思い直して帰ってしまう可能性も減る。

どこだ？ どこに潜んでいる？

ほかの住人に吸血鬼だとバレにくいという点では単身向けのアパート。町の外から来た奴なら駅前のビジネスホテル。

最初の殺人の状況から考えても、人混みを避けるために郊外を狩場に選ぶ知恵を持っている可能性が高い。だが同じ犯行現場は避けるはず。

あるいは吸血鬼に覚醒した時点で、自分の奇行を周囲に目撃されるのを恐れて、山の中に移っている可能性もあるだろう。町を囲む山地は急峻な地形と鬱蒼とした木々でいつも薄暗い。適切な窪地か洞穴でも見つければ日中は日差しをやり過ごせる。

だがその場合でも、人を襲うためにはどのみち人里に近づかなくてはならない。当然奴にとっても移動距離は短い方がいいし、途中に身を隠せる場所が多い方がいいだろう。

その上でこちらにとっても待ち伏せが可能な地形でなくてはならない。

となると――

彼我のすべての都合と可能性を総合し、吸血鬼が通る可能性が高いいくつかの経路、それが最も集中し、かつ罠を張るのにも適した一点を選び出して、

「――ここか」

俺はそこに赤い印をつけた。

町の北東、扇状地の北の端に位置する農地。周囲には農具小屋が点在し、大人が身を隠せる深さの水路も張り巡らされている。

ここに奴を誘い出す。

「信ちゃん、コーヒー淹れたよお」

「あ、すまん。ちよつと待ってくれ」

結論を出したところで襖の向こうから天野の声が響き、俺は慌てて地図と資料を片付け、雨戸の隙間に内張りを張り直して、彼女を招き入れた。

「えへへ。一緒にスーパー行った時、クッキーも買ってたの。お邪魔じゃなければ一緒に食べようよう」

お盆の上に乗った可愛い焼き菓子と、同じぐらい可愛い天野の笑顔に、思わず頬が緩んだ。

さすがに昨日の今日で元気いっぱいとはいかないが、こちらに余計な心配をかけないように気を使ってくれているらしい。

俺の差し出した座布団にスカートを広げてふわりと妖精のように腰を下ろした天野は、ミルクを溶かしたコーヒークップを傾け、宝石のようなドライベリーが埋め込まれたクッキーをさつそく嬉しそうにかじり始める。

俺もそれに倣って少し休憩することにして、世間話に興じた。

今朝の献立はあれがうまかったこれがうまかったとか。それに対する吸血鬼特有の栄養学的な解説。そういえば一昨日のシチューで目についた一工夫はどんな意図に基づいているのかだとか。そんなことを訊いたり答えたりした後、天野が話の流れで訊いてくる。

「お昼はなにがいい？」

「和食かな」

「それじゃあ、冷蔵庫のサンマ、今日焼いちゃうね」

初物が出て良かった、と上機嫌に言いながら、サクサクサク、と何枚目かのクッキーをかじり始める。

今年は豊漁で、早くも大量の水揚げがあるらしいのだ。まだ旬には早い割に身持ちのいいやつが安かった。

その瞳が、ふと部屋の隅に追いやられた書類の束に向かう。

「お仕事してたの？」

「……ああ」

「わたしも——」

「ああ、すまん。見せちゃいけないことになってるんだ」

言いかけた天野に先回りして俺は断った。

天野は雷に打たれたように目を見開き、そしてうつむいてしまう。

「……そっか。そうだよね」

本当は手伝いたかったのだろう。膝の上できゅっと小さな手を握り締める。

「わたし、まだ容疑者だもんね」

その語尾が抑えようとして抑え切れなかったようにかすかに震えたことに気づいた俺は、思わず彼女を抱き寄せていた。

「天野」

「あっ」

ふわり、と愛らしいポニーテールが揺れた。

他愛もなく腕の中にすっぽりと収まってしまったふわふわとやわらかな体を、俺は逃げてい

かないように後ろからきつく抱きしめた。

そのまましばらくの間、二人でじっと互いの体温を確かめ合う。

やがて天野は、はぁ、と息を吐き、それで気持ちを落ち着かせたように、こちらの腕に左右の手を当てながら自嘲気味につぶやいた。

「わたし、ダメだなあ。信ちゃんの邪魔しないようにしようって決めてたのに、結局また心配かけちゃった」

俺はそのきれいな髪に鼻先をうずめながら応じる。

「天野は悪くないさ。俺が余計なことを言ったのが原因だ」

「ううん、信ちゃんのせいじゃないよ。わたしを心配させないために言ってくれたんだもん」腕の中から、切なげな瞳で見上げてくる。

「昨日言ってくれたから、まだこれぐらいで済んでるんだよ。もし『その時』になって急に教えられたり、信ちゃんは何も言わずにいなくなっちゃったら……わたし、きっと取り乱してたと思う」

「天野」

「信ちゃん——」

互いの名前を呼び合い、唇を重ねた。

俺は何をしているのだろう。そう思った。

そんなことはないと思ってはいるが、まだ可能性としては、彼女が犯人であることもあり得るというのに。

明日の待ち伏せの予定を伝えたこと自体は問題はない。今まで俺が面倒を見てきたので、彼女はそこまで深刻な血の飢えに晒されていないからだ。仮に彼女がそうだったなら、明日二度目の狩りが行われるという俺の予測は外れる。

そうなった場合、俺はどうするのだろう。

天野の悲しげに閉ざされた瞼の下から一粒の透明なしずくが白い頬を流れ落ちていく。

彼女の唇の感触を記憶に刻み付けながら、俺はそんなことを考えていた。

夕日が西の山の稜線に沈んでいこうとしている。

茜色に染まる世界。

長く伸びた自分の影法師を引きずりながら中庭を過ぎり、蔵へ向かう。

鉄扉に鍵を差し込み、ぎい、と開いて中に入り、いくつも並んだ棚の中から、一抱え程の細長い木箱を選んで運び出す。

ふたたび鍵を閉め、木箱を抱えて母屋に戻った。

座敷で木箱の紐を解く。

蓋を持ち上げると、中に収まった一振りの白鞘が姿を現す。

化け物討伐業者として、うちには一通りの武具が揃っている。吸血鬼退治に適したものもいくつかあって、今回俺が選んだのがこれだった。

ヤクザ映画のような白鞘を手に取り、鯉口を切って、ゆるやかに湾曲した刀身をするりと切っ先まですべて引き抜く。

蛇がのたうつような造りをした刃紋、そこに沿って浮かび上がる金属粒子が、西向きの窓から差す紅い斜光を吸って、無限の星屑を散らしたように輝いた。

刃渡りは二尺三寸、つまり約七十センチメートル。

手入れはこまめにやっているで刃の状態はまったく申し分ない。もっともこいつは、たとえ無整備で何年も放置したとしても錆一つ付かないかもしれないが。

別に現代的なステンレス刀だとかそういうわけではなく。

吸血鬼は遅くとも戦国時代の初期までには宣教師たちと一緒に日本に入り込んでいる。つまり、対抗手段もその頃には出来上がっているのだ。

俺は何度か刃を返して刃面を検めた後、鞘に収め、箱の中に戻した。

明日はこいつを外套の下に忍ばせていく。それまでに適切な柄に巻き直しておかなくてはいいけない。

今付けている鞘と柄はあくまで保管用だ。あやかしを斬るために鍛えられた刀はそれ自体が妖刀でもあるので、戦闘用の拵えを付けっ放しにしておくのは本当に危険なのだ。

銃も用意するつもりだが、それを撃つのは別の人間の役目だ。たとえ聖別された銃弾や純銀製のものを用いても、吸血鬼を一撃で仕留めるのは難しい。

動きを止めることはできるだろうが、結局最後は接近戦に訴えることになるだろう。

ここから先は、もう迷わない。

実戦重視で行こう。

翌日、俺は朝一で警察署に立ち寄って討伐計画書を提出し、承認された。事前にメールで刑事さんに送って何度か打ち合わせもしていたので、本当に手続き上のことでしかないが、これで正式に人里近くで対化け物用の武器を振り回す許可が出たことになる。

付近の住人には警察の協力で市街地のホテルまで避難してもらった。吸血鬼の腹の空き具合に合わせたため急な話だったが、みんな昼までには自宅から逃げ出してくれた。会社勤めの人

は勤務先からホテルに直行する人がほとんどだそう。

日が高く昇ってから動いたので、大勢がばたばたしていても勘づかれた恐れは少ないだろう。こういう面では吸血鬼の相手は楽でいい。

どこまで守られるかは分からないが、避難のことを他人に話したり、ネットに書いたりしないようにも要請しておいた。これは逆に吸血鬼の面倒臭いところだ。知能のないタイプの怪異と違って、人間と同じことができたり元人間だったりするので、リアルやネットのうわさ話が

伝わってしまう恐れがある。そろそろ空腹で理性が薄れているはずなので、他人と呑気に世間話をしたり、スマホやパソコンをいじったりできている可能性は低いとは思うが――

地元の猟友会には一昨日のうちに連絡を取って、射撃役の猟師を派遣してもらっていた。

応じてくれたのは三人。

普段は鹿や猪を獲っているというライフル撃ちのベテランが一人と、若いドローン操縦士が一人。

最後の一人は元自のレンジャー部隊出身とのことだった。心強い。

討伐作業中はほかに警官が一人、俺たちにつく。こちらは戦力ではなく見届け人だ。自衛用の拳銃は持っているが、基本的に見ているだけで、たとえこちらが苦戦していても手は出さない。

こう言う役立たずのようだが、実は案外重要な役割でもある。警察にはこれが殺『人』ではないこと、武器の使用が法令によって許可された範囲内に収まっていたことを証明してもらわないといけないからだ。

さもないと後で罰金か刑事罰を受ける羽目になる。悪くすれば事業許可取り消しでご廃業だ。悲しいかな、俺たちは所詮正義のヒーローではなく営利団体に過ぎないので、規則を破る者にお上は厳しいのだ。

それに警官が書く報告書は後で一般に公開されて、ほかの討伐業者が戦術を改良したり、その問題点を考えたりする時の貴重な情報源になる。結局のところ技術や経験はマニュアル化して全体に共有しないと、個人の経験に頼っているだけではどこかで限界が来るし、世の中も進歩しない。

そして経験の共有を業者に任せると、競合より優位に立つために肝心なところを隠蔽する奴が絶対に出るので、利害関係のない警察に強制的に開示させてしまうのがいい。

――というのがジジイの言だ。俺には正直まだピンとこない。まあ適当にお利口なふりをしていれば大丈夫だろう。

彼らとの作戦会議は午前のうちに終わった。みんな手慣れているので話が早い。後は夜まで各自現場の下見や機材の調整に励んでもらうことにして、俺は病院に血を受け取りに行った。

例の若い医師はすっかりやる気になっていて、襟元で紐を引っ張るとビニールの袋が破れて血が背中全体に沁み出すような仕組みを考えてくれた。なるほど、これなら直前まで血を開封せずに行けるし、瓶などに入れてぶっかけるのと違って、こぼしたり変なところにかかってしまっただけで手足を滑らしたりする心配がない。袋を取り換えながら何度か動作を確認してみて、問題なさそうだったのでありがたく使わせてもらうことにした。

最後に病院を出る時、なぜか霊安室にはかの医師や看護婦までもが次々と集まってきて、万歳三唱で見送り、千本針まで贈ってくれたのにはさすがに面食らった。一応、一般の患者が入らないエリアだし、事情を知らない人間には地下の死体の取り扱いについて専門家から講習を

受けるためと言ってあるそうなので、情報が漏れる恐れはないだろう。

そして午後――

「そうだ。信ちゃん、今晚のごはんは何がいい？」

いったん家に戻って遅めの昼食を取った後、また出かけるために玄関で戦闘用のブーツを履いていると、後ろから天野がそう言った。

今家を出ると、次は作戦終了まで帰ってくることはない。吸血鬼を討ち取るか、それとも空振りに終わって何も出ないまま夜が明けてしまうかだ。

だがどのみち帰ってくるつもりなのだから、献立は決めておいた方がいいだろう。

「魚がいいな。濃いめの味付けで」

徹夜した場合は朝飯に食うつもりで答えながら、妖刀を手にしち上げる。

今の俺はダークグレーの作業着の上に、丈の長い膝までの地味なカーキ色の登山用雨合羽という出で立ちだ。雨合羽の襟元にはもちろん既に血を仕込んでいて、染み込みやすいように中には同色の綿布を縫い合わせてある。ここ数日は晴れていたが、山の中は大抵草葉に大量の雨露が溜まっていて、普段着のまま入ると全身濡れねずみになってしまうものなので、雨具を着ていることに不自然さはない。

今夜はこの合羽の下に妖刀を隠し持っていく。

その妖刀も昨日のうちに拵えを済ませておいた。鞘は透き通るような輝きを持つ青貝微塵塗。柄は朱塗鮫皮の上に金糸菱巻で、刀身を固定する目釘と目貫にはともに乳白色の骨材を使っている。鰐は赤銅地の牡丹透だ。

妖刀や霊刀の類は「拵え」、つまり柄、鰐、鞘の選択によってその性質や強度を変える。ばらばらにされていたものが完全体となったことでそれは早くも覚醒し、流血の予感を悦ぶように、とくん、とくん、と手の中であやしげな妖気を脈打たせ始めていた。

早めに血を吸わせるか、また分解しておかないと、こいつが人を襲ってしまいそうだ。

じゃじゃ馬をベルトに差し、下緒の金具を固定して振り返ると、エプロン姿の天野がこちらを見て微笑んでいた。

「分かった。カレイの煮付けにするね。大きな子持ちだよ」

そりゃ楽しみだ。

もう覚悟を決めたらしい。今日の彼女は泣いていなかった。

けれど無理に微笑んでも、不安や恐れをなくせるはずもないので、俺は彼女の手を引いて胸に抱き寄せた。

「――ッ」

何かを言おうとした天野は、けれどぎゅっと抱きしめられると結局口を噤み、手を猫のように丸めて頭をうずめてくる。

そのまましばらくの間、お互いにじっとして体温を確かめ合っていた。

天野の体は華奢で腕の中にすっぽり収まってしまふし、とてもやわらかいので抱き心地がいい。

それに本当に良い匂いがする。

……ダメだな。これじゃこっちが落ち着かせてもらってるみたいだ。

実際、柄にもなく緊張していたみたいで、彼女を抱いているうちに体が軽くなったように感じた。

この際なので開き直ってそれをたっぷり堪能させてもらった後、体を離し、肩に手を添えたまま目を合わせて微笑む。

「じゃ、行ってくる」

「うん、行つてらっしゃい。絶対、無事に帰ってきてね」

天野は今にも泣き出しそうな程に両の瞳を潤ませて、けれどさっきよりはずっと明るく微笑んでくれた。

まだ空に日が出ているので、彼女には先に家の奥に引っ込んでもらった。

戸を開き、光が溢れる中、見送る者のいない玄関を後にする。

唯一の相棒である妖刀だけが、人の腰でカタカタと声にならない陽気な笑い声を奏でていた。

夏の黄昏の日差しが山の稜線の向こうに消えていく。

そろそろだ。

『こちら、橋部。配置についた』

『土屋、準備よし』

『外村だ。いつでも行ける』

耳につけたインカムに次々と猟師たちの声が届く。

『巡査部長の五十嵐八千穂です。皆さんの配置を確認しました。どうぞお気を付けて』

最後に見届け人のおば——中年の女性警官が気遣わしげに告げた。

「阿曇、了解。これより討伐を開始する」

急速に広がった田舎の夜闇の中で、地図を見ている風に握ったスマホの画面に向かって俺は宣言した。

そして襟元の紐を一気に引き抜く。

たちまち、吸血鬼ならずともはつきりと分かる濃密な血臭が周囲に漂い始めた。

妖刀の興奮が頂点に達して、持ち手にしか聞こえない哄笑を人知れず上げる。

今回、味方である猟師たちは見える範囲にはいない。吸血鬼の感覚の範囲外からこちらを支援してもらう。

操縦士の土屋さんはドローンを使って辺り一帯の監視。吸血鬼の接近を警戒してもらう。ベ

テランの橋部さんはその護衛に当たった。

元目の外村さんは狙撃だ。ここから六百メートル離れた場所にある小屋の中に潜伏して、いまだ姿を現わさない吸血鬼を狙っている。

得物は橋部さんと同じくライフル。豊和M一五〇〇。自衛隊では選抜射手マークスマンをしていたそうで、人間大の目標への狙撃経験も十分ある。

いくら刑事さんが顔を効かせてくれるといっても、さすがにライフル手まで警察から引張ってくるのは無理なので、この三人が捕まったのは本当にラッキーだった。急な話だと誰も来てくれないことも多い。その場合は討伐を延期するか、危険を承知で作戦を変更することになる。

余裕をもってスケジュールを立てて、必要な人材をすべて集めてたつぷりと調整期間を取って、万全の体制で臨めたらそりゃその方がいいに決まっている。だが生き物、それも怪異が相手となると、なかなか毎度そうとは行かないのが実情だ。

当然雇い料はこっち持ちだ。誰かが金を使わないと業界が回らないので盛大にばらまくことにする。

周りには家屋や農具小屋の点在する開けた田畑が広がっている。俺が背中を向けている山裾から、正面に見える市街地の明かりまで、視界を遮るものはほとんどない。秋に向けて実をつけ始めた薄青い稲穂が、月のない暗闇の中で、かすかな夜風に吹かれて音もなく揺れていた。不審なプロペラ音を響かせていると吸血鬼が警戒するので、今回は飛行タイプのドローンは使っていない。代わりに定置式のやつを辺り一帯に配置して、そのセンサー情報を土屋さんのパソコンに集約、赤外線とレーザーから体温や心臓の脈動のようなバイタルサインを検出してもらっている。

『阿曇君、反応があったぞ。そっちに向かっている。……くそ、速いな。飢餓と血の臭いで我を失っているぞ、これは』

土屋さんの警告。

同時に俺が見ているスマホの画面に赤色のマーカーが灯った。距離二キロメートル。予想通り山裾の方角だ。やはり山中に棲み処を移していたのだろう。

そこから地図の上を画面の中央——俺が無警戒を装って突っ立っている地点——に向かって急速に接近してくる。隣にはその移動速度が表示されていた。

時速八十キロメートル。ライオンのトップスピード。それを持続できる。

会敵まで二分もない。

果たして画面上で彼我の距離はたちまち溶けてなくなり、現実において急速に膨れ上がった殺意が、こちらの首筋に食らいつくべく背後で大口を開く。

その瞬間、狙いすました銃弾がその頭の部を正確に撃ち抜いた。

——いい腕だ、外村さん。

俺は振り返りながら雨合羽を跳ね上げ、もはや正体を隠す必要もなく妖刀を抜き放った。吸血鬼は右のこめかみから侵入した銃弾によって顔の左側から脳漿と血しぶきを噴き出しながら、半ば飛び出した目玉をぎょろりと動かして、俺と俺の手に握られた刀身を睨みつける。まだ生きている。

そしてもう回復し始めている。

だからこいつがふたたび動き出す前に、俺は妖刀を振り上げる。

吸血鬼は咄嗟に顔の前で左腕を盾にした。それを切り落とされている間に後退しようというのだろう。普通の刀が相手ならそれで正しい。

だが禍々しい哄笑を上げる妖刀がそいつの二の腕の皮膚に食いつき、途中で骨を砕きながら反対側へと突き破った瞬間、吸血鬼は一瞬目を見開いて自分の手首の断面を凝視し、そしておそらく想像すらしていなかっただろう激痛に悲鳴を上げてのたうち回った。

痛みだけではない。切り落とされた腕はまるで血を吸い取られたかのように、萎びて縮み、切られていないはずの反対側の腕や両脚の方まで骨と皮ばかりに細くなってしまうている。シャツで覆われている胴体も、あばらが浮き上がる程痩せてしまったのが裾の下から見取れた。頬はげっそりとこけ落ち、まるで骸骨のように落ちくぼんだ眼窩の中でぎょろろと目を動かしながら、吸血鬼は地面を這いずって逃げ出そうとしていた。

そいつの背後で、俺はぶん、と妖刀を横に薙ぎ払った。

血糊は飛ばない。切った瞬間にはべったりと刀身を濡らしていたそれは、瞬く間に鉄の地肌の中に溶け込み、金属の粒界に沿って真っ赤な葉脈のような痕跡を一瞬浮かび上がらせた後、すぐに見えなくなった。

久しぶりに味わった血の旨さを悦ぶように妖刀がケタケタと囁く。

——相手が吸血鬼なら、逆に血を吸ってやれば良く効くだろう。

そう考えてこいつを鍛えた中世の刀工は、きつととびきりのサディストだ。不意打ちを食らった吸血鬼はもはやあの超人的な身体能力を発揮することもできず、死にかけの老人のように地を這うしかない。

既に瀕死のそいつに向かって、俺はふたたび得物を振り上げる。

最初の一撃さえ入れれば、後は吸血鬼は完全に無力で、とどめを刺すことは造作もない。

その一撃が問題だった。獣並みに素早い吸血鬼が、元気な状態で刀の一撃をおとなく食らってくれる可能性はほとんどないからだ。

結局、リスクを覚悟で、相手を自分に——妖刀の間合いに引きつけ、至近距離で脳髓を吹き飛ばした一瞬の隙を突くしかなかった。ジジイなら、もつとうまい手で決めてみせたんだろうが……

……：……：そういえば吸血鬼クラスの大物を一人で——獵師たちを雇ってはいるが、ジジイやほかのベテラン討伐業者の見ていないところで——狩るのはこれがはじめてだ。

天野を助けることで頭がいっぱいで、そんなことすら今の今まで忘れていた。
最後の一撃を振り下ろす直前、俺はそんなことを考えていた。

殺気に気づいた吸血鬼が振り向く。

残った右腕で顔を庇うようにしながら、落ちくぼんだ目でこちらを凝視するその時の怯え切った表情に、一瞬、天野の儂げな微笑が重なった。

——あいつのことは俺が守る。

だがこいつは駄目だ。こいつは既に人の血の味を覚えてしまった。生かしておくことはできない。

命乞いか、それとも恨み節か。口を開いて何かを言いかけていた吸血鬼に、俺は表情を変えることなく妖刀を振り下ろした。

袈裟切りの一撃は、その時の左の肩口に食い込み、重く、硬く、鋭い鋼鉄の刃でもって鎖骨と肋骨と脊椎と臓物を破砕しながら右のわき腹へと突き抜け、今度こそ絶命させた。

後には上半身と左腕を両断され、ミイラのように干からびた牙の長い男の死体だけが残った。

『無事終わった。今から帰る』

そうメールを打っていたので、玄関の戸を開けるなり、天野が飛び出してきた。

「信ちゃあああんッ!!」

こちらの存在を確かめるように胸にしがみつきながら泣きじゃくる。

「信ちゃん！ 信ちゃん——!! ああッ、わたし、わたしね、信ちゃんのこと……ッ!!」

「天野」

放っておいたら永久にそうしていそうな天野をどうにか引き剥がし、肩を掴みながら、俺は彼女の涙に覆われた目を見て微笑みかける。

「ただいま。ちゃんと帰ってきたぞ」

「……うん。おかえり、信ちゃん」

そしてどちらからともなく唇を重ねた。

何度も何度も互いの吐息を確かめながら接吻を交わし、抱きしめ合う。

命のやりとりの後で気が昂っていたせいもあるのだろう。俺は天野の体のぬくもりとやわらかさを堪能するうちに、ついつい後ろに回した手を彼女のお尻、そして敏感なところにもで伸ばして、触り始めてしまう。

天野は拒まなかった。それどころか、ぴくっ、と体を震わせると、ぐい、と大きな胸を一層こちらに押し付けるようなことまでしてくる。

俺の理性はそこでぷつんと途切れた。

もう夜は明けたのだろう。閉め切って嚴重に目張りした雨戸の向こうで、鳥の鳴き声が聞こ

える。

それに意識を呼び覚まされたように、腕の中で寝息を立てていた天野の糸纏わぬ裸体がもぞもぞと動き、その美しく澄んだ瞳をぱっちり開いて、こちらの姿を認めると、どこか満ち足りた表情で口を開いた。

「——しちゃったね、信ちゃん」

「そうだな」

一足早く目覚めていた俺は天井を見ながら答えた。

結局刑事さんの言った通りになってしまった。いや、別にいいんだけどな？ 天野の嫌疑が晴れた後だし。

「わたしたちは……恋人同士ということになるんでしょうか？」

「……そりゃそうだろう」

何なら二人で蛍を見た時からそうだったんじゃないかと思うが。好きだって言ったし。はっきりと。

だが天野にとっては、二身合体を果たしたという事実はそれだけ重要らしい。

「えへへ、なんか変な感じだよ」

嬉しそうにシーツを抱きしめながらごろごろと転がり始める。女の子の感覚は良く分からない。い。

そのすらりとした眩しい程の両脚の内側と、そこに挟み込まれたシーツの部分に、赤いシミがついているのが暗闇に慣れた目で見えた。

はじめてだったというだけでなく、生理もまだ少し続いていたらしい。少し申し訳ない気がするが、本人もあれの最中に性欲が高まるタイプだったみたいなので（吸血鬼化の影響も否定できないが）、まあ、いいか。

「何か飲み物、持ってくるな」

枕に顔をうずめて足をバタバタさせている天野にそう声をかけて、俺は部屋を出た。

台所に向かう廊下の途中で固定電話の着信ボタンが点滅していることに気づいた。

着信からそれほど時間は経っていなかったもので、折り返しでかけ直すことにする。

刑事さんは三コール経たずに出た。

『悪いな。お楽しみ中だったか？』

開口一番これである。

なぜ分かった。年の功か？

「いや、別に。ただ寝てただけだ」

何となく誤魔化す。

嘘は言っていない。時間的に電話がかかってきた時にはもうお楽しみは終わっていて、天野と二人で寝息を立てていたはずだからだ。

『ならいいがな』

刑事さんは信じてなさそうな声で言った後、続ける。

『それはともかく、吸血鬼退治、ご苦労だった。後始末はこっちでやっておいたぞ。さっき現場検証が終わって、確かに吸血鬼相手の仕事だったと確認が取れた』

「そりゃ良かった」

肩をすくめ、先の動揺が残っていたので、素っ裸でトランクスを履いただけの格好で背中を廊下の壁に預けながら、思わず下手な冗談を返す。俺はこういう時なかなかクールになれない。「毎回、実は異常に運動能力が高いだけのただの人間だった、って言われたらどうしよう、っと思って、不安で眠れなくなるんだ。刑事さんも、いつも徹夜仕事させて悪いな。もういい年なのに」

『なに、命の取り合いをお前たちに任せてる。当然の報いだ』

刑事さんは取り合わないでおいてくれた。

いつものことだが、このおっさんは怪異の駆除を民間業者にやらせていることに罪悪感を抱いている節がある。

要は害獣の類と同じ扱いなわけだが、吸血鬼がそうであるように、化け物は元人間であることも多い。それが人里に下りてきてしまった熊とは勝手が違って、刑事さんのような古株の刑事がすんなり受け入れられないところなのだろうか。俺やジジイがこの人を信用している理由でもある。

『それから、お前が仕留めた吸血鬼だがな』

「うん」

軽く世間話を挟んだ後、おもむろに刑事さんは本題に入った。

『検視したところ、体に噛み痕があったぞ。左のわき腹、背中側にちょっと回った辺りだ。昨晩は月が出ていなかったし、服で隠れていたから気づかなかったな？』

俺は一瞬目をつむった。

化け物討伐業者は獲物を仕留めた後、なるべく現場をそのままにして帰る。服を脱がせて、自分で死骸を検めたりはしない。何か、本当は人間だったものを化け物に偽装する工作をしたんじゃないかとか、痛くもない腹を探られたくないからだ。

それだけ人間の形をしたもの、元人間だったものを殺すというのは敏感な問題なのだ。

あるいは反対側だったら、刀が服を切り裂いた時に傷が見えたかもしれないが――

目を開き、息を吐く。

ずっと閉め切っているから、同じはずなのだが。

さっきまでよりも、廊下が暗くなっている気がした。

「……なるほど」

乾いた声が出た。

「そいつはよろしくないな」

受話器の向こうで黙然とうなづく気配がした。

刑事さんとはその後、今後のことで短いやりとりをして通話を切った。

天井を見上げて、ため息を吐く。

天野の嫌疑は晴れた。

だが、事件はまだ終わっていないかったというわけだ。

第二章 「技を、きたえる！」

「おおーッ!! 帰ったぞ、孫よーッ!!」

燦々と降り注ぐ夏の猛烈な陽光と熱気。そこにただでさえうっとうしいセミの鳴き声を掻き消すかのようなさらにでかい声が響き渡る。

一緒に駅のホームから降りてきたほかの乗客がびっくりしたように振り向くのが見えた。

身長百九十センチメートル超でプロ野球選手のように筋肉隆々。真っ白な髭を蓄えた顔にグラサンを装備して、服装は短パンと浮世絵柄のアロハシャツ。そんな陽気なジジイが、公衆の往来でハゲ頭を眩しく光らせながら丸太のような腕をブンブン振っていれば目立たないはずがない。

俺はその事実と目を射る反射光に若干うんざりしながらも唯一の肉親としてそいつをあたたく出迎えてやった。

隣に立って歩き始めると、旅行用のキャリーケースの車輪をガラガラさせながらさっそく尋ねてくる。

「ヤエちゃん、元気にしてたか？ ん？ 討伐中にのんびきならない関係になっちゃったりしなかっただろうな？」

なんで親父どもはみんな若者の下半身事情がそんなに気になるのだろうか。

少子化だからか？

俺はいささか面倒臭く思いながらも答える。

「討伐中にはなってねえよ。心配すんな」

それで伝わったらしい。ジジイはニヤリと笑った。

でかい手を伸ばしてきてこっちの背中をバシバシと叩く。

「そうか。いや、良くやった。良くやったぞ、信之介。一人で吸血鬼を退治するとは成長したもんだ」

「まだ何匹か残ってる」

「なに、すぐ見つかるさ。早めに片付けちまおう」

ロータリーに停まっていた新型クラウンのタクシーに二人して乗り込む。

「何匹か、って言ったな。討伐済みの吸血鬼の『親』だけじゃないってことか」

ジジイはでかい体をどっかりと革のシートに沈めながら、張り合うようにどっかり反対側に腰を下ろした俺に向かって会話を続けた。

外より薄暗くなった車内で、窓から差し込む真夏の午後の陽光が眩しい。ジジイの頭は車の屋根の影に入っただのでそちらはだいぶマシになった。

うなづく。

「第一発見者の前に現場で吸血鬼と接触していた奴が気になっている。そいつも吸血鬼なら、警察に通報しない理由になるだろ？」

「なるほど、なるほど。誰がどう見ても吸血鬼のしわざな殺人事件で、目撃者です、なんての

この吸血鬼が名乗り出たら、自分が犯人扱いされて討伐されちまいかねんって思うわなあ」
ジジイはどこか愉快げにくつくつと含み笑いをこぼしながらうなずいた。

そして満面の笑みをこちらに向けてくる。

「お前えの勘はよく当たる。きつとそいつも吸血鬼さ」

「もつとも人間の血を吸ってるかは分からない。まずはそれを調べるところからだな」

「なんかアテがあんのかい？ 名探偵の信之介くんよ？」

「ない。それもこれから考えるんだ。まあ、いざとなったら本人に訊くさ」

「はわわッ、信ちゃんのおじいちゃん！ お邪魔してるよう〜」

「わははッ、邪魔なんてとんでもねえ！ こんなあばら家で良けりや好きなだけいてくれ。何ならこの際、信之介の嫁に来てくれたっていいんだぜ!？」

「ふえ!? え、えつと、その……」

天野は顔を真っ赤にしてうつむきながらもじもじとした後、ついに恥ずかしさに耐え切れなくなつたようにこつちにすがりついてきた。

「し、信ちゃんん〜！ わたし、お嫁に誘われちゃったよお。えへ、えへへえ……」

「よーしよーし、大丈夫だぞー。天野が結婚してくれたら俺も嬉しいからな。だが、ジジイ。お前はセクハラ発言をそのへんで自重な？」

なんか嬉しそうだから別にいいけどな。

肩に顔をうずめる彼女のポニテの後ろ頭をぼんぼんと撫でてやりながら俺は言った。

「なんでえ、現代っ子はこんぶら、いあんす、がしっかりしてやがる。当人が嫌がつてないんだから別にいいじゃねえかよ」

作業衣に着替えて座敷であぐらを掻いたジジイがぼりぼりと脇腹を掻きながら楽しげに不平を唱えた。

「あまり人の頭越しにサクサク話を進めるなって言ってんだよ。俺から言う機会がなくなっちゃうだろ」

こっちはもうその日になつたらどんな風に天野を食事に誘うかとかどんな手順でムードを高めた上で指輪を渡すとかいろいろ考えてるんだ。それを全部無駄にされたらたまったもんじやない。

「ふーむ、そういうことなら仕方ねえ。よし、そっちについては後で僕とばあさんの馴れ初めをたっぷり聞かせてやるとして、今は吸血鬼退治の方に集中しようじゃねえか！」

何の参考にもならなさそうな昔語りの予約を勝手に入れつつ、パン！と膝を打ったジジイの前に俺はため息をつき、今日こいつを駅まで迎えに行く前にあったことを話し始めた。

「美名瀬十吾。半年前この町に引っ越してきた三十二歳の会社員だ。引っ越し後は駅前のアパ

ートで暮らしていた。同居人はいない。勤務先は春日浦中野の工業団地、そこに去年新しくできた丸山化学鋳業の営業所」

鮮烈な朝の日差しがフロントガラスから差し込んでくる。

助手席で渡された資料をめくる俺に、捜査車両を運転している刑事さんが説明した。

「勤務態度は良好で、職場でも特に問題を起こしていない。だが二週間前から持病の鬱病の悪化を理由に欠勤が続けている」

「その頃に吸血鬼化が始まった」

刑事さんはうなずいた。

「司法解剖の結果もそれを支持している。腎臓の変異の進行具合がちょうどそれぐらいなんだそうだ」

吸血鬼化した人体には、犬歯の伸長以外にも尿が青くなるなどの目に見える変化が起きる。尿そのものを採取しなくても、腎臓に変異開始後の経過日数に応じた特徴的な病変が残るので、それを見るのが、吸血鬼化の進行度を測る上では一般的な手法だ。妖刀に全身の血を吸い尽くされてカラカラに乾いた変死体からも証拠を採取しやすい。

交差点に進入してハンドルを切り、車内からの街の風景を旋回させながら続ける。

「美名瀬は以前から市内の心療内科に通っていたし、連絡も取れていたから、勤務先では心配はしつつも、特に疑問を抱かなかったそうだ。メールや通話での受け答えにも不審な点はなかったという。今日朝一で美名瀬の上司と話をしに行ったが、奴が吸血鬼化して、業者に討伐されたと伝えるとひどく驚いていた」

資料にクリップで留められた写真、そこに写る朴訥そうな男の顔を見ながら刑事さんの説明に耳を傾ける。

心に病を抱えつつも、おそらくそれなりに周囲から愛されて生きていたのではないだろうか――俺が殺した元人間の写真からは、そんな印象を受けた。

「職場への連絡は、最後まで？」

うなずいた。

目抜き通りから離れていく方向の狭い片側一車線で信号が赤になり、車を停車させると、その間にダッシュボードからジップロックに包まれたスマホを取り出して渡してくる。

「奴のズボンに入っていた携帯だ」

手のひらの上に乗せられたそれを見下ろす。

泥と血にまみれた銀色の筐体が、フロントガラス越しの陽光を浴びて鈍く輝いていた。

「お前に討伐された日の朝にも、そいつで欠勤をメールしていた。通信会社に確認したが、三日前から基地局の接続先が変わっている。その頃から山の中に潜伏を始めたとして間違いないだろう」

「三日前か……」

つぶやきながら資料をめくる。

次のページには美名瀬が負った噛み傷の写真が添付されていた。

上半身が斜めに切り落とされた死体、その下半身側に残ってる方のわき腹をやや背中に回った辺り。妖刀で斬られたせいで、ひどくやせ細って、しぼんで見えるそこに、直径5ミリ程の刀創ではあり得ない一对の赤黒い斑点が浮き上がっている。

吸血鬼の肉体の再生能力は高いが、吸血鬼になる前についた傷はそのまま残る。

間違いなく吸血痕だった。

美名瀬を襲った吸血鬼はすぐに食事を終えたらしい。そこ以外に噛まれた形跡はなく、吸われた血の量もせいぜい五十cc程度だと思われた。美名瀬がこれで失血死した可能性は低い。

「噛まれた正確な日付は分からない」

信号が青に変わったので車をふたたび走らせながら、刑事さんが説明を再開した。

吸血鬼になったやつが実際に事件を起こすまでは時間がかかる。他の吸血鬼に噛まれてからタイムラグが始まるまでのタイムラグ。吸血鬼化が始まってから空腹に耐えられなくなるまでのタイムラグ。どちらも個体差が大きく、追加の証拠なしに事件を起こした日時からそいつが噛まれた正確な日付を逆算するのは困難だ。

「外科にでもかかってくれていれば良かったんだが、あいにくどこにも記録がなかった」

「そうだろうな」

俺は資料を眺めたまま応えた。

「吸血鬼に噛まれた前後は記憶が曖昧になる。蚊と同じだ。血を吸っている間、獲物の反応を抑えるために傷口から毒を流し込むんだ。痛覚を麻痺させる麻酔に、認知能力を混乱させる向精神成分——」

ページを繰りながら続ける。

「しかも自分では分かりづらい背中側の噛み傷だ。たぶん、ぼーっとしている間に出血も止まって、気づいた時にはなんか腫れてるぐらいにしか思わなかったんじゃないかな」

「……なるほど。うまくできている」

刑事さんは感心というよりは憤りに近い息を吐いて言った。

「化け物も生き物さ。環境に適応するように進化してきて今がある。人間の追跡を躲すために、そう簡単には尻尾を掴ませない」

俺は慰め半分にそう言って、証拠品のスマホをダッシュボードに戻し、資料の束は自分のリュックサックにしまい込む。

「となると、やはり——」

タイヤの音と尻に伝わる振動が変わる。

アスファルトで舗装されていない狭い砂地の横道に入り込みながら刑事さんは続けた。

「——ここで、何か手がかりが得られるか、だな」

それがどこかはすぐに分かった。

正面が砂利道を挟んで畑になっている古びた二階建てアパートの前に二台のパトカーが停まり、警官が何人も集まってきているのが見えた。

「邪魔するぞ」

「お疲れさまです」

刑事さんが声をかけると、二階の部屋のドアを守っていた若い警官が敬礼した。後に続いて中に入る。

途端にむっと立ち込める血臭、そして腐臭。その中で鑑識が忙しそうに証拠品を検めたり、室内の写真を撮ったりしている。

1DKの、おそらく東京とかの都会の基準と比べると単身用としてはかなり広い部屋の中は、ひどい有様だった。

そこら中に何頭分もの犬や猫、小鳥といった小動物の切り裂かれた死骸が転がり、冷蔵庫にはそいつらの臓物や飲みかけの血を集めたボトルが乱雑に押し込められている。肉の腐った臭いに引き寄せられてネズミが湧き、それも捕まえて血を搾り取って飲んだ形跡があった。

浴室は慣れない血抜きのために血だらけになっていた。他の部屋の壁や床にも血が飛び散っており、家具やカーテンには爪で暴力的に引き裂かれたような跡が残っている。美名瀬が必死に吸血衝動を抑えようと努力していたことが伺えた。

吸血鬼化したばかりの人間の住まいはこういう状態になりやすい。どうにかして人間を襲うまいとして、ほかの動物の血を代わりにできないかと悲惨な試行錯誤を続けるのだ。だが一度でも人の血を吸っていると、結局はその味を忘れられず、ふたたび事件を起こしてしまう。

玄関近くのゾーニングされた一画で鑑識の人に手袋やマスク、髪覆いを借りて身に着け、現場を汚染しないように気をつけながら、俺も家探しに参加させてもらった。

「刑事さん」

机の上に広げられていた大学ノートを一枚めくって、俺はすぐに刑事さんと呼んだ。

美名瀬は日記をつける習慣があったようだ。ほとんど毎日のようにその日の出来事や思いを書き綴っている。ひよっとしたら鬱の心理療法の一環だったのかもしれない。

もちろん吸血鬼化が進むにつれてそれどころではなくなってしまうようだが、そうなる前――先々週のことかびつしりと書き連ねられたページの中に、一日だけ、欠けている日付けがあった。

吸血鬼に噛まれた時に注入される毒が厄介なのは、ただ記憶をなくすだけでなく、自分がそれをなくしたことすら分からなくなるからだ。

認知症と同じだ。確かに記憶が欠落していて、誰かにその時何があったかと尋ねられても答えられないのに、自分ではそう思っていない。答えられないこと自体を認識できない。

意識を取り戻した直後は、急に時間が進んだことに気づき、ぼんやりと「今何をしていたんだっけ?」と思ったとしても、時とともにそう疑問に思ったことすら忘れていく。

会社帰り、帰宅途中に襲われ、夕暮れ時だったはずの周囲の世界が突然深夜になっても、とにかく家に帰らなくてはいつもの通りの歩いているうちに「なぜか急に真夜中になった」という記憶自体が思い出せなくなっていく、帰宅して床につき、朝を迎える頃には完全にいつもの日常に戻っている。

こうなるともう誰も異常に気づけない。

だから日記にも「昨日何があったか思い出せない」というような文言は一切ない。いつも通りの記述が、それが欠落した日付まで淡々と続き、その日を飛ばして、翌日からまた何事もなかったかのように再開される。

普通ならそのことに特別疑念など抱かないだろう。美名瀬自身もそうだったに違いない。一日だけ日記をつけなかった日自体はほかにもあるからだ。この日もそうだったのだろうと自分で納得して、それで終わってしまったのだろう。

だが、美名瀬が吸血された可能性のある時期の範囲内で、日付が欠落しているのはそこだけだった。

「これは……」

隣に立った刑事さんが説明を求めるような声で言った。

「吸血鬼の毒でボケた頭で日記は書けない」

俺は振り向きながら答えた。

「少なくともまともな文章にはならないはずだ。内容は支離滅裂で、そうだとすることに気づかないまま書き続けてしまう」

そして欠落日以外の日付の文章はまったくの正常だった。

おそらく美名瀬は本当にこの日の夕方に襲われたのだ。どこか日の届かない場所で——数時間分の記憶を飛ばされ、帰りが遅くなったので、日記をつけている時間もなかった。

室内なら朝方や昼間に襲われることも考えられるが、その場合は会社の誰かが美名瀬の様子がおかしいことに気づくだろう。たとえ休日で、誰とも会わなかったとしても、夜までは毒の影響が残る。それがこの日以外の、日記の記述がある日だったなら、漢字が書けない、筆跡が急に乱れる、といった吸血鬼に血を吸われた直後の犠牲者に特徴的な異常が生じたはずだ。

「……手がかりが掴めたな」

刑事さんが声にかすかな興奮を滲ませながらそう言った。

俺と刑事さんはその後も鑑識に混じって捜索を続けた。

残念ながらほかに美名瀬を襲った吸血鬼に繋がりそうなめばしい手がかりは得られなかった。どうやら日付だけを頼りにそいつを探さなくてははいけないらしい。

しかし、諦めて部屋を出ようとした時——

「塚本係長、これを」

青い作業着を着た鑑識の一人が、洗面所から布切れを手に出てきて声を上げた。

刑事さんが受け取り、ためつすがめつ眺める。

美名瀬が着ていただろうシャツだった。前の部分にべったりと大量の血痕がついている。

「洗濯機の一番禺に突っ込んでありました。胸ポケットにこのレシートが」

鑑識が説明しながら、某飲食チェーンの店名が印字されたしわくちゃの紙片を差し出す。

「日付は、最初の事件のあった日です」

つまりこの部屋で解体された何かの動物の血ではなく、犠牲者の人血である可能性が高い。

刑事さんが白いワイシャツを赤く染め直すような大きな血痕に目を下ろす。

「よほど慌てて血を吸っていた——ということか？」

怪訝そうに眉を顰めながら言った。

「いや、こいつは吐き戻しだ」

俺は横から口を挟んで疑問に答えた。

刑事さんが鑑識の人と一瞬間を見合わせた後、こちらを振り返って眉を上げた。

「吸血鬼は高速で動くからな。別に鳩尾を一撃されなくても、吸った血を戻すことがある」

俺はその視線に答えて言った。

「現場から逃げる時に、『何か』とぶつかったんだろ？ 胃の中にたっぷり血を貯め込んで、たふたふさせていたところに強い衝撃を受けて、弾みでオエッ、と口からこぼしちまったんだろうさ」

「なるほど。つまり」

「そうだ」

うなづく。

「ぶつかった奴にも同じ血がついてる可能性が高い」

「目撃者の手がかりも得られた、ということか……」

ふたたび声に高揚を滲ませて、刑事さんは言った。

アパートを出た俺と刑事さんは近所の喫茶店に入った。

生き物の残骸にまみれる作業はもっぱら専門家の鑑識がやってくれるおかげで特に汚れなかったもので、どちらも特に着替えたりシャワーを浴びたりはしていない。

一応、お互いに服に蛆なんかがついてないか確認し合った後、全身に消臭剤をぶっかけて、気持ち時間を置く程度のこととしてはしておいた。田舎の警察はいいかげんだ。

例のシャツはDNA鑑定に回してくれるらしい。血が付着してかなり時間が経っているが、量が多いので問題ないとのこと。そこで被害者のものと一致すれば確定だが、おそらく間違いないだろう。

「状況を整理しよう」

実際のボックス席で、注文した「山盛りBLTサンド」を昼飯にぱくついている俺に、膝ぐらの高さのテーブルを挟んで向かい側のソファに腰掛けた刑事さんが大きなファンのゆっくりと回転する天井を見上げ、煙草のけむりを静かにくゆらせながら言った。

俺は吸わないが（未成年なので当たり前だ。討伐屋は法律に厳しいのだ。天野が嫌がりそうなので、大人になっても吸う気はないが）、特に臭いが気になる性質でもないので向こうも気にせず吸っている。

ソファの背もたれの後ろには背の低い観葉植物の鉢植えが置いてあって、美名瀬のアパートを訪ねた時よりも少し高くなった日差しが落とすその細かな影が、透かし彫りのように刑事さんの背広の上にかかっていた。

「まず美名瀬十吾が何者かに嘔まれて吸血鬼化、人を襲った。同時期にお前と親しい天野八重香も吸血鬼として覚醒している」

親しい、の部分に何やら含みを感じたが、今反応するのはちょっと違うような気がしたし、何やら悔しくもあったので聞き流すことにする。

「美名瀬が殺しをやった時、何者かがそれを目撃していた可能性がある。美名瀬は現場から逃亡した際、そいつとぶつかり、飲んだ血の一部を吐きこぼした」

一本目の火を灰皿で揉み消し、視線を上げてこちらに向けてくる。

「一週間後、美名瀬はお前に討伐された。だが美名瀬を吸血鬼化した『親』の行方は分からず、『目撃者』の正体も判然としない」

「まずは美名瀬が『親』に嘔まれた日の行動を洗うことからだな」

刑事さんが言い終えたと思ったので、俺はパンとマーガリンと肉と野菜が咀嚼されて混ざり合った口の中のサンドイッチの一塊を飲み込んで言った。

雑にばらばらにされた生き物の死骸には生臭さと腐臭しか感じなかったのに、ちゃんと調理されたハムやベーコンはマスタードが鼻腔を突き抜けるような香り高さで、実にうまい。不思議なことだ。この店のBLTサンドは具材の量がたっぷりで特にうまいと思う。

「スマホのGPSデータが残っていれば、どの経路を辿って会社から家に帰ったか分かるだろう。そこに沿って聞き込みをすれば誰か見ていた奴がいるかもしれない。日差しが遮られる場所——繁華街の狭い路地や、駅の構内が怪しいな。夕方ならその程度の日陰でも吸血鬼が行動できる。その辺を重点的に探して——」

「その前にだ、阿曇」

「？」

しゃべりながら二個目のサンドイッチに伸ばしかけていた手を止め、刑事さんを見る。

「お前、今回の事件についてどう思う？」

質問の意図が分からなかったので無言で先を促した。

「以前、二体の吸血鬼が同じ地域で同時に覚醒することは滅多にないと言っていただろう」
左右の膝に肘を載せて、体を少し屈めた姿勢でテーブルの向こうからこちらを見ながら、刑事さんは続けた。

「美名瀬の『親』がどっちなのかは分らん。この地で目覚めたのか、それとも最近移ってきたよそ者なのか……。だがいずれにせよ、今この町には天野八重香とそいつ、最低二体の吸血鬼が存在していて、『目撃者』も吸血鬼である可能性がある」

じつと俺と目を合わせたまま、束の間口を嚙み、また開いた。

「……合計三体だ。もし『目撃者』がそうだとすると、三体ものの吸血鬼が、短期間のうちに次々とこの町に現れたことになる。こんなことが他の地域でもこれまでにあったのかが知りたい」
俺は顎にこぶしを当てて、少し考え込んだ。

「それは……ちょっと聞いたことがないな。少なくとも俺の知る限り近世以降は一度も起こっていないはずだ。そもそも三体も吸血鬼が集まったら魔王変化の危険もあるし……」

「マオウ——何だ？」

「魔王変化。同じ種類の化け物が複数体で融合、合体してより上位の存在に変化するんだ。吸血鬼なら三体以上からそうなる可能性があって、一体増えるごとに指数関数的に確率が高まっていく。これは化け物どもが意図してそうなるというより、大勢で集まっていると何かの弾みでそっちに存在が切り替わってしまうという側面が大きい」

肩をすくめて続ける。

「古代より前の時代には日本でもよくあったことだ。だがそのたびに、その時々の人間の英雄によって討ち滅ぼされてきた」

右手の大きな升目の格子窓から差し込む強烈な夏の陽光、それを透明なグラスと氷が反射する真っ黒なアイスコーヒーから突き出した白いプラスチックのストローを咥え、一口すすった。冷たいコーヒーで口の中のマヨネーズと肉の脂を洗い流して、ぷつ、と口を離す。

「化け物側も学習して、徐々に無害化してきている。目立つ真似をしたら人間は必ずそれ以上の武力を集めて襲い掛かってくると理解したんだ。知能のある奴も、そうじゃない奴も。だから歴史が進むにつれて、連中が魔王を出現させかねないような規模の群れを作る事例は減ってきた」

しゃべってる間も、命の水のごとき澄み切った味わいの黒く冷たい液体が胃袋の中を滑り落ち、まだ昨日からの連勤の疲れが残っている脳にカフェインを染み渡らせていく。

刑事さんは温かいやつを頼んだ。白いコーヒーカップの黒い液面から白い湯気が立ち、テーブルに斜めに降り注ぐ日差しを薄く揺らめかせていた。

それを視界の隅に捉えながら、刑事さんを見て説明した。

「吸血鬼も例外じゃない。数が増えればたとえ魔王に成らなくても犠牲者が増えて、人間の狩人に目をつけられやすくなる。他人の吸血行為のせいで自分まで巻き添えて狩られたらたま

ったもんじゃない。そこで肉食動物のように縄張りを作って、仲間同士距離を置く。仲間を不用意に増やさないために、吸血もなるべく直接嘔まずに道具を使って済ますぐらいだ」

喫茶店の店内は空調が効いていたが、古い建物の窓際ということもあって、真夏の陽光はそれなり以上に暖かく、人間の吐く息や飲み物のおかげで湿度も高い。

アイスコーヒーの方は逆に中身の氷で良く冷えているので、グラスの表面に湿気が結露して汗をかいている。

「奴らはそれぐらい知能が高い。まあ、元人間か、ほとんど人間なんだから当然だが——うっかり仲間を増やしてしまった場合は、『親』は『子』をすぐに縄張りから追い出すか、自分がどこか遠くに去っていく」

それを持った時、手のひらについた水滴を、これまたしつかりと温かいおしぼりでぬぐい取った。

グラスの方には結露が俺の手で拭き取られたところと、拭き取られていないところが鮮やかなコントラストになって残っていた。

「そもそも奴らは絶滅危惧種なんだ。世界のほとんどの地域ではとくに狩り尽くされていて、日本やほかの二、三の国で千体ぐらいが細々と生き残っているに過ぎない。天野みたいに大昔に混ざった奴はそれなりにいるはずだが……代を重ねるたびに血が薄まって、覚醒確率も下がりが切ってるから、同時に複数の個体が覚醒するなんてことはまずないし、今でも生き残っているような個体は慎重になっている。自分以外の吸血鬼が存在している場所にわざわざ入り込んで、そこに何日も留まるようなことは普通はしない」

刑事さんはため息をついた。

「警察で把握していないことが多すぎるな。悪いが、吸血鬼や怪異全般について、これは知っておいた方がいいということパンフレットにまとめてくれないか。専門家の知見として、捜査が本格化する前に署内に配布しておきたい」

「いいぜ？ 明日には届ける。ジジイも帰ってくるからな。いろいろ教えてくれるはずさ」

「頼む」

刑事さんはカップを手に取り、黒々とした液面を揺らすうまそうなホットコーヒーを一口くちを含み、飲み込んで、皿に戻す。

陶器と陶器がぶつかる音が小さく、そして軽やかに響いた。

「複数の吸血鬼が同じ場所に出現するのが滅多にないことだというのは分かった。だが、この町では今その滅多にないことが起きている」

俺はうなずき、考えをまとめるためにまた顎に手を当てて、窓の方に視線を向けた。

先程の自分の言葉と矛盾するようだが、実際そういうことが起きてしまっている以上はどうしようもない。

いくつものあり得なさそうな可能性の中から、少しでもあり得そうなものを選んで答える。

「……やっぱり、現状では美名瀬の『親』はこの地で目覚めたばかりの吸血鬼だと見るべきだと思う。以前から生き残っている個体なら美名瀬を直接噛んで吸血鬼にしてしまうようなへマをする可能性は低い。問題は『目撃者』だ」

「吸血鬼なのか、吸血鬼でないのか」

「そして以前から存在していた個体か、それともこいつもやはり最近覚醒したのか」

刑事さんに目で向き直りながら続ける。

「前者だとすると一つ分らないことがある。なんでわざわざ美名瀬の狩りの現場に近づいたのか、ということだ。吸血行為が行われていることは臭いで気づいたはずだ。吸血鬼の鼻ならたとえ雨が降っていても嗅ぎ取れる。気づけば普通は近づかない。吸血鬼同士だからといって友好的とは限らない。獲物を奪われると思って襲ってくるかもしれない。もしそれが狩人の罠だったとしたら、自分もまとめて狩られるかもしれない。危険だということは分かっていたはずなのに——実際、案の定俺たちに存在を掴まれている」

腕組みをして、BLTサンドの皿と、冷温のコーヒーが二つ並ぶテーブルの天板に目を下ろした。

「後者だとしてもそれはそれで問題がある。三体もの吸血鬼が一つの地域で同時に覚醒したことになるからだ。二体までなら俺も何とか受け入れられるが……三体となるとな」

「そもそも日本全体で、吸血鬼への覚醒はどれぐらいの頻度で起こるものなんだ？」

「今では百年に一度あるかないかだ。俺たちが捕捉できていない事例も当然あるだろうが、それ以上とは考えられない」

「……なるほど」

「あるいは『親』と『目撃者』が実は同一個体なのかもしれないが——その場合もやはり現場に近づいた理由が良く分からないな」

「血の臭いに惹かれたんじゃないか？ 経験の浅い個体なら、それが危険だと分からないこともあるだろう」

俺は首を振った。

「刑事さん、『親』は美名瀬の後には人を襲っていないんだ。ほかに行方不明者も、噛まれて吸血鬼になった奴も出ていないことからそう判断できる。そして美名瀬の血もほとんど吸っていない。飢餓を免れ得る期間はとくに過ぎていたはずだ」

産まれたばかりの吸血鬼は、肉体を急激に変化させるために特に大量の血を必要とする。二週間腹を持たせるためには最低二リットル、できれば三リットルは必要なはずだ。

『親』の吸血量は美名瀬の体に残った噛み痕から推定できる。間違いなく二口か三口ぐらいしか吸えていない。

そのこと自体は別に不思議でも何でもない。吸血鬼に変異したばかりの奴は手際が悪いから、せつかく獲物を捕まえても人が近づいてくる気配にビビって逃げ出したり、吸血の途中で自分

で自分の行為が恐ろしくなって食事を止めてしまうことがよくあるからだ。

空腹で理性を失っている間は躊躇なく人間の血をすすれても、飲んでいるうちに飢餓感が和らいでくると、自分が何をしているのか理解し始める。

吸血鬼になりたての奴が最初にパニックに襲われるのは、大抵そんな時だ。

美名瀬が農具小屋から逃亡したのも、吸血現場を誰かに見られる恐怖よりも、人の気配で我に返って状況を認識したことが大きかったかもしれない。

だが、それにも関わらず次の犠牲者が発生していないことは大きな意味を持っている。

「事件を起こさずに人血を手に入れる方法を見つけたということだ。こういうことは時々起こる。人間の協力者が現れて、自分の血を提供したり、どこかから、何らかの方法で血を手に入れたりしてしまうんだ」

「病院関係者——」

刑事さんが低い声でつぶやいた。

「そうだった事例がある。今回の『親』がどうかは分からない」

俺はうなずいて答えた。

頭の中に一瞬、先の美名瀬討伐でずいぶんと——いささか不自然に思える程——親身に協力してくれた若い医師の姿が浮かぶ。……いや、まさかな。

首を振り、続けた。

「安全な方法で血を調達するアテがあるなら、『親』が臭いに誘われたとは考えにくい。理性を喪失する程の飢餓状態ならまず外出自体を控えるだろう。だから、なんで都合良く美名瀬が吸血している現場の近くに現れたのか、説明がつかない」

「そして最後、『目撃者』が人間である可能性については——」

「なぜ警察に通報しなかったのかが分からない。たとえ暗闇でぶつかってきたのが吸血鬼だと分からなかったのだとしても、わざわざ土砂降りの夜中にあぜ道を離れて農具小屋に近づいた以上、そこで何かが起きていることには気づいていたはずだ」

「——そういうことだな」

そう言うと、刑事さんは眩い夏の日差しの溢れる窓の外に目を向け、二本目の煙草を吸いながら何事かを考え始めた。

会話が途切れたので、俺もサンドイッチに手を伸ばした。

窓の光を浴びながら今度こそかぶりつくと、シャキシヤキとしたレタスと、トマトの甘い酸味が口の中で夏の海の白波のように弾けた。

「いっそのこと、総当たり式に検査でもしてみるか？」

二つ目のサンドイッチを食べ終えても刑事さんが何も言わなかったので、俺は紙ナプキンで口元をぬぐい、間を持たせるぐらいのつもりで提案した。

「昼間でも家に籠もってるような怪しい奴に片っ端から声をかけて、日差しの下に連れ出せば、

そいつが吸血鬼かどうか一発で分かるだろう。費用も手間も大してかからない。一番シンプルで確実な方法だ」

まあ、問題の『親』や『目撃者』が、今でも街中で暮らしていればの話だが。

刑事さんはそちらについて少し考えた後、ゆっくりと首を振った。

「いや、それはまだいい」

「理由は？」

少し意外だったので俺は眉を上げて尋ねた。

「この事件には、俺たちがまだ気づいていない何かがある。それを見つけるまでは決定的な行動は起こしたくない。捜査はあくまで被疑者を絞り込む範囲で行う」

「……そう思う理由は」

「勘だ」

刑事さんの短い返事にやや面食らいながらも、俺はその意味を吟味した。

他の化け物退治でも、長年の経験者の勘というものは馬鹿にならない。存在自体があやふやな存在を相手にするとどうしてもそうなるのだ。今回も、県警本部の捜査一課で長年殺人事件を扱ってきた刑事さんが言うなら従っておくのが無難だろう。

もちろん今回の事件の犯人は、刑事さんが今まで相手にしてきた人間の殺人鬼とは違う。だが吸血鬼というやつは人間に近いだけあり、人間的な行動を取りやすいのだ。

そう決め、うなづく。

「分かった。俺もそのつもりで吸血鬼探しを続けよう」

「すまん。もつとも、どのみち当面はほかのことで忙しくて、捜索だけに集中する余裕はなくなるかもしれないが」

「何か、あるのか？」

気になって尋ねると、刑事さんはちょっと口を噤んだ後、答える。

「今夜、県庁から怪異の蔓延に伴う特別警戒警報が出る」

またもや意外だったので俺は片眉を持ち上げた。

「早いな。まだ昨日の今日なのに」

「少なくとも美名瀬以外にもう一体、吸血鬼が潜んでいることが分かったからな。それに今の知事は表向きリベラルを装ってはいるが、実態はゴリゴリの保守派だ。治安問題には殊更厳しい態度で臨みたがる」

まだ残っている煙草を灰皿に乗せて、刑事さんは言った。

「明日の夜には警察と討伐業者合同での市内の見回りも始まるだろう。お前のところにも協力要請が届くはずだ。……準備はしておいてくれ」

俺は無言でうなづいて応えた。

「問題はいくつかある」

刑事さんがソファアの背もたれに上体をもたれかけさせながら続ける。

「一つは人間側が目立つ動きをすることで、吸血鬼の他地域への逃亡を促すのではないかという。だが今のお前の話を聞く限り、今回に限ってはその恐れは少ないだろう」

ベルトのバックルの辺りで左右の指を組んで言う。

『親』は覚醒したばかりだ。まだ吸血鬼ならではの生存法に慣れていない。加えて何らかの方法で騒ぎを起こさずに血を調達しているなら、それが持ち運び可能な手段でない限り、居場所を移すことには躊躇いがあるはずだ。……俺たちの予想が正しければ、だがな」

俺は自分の判断の正しさに特に疑いを抱いていないので、じつとこちらを見据えてくる視線をまっすぐに見返しながら、刑事さんの話に黙然と耳を傾け続けた。

『目撃者』についてはことさら気にする必要はない。用心深い吸血鬼なら、美名瀬に体当たりされた時点ですぐにこの町を去るだろう。もし留まっているとすれば、奴にはそうしなければならぬ理由があるということだ。今さら夜の見回りが始まった程度で動くとは思えない」

深緑色の大理石の灰皿から立ち上る透明な煙が空調の風で揺らめいては、刑事さんの視線を時折遮っていた。

「もう一つは、見回りに人手を割かれ、捜査の進展が遅れること。だがこれも、今すぐ決定的な行動を起こす気がないなら問題は少ないだろう。つまり——」

「新たな吸血鬼被害を抑制することに注力しつつ、ピンポイントで被疑者の周りを探る」

「そういうことだ。ならばどのような仮説に従ってそれを進めるかだが……とりあえずは今言った通り、『親』と『目撃者』は別個体、そしてどちらも吸血鬼だと考えて捜査を進めようと思う」

俺はもう一度強くうなずいた。

「悪くないな」

「俺は『親』を追う。お前は『目撃者』を探してくれ。何か、警察でやっておくべきことはあるか？」

「美名瀬の交友関係を知りたい」

迷わずそう言うと、刑事さんは視線で理由を尋ねてきた。

『目撃者』は美名瀬と顔見知りだったんじゃないかと思うんだ。それなりに付き合いの長かった知り合いが急に自分と同じ吸血鬼になってしまったら、危険だと分かっている、様子を見に行きたくなるだろう」

俺はよどみなく答えた。

「昼間、会社で会うような奴は関係ない。夜の知り合い、もしくはネット仲間が怪しいな。吸血鬼疑いリストは知り合いから手に入れてある。美名瀬の知り合いの名前が、その中に含まれていたなら——奴が吐き戻した血のことで、一つカマをかけに行ってみる」

「いいだろう。部下に調べさせておく」

刑事さんは口の端にちよつと笑みを浮かべてそう言った。

俺は何やら面白いことを口走ったらしい。そのことを怪訝に思っていると、刑事さんは灰皿へ手を伸ばして、煙草を潰し始めながら、疑問に答えるように続けた。

「お前は討伐屋よりも、探偵にでもなるべきだったんだと、いつも思うんだがな」

「……なんでだよ？ どっちも同じようなもんだろ？」

いささか心外だったので俺は思わず訊き返した。

「少なくとも化け物相手に切った張ったをやる可能性は今よりずっと少ない」

ソファから腰を上げ、立ち上がって、背広の襟を正しながら言う。

「今からでも普通の高校生に戻って見たらどうだ？ 天野八重香も喜ぶだろう。出席日数も足りていないんだろう？」

「放^はつとけよ。こんな状況で討伐屋が何もしなかったら、そっちの方が危ないだろう」
なんでここで天野が出てくるんだ、と思いつながら俺は不機嫌に答える。

「それはそうだ。こちらにその気がなくても危険は向こうからやってくる」

刑事さんは嘆息すると、財布からコーヒー代と俺のサンドイッチ代を取り出し、テーブルの上に置いて告げた。

「美名瀬の人間関係については三日程度で洗えるはずだ。一通りの一覧が出来次第、そちらに送ろう」

「助かる。……飯、食っていかないのか？」

「愛妻弁当なんだ。店に持ち込むわけにもいかんからな」

「そりゃ悪かった」

「なに、どうせこれから休憩だ」

刑事さんをそれをちよつと楽しみにしているような声色で言って、珍しく普通のおっさんのように破顔して見せた。

「なるほど、政治家が動いてやがるのか。面白くなってきやがった」

話し終えると、ジジイが顎ヒゲをさすってニヤニヤとしながら不謹慎にそう言った。

「美名瀬の『親』はそっちに任せて大丈夫だ。お前えは言われた通り『目撃者』の搜索に集中しろ」

うなづく。

「ジジイはどうすんだ？」

「儂はちよつと調べものがある」

視線で尋ねると、ジジイは特に隠すでもなく続ける。

「ヤエちゃんのご先祖のことだ。大昔にどこかの代で吸血鬼が紛れ込んだとなると、ヤエちゃんのご両親以外にもその血を継いでいる家系があるかもしれん。予防医療も診療所の大事な役

目だからな」

「なるほど」

素直に感心する。俺は目の前の吸血鬼を追うことで頭がいっぱいになっていた。さすが年長者は視野が広い。未熟な若者の見落としをそつなく拾い上げてくれる。

「となると明禅さんところか」

「ああ、そうだ。明治より前の系図となるとあそこにしかない」

よく知られているように、江戸時代には幕府の方針で僧寺が日本中の人口を管理していた。うちの地域もご多聞に漏れず、昔からの住人はすべて西の河原に建つ禅宗寺が過去帳——続柄と死没の記録——を保管している。幕府が開かれてから急に寺が統治機構に取り上げられたわけではなく、往々にしてそれまでの慣行の追認という側面もあったので、それ以前の祖先もだいたいはそこが把握していた。

昔からの富農や名家と言われるような家であれば自分たちで系図を管理していることもあるが、普通の家は何代か遡ると分からなくなってしまうことがほとんどだ。その場合は寺で過去帳を辿らないと明らかにできない。

方針を決めるとジジイは立ち上がった。

「本格的に調べるのは明日からだ。今は夕飯までに刑事さんの宿題を片付けちまおう」

「了解」

俺も立ち上がりながら答えた。

この時、天野は俺が話している間、一言も口を挟まなかった。

隣で正座し、膝の上できゅっと小さなこぶしを握り、口を横に引き結んで、長卓の一点を見つめていた。

無理もない。ほんの少し前まで、こいつ自身が人を襲ったかもしれない疑いで駆除されるか否かの瀬戸際にあったのだ。

事件がまだ続いていて、自分が突然その同族になってしまった吸血鬼を、また新たに狩るやら狩らないやらの話をしている。それを聞かされるのは穏やかな気分ではないだろう。

だが、黙って事を進めるわけにもいかなかった。

そもそもそれが良くないから以前も討伐のことを告げたのだというのもあるし、今夜、吸血鬼絡みで行政から警報が出る。それは決して世間が天野を恐れているからではないのだということだけは、最低限知っておいてもらわないといけない。

美名瀬の『親』は別にいるし、『目撃者』との接点もない。天野はもう事件とは関係ないのだ。

気分が優れないようなら退室してもいい、必要なことは後で伝える、と話している途中に何度か促してもみたが、天野は首を振って、決してここを離れようとはしなかった。

青い顔をしてじっと俺たちの話に耳を傾けていた。

……もし尾を引くようなら、俺にできる範囲で慰めよう。

心の中で彼女に詫びながら、そう決めた。

俺はこの時、天野の決意を甘く考えていた。

それから俺はジジィと一緒に、刑事さんに頼まれた「吸血鬼ハンドブック」の作成に追われた。

書齋として使っている部屋の畳にどっかりとあぐらを掻いたジジィの隣で、座卓の上にお気に入りの東プレ静電容量式キーボードを載せ、モニターに向かって捜査に当たる警官が知っておくべき事柄を箇条書きでつらつらと書き連ねていく。

曰く、ニンニクや十字架はまったく効かない。

曰く、流れる水の上を渡れないとか、招かれないとかは迷信。普通に渡れるし、入れる。

曰く、心臓に杭を打ち込んでも別に死なないが、打ち込みっぱなしにしておけば心臓が機能回復できないので血流が止まり、体を動かせなくなる。そのまま一定期間（二週間が目安）経過すれば飢餓状態に陥って死ぬ。血流の有無に関係なく、吸血鬼が脱出できないような場所に閉じ込めておいて、血やその他飲食料を与えずにいてもやはり二週間程度で干からびて死ぬ。霧やコウモリになって逃げ出すことはないので安心して良い。ただし稀に自分の体を分解して檻を抜けようとする個体がいるため、鉄格子の間隔には注意を要する。可能な限り隙間の存在しない監房や容器を用いることが望ましい。

曰く、脳を破壊すれば一時的に行動不能に追い込める。ただし破壊し続けるとすぐに再生するので注意すること。

曰く、攻撃だけで吸血鬼を殺し切るには専用の呪具が必要。銀の銃弾はただ銀製というだけでは再生を数秒遅らせる効果しか得られない。呪力を付与する技能がないなら、通常の弾薬を大量に用意して大量に撃ち込む方が費用対効果は高い。

曰く、太陽光はよく効く。通常のダメージに比べて回復も遅れるため、吸血鬼はこれを非常に恐れる。個体差はあるが概ね七万ルクス以上から太陽光を浴びた部分の皮膚が発火し、激しい苦痛とショックによる行動不能状態を引き起こす。ただし追加の燃料を与えない限り燃焼は短時間で終わり、炭化した組織が外皮のように体表を覆って内部までは光が届かなくなるため、黒焦げで動かなくなっても中身はまだ生きていることが多い。完全に殺し切るには結局ガソリンなどで十分な時間焼いて肉体深部まで熱を通すか、聖なる武器で追加ダメージを与える必要がある。

曰く、通常の手段のみを使って殺す場合は、先に挙げた餓死させる方法以外では拘束して火葬場に持ち込むのが現代では一番手間がかからない。骨髄を確実に焼き切るために炉温は必ず1000℃以上とすること。

曰く――

長年の経験に任せて、とめどなく溢れる湧き水のようにつらつらと語って聞かせてくれる知識を、同じ速さでカタカタとキーボードに打ち込んでいく。

ジジイはロートルすぎてパソコンどころかワープロも満足に使えないので、こういうのは毎回俺の役目だ。

ジジイが一番働き盛りだった時は役所への届出も全部手書きの時代だった。今さら新しいことは覚えられないらしく、パソコンを扱わせようとしたら太い左右の人差し指で不器用にタイピングし始めるので、文章一枚作るのも遅くて仕方がない。そんなジジイの書類仕事を小学生の頃から手伝っていたら、こっちはいつの間にかキーボードを見ずに打てるようになった。当然五指は全部使っている。

書き留めたものを整理し、図で説明した方が早いものは簡単なイラストを作って貼り付けていく。

二時間程で俺はどうにか素人にも分かりやすそうな手引きを仕上げた。

夕飯はサバの味噌煮だった。俺たちが仕事をしている間に天野が作ってくれた。ジジイは一口食うなりそのうまさに大げさに感動していたが、実際彼女の料理の腕は大したもんだと思う。

エプロン姿も様になっている。ポニテが映えるというか、胸の盛り上がりがすごいというか……乳の丸みが横からはみ出てる。

もちろん鳥レバーや卵の煮物、イカの肝の塩辛といった、吸血鬼が血の代わりにできるおかずも副菜としてたっぷりと用意してある。俺やジジイもたんばく質をたくさん摂らないといけないのでちょうどいい。面倒な書類仕事がどれだけあろうと、討伐屋の基本は肉体労働だ。

飯の間、天野の表情はもう普通だった。よくしゃべり、ころころと笑う。自分の作った飯を実にうまそうに食う。刑事さんとのやりとりを話して聞かせた時の思いつめた様子もない。だから俺は、彼女が立ち直ったのだと思って、勝手に安心していた。

そして、夜――

トランクスとTシャツ一枚の姿で布団に横たわって明かりを落とした天井を見てみると、廊下側の襖が開いて、例のごとく俺のお古のパジャマを着た天野が枕を抱えて現れ、さも当然のような顔をして同じ布団の中に入ってきた。

おい、マジか。まさかジジイが家にいるのにおっ始めようってのか？

いや、さすがにそれはちょっとまずい気がするが、天野がその気ならなるべく声を立てさせない方向で応じるのも決してやぶさかではない――と一瞬、頭の悪い心配で心臓が高鳴るが、さすがにそんな気はなかったらしく、いつかの夜のように、むにゅーう、と胸を信じられないほどやわらかく変形させながら腕に抱きついてきた以外はおとなしく横になる。

どうやら本当にただ一緒に寝るだけのつもりらしい。天野にとって一つ屋根の下で暮らしている恋人とはそういうものなのだろう。

枕の上で目が合うと、襖の隙間からわずかに廊下の常夜灯の明かりが漏れてくるだけの暗闇の中で、左右の美しい瞳を煌めかせながら優しい微笑みを浮かべる。

「おやすみ、信ちゃん。今日もお仕事お疲れさま」

「——ああ、おやすみ。天野も一日、家のこと見ていてくれてありがとな」

俺はかろうじて、さもTPOも弁えず欲情などしていかないかのような優しい彼氏の表情を顔面に貼り付けて返事をかえした。

俺は基本的に天野を傷つけないのだ。男の剥き出しの性欲を一切取り繕わずにぶつけるにはこいつはちょっとばかり純粋すぎる。

想像するだけで罪悪感がすごい。いや、マジで。ほんとに。

だが相手にその気がないからといって、この状態で俺までその気にならずにいるというのは無理があった。

風呂上がりの天野の体は、火照ってほかほかとしていて、何かと湿っぽくて、左半身の密着している部分が常よりもさらにやわらかく感じられて、何やら甘い香りまで漂わせている。

何より純粋だの何だの言いつつ、昨晩はほとんど夜が明けるまで、お互いをあんなに激しく何度も求め合ったばかりなのだ。

信じられなかった。体は成長してもいつまでも子どもっぽくて、いつもぼけぼけとしていて、男と女は互いの信念と希望を抱いて合体するものだということをちゃんと理解しているかすら正直不安だった（学校の保健の時間に習うはずだが）天野が、まさか、まさかあんな、大人の女のように――

あの時の天野はどこを触つてもとても敏感に感じていて、果てしなく可愛かった。

もちろん俺もものすごく気持ち良かった……

その衝撃は、一日経った今でもしつかりくつきりこちらの脳髓に刻み込まれたままなのだ。

抱きかかえられている左腕の指先がちょうど天野の着ているパジャマのいけないところに当たっていて、そのまま触り始めてしまいそうになるのを必死に自制する。

いかん、幼なじみなんて関係性のおかげではじめから距離感0だ。

これ、今夜眠れるのか？ 明日も仕事だったのに――

そんなことを考えながら呆然と天井の沁みを数えていると、こちらが起きることに気づいたのか、ふと天野が顔を上げる。

そのまましばらくじっとした後、意を決したように切り出した。

「あのね、信ちゃん。一つお願いがあるんだけど」

「――!？」

一瞬マジで触ってほしいとでも頼まれるのかと思ってドギマギしながら振り向くが、暗闇の

中に浮かぶ透き通った両の瞳は伏目がちで、思ったより深刻な雰囲気を纏っていた。

「今度の吸血鬼探し、わたしも一緒に連れて行ってほしいの」

寝るために電灯を落とした後の暗い家の中の夜の光景の中で、髪を下ろしているせいか、いつもとは少し違って見える表情をしながら、彼女は言った。

「いや、お前、それは――」

ごく当たり前の事実として反射的に駄目だと言おうとしたのを遮り、訴えてくる。

「もういやなの。信ちゃんが怪我をするかもしれない……死んじゃうかもしれないのに、ただ待っていることしかできないなんて……」

その時の気持치가蘇ってきたのだろう。天野は両の瞳を涙ぐませた。

それでも言葉を途切れさせることなく続ける。

「夜だけでいいの。昼も一緒にいたいなんて言わない。信ちゃんのお仕事の邪魔もしない。しないようにするわ。だから――」

桜色の唇を一瞬閉じ、ひたむきな視線に釣り上げられるように上体を起こした俺を見つめてくる。

「……お願い」

絞り出すような声で、天野は言った。

今はストリートになっている黒髪が布団の上に静かに垂れていた。

拒絶されることに怯え、今にも泣き出しそうな程に瞳を揺らして、けれどけなげに、懸命に見つめてくる天野を見ているうちに、だんだん状況が飲み込めてきた。

どうやら俺はまた間違えていたらしい。

天野のことを守りたかった。守っているつもりだった。

だが、ただ事件を解決するだけでは、彼女を守れたことにはならなかったのだ。

事の始まりは俺が天野を遠ざけたことだ。

もちろんそれとは関係なく彼女はいずれ吸血鬼化しただろうが、それでも俺たち二人の問題はそこが発端だったのだ。

二度と手放さないと誓ったはずなのに、いつのまにか同じことを繰り返そうとしていた。馬鹿みたいだ。

だから俺は、彼女のか細い肩を抱いて、ぐっと胸の中に引き寄せた。

断られることを覚悟したのだろう。天野は息を詰まらせたように声を漏らす。

「ッ、信ちゃん――」

「いいぞ」

良い香りのする髪をできる限りの愛情を込めて撫でてやりながら、俺は言った。

腕の中で天野が目を丸くする気配がした。

ガバツと顔を上げて見つめてくる。

「ほんと!？」

「明日、ジジイに話してみる。反対されるかもしれないが——何とか説得してみるよ」
見開かれた潤んだ瞳に向かって、なるべく能天気そうに笑ってみせる。

「元々人手を増やしたいという話はしていたんだ。ジジイはもう年だし、俺一人じゃできることにも限界があるからな」

静かな夜の帳に覆われた天井を仰ぐ。

「ただ新人を入れようにも、今日日どこも人手不足で探すアテがなかった。天野が手伝ってくれるって言えば渡りに船だと思う」

ふたたび天野に目を下ろした。

「もちろん、これから先もずっと手伝うかは今決める必要はないさ。インターンや職場体験みたいなものだと思えばいい。けど、今回だけでも天野と一緒にいてくれたら、俺は嬉しいな」

「信ちゃん……」

天野が瞳を揺らし、しばし見つめ合う。

そしてどちらともなく唇を重ねた。

彼女の唇はやわらかく、そしてやはり良い匂いがした。

その感触に全神経を集中して味わいながら考える。

何となく天野を討伐屋にするみたいな話にしてしまったが、たぶんこれで良かったのだろう。現場でも一緒にいるなら相應の身分を与えるのが真っ当な発想だ。

もちろん危険はある。相手もこっちも遊びじゃない。討伐屋として現場に立つなら怪異を攻撃することもあるだろうし、そうなれば相手から反撃される可能性も当然ある。そういう状況でも天野を守り続けるのは、ずっと家に押し込めておくよりもそれなりに骨だろう。

けれど、それこそが俺が背負うべき業、かつて彼女を遠ざけてしまった報いなんだと思う。

もう二度と天野を一人にはしない。ずっと一緒にいよう。
今度こそちゃんと守ってみせる。

二人で事件を終わらせるんだ。

それからは、ふたたび横になった後も天野のやわらかい体をずっと抱きしめていた。

股間の分身はこんな時でも相変わらず空気を読まずに未練がましく暴れたそうにしていたが、腕の中でこちらを信頼し切った寝息を立てる天野の安らかな寝顔を見ると、頭の方では欲望を解き放ってやる気などまったく失せてしまう。

どうやらちゃんと眠れそうだった。

ただ抱き合って眠っていただけの翌朝というのは、散々やりまくった後とはまた別の気恥ずかしさがある。

ほぼ同時に目覚めた俺たちは照れ笑いという形でそれを伝え合い、もう一度心ゆくまで接吻してから、床を立った。

朝の時間が始まる。

天野は張り切っていた。朝飯ぐらい俺がやると言っているのに、気合たっぷりポニテとエプロンを括って台所に入っていた。おかげで俺は昨日の書類の手直しをして早めに刑事さんに送ってやる（事件があった時の警察には朝も夜もない）のと、刀の手入れに時間をかけられた。

ジジイは年寄りのくせに遅くまで寝ていた。いつもは俺より少し早いぐらいに目覚めるんだが、長旅から帰ったばかりなのと、昨晚、俺と天野がふたたび昔のように仲睦まじくなったことを喜んで、おーいおいおいと大げさに嬉し泣きしながら、天野にもらった余り物のサバの切り身を肴に一人で夜遅くまで晩酌していたこともあるのだろう。老人は涙腺が脆いのだ。俺も天野も寝かせといてやった。

七時頃によく起きてきて、ぼりぼりと胸を搔きながら大あくびをして台所に現れたかと思うと、既に飯の仕度ができていることに目を丸くし、慌てて部屋に取って返して、寝巻から着替えて戻ってきた。

朝食は昨夜のうちに煮込んでおいたらしい鯛のアラ煮に、卵焼きと冷ややっこ、筑前煮、なめこの味噌汁、ひじきの煮物などなど。

卵焼きはとろとろとやわらかく、アラは煮凝りをほかほかの飯の上に乗せると熱で溶け出して、米に甘辛い極上の黄金色^{こがね}の煮汁を沁み込ませてくれた。

なんとサバのワタの煮込みまであった。新鮮なやつが何匹も手に入っただけで、昨日味噌煮を作る時に酒で洗って、醤油とみりんに漬けておいたらしい。

こいつがまたとんでもなく飯に合う。ジジイならずとも俺もそのコクと旨さにすっかり感心してしまった。小鉢に盛り付けられたものを一口噛むたびに、こつてりとした濃厚な味わいが口の中にいっぱい広がっていく。

俺もジジイも魚臭さが気にならない性質なので、朝から煮魚やワタの煮込みを食っても平気だし、そもそも本当に上手に作られているのでまったく匂いが気にならない。これはもう純粹な旨みの塊みたいなものだ。

魚介の内臓は、もちろん吸血衝動の抑制に良い。だがそればかりでなく、上手に作られたものは普通の人間にとっても当然ごちそうだ。うまく作るにはそれなりにコツがいるはずだが、天野はまだ高校生なのにもうそれを会得していて、自分がこんな状況に置かれていても普段と同じようにその技量を發揮してしまえるらしい。

体に沁みついていくというのだろうか。

本当にすごい奴だ。天野は。

もちろんサバもな。

朝食を終えて一休みした後、あらためて「話があるんだ」と切り出す。

天野が隣で心配そうな顔をしていたが、昨夜話し合ったことをそのまま伝えると、ジジイは意外にも大喜びした。

「そりゃいい！ 信之介だけじゃまだまだ危なっかしいからな。よく気のつくヤエちゃんが手伝ってくれりゃ百人力だ！」

……傷つくぞ？

どうやらジジイは俺よりも天野の中に討伐屋としての才能と頼りがいを見出していたらしい。なんてことだ。

まあ思ったよりずっと簡単に了承が得られたからよしとするか、と自分で納得していると、ぐいっと茶を飲み干したジジイが勢い良く立ち上がる。

「んじゃ、さっそくやるとするか！」

「やるって……何を？」

「おいおい、鍛錬に決まってるだろう。まさかお前え、ヤエちゃんを何の準備もなしに現場に放り込むつもりか？ 自分の身ぐらい自分で守れるようになってもらわないと困るだろうが！」それはそうだ。

まったくの未経験の天野に本当に護身を要求するかはさておき、ある程度の格闘能力と、命のやり取りを伴う鉄火場でも落ち着いていられるだけの冷静さを身に着けておいてもらうに越したことはない。それがあるのと無いのでは、背後に守って戦う時の危険性が段違いになる。「信之介、ヤエちゃんの道着持ってこい。確か、カーチャンが昔使ってたやつが蔵に放り込んであるはずだ。たぶん大きさも同じぐれえだろ。ちゃんとしたやつは今度作ればいい」

「了解」

ジジイが指示を飛ばし、俺が応える。

そして三人で柔道用の道着に着替え、母屋の裏手にある道場に集合したのだった。

「よおし、では今からヤエちゃんの初稽古を始める！」

根っからの格闘マニアにして暑苦しい熱血スポ根野郎でもあるジジイは、ビシッと帯を決めた道着姿でウキウキした様子で腕組みをして言った。

「受け身に当て身、やるべきことは山程あるが、まずは当人の今の格闘技術を知りたい。——というわけで、ヤエちゃん、まずはあいつに適当に飛び掛かってみてくれ」

と、ごつい親指でこっちを指差してくる。

慣れない柔道着を着せられて、こちらから十歩の距離に立たされた天野が、今一状況を飲み込み切れない様子で目をぱちくりさせるのが見えた。

うちの道場はテニスコート二つ分ぐらいの広さだ。その中央に通常の柔道場の倍の縦横九間

(十六メートル)の場内を色違いの畳で示してある。

個人宅の柔道場としてはかなり広い方じゃないかと思うが、普通の人間よりも倍もでないやつや、普通の人間よりも二倍は速く動けるやつを想定した対化け物稽古ではこれぐらいが普通だ。もっと広い空間が必要な場合もあるが、そういう時は素直に外でやる。

そこに俺は指導役のジジイと同じように黒帯をぎゅっと締めて天野と向かい合って立ち、言った。

「ジジイ、こっちゃいつでもいいぜ」

「いい返事だ、孫よ！ 試合始めエ!!」

ジジイが丸太のような腕を勢い良く振り上げた。

「あうあう、えっとえっと」

だが天野は稽古が始まって、その場に立ちすくんだままオロオロとしていた。

……まあそりゃそうだ。普通の女の子が適当に相手に殴りかかれと雑に言われて、その通りに躊躇なく殴りかかれる子はあんまない。

だがそんな常人の心の機微が分からないらしいジジイは不思議そうな顔で天野に近づく。

「どうした、ヤエちゃん。殺すつもりで殴る蹴るしてくれていいんだぜ？」

「でもでも、その」

黒髪のポニテはいつものまま、大きな胸のふくらみを白の無地Tシャツで包んで、その上に婆ちゃんのお古の道着を重ねた天野はまだ戸惑っているようだった。

しばらく悩んだ後、意を決した様子でこちらに向かって声を張り上げる。

「あ、あのね、信ちゃん！ わたし、吸血鬼になって、すごく力が強くなっちゃったから——だから、思いつきりぶつかったらとっても危ないと思うんだけど！」

「……」

さすがに舐めすぎである。

天野としてはこちらを心配してくれているのだろう。好きな男を傷つけないのかもしれない。一生懸命言葉を選んでいいるのも良く分かる。

だが、今は鍛錬中だ。

ふう、と腰に手を当ててため息をつく。

そして顔を上げ、余裕そうな笑みで手招きしてみせた。

「本気で来い、天野。一緒に化け物退治がしたいんだろ？」

戸惑う少女を真っ直ぐに視界に捉えながら続ける。

「本気で来ないと、本番連れて行ってやれないぞ」

天野は一瞬息を呑んだ後、ぐっと口元を引き結んだ。

こちらを正面で見ながらきゅっと体の両脇で拳を握る。やる気になったらしい。

構えは適当なんだろうが、吸血鬼の身体能力はたとえ技術面が完全な素人でも決して侮れな

い。野生動物を相手にするようなものだ。

俺も表情はそのまま、軽く腰を落として迎撃姿勢を取る。

そして天野が、畳を蹴った。

ドンッ、といういきなりの衝撃音。敷き詰められていた畳が猛烈な圧力に晒されて勢いよく跳ね上がる。

十歩——十メートル——以上離れていた天野の姿が、一瞬にして視界いっぱい広がった。さすがの加速。まるでロケットブースターでもつけているかのようだ。

だがこちらもズブの素人ではない。掴みかかってきた彼女の右手を、そのさらに外側に素早く躲す——と見せかけて、天野が吸血鬼らしい動体視力でそちらに視線を動かし、追いつてきた瞬間、トン——と畳を蹴って反対側に瞬時に取って返した。

同時に彼女の死角で軽く軸足を蹴って重心を崩してやり、宙を掻いた右腕をすかさず横から巻き込みながら懐に潜り込む。

天野の華奢な——しかし野生動物のように強靱な力を秘めた体が、彼女自身の生み出した勢いでぐるんと背中の上を一回転するのを感じた。

「……ふえ？」

こてん、と畳の上に仰向けに寝転がった天野が、俺に袖と襟首を掴まれたまま気の抜けた声を漏らして目をぱちくりとさせる。

床と激突する直前、腕の力で思いつきり胴着を引っ張り上げて勢いを殺しながらふわりと落としたので、痛みどころか激突の衝撃もまったくなかっただろう。おかげで何が起きたのかも分からなかったに違いない。

「ええええええー!?」

天野が畳の上に倒れたまま素っ頓狂な声を上げた。

「な、なんで？ 信ちゃん、今のどうやったの!？」

ここまでびっくりしてくれろとさすがにちよつと気分がいいな。

柔術の技ってのはマジシャンの手法と同じだ。説明されれば理屈は簡単でも、実際の戦いの中で上手にハメ込まれると相手には何が起きたのか分からない。視線と意識を、タネとはまったく違うところに誘導されてしまっているからだ。

だから戦国時代にはこいつが大いに発展した。全身甲冑を着込んでいる相手にそのまま刀を打ち込んで通りにくいのが、転がして、組み伏せて、取り押さえてしまえば、鎧の隙間からぐりぐりと切っ先を捻じ込むことは簡単にできるだろう？

要するにこいつは素手での格闘術と見せかけて、その実、戦場での鎧武者同士の殺し合いを想定した介者剣術の一種だ。生け捕りが重視されるようになったのは江戸時代、スポーツ化して柔『道』となったのは明治以降に過ぎない。

そしてそれは化け物退治にも有効だった。昆虫のような頑丈な外殻を纏ったやつ。発情期の

雄猪みたいに背中脂肪が異常に硬くなっているやつ。そして吸血鬼のようにすばしっこく、回復力の強いやつ。どれもそのままでは致命傷を与えにくい。

先の美名瀬討伐では、俺は猟師に銃で奴の頭を吹き飛ばしてもらって動きを止めたが、それができない時はまずは自分の力で取り押さえたり、関節を外したりして動けなくしてから刃を入れるという手順が一般的になる。

妖刀を使えばそれも割合すぐに終わるが、普通の刀でどうにかする場合、心臓を刺した上で全身の血の流れが完全に止まるまでずっと押さえ続けられないといけない。寝技も重要ということだ。

対化け物に特化した柔術として、うちの道場では牛を相手に乱取りをする（近所の農家から借りてくる）こともある。要するにどれだけ力が強かろうと牛程度までの相手なら普通に投げられるということだ。それ以上となると数人がかりで取り組んだり（それ用の技もちゃんとある）、大型動物用の罠を使ったりすることになるが。

吸血鬼の力がどれだけ化け物じみていようと、所詮「人間と違って」という話に過ぎない。もっと強い野生動物はいくらでもいるし、体重一トンを超える闘牛用の牛を上回ることもしない。

一対一ならまったく問題はない。

……いやまあ、めっちゃくちゃ疲れるけどな。

「天野もけっこうスジは良かったぜ？　これなら二、三日練習すればすぐにでも現場に出られる」

膝がガクガク笑いそうになるのを必死に隠しながら俺は余裕をかましてみせた。

くそ、完全に運動不足だな。このところ書類仕事にばかりかまけていて練習をサボりすぎたか。

実際、天野の動きは想像以上に良かった。急増した筋力で全力疾走してもほとんど体幹がブレていない。吸血鬼化したばかりだと、普通は自分で自分の力を制御することすら困難なはずだが、それを既にほとんど完璧に使いこなしている。

間違いない天性の才能と言えるものだろう。なるほどジジイが期待するわけだ。

こちらにも本気で動かざるを得なかったので、短期間の取り組みでも体力をかなり消耗させられた。特に限界に近い速度で反復横跳びをした太ももや脛の筋肉が発熱し、今さら道着の下に汗が噴き出してくる。速度を殺してやるために（吸血鬼のスピードでそのまま畳に叩きついたら受け身を取っても怪我をする）瞬間的に天野の体を引っ張り上げた両腕もけっこうキタ。

やっぱり吸血鬼相手に格闘戦なんてするもんじゃないということだ。誰かに銃で脳幹を吹き飛ばしてもらったのが一番いい。

「んじゃ、後は基礎練をして……」

などと、どうにかこれ以上自分が相手をしなくていい方向に持ち込もうとしていると、

「よォし！ 次は儂が相手だ、信之介!!」
——おい。

ジジイが余計なことを言って、全身の筋肉をムキムキと膨張させながら場内に乗り込んできた。

天野の訓練じゃなかったのかよ!?

「どわああ!?!」

それから俺はジジイに投げられまくった。

ただでさえ相手はいまだに謎に全盛期の筋肉量を維持していて、俺より一回りは体がでかく力も強い。

技術面については比べ物にならない。物心ついた頃からずっと稽古をつけられてきたが、万全の状態でもこれまで勝てたことなど一度もないのだ。

先の取り組みで想定外に消耗した今の俺ではお話しにならない。

「いいか、ヤエちゃん！ 柔術の基本は体重移動だ。自分は元より相手の体も動かす。避けると見せかけて相手をそっちに誘導する。技を掛けると見せかけて相手にそれに抵抗するために踏ん張らせる。そして実際にはそれとは逆方向に動く！ これをうまくやればどんな相手でも投げられる！」

ジジイは俺をビターン！ ビターン！と何度も畳に叩きつけながら、場外で目を丸くして見学している天野に解説してみせる。

どうやら先程あっさりと投げられてしまった彼女が自信を喪失しないように気を使っているらしい。

それはいいんだが、俺をダシに使わないでくれるかな？

せめて、もうちよつとこう、実戦形式でない方法で解説するとか。

だがそんなこっちの願いも空しく、ジジイはますます一人でヒートアップしていく。

「ふおおおお！ どうした、信之介！ 一回ぐらい儂を投げてみせよ！ それができるまでこの乱取りは終わらせんぞォ!!」

マジかよ、このまま永遠に投げられ続けろってか!?

俺は思わず目を剥いた。

こっちだって、あまり天野に頼りなさそうなところは見せたくないんだからなッ!?

だいたい、ジジイを投げれたことなんて、今までだって一度もないんだぞ。それをこの土壇

場で——

「し、信ちゃん……」

延々と俺が吹っ飛ばされ続けるのを見せつけられている天野がうるうると瞳を潤ませ、そして大きく息を吸い込む。

「信ちゃん、がんばれえー!! おじいちゃんを投げちゃえーッ!!」

その思わぬ大声に、ジジイがビクン！と肩を跳ね上げてそちらを振り返った。

「うおおお!? ヤエちゃん、こっちには声援はねえのかい!?」

「ごめん、ね☆ おじいちゃん。わたしはもう信ちゃんの女だから、たとえおじいちゃんでもほかの男は応援できないの」

天野はバチーン、と星の子を散らすようなウインクをかましながら、小っちゃな両手を可愛らしく合わせてジジイに詫びを入れた。

いや、何もそこまで貞節を決め込んでくれなくてもいいんだが——ええい、糞ツ。やるしかねえのか。

「——うおらあ!!」

意識することなく迸った裂帛の気合とともに、はじめてこちらから仕掛ける。

「ぬう!？」

向こうの袖を引き寄せ、掴みかかってきた剛腕を打ち払う。ジジイの巨体を前に自分の体を左右に振り回し、激しく位置を入れ替える。

俺に引きずられるジジイがこちらの右の脛を気にしながら一瞬目を剥いた。

それを見ての小外刈り——

と見せかけての背負い！

瞬時に体を回転させながらジジイの巨体の下に滑り込み、思い切り腰を上へ突き上げる。

床に対して水平近くなるまで上体を傾けた自分の背中の上で、巨大な、とんでもなく巨大な重量がふわりと浮き上がる感覚がした。

天野の時のように相手を気遣って落とす余裕などもちろんない。ズブウン……と、道場中の畳が浮き上がるような衝撃が走り、同時にジジイがうまく受け身を取る光景が視界の隅に映る。

手を離れた瞬間、プールから上がった時のように思わず重力を見失ってよろめきかけた。

自分でも信じられない。

俺が？ 投げた？ ジジイを？

おいおい、マジかよ。

これまでの人生で最高の切り返しだった。それは間違いない。ジジイが言った通りに相手の重心を動かし、速度で対応する暇を与えなかった。

手加減したか、しなかったかで言えば、もちろんしてくれていただろう。そもそも実戦形式とは言え、所詮技の種類を制限した試合稽古だ。本当に何でもありで戦えば、俺なんぞジジイの前では五秒もかからず首の関節を180度回転させられて地面に転がされてしまう。

だがそれでも、今まではその稽古ですらまったく勝つ糸口を見つけられなかったのだ。

自分の為し遂げたことが信じられず、俺は荒い息をつきながら、仰向けに横たわるジジイを呆然と見ていた。

「信ちゃあああああ——ん!!」

と、そこに吸血鬼の速度を備えるようになった天野が、ポニテを激しくなびかせながら、まるで国体で優勝したかのような勢いで飛び掛かってきて、抱きついてくる。

むにん、と肩にものすごくやわらかいものが押し付けられる感触がした。

「うええええん、信ちゃあああん！ わたし、わたし信じてたよお！ 信ちゃんなら絶対勝つてくれるってえええ!!」

泣きじゃくりながら、ぎゅうつ、と首根っこにしがみついてくる。そのとんでもなく素敵な感触。おお、すげえ。こいつはまさに世界最高の「頑張ったご褒美」というやつだぜ、うは、うはははは。

なんて思っていることはおくびにも出さず、ぽんぽん、と努めて優しくポニテの後ろを撫でてやって、優しい眼差しを向けながら言った。

「ありがとな、天野。天野が応援してくれたおかげで力を出せた」

「信ちゃん……」

そして見つめ合う。

ジジイの巨体が目の前でぶっ倒れていなければ、ムードが高まりすぎてそのまま唇を重ねていただろう。

そのジジイも喜びを隠し切れない様子でのっそりと起き上がる。

「ふふふ、良くぞこの儂を倒した、信之介よ。お前はまだ儂より弱いが、そこに愛の力を重ね合わせることでほんの少しだけ上回ることができたようだな」

うるさいよ、ボケジジイめ。取ってつけたような講評をくれやがって。

「愛の力……ッ」

だが俺よりだいぶ純粋な、否、純粋すぎるところのある天野は、言葉を真に受けてぽっと頬を赤らめた。

「後はお前がヤエちゃんの稽古をつけてやれ。どうせ刑事さんから美名瀬の知り合いについて調査結果が届くまでは大してすることもねえだろう。今のうちにヤエちゃんを鍛えるんだ」

「おう」

「はい！」

俺は天野とお互いを抱きしめたまま元氣よくうなずいた。

それから俺たちは午前いっぱいを天野の訓練に費やした。受け身の練習に始まり、寝技や投げ技の基本を仕込んでいく。汗をかきながら覆いかぶさったり、覆いかぶさられたり、お互いの襟元を掴んで技を掛け合ったりを繰り返す。

野暮ったい柔道着を着ていても、いやだからこそと言うべきか、黒髪ポニテでおっぱいの大きい天野はとても魅力的な女の子なので、危うくこっちの股間が何度も大変なことになりかけたが、真面目にやってくれている彼女の熱意に応えるべく気合で乗り切った。

当て身——つまり打撃技——も教えた。サンドバッグや俺が持つ等身大のミットに向かって

左右の突きや上段蹴り、その他様々な攻撃を放ってもらう。ここでも、ポニテを揺らして真剣な表情で体を動かす天野は、その凛々しくも女らしい姿で何度も俺を魅了してきた。

「はう、お腹空いたよ」

最後にはそう言って目を回していたが、やはり彼女の飲み込みは早く、昼前には粗方の技を覚えてしまった。これなら明日からは乱取りを中心に練習できる。

天野が消耗し切っていたこともあって昼飯は俺が作った。といっても、ほとんどは前日から仕込んでいたものを温めただけだ。

出汁醤油がしっかり沁み込むまで茹で卵と一緒に煮込んだ山盛りの豚の角煮と、付け合わせにはたっぷり地鶏の心臓とモモ肉の甘辛煮。豆腐の味噌汁に大量の納豆（土地のものでうまいのだ）。野菜はほうれん草を中心に海藻とタコの酢の物、きんぴらごぼうなどだ。

角煮は濃い目の味付けにしていた。夏の暑い時期に長時間激しい運動をして、俺も天野も大量に汗をかいたのでちょうどいい。味噌汁と合わせて塩分の補充を図ろう。塩分は大事だ。多量と高血圧の原因になるが、足りないとは頭痛を起こす。

死んだように突っ伏していた天野は飯が炊けた頃、匂いに惹かれてふらりとゾンビのように立ち上がり――風呂場に寄り道してシャワーを浴びてから食卓に現れた。どんなに疲れていても汗の匂いだけはどうにかするのは、女の意地というか根性というもののだろう。女子校では消えてなくなるらしい。

天野はいつにも増してたくさん食べた。タレと脂で照り輝くような角煮をおかずにとんぶりから勢い良く米をかき込み、大量に炊いていたお櫃を瞬く間に空にしていく。

もちろん俺も負けじと食う。こつてりとした味付けの角煮とハツをまとめて口に放り込み、白米と一緒に噛み潰し、味噌汁で流し込む。吸血鬼との力のぶつけ合いでもなく腹が減っていた。体を動かせばそれだけ栄養補給が必要になる。当たり前のことなのだ。

余裕なのは俺を散々投げまくった後は見て指導するだけの監督を決め込んでいたジジイだけだった。たぶん、見た目は派手でも長年の経験で体への負担の少ない動き方をしているためでもある。欠食児童のようにがつつく俺たちの前で、いつも通りの量をのんびり茶碗で平らげる。とはいえ、元々の体格が体格なので何度もお代わりを繰り返し、ぺろりと平らげた飯の量は一合半だ。とても古希越えの老人とは思えん。

「そういえば、ヤエちゃんのご両親にはもうこのことは伝えたのか？」

引き続き大量の米と豚の脂をもりもりと貪り続ける俺たちを他所に、一人でさっさと食い終えたジジイが湯呑みを傾けながらふと思いついたように言った。

俺は既に半分消えてなくなりかけている大皿の角煮に伸ばした箸を止めて、うなずいた。

当たり前だ。天野が転がり込んできた翌日には電話して、うちで治療――治る見込みのない治療だが――を続ける了承を取っている。

天野が吸血鬼探しに加わる――少なくともこの事件が終わるまでは討伐屋として活動する――

― ことについても、これから伝えるつもりだった。

「なら僕も明日にでもご挨拶に伺おう。こういうのは一度誰かが直接話した方がいい」

「はうう……」

天野がふわふわな頬にご飯粒をつけながらさみしげな声を出した。

あんなにお腹を空かせていたのに、食べるペースまでちびちびと普通の女の子のように遅くなってしまうている。

天野の親御さんはあれからまだ家に帰っていない。仕事の都合で、今後もしばらく帰れる見込みもなかった。そういう仕事なのだ。

俺やジジイがいるとは言え、心細さは一入^{ひとしお}だろう。

「しばらくの辛抱だ」

彼女の頬つべに指を伸ばして米粒を取ってやりながら、俺は言った。

「来月になったら帰ってこれるんだろ？ その時、天野の元気な様子を見せてやろう」

「うん……」

天野がうなずいて、頬を肩にすり寄せてくる。

もちろん気休めにしかならない。それはわかっていた。

一度吸血鬼化してしまった以上、以前のように家族で暮らすことはできない。一般家庭では天野が暴走してしまった時の手立てがない。投薬や妖具を使った拘束が可能なこの診療所から、天野はもう一生出ることは許されないのだ。

向こうから面会に来てもらう以外は、せいぜい夜を選んで、俺かジジイの監視下で短い時間、家に戻れる程度だろう。太陽が出ていればそもそも物理的に外出することすらできない。

監獄のようなものだ。日差しと、人間の社会制度という鉄格子で閉ざされた檻。

俺にできるのは、天野がせめてその中でだけでも笑顔で生きていけるようにしてやることぐらいだ。

ポニテに纏められた、さらさらとした黒髪を撫でてやる。天野の方も頬ずりが止まらなくなっていた。こちらの存在を確かめるように。

そんな俺たちを、ジジイはちゃぶ台の反対側から、慈しむような、どこか憐れむような眼差しで見ている。

午後はジジイは昨日言っていた通り寺に過去帳を調べに行き、俺は天野と座学で過ごした。学習内容は化け物に関する一般的な知識や、討伐屋特有の武器の使い方などだ。

朝飯前にメールで刑事さんに送っていた吸血鬼の手引きも授業に使った。気を使わないでもなかったが、これから吸血鬼と対峙する以上、知ってもらう必要がある。

天野はちゃぶ台の上に載せたディスプレイの前に正座して、横で俺が解説する自分の仲間たちの生息――主に殺し方に関するそれ――を興味深げに聞いていた。

まだ吸血鬼という種族の一員としての意識に乏しいので、同族殺しの心理的な問題についてはこちらの取り越し苦労だったかもしれない。

武器は例の妖刀を教材にした。

ちょうど今夜の見回りに持っていくつもりだったので——当然、美名瀬相手に使った時のようなガチガチの戦闘モードで携行するわけにはいかないが——拵えを付け直すついでといったところだ。

『『村正』だ』

それを収めた木箱を天野の膝の前に下ろす。

「開けてみな」

促すと、緊張の面持ちで白い指を操って、箱を封じる紐をほどき、蓋に手をかける。

わずかに隙間が開いた瞬間、天野の動きが止まり、息を呑む気配がした。

吸血鬼特有の超感覚で、溢れ出した妖気に気づいたのだろうか。にわかに響き出した哄笑は、使い手として妖刀と繋がっている俺の頭の中でしか聞こえないはずだが、魔の者がケタケタと笑う気配のようなものを感じ取ったのかもしれない。

既にあの時の華々しい拵えは解いて木無垢の白鞘に戻してあるが、一度振るった妖刀はそうすぐには眠りについてはいくれない。

美名瀬から吸い取った血の味を何度も何度も反芻しているかのように、笑い声にはびちやぴちやと舌なめずりの音が混じっていた。

天野が固まったのは一瞬だった。

やがて蓋を完全に持ち上げると、妖刀の全身が露わになる。

俺はそれを手に取り、刀身を鞘から引き抜いて、海原が沸え立つような複雑にして優美な刃文と木目模様の地鉄を見せてやりながら解説した。

「こいつは斬りつけた相手の血を強制的に吸い取る性質を持っている。当然どんな化け物にも——何なら人間にも——効くが、吸血鬼にはとりわけよく効く。血糊が飛び散らないもんだから暗殺にも便利でな。江戸時代にはご禁制扱いされていた。全部の村正がそうだというわけじゃないんだが……一部がな」

まだこれを天野に持たせるわけにはいかないが、味方の使っている武器がどんなものか知っておくのは悪いことじゃない。

刀の刃と、持ち手、それを続けざまに指で示してみせる。

「一般にこの斬る部分を刀身、こっちの持つところを柄という。まあこれは分かるな？ 日本刀の刀身は刃のない続きの部分が柄の中に埋め込まれている。そっちは『茎』だ。さっき言った柄や、鞘も含めた刀身以外のすべての部品と、その実装時の組み合わせを総称して『拵え』と言う」

柄の刃に近い方に小さく切り取られた丸を指す。

「ここが目釘。柄と茎を貫通して、刀身が抜けないように固定する役目を持っている」
次いでその上、刃と柄の境界部分の金属部品を指す。

「こいつがハバキ。刀を鞘に収めた時、ガタつかないように押さえるための部品だ」
その他の細かいところは、今は白鞘なので装着していない。

「妖刀は拵えによって性質や覚醒度合いを変化させる。今はいわゆる白鞘だ。鏢がなくて、鞘も柄も材木がそのままむき出し。ルパン三世で五右衛門が振り回してるやつだな。本来は保管用や、刀身のみを鑑賞したい場合などに使う。この状態の時、妖刀は基本的に眠っている。布団に入ってる状態だ。使った直後だと今みたいにまだ興奮しているが、あと二、三日何もせず
にこのまま置いておけばすやすやと夢の中だ。そうなればもう勝手に動き出して悪さをする心配もない」

ふたたび柄を指す。

「拵えはまずこの柄の材木を戦闘用のものに変えた後、上から鮫皮さめかわを着せて、柄紐を巻いて作る。普通の日本刀なら柄巻師に任せればいい作業だが、俺たちは自分でやらなきゃならない。急ぎの用事がほとんどで、相手の特性や作戦に合わせて何度も組み直さないといけないからな。普通の柄巻と違って何日もかけていられない。鮫皮も、一から加工するんじゃない、あらかじめ磨いて、ものによっては漆を塗って乾かして、裁断まで終わらせたやつを何枚かストックしておいて、目的に応じて選んで使うんだ。鞘もハバキと事前に合わせて組み立て終えたやつを――」

「はいっ。先生、質問！」

天野が元氣良く手を挙げて言った。

朝の稽古の疲れはまったく残っていないらしい。良いことだ。

吸血鬼になってから全力に近い運動をしたのははじめてだったはずだから少し心配していたが、飯もしっかり食べていたし、問題ないだろう。

「ん、何だ？」

俺は微笑みながら顔を上げた。

「鮫皮って、鮫の皮なの？ ホオジロザメとか？」

「鮫と言いつつ実はエイだ。普通はな。外側の面が真珠を敷き詰めたみたいにつぶつぶになっていて、滑り止めにいいんだ」

まあ、そうじゃない場合もあるけどな、と心の中でつぶやく。ちょっとエグい話になってしまったので、これはまだ伏せておくことにした。

知っておくのは悪いことじゃないが、業界に入門したばかりの女の子をいきなり怖がらせることもないだろう。

そんなことを知る由もない天野は「おおー」と呑気な感嘆の声を上げている。
「そっか。ホオジロザメじゃ、捕まえるの大変だもんね」

感心したように言った。

「まあエイも日本じゃ獲れないから、輸入するの大変だっただろうけどな。確かはるばる東南アジアから仕入れていたんだとさ」

軽口（天野は真面目に言っただが）に応えてから話を戻す。

「美名瀬を討伐した時の拵えは天野もちらっと見ていたと思うが、鞘が青貝微塵塗で、鮫皮が朱塗。どっちも村正の妖気を最大化する効果がある。そのぶん狂暴になっちゃうから、今夜の見回りには連れていけない。だから今回は鞘を漆黒の蝨色塗、柄もおとなしめの白蛭巻にするのを基本に細かいところを調整するつもりだ。妖刀が眠りまではしないが、働くのがちょっとだるい、人間で言うところと月曜の朝ぐらいの気分になる組み合わせだな。威力が下がるから、吸血鬼を確実に仕留めるには物足りないが、追い払う程度は十分できる。見回りにはそれぐらいがいいと思う」

説明を止めて、隣で両膝をついてこちらの手元を覗き込んできている天野を振り返る。

「……これから換装作業するけど、見学してみるか？」

「うんっ」

刀そのものに興味があるというより、一緒にいられることが嬉しいという風に天野は笑った。だから俺も嬉しくなって、それからはずっと天野と一緒にいた。槌串で目釘を押して抜き取り、柄を割って取り換え、鮫皮を着せ、柄糸を巻いて、鐐を嵌め込む俺を、彼女は飽きもせず、に、きらきらとした瞳で見ていた。

そして夜――

県庁からは昨夜に引き続き警報が発令され、さらに今夜はそれに加えて民間事業者に向けた治安維持への協力要請も発出される。

既に準備していた俺たちはいつかのようにヤマハWRに二人乗りして街に繰り出した。

服装はどちらも普段着ではなく、警察の特殊部隊のような暗灰色の作業着だ。これ自体に吸血鬼やその他化け物の牙・爪などを想定した多少の防刃機能が備わっているが、さらに肘や膝のような要所と胴体はより防刃力の高いプロテクターや防刃ベストで守っている。

ベストの背中側には白く染め抜かれた『阿曇内科診療所』のロゴ。ヘルメットには記録用のカメラがマウントされていて、顔の前面を大きく包み込むバイザーは厚さ二センチのポリカーボネート製だ。

口元には戦闘中に化け物の体液を誤飲することを防ぐためのフェイスガードをつけている。村正は単車のサイドラックに固定した。

あの時と違って、積み荷は所帯じみた買い物袋ではなく多少控えめな程度に物騒な得物であり、服装も少々頑丈でこわつたものになってしまっているが、その奥に感じる天野の愛らしい体のぬくもりは何も変わらない。

こんな無粋な格好でも久しぶりのお出かけで天野はどこか楽しそうだった。忙しかったせいで、結局彼女が生理で寝込んだ日の夜に家の周りを散歩した以外、ほとんど外に連れ出せてやれてない。目抜き通りをタンドムで駆け抜けながら心の中で反省する。

中心部へと進むにつれて周りに家や建物が増えていき、いくつかの通りを抜け、交差点を曲がるうちに、天野も次第に言葉少なになった。緊張してきたのだろう。

警察から指定された集合場所は街の幼稚園の隣の公園だ。俺の班は時間までそこで待機することになっている。

入り口の前の通りで単車を止めると、俺たち以外のメンバーが既に集まっているのが車止めの柵の向こうに見えた。

四十代の普通の体格のおっさんと、それより一回り若いぐらいの、上背があつて丸眼鏡なおっさ——お兄さんがそれぞれ一人、眠気覚ましの缶コーヒーを手に談笑している。服装はカラーリングや細部の装具が少し違うだけで、俺たちとさほど変わらない。

松山隼人。

西崎俊太。

どちらも討伐屋の先輩だ。

先輩たちは俺と同じように威力を調整した妖刀を腰に差していたが、それに加えてもう一つ、肩に十発弾倉付きのライフルも提げていた。

どちらもボルトアクションだ。現代の日本ではフルオートは元より、セミオートのライフルも事実上、警察と自衛隊しか所持できない。警察は妖怪変化よりも人間の銃乱射犯の方を恐れているので仕方のないことではある。世の中、化け物に殺される人間よりも、人間に殺される人間の方が圧倒的に多いのが統計的な現実だ。

実用上の問題もある。討伐業者は獲物である化け物の特性に合わせて銃弾を改良したり、聖別したり、真言を刻んだりしたものを自作して発射したりする。そういう改造弾を自動装填機構で使うと、重量や表面の摩擦が変わるせいで弾詰まりを起こしやすいのだ。

ボルトアクションではそういう問題が少ない。ばね仕掛けではなく人間の腕力を使うので、少々規格の違う弾でも強引に排莢できる。だから規制が強まる前から、討伐業者はほとんどみんなボルトアクションを使っていた。どうしても発射速度が必要な場合は、人数を揃えてみんなで撃ちまくればいいという発想だ。

構造は軽量かつ堅牢で、命中精度もオートマティックより高い。一昨日の討伐の際、美名瀬の頭を一撃で撃ち抜いた元自猟師の外村さんの豊和M一五〇〇もボルトアクションだった。

狙撃用のライフルを肩に担ぎ、腰には接近戦闘用の妖刀を差す。そして化け物の爪の一撃や牙での噛みつきを主に想定したヘルメットに防刃装備。このあたりが現代日本におけるフル武装の討伐屋の代表的な出で立ちといったところだろう。

ちなみに俺は年齢制限の関係でまだライフルを持たせてもらえていない。射撃自体は昔から

ジジイに連れられて、近くの自衛隊の駐屯地で練習させてもらいに行ったりしているのだが、仕事で使えるようになるには車の免許と同じく後一年かかるのだ。だから他人がそれを引っ提げてのを見ると少々物欲しそうな顔になってしまう。

やっぱり遠近両方の攻撃手段があるといかにも一人前の討伐屋、って感じがするから……。まあ仕事の時は免許持ちや猟師と一緒に来てもらえばいい話なんだが、自分でも撃てれば戦術の幅が広がるし、逆に自分が誰かの応援に駆けつけることもできる。こればかりは時間が経つのを待つしかない。

ちなみに免許持ちと一緒に現場に出て、そいつが負傷して撃てなくなった場合などに身を守るために緊急で自分が射撃を代わるのは合法だ。さすがにそこでおとなしく化け物に殺されろと言いつつ程、日本の法体系は無慈悲ではない。もっともそんな機会は滅多にあるものじゃないし、ない方がいい。

護身という点では拳銃もあれば便利だと思うのだが、そっちはオートマチックだろうとリボルバーだろうと一律禁止。やっぱり化け物以上に人間を殺しやすすぎてしまうんだな。服の中とかに隠し持てるから犯罪にも利用できてしまう。拳銃の使用が想定される場面では、刑事さんの言う通り可能な限り警官を連れて行ってそいつに盾になってもらうことにしよう。

また討伐協会では自衛隊の訓練施設を使わせてもらう代わりに、有事には作戦に協力するとう協定を国と結んでいる。といっても最前線ではなく後方での重要施設警備やゲリコマ対処が中心だが、そうなればもはや人間もどきではなく本物の人間狩りだ。まあお互いが納得ずくで殺し合うなら仕方がない。生きていればそういうこともある。

公園の入り口でWRのサイドスタンドを立て、ヘルメットを脱いでホルダーに引っかける。俺はサイドラックから妖刀を外し、天野は髪紐を取って慣れた感じでポニテを結び直して、ともに敷地に入った。

「先ばーい」

「おっ。来たか、阿曇屋の！」

夜なので抑えめに声をかけて手を振りながら近づくと、二人が振り返って、背の高さが普通の方——松山さん——がやはりうるさくならない程度に威勢のいい声を上げた。

「お疲れ様です。俺たちで全部ですか？」

「ああ、一回目の見回りはこのメンバーでやる。俺とお前、西崎だ。それと、ほかにもう一人飛び入りがいるって聞いているが……」

そう言いながら、俺の後ろに隠れるようにして立っている少女に目を向けた。

「あ、うー、えっとえっと——」

前に出るように促すと、天野はおどおどと声を上げ、やがてガバッとポニテを跳ね上げて勢い良く頭を下げた。

「は、はじめまして！ 信ちゃんがいつもお世話になってます！」

「わははっ。それじゃあまるで『信ちゃん』の女房が旦那の職場に挨拶しに来たみたいだぜ」
松山さんがおかしそうに大笑した。

西崎さん——丸眼鏡をかけている背の高い方——も、思わずといった様子でぷつと噴き出し、微笑ましげに肩を揺らす。

「は、はう……」

天野は極度の緊張といきなりやらかした恥ずかしさで真っ赤になって目を回した。
落ち着かせるために俺は彼女の隣で手を握ってやる。

「えっと、天野八重香です。まだ何も分かりませんが、頑張りますのでよろしくお願いします」
それで立ち直った天野は、それでもまだ小っちゃな子猫が安全な寝床の中からそつと外の世界を伺うような目をしつつ、どうにかこうにかそう言い終えた。

「今日は見学なんだ」

上出来だ、と彼女の細い腰を軽く叩いてやって、俺は後を引き受ける。

「天野には俺たちに同行して、討伐屋の仕事がどんなもんか雰囲気を感じてもらおう。見回りは俺たちでやる」

「ん、いいだろう。事前に申請も通ってるしな」

この場を仕切っているベテランの松山さんが、警察から渡されたのだろう書類をパシッと叩きながらうなずいた。

見回り開始まではまだ二十分程あった。

そこで待っている間、四人で立ち話をする形になったのだが、俺はすぐに松山さんに絡まれた。

「聞いたぜ、信之介ちゃんよう。吸血鬼を退治したんだって？　大物じゃねえか。大したもんだ」

「痛い、痛い。止めてください、先輩」

肩にがっしりと腕を回して歩きながら反対の手でわき腹をドスドスと殴ってくる。

何事につけて兄貴風を吹かしたがるこの人のことが、俺は正直嫌いではない。

天野の方は自販機の前で西崎さんに何か話しかけられていた。

そうして二人から少し離れたところで、松山さんが不意に声を潜める。

「——で、あの娘が、例の吸血鬼に覚醒しちゃった女の子ってわけか？」

うなずくと、松山さんはニツと口の端で笑って、俺の背中をバシッと叩いた。

「よし分かった。お前が守ってやれ」

「……はい」

それだけ言うと二人の方に戻っていく。

「信ちゃん」

入れ替わりに天野が買ってもらったらしい缶コーヒーを手に嬉しそうに駆け寄ってきた。

公園の街灯に照らされた漆黒のポニテが、軽やかに遊びながら松山さんの影と交差した。
「えへへ、信ちゃんの分ももらったの。信ちゃんも一緒に飲もうよお」

厚みのある防刃ベストに覆われた大きな胸の前で、左右の小さな手にスチール缶を握って満面の笑みを浮かべている。

松山さんは俺たちが来る前のように大人二人で雑談を始めた。

「お前えもう三十だろ？ 早くああいう可愛い嫁さん見つけろよ？」

「いやー、難しいっスねえ。俺は『信ちゃん』と違って女にモテないんで」

西崎さんはそう言って、いいなあ、俺もああいう幼なじみ欲しいなあ、とかつぶやいていた。

「よし、そろそろ行くか」

「はい」

「了解」

松山さんが声を上げ、俺が応えた。西崎さんもうなずく。

松山さんと西崎さんは揃って缶コーヒーの残りを飲み干し、近くに空き缶の回収箱がなかったので、ビニール袋で閉じてバックパックに入れる。

ライフルを持つとポイ捨てはおろか信号無視すらもなくなる、というのは少なくとも討伐屋界隈では真実だ。銃所持許可には人格適正や素行、(軽)犯罪歴の項目があるので、警察はいつでも俺たちからそれを没収できる。大切な商売道具が使えなくなったらえらいことだ。

もちろんそうなった時のために日頃から猟友会と仲良くしていたり、討伐協会で人材を融通し合う制度があるのだが、それだけ人に迷惑をかけることになるし、何より非常にみつともない。

俺と天野も、二人に倣って空き缶を始末し、バックパックを背負い直す。

天野は新人だから俺が見ているわけだが、「んしょ」とやる彼女はそんな何でもない動作すらも一々可愛かった。抱きしめたい。

着ているのは飾り気のない作業着と無骨な防具なのに、なんでこいつはこんなに可愛くて、そして女を感じさせてしまうのか。

本当に抱きしめたい。

「これより夜間の市内巡視を始める！」

消防団よろしく一列に並んだ俺たちの前で松山さんが指揮官として仁王立ちして言った。

「今夜の着眼は『礼儀正しく、愛想良く』だ！ 見回りは化け物退治じゃなくてあくまで住人の皆さまに安心していただくことが目的だからな。出ることはまずねえと思うが、もし吸血鬼と遭遇した場合も仕留めるよりも追いつくことを優先しろ。たとえ逃げられても吸血を阻止できればよしとする。ライフルは指示しない限り上空への警告射撃のみ許可する。特に西崎、お前えはたとえ俺が襲われていても『撃て』と言わない限り、そいつへの直接射撃は控えろ」

松山さん以外では唯一ライフルを持っている西崎さんが俺の隣でこくりとうなずいた。

「見回りの間、住人とすれ違う時は必ずにこやかにあいさつをしろ。いいか、マクドナルドの店員みてえな渾身の笑顔でだ。物騒な得物を担いだ連中が不機嫌そうなツラで黙々と歩いてたら吸血鬼よりもそっちが不審者だぞ！ 分かったか、野郎ども——」

と、いつもの調子で結ぼうとこちらを順に見回し、野郎以外の存在を見つけて付け加える。

「——と、可愛らしいお嬢さん一名！」

「はいっ」

びしりと気をつけの姿勢を取っている天野が一生懸命な感じに背筋を伸ばして言った。

俺と西崎さんも口々に返事をかえす。

松山さんは満足そうにうなずいて、踵を返して道路へ向かって歩き出した。俺たちも続く。

「出発だ。気楽に行こうぜ。なあに、ちよっとお散歩して戻ってくるだけだ。あ、隊列はもう作らなくていいぞ。だらしない程度に緊張してない雰囲気で行くんだ。ぴりぴりしてっと通行人の皆さんに何か起きたのかと思われちゃうからな」

加減が難しかったが、そこは松山さんが指示して適宜調整した。

俺は先輩たちの死角をカバーするように動きながら、一緒に歩いている天野に、吸血鬼の生息としてどういう場所に隠れていることが多いかだとか、市街地ではこういう場所で待ち伏せを受けやすいので注意する必要があるだとかいったことを実地で教えていった。

必ずしも今すぐ覚える必要はないが、彼女が今後も討伐屋を続けるなら（本人の意欲次第だが）いずれ役に立つだろう。

天野は緊張した面持ちながらも真剣に聞いてくれた。

俺はというと、分厚いバイザーを下ろし、ごわついた作業服を着込んでいても、こちらの説明にうんうんとうなずく彼女はやはりとても女らしく魅力的で、意識していることを表に出さないようにするのが一苦労だった。

……ダメだな、俺の方こそ天野の真面目さをもっと見習わないと。

警報が出ているからだろう。夜の通りはいつになく人通りが少なく、逆に周囲の家屋から漏れる窓の明かりや話し声は多いように感じた。みんな、家の中で家族で映画を見たりゲームをしたりしているのかもしれない。

だがそれでもまったく出歩いている人がいないわけではなく、しばらく歩くと、おっとりとした雰囲気の小柄なおばあちゃんが前から近づいてくる。

「あらあゝ。皆さん、ひょっとして見回りの人？」

「「おはようございます！」」

「お、おはようござい、ますっ！」

俺と先輩たちが一斉に笑顔であいさつして、天野が一步遅れてまだぎこちなく続いた。

「あら。いま朝だったかしら？」

払暁前かと思ったのだろう。おばあちゃんは頭上を見上げながら不思議そうに頬に手を当てた。

「わはは、討伐屋が吸血鬼を相手にする時のおまじないなんですよ。昔、狩人が山で吸血鬼に追い詰められた時に、ヤケクソで朝だぞ！って叫んだら逃げていった、って伝説があるんで」

松山さんが先程自分で宣言した通りの愛想の良さでおばあちゃんに説明した。

要するに気休めとか、子どもだましというわけだが、常識的に考えてこれから人を襲おうと極度の緊張状態にある時にそんな風に声をかけられたら、一瞬「えっ」ともなるだろう。吸血鬼にとって朝日は何よりも恐ろしい災厄だ。

人間が自分で言うとは限らず、夜中に鳴いたニワトリの声で鬼が朝だと勘違いしたり、あるいは人間が言葉で「朝だ」と言う代わりに、ニワトリの鳴き声を真似したりといった伝承は世界各地に多い。

実はちゃんと効果もある。

ただ勘違いさせるというだけでなく、原理は不明だが、声自体にも何らかの霊力が宿っているらしいのだ。太陽光が弱点の怪異に、「朝だ、朝だ」と人間から告げながら戦わせた場合、夜間であるにも関わらず（そして怪異自身そう認識していたにも関わらず）パフォーマンスが最大5パーセント低下したという研究結果がある。逆に戦っている怪異から人間に、あるいは別の怪異から双方に、「朝だ」と言わせた場合はどちらにもパフォーマンスの変化は見られなかったそうだ。

人間から怪異に向かって宣告した場合にのみ効力を持ち、怪異が自分で言った場合は効果がない。これがただの暗示であれば自分で言った場合も自己暗示にかかると考えられるので、松山さんが「おまじない」と言う通り、何かしらの呪いの力が発動していると見るべきだろう。

ちなみに天野に効果がないことは家を出る前に確認済みだ。今回、天野は明確に討伐屋として活動しているので、呪いからは人間勢力と認識されるようだ。

一応、今も隣で雰囲気を探っているが、彼女の妖気に変化はない。

このことは後で報告書に載せておいた方がいいだろう。

人間と怪異の関わりは有史以前にまで遡るが、依然として分かっていることよりも分かっていないことの方がずっと多い。どんな些細な情報も今後の研究の糧になるはずだった。

「まあ、そうなの。大変ねえ、こんな遅くまで見回りなんて……」

そういった細々とした事情は知る由もないおばあちゃんが、気の毒そうに頬に手を当てて言った。

「いやー、これも俺たちの仕事ですから」

先輩は何でもなさそうに笑う。

だがおばあちゃんはボン、と手を合わせ、右腕にかけていた鞆をごそごと漁り始めた。「そうだわ。これ、みんなで食べてちょうだい。さっき、その和菓子屋さんでおはぎを買っ

てきたところだったの。飲み物もあるから」

「ひょお、マジですか！ いただきます」

「おばあちゃん、ありがとう。ちょうど、今晚の夜食どうしようかなって思ってたところだったんです」

松山さんが大げさに喜んでみせ、西崎さんも背の高い体を精いっぱい屈めて屈託なくお礼を言った。

ラップに包まれたおはぎと、コラボ中の有名な野球選手の写真がラベルに描かれている緑茶のボトルを人数分ありがたく受け取り、全員で手を振って優しいおばあちゃんと別れる。

……うん？　なんか変だな？

「どうした、信之介？」

内心首をかしげた俺に目ざとく気づいた松山さんが隣を歩きながら尋ねた。

「いや、こんな時間までやってる和菓子屋がこのあたりにあったかな、って——」

言いかけたところで町内放送の声が辺りに響く。

『市役所からの、お知らせです。本日、午後四時頃から、八十歳の女性が、市内で行方不明になっています。女性の特徴は、身長百四十センチぐらい、白のカーディガンと、薄桃色のスカート。お心当たりの方は——』

「さっきのお婆ちゃんじゃねえか！　信之介、捕まえてこい！　天野ちゃんを連れて行け」

「了解！」

「はわわ、信ちゃん」

踵を返して駆け出す。後ろから天野の狼狽した声が続いた。

問題のおばあちゃんはすぐに捕まり、警察に電話して、教えてもらった住所まで四人で送り届けることになった。

戸建の玄関で孫娘らしい三十路前といった見た目の女性は何度も頭を下げてきた。

「本当にありがとうございます。すみませんでした。もう、おばあちゃん、見回りの人に迷惑かけちゃダメじゃない」

「ごめんなさいねえ。ついつい自分の家が分からなくなっちゃって……たぶんあっちで帰れると思っただけ……」

おばあちゃんが頬に手を当てながら申し訳なさそうに言った。

ちなみにあの時彼女が歩いていった方角はちょうどこの家の真逆だった。

吸血鬼騒ぎが起きたタイミングでの失踪でよほど心配されたのだろう。家の中から他の家族も出てきて、口々にお礼を言われる。先の孫娘の旦那さんらしき男も、おそらく自分で探しに行っていたのだろう。ダイハツの軽自動車に戻ってきた。

一緒にここまで歩いてくる時は若い人たちに囲まれてご満悦といった様子だったおばあちゃんも、家族が大騒ぎしていることで事の重大さに思い至ったのか、しょんぼりとすっかり気落

ちしてしまっていた。

「いやいや、見つかった良かったですよ」

松山さんが取りなし、緊張が解けたせいで泣き出しそうになっている女の人たちを落ち着かせながら言う。

「お婆ちゃんも、おはぎありがとうございます。この後食べさせてもらうから」

「俺、甘いもの好きなんですよ。声かけてもらえて嬉しかったです」

西崎さんも続いた。

俺と天野も口々に励ます。

おかげでお婆ちゃんも少し明るさを取り戻したようだった。

「まあ、そうなの？ よかった……」

別れを告げて立ち去る時、お婆ちゃんは玄関から小さな女の子のように手を振ってくれていた。

「ねえ、知ってる？ 吸血鬼が出た時は、夜でもおはようって言ってますって。さっき教えてもらったのよ。そうしたら逃げていくから、って——」

戸建てに入っていく彼女が家族にそう言っているのが聞こえた。

角を曲がったところでいったん集まり、松山さんが全員の顔を見回して告げる。

「よし、戻って見回り続けるぞ」

「……はい」

俺はちよつと疲れながらうなずいた。

そんな思わぬハプニングもあったが、その後は何か問題が起こるということはなく順調な見回りが続いた。

警察に指示された経路を辿り、討伐屋の目から見て怪しいと思う場所を一つ／＼確認し、サーバーと繋がっているタブレット端末に記録していく。

住宅街を抜け、駅前繁华街に近づくと、それなりに人出も増えてくる。また随所に立って周囲を見張り、無線で連絡を取り合っている警官の姿や、サイレンを鳴らさずに静かにパトランプの赤い灯りを回転させながら道路を行き交うパトカーが目立ち始めた。

既に他県からも応援が大勢入っているようだった。この町の警察が一度に出せる数よりも明らかに多くの警官が活動している。

刑事さんたちも、ここからは夜は吸血鬼の襲撃を警戒、昼はその隠れ家を探索といった具合に動くことになるだろう。

俺たちは店を開いている居酒屋やコンビニに入っては、客や店員に何か異常がなかったかを尋ね、まだ外に残っている人々には早めの帰宅と帰路での注意を促していった。

ほかの見回り組とすれ違うこともあった。

猟師も駆り出されているのだろう。そのうちの一つの中には、あのドローンで美名瀬退治を

手伝ってくれた土屋さんの姿があり、こちらに気づくと茶目っ気たっぷりに片目をつむってウインクしてくれた。

あらかじめ目をつけていた建物——取り壊す予定なのだが業者が集まらなくて工事が進んでいない雑居ビルや、何年も前から住む人間がいなくなったまま放置されている空き家——には、直接立ち入って、ヘルメットのヘッドライトや懐中電灯をかざし、吸血鬼が潜んでいないか一部屋一部屋確認していった。不意遭遇の危険があるので、俺は妖刀を鞘から抜き、西崎さんもライフルをいつでも撃てるようにして、部屋に入る松山さんを援護した。

コンクリートのビルなら発射した銃弾が外に飛び出す恐れがないのでもいいのだが（強固な外殻を持たない吸血鬼が相手なので、今持ってきている弾は貫通力の低いホローポイント弾だ）、これが古い木造住宅だったりするとなかなか難儀した。そういう時は三人全員で刀を抜いたり、うち一人が全身盾を構えたりして、何かあった時すぐにお互いを支援できるようにしながら中に入った。建物全体を確認し終わると電力会社连接到電氣系統を復旧させてもらい、通信機能付きの監視カメラや動体センサーを取り付けていった。

ただの通り魔殺人鬼なら犠牲者をどこで襲ってもいいんだろうが、吸血鬼にとってこれは殺人ではなく『狩り』なので、獲物を仕留めた後、人目を気にせず安全に血を吸うための場所が必要になる。だから廃ビルや空き家を見て回り、人間が入った痕跡を残し、監視装置を仕掛けていくことは吸血被害の抑制にかなり効果的がある。

吸血鬼と人間の縄張り争いのようなものだ。熊が木に背中をこすりつけてここが自分の領域だと主張するように、埃の積もった床に残る真新しい足跡や、静かに明滅する監視機材のランプで、吸血鬼に対して俺たちがこの場所に関心を持っていることを伝えていく。

カメラやセンサーは一度設置したら異常がない限りそのままでもいいやつだが、初日なのでやることが多い。汗もかいだ。田舎の日没後は夏場でも涼しいとは言え、街の中心部まで来ると屋間の熱を溜め込みやすいコンクリートや、夜でも動き続ける周囲の空調のおかげで郊外よりも1、2℃気温が高い。そこで分厚い防刃装備をつけて、風通しの悪い屋内で動いているとどうしても熱が籠もる。

運んできた脚立に登って、蛍光灯が取り外された天井のソケットやダクトレールに監視機材を吊り下げ、それで思うような画角が得られなかった場合は壁の他の場所などに取り付ける。木造家屋ならそのままネジ止めし、壁がコンクリートだった場合は電動ハンマードリルを打ち付けて穴を開けた後、プラスチックのクチバシを差し込んで、インパクトドライバーでネジを捻じ込み、懸架用金具を固定していく。

電氣は、引込口配線が撤去ないし破損していると電氣工事士の資格を持っている西崎さんがあらためて引き直し、後で感電する奴が出ないように、明日にでも絶縁検査などを行う竣工検査業者を送ってくれるよう電話で電力会社に依頼する。配電盤のブレーカーを上げて建物の必要な場所に通電し、機器の配線を繋ぐ。最後に電源を入れて、俺がノートPCからネットワー

ク設定を完了すれば終わりだ。

センサーを含め一通りの機材や工具はバックパックに入れたり、肩に担いで持ち歩いているが、使い切ったら商用バンやトラックで道路を巡回している奴らと落ち合って補給を受けた。

俺は先輩たちと一緒に作業をしながら、天野に機器の機能や目的を説明したり、不審者と間違わないために、通行人に何か尋ねられた時の説明役として建物の入り口に立っておいでもらったりした。

それぐらいの役でもあるのといないのとは大違いなのだ。おかげで予定より早く作業が進んで、おばあちゃんを家まで送った分の遅れを取り戻せた。

五時間程そんなことを続けた後、俺たちは次の班と交代し、最初の公園に戻った。

「――甘^あつまあ^いい！」

ベンチに腰掛けた天野がおばあぎを一口頬張るなり、感極まったような声を上げた。労働の後の甘味は脳に来るもんだからな。

側に立って緑茶を飲んでいる松山さんが上機嫌に笑った。

「わはは、まあ悪くねえ一日だったな」

「うちのばあちゃんもあれぐらいなんです。まだしっかりしてるけど、そろそろ心配だなあ……」

西崎さんは手に持ったおばあぎで、認知症の始まっていた先のおばあちゃんのことを思い出しているらしく、しんみりと言った。

四人でおばあぎを食べ、茶を飲んで軽く休憩した後、解散となる。

「俺たちの今日の仕事はここまでだ。次は来週月曜、午後十時から。まだ事件が解決していないければ今回と同じメンバーでやる。信之介は、帰りはいつものWRだな？」

うなづく。

「先輩たちは？」

「俺たちや向こうの駐車場にうちのキャラバンを停めてある」

「じゃあ、ここで」

「おう。居眠り運転で事故って余計な手間かけさせんなよう？」

「大丈夫ですよ。お茶飲みましたから。先輩もご安全に」

そう言って天野と二人で單車に跨る。

「先輩、お疲れさまです！」

当初よりはいぶ打ち解けた様子の天野がケツから手を振り、俺はWRを発進させた。

ふたたび路上で二人きりとなり、来た時よりもぐっと少なくなったほかの車のヘッドライトの群れに紛れながら、目抜き通りから郊外の自分ん家を目指す。

腰に掴まっている天野の手は熱かった。仕事の興奮の余韻が残っているらしい。多少なりともやりがいを感じてくれたならありがたい。

田んぼや一面のサツマイモ畑の中を走る国道を抜け、交差点で脇道に入り、家に着く。
ジジイは既に帰っていて、窓から明かりが漏れていた。

「ただいまー」

「ただいまっ」

玄関の引き戸を閉めると同時に奥からジジイが出てきた。

「おう、おかえり。ご苦労だったな、信之介。何事もなかったか？」

「ああ、静かなもんだ。やっぱ、人間があからさまに警戒してる時に暴れる程間抜けじゃないな、今回の吸血鬼は」

ジジイは満足げにうなずいた。

ブーツを脱ぎながら尋ねる。

「そっちの塩梅は？」

「儂の方も成果があったぞ。おかげで明日の出張ですることが増えた」

振り向いて眉を上げると、ジジイはにこにこしながら廊下の奥へと踵を返したところだった。

「詳しくは明日の朝に話す。今日はもう風呂に入って寝ろ。軽い夜食もある。あまり遅くなると明日に堪えるぞ」

夜食はおにぎりと卵焼きだった。ジジイがごつい不器用な指でこれを作ったと思うとちょっとおかしくなるが、今夜が初出勤となった天野をねぎらいたかったのだろう。その天野はとても嬉しそうな様子で、有明産の焼き海苔を貼ったでっかいおにぎりを頬張っていた。

彼女が風呂に入っている間に手早く妖刀の拵えを解き、ふたたび白鞆にして木箱に戻す。

三番風呂は程良い湯加減だった。天野が出る時に温め直してくれたのだろう。ほんとに気の利く女の子だ。

うん、そうか。さっきまでここに天野の裸が漬かっていたのか。さながら真っ白なカブの酢漬けのように――

湯けむりに包まれながらそんなことを考えると、つつい股間のものがむくむくと大きくなり、赤黒い先端を湯面から突き出してしまう。

ふう、と我がことながらため息をついた。

つくづく俺はダメな奴だな。恋人の天野は吸血鬼になってしまっただ変な思いをしていて、それでも必死に進もうとしているというのに、俺は自分がやることしか考えられんのか……

これでは刑事さんに何も言い返せない。

頭上の窓から小さな夜空を仰ぐ。

いつのまにか月が出ていて、こちらに呆れているような輝きを向けてくる。

その丸みに、朝から散々意識させられてきた天野の女らしい体の輪郭をまた連想してしまい

そうになった。

頭までお湯に沈めて、ぶくぶくと泡を吐く。

本当にダメだ、俺は――

吸血鬼が美男美女揃いだというのは俗信だ。その辺の普通の男女が吸血鬼になったりするんだからそりゃそうという話だが、美男美女が吸血鬼になった場合は吸血のために自分の魅力を最大限利用したりすることはある。

吸血鬼に限らず、犯罪者や日陰者は整った顔立ちの方が悪事を働きやすく、それが発覚しても一般市民から匿ってもらえたり、見逃してもらいやすい傾向がある。

したがってそうでない場合よりも生存率は高く、行動はより大胆になり、結果的に目立ちやすい。

つまり特段美しくない吸血鬼は世間からなるべく目立たないように慎ましく生きているのであまり意識されないのだ。

悲しいことだな。

だが、もし仮に天野が人間に敵対的な吸血鬼で、俺がその討伐を請け負った業者だったとすると、間違いなく色香に惑わされて返り討ちに遭っていただろう。

天野はたぶん世界で一番可愛いし、ポニテだし、ポニテだし、体つきもとてもえっちだし、俺は根っこがスケベすぎる。

女の武器で迫られたら100パーセントまったく勝てる気がしない。

困ったことだ。

まあ天野になら殺されてもいいけどな。だって、その……エロ可愛いし。

そんなことを考えながらいつもより遅い時間に就寝すべく布団に寝転がっていると、その色香たっぷりな美少女が、枕を抱いてもはや当然のような顔をしながら襖ふすまを開けて現れ、「んしょ」などと言って同じ布団に入ってくる。

何やら上機嫌に鼻歌まで歌っていた。

そしてすぐ隣に横たわり、例のごとくぎゅっとこちらの腕を抱え込んできた。

一對のとても大きな膨らみが、むにゅゅ、と押し当てられ、信じられないほどやわらかく形を変える感触が、夏物のパジャマの薄っぺらい生地越しに伝わってくる。

うおおおお、煩惱退散煩惱退散。

思わず鼻腔が広がって鼻息が荒くなりかけたのを必死に取り繕い、あくまで紳士的な態度を装って艶やかな黒髪を優しく撫でる。

すると天野は大好きな彼にくっつけてしあわせいっぱいというような表情でごろごろと肩に頬ずりしてくれた。

こいつは俺にレイプされるかも、なんてことは欠片も考えてないんだろうな……。ちよっと

呆れながらそう思った。保護された先で初日からヘソ天でバンザイして眠りこける子猫みたいに安心し切っている。幼なじみ特有の気安さも良し悪しだ。

しばらくお互いの体温を、おおむね一方的に押し付けられる形で確かめ合った後、天野は瞼を開き、大きな透き通った両の瞳を夜闇の中で神秘的に煌めかせながら見つめてきた。

「えへへ」

そして悪戯な子猫みたいに目を細めてはにかむ。

「今日はとっても嬉しかったよう。信ちゃんとおじいちゃんがわたしを仲間に入れてくれて、信ちゃんと一緒にお仕事できて——」

一旦言葉を区切り、安らかな微笑みを浮かべて続けた。

「信ちゃん、いつもああいうことしてたんだね」

「何もなくて退屈だっただろ？」

俺は苦笑気味に応えた。

天野はゆるゆると首を振った。

「ううん。信ちゃんも、先輩の人たちも、みんな街を守るためにがんばっててすごいな、って思った」

その表情は早くも少し眠たげだった。

夜遅いこともあるし、今日は朝から本当にいろんなことがあったから、気疲れも大きいのかもしれない。

何しろ生まれてはじめての討伐屋稼業だ。普通の仕事でも初出勤は緊張する。

少なくとも、天野のような普通の女の子が、武装した男たちと一緒に、化け物が潜んでいる可能性のある深夜の通りを何時間も歩き回されるのは普通の体験ではないだろう。

結果的に何もなかったとは言え、俺や先輩たちが吸血鬼がいなか検めるために廃屋や無人の雑居ビルに突入する時、それを見送る天野の表情は本当に心配そうだった。

ゲリラの蔓延る紛争地帯というわけではないが、まあそれと似たようなものだ。

そんな感じですつと過ごして、ようやく家に帰ってこれたのだ。布団に潜った途端緊張の糸が切れてしまっても無理はない。

それを氣遣って、布団からそつと手を伸ばし、風呂上がりのしつとりとやわらかい頬ぺたを覆ってやる。

天野は「にゃーん」と本当に猫のような甘ったるいソプラノの鳴き声を上げて、嬉しげにそこに頬をすり寄せてきた。

そうしている間にも今にも眠りに落ちそうな雰囲気になっていく。

この分では天野とするのは今夜もお預けだろう。

疲れてるのに無理はさせたくないからな。

なんかせっかく付き合い始めたはいいものの、結局恋人としてのあれやこれやは最初に一回

やったきりだな。今となつてはひよつとして夢だったのではと思える始末だ。

いや、決してやるのがすべてというわけではないのだが（本当だ。信じてほしい）、天野はとても可愛くて魅力的だし、毎晩く無防備に抱きついてくるし、俺の股間のものは言うことを聞かないしで、正直溜まりがちであることも事実なのだ。健康な男子高校生の性欲を甘く見てはいけない。

何より俺自身が、だ。このままでは天野が寝ている横で夢精して果ててしまうという最高に悲しい事態にも陥りかねない。理性は耐えられても体が言うことを聞くとは限らんのだ。

やはり、彼女が寝付いた頃にこっそりトイレに立って抜いてくるべきでは？

とかさつき風呂場でとつとと処理しておけば良かったのでは。

ガチガチに勃起したあそこが天野に当たらないように苦勞して姿勢を変えながら、そんなことを考えて真剣に懊悩していると、彼女がふとまた目を開き、ふわふわとした瞳をこちらに向けてくる。

「……ねえ、信ちゃん」

黒髪のポニテを解いた頭を、子どもの頃よく泊まりに来ていた時から使っていた懐かしの枕に預けながら、穏やかな表情のまま彼女が言った。

「もし、わたしが血を飲みたい気持ちを抑えられなくなって、人を襲うようになってしまったら……その時は、信ちゃんがわたしを殺してね」

俺は一瞬、その意味を捉え損ねた。

頭が真っ白になり、煩惱どころか思考能力まで吹き飛ばされる。

最初から覚悟していたはずなのに、自分だけ能天気な時間を過ごすうちにいつのまにか忘れてしまっていたらしい。

かろうじてみっともなく狼狽えてしまわずに済んだのは、ジジイに鍛えられていたおかげだろう。

どんな時も冷静でいろと口うるさく言われていた。親しい人間を自分の手で始末しないといけないこともあるのがこの仕事だから、と。

言われるまでもなく、そうしているつもりだったが——幼なじみの、好きな女の子の口から、その現実を言葉にして告げられた時の衝撃は、想像していたよりずっと大きかった。

「……馬鹿だな」

内心の動揺をどうにか抑え込み、欠片も表には出さないようにして——一方で否定することもないから、俺は何でもなさそうに微笑みながら振り向き、そっと彼女の髪を撫でた。

「なんでそんなことを言うんだ？」

「えへへ、ごめん。わたしってば、いつも信ちゃんに迷惑ばかりかけちゃう」

彼女が微笑み返してきた弾みに、透明な涙の一しずくが瞳からこぼれ落ちて頬を伝った。

「そんなことねえって」

それを指でぬぐってやりながらどうにか慰めようと無駄な努力をする。

「ほんとはね、いつも思うの。もっとしっかりしなきゃ、って。信ちゃんに、面倒だな、とか、うるさい奴だな、って思われないように……でも、結局いつもこうなっちゃう」

「おい、天野。もうやめとけ」

彼女がどんな暗い方向に行ってしまうそうだったので俺は思わず制止した。

そして上体を起こし、腕組みをして告げる。

「よし、分かった。もし天野がそうになったら、俺が殺してやる。天野に誰も傷つけさせはしない」

結局、天野が恐れているのはそのことなのだ。こいつは優しい奴だから、自分が恐ろしい怪物となつて、親しい人間や罪のない人々を襲ってしまう可能性に耐えられない。

いかにも自信たっぷりな態度を装って続ける。

「でも、あくまで『もしそうなたら』だ。俺が天野をそうさせない。そして天野がそうならない限り、俺は何があっても、絶対にお前を守る」

「信ちゃん……」

「約束だ、天野」

やっぱり俺はアホだな。

体を起こした彼女の細い肩を掴んで告げながら思った。

ジジイにも、先輩にも言われて、自分でもそう決意していたのに、当人には今の今まで一度も言っていないかった。

こんなことでは、天野がこんな表情かおをしてしまうのも当然だろう。

「俺がお前を、ずっと——いや」

まっすぐに彼女の目を見つめながら言い直す。

「俺に、お前を一生守らせてくれ」

言われている意味が一瞬分からなかったのだろう。天野は束の間、ぼうつとした瞳でこちらを見つめ返してきた。

しかしやがて脳に言葉が行き渡ったらしく、ボン！と頭から湯気を噴いて瞬時に顔を紅潮させた。

「……ふえ!？」

はわわ、と口元に手を当てながら、動転して、混乱し切った様子で訊き返してくる。

「し、信ちゃんッ、それって、それって——ッ!？」

「そのつもりだ」

強くうなづく。

「いつかちゃんと言う。悪いが今はこれだけだ。だけど——」

涙でいっぱい瞳を驚きで見開く天野に畳みかけるように告げた。

「お前を、俺の、一生かけて守り抜く、たった一人の女にする」

互いに見つめ合いながら、恥ずかしさで耳まで真っ赤にした彼女にも良く聞こえるように一言／＼区切って俺は言った。

「俺はそのつもりだ。約束する。誓って、絶対にそうする」

こちらを見上げてくる天野の、まん丸に広がった美しい双眸。その透き通った左右の瞳のそれぞれに、自分の顔が映っているのを認めながら結んだ。

「だからもう、死ぬ時のことなんか考えるな。お前の心も、体も、全部俺に預けてくれ！」

天野はもはや思考が完全に焼き切れたかのように、茹で上がった赤い顔で固まり、ばくばくと無意味に口を開閉させた。

「あ、あう……」

そしてうつむいて、ぼそつとつぶやく。

「……もう死んでもいいかも」

「あの、天野さん？　ちゃんと話聞いてました？」

思わず不安になって突っ込みを入れると、天野はぱっと体を離し、枕に飛び込むように顔を押し付けながら足をバタバタとさせる。

「ふええええー！　だってだって、こんなしあわせすぎるようー!!」

かと思うと今度はばね仕掛けのように飛び起きて、胸にすがりついて見つめてきた。

「ね、ね、いいのかな？　わたし、こんなしあわせで……。だって、ほんのさっきまで、そんな普通の女の子みたいなしあわせなんて、もう無理なんだ、って諦めてたんだよ？　それなのに——」

きつとそれは、街に漂う緊張感が悪い方向に働いてしまったのだろう。

人々が吸血鬼に向ける警戒の視線が、いつか自分に向けられることを想像してしまった。

本人が望んだこととは言え、やはりいきなり仕事に連れ出すのは配慮に欠けていたかもしれない。

けれど——それは隠したところで、結局いつかは気づいてしまうことだ。

「いいに決まってるだろ？」

今にも溢れ出しそうなほど涙を湛えて、でもきらきらと輝きながらひたむきな眼差しを向けてくる瞳に笑い返し、良くない考えがどこかへ飛んでいくように頭をガシガシとちよつと強めに撫で回す。

「世の中、本当に普通の奴なんて実はそんなにいないぞ？　単にみんな空気を読んで普通のふりをしてくれるだけだ。教師とか警察とかが過労死しないようにな。だから天野も、いかにも普通の女の子です、ってな顔して歩いてればいいんだよ」

「わたし、こんな、牙も生えて、吸血鬼になっちゃったのに……それなのに、信ちゃんの——にしてくれるの？」

俺はうなずいた。

なるべく力強く見えるように。

彼女が安心できるように。

そして少しは、頼りにしてもらえるように。

「する。だから、ずっと一緒だ。天野のことは、俺が一生守る」

天野はしばしの間、呆然とこちらを見つめ、そして今度は本当に泣き出してしまった。

「ふえええん、信ちゃんゝゝッ!!」

腕の中に飛び込んできた、嗚咽を漏らす華奢でやわらかな肢体をぎゅっと抱きしめる。

天野がこうなるのは二回目だ。最初は、自分がやったかもしれないなかった事件の真犯人を、俺が見つけ出してやると告げた時。

あの時よりは、少しは気分も良くなっているだろうか？

そうだといいと心から願う。

「わたし、わたし、信ちゃんが幼なじみでよかったよう〜！」

「おいおい、それって本当か？ こっちは気が利かない奴だと思われてるんじゃないかって、いつも気が気じゃないんだけどな」

軽口を——口調が軽いだけで、本当は本気でそう思っていることを——叩くと、天野はブンと首根っこで激しく首を振った。

「そんなことないもん！ 信ちゃんはいつも、わたしの願いごとを叶えてくれて——」

そこまで言って、はっと口ごもり、腕の長さの分だけ顔を離して見つめてくる。

自分がまだ返事をしていないことに気づいたらしい。

催促するのかもしれないと思って黙っていたのだが、分かってくれて良かった。

「……えへへ」

天野は何度か指で涙をぬぐった後、照れくさそうに笑った。

「わたしもね、信ちゃんのこと大好き」

澄んだ美しい瞳に、こちらの姿を映しながら言う。

「一生、あなただけを愛し続けます。だから、わたしのこと……守ってください」

「任された」

そして俺たちは唇を重ねた。

長い間そのままだった。

人生で一番長い接吻だったかもしれない。

俺と天野は無心に互いの唇の感触を確かめ合い、息継ぎを挟んではふたたび重ね合わせ、飽きることなく二人で交わすその味を味わい続けた。

時間の感覚が薄れ始めた頃になってようやく顔を離してまた見つめ合う。

混ざり合った二人の唾液が、静謐な夜闇の中で、透明な糸となって互いの口を繋いでいた。

「ふ、ふふ。ふへへ」

天野は喜びすぎて笑い声が止まらなくなっていた。

口元が緩みまくりだ。可愛い。

「信ちゃんー!!」

「天野——ッ」

ふたたび、今度は歓喜の叫びを上げて腕の中に飛び込んできた小さな体をぎゅっと抱きしめる。

「愛してる」

後ろ頭を撫でてやりながら耳元にささやいた。

「わたしも。わたしもだよ」

天野はこちらの胸板にぐりぐりと頭を押し付けながら言った。

「わたし、わたしね、ほんとはいつもこうしたいと思ってたの」

腕の中で顔を上げて歓喜に輝く瞳で見つめてくる。

「信ちゃんと気持ちを伝え合って、愛を誓い合って、——になれたら……きつとしあわせだろうなあ、って」

透明な笑顔を浮かべる。

「えへへ、叶っちゃったよう。叶えてくれて、ほんとにありがとう」

そしてふと恥ずかしげに頬を染めながら目を逸らした。

「あ、あの、それからんだけど……今日はもう遅いし、おじいちゃんもいるから、そっちはまた明日、ね？」

その視線が、ちらちらと俺の股間の方に向けられていた。

やべえ、バレてた。

「ぐ……すまん。俺って奴は、こんな時まで本当に——」

「う、ううん、いいの。信ちゃん、男の子だもん。そういうことだってあるよ」

震えながら懺悔する俺を、天野は聖母のごとき寛大な心で許し、紅潮した表情のまま続ける。

「それに……わたしの体にコーフンしてくれてるの、実はちょっと嬉しい……えへへ」

マジかよ、やべえ。そのセリフでより一層興奮が高まっちゃった。こりやもう今夜は眠れねえな。

とか言いつつ、いつの間にか眠っていた。いつものように幼なじみ同士、二人で抱き合って。天野より慣れているとは言え、俺もやはり相当疲れていたらしい。新人を教えながら街の中を化け物を警戒して歩き回ってたんだからそりやそうか。

彼女の喜ぶ顔が見れて精神的に満足してしまったというのもあるかもしれない。

一足先に夢の世界に旅立ち、腕の中で安心し切った表情ですやすやと寝息を立て始めた天野の寝顔を眺めているうちに、いつの間にか自分も眠りに落ちていた。

朝の気配を感じて目覚める直前、昔の夢を見た。

俺と天野がまだ、背丈など今の半分ぐらいしかなくて、毎日のように一緒に遊んでいた頃の夢だ。

あの頃は近所の畑の裏山が二人の遊び場だった（親にはあまり奥まで入るなと言われていたが）。特にいくつもの横穴が空いた斜面の前の広場はお気に入り、山の日差しが降り注ぐそこで俺たちは飽きることなく追いかけてこやかくれんぼをして過ごした。

夢の中の天野はいつも笑顔だった。黒髪を今と同じように、今よりも短いポニーテールにして、それを尻尾のようにびこびこ揺らしながら光の中を元気に走り回っていた。

今と違って、不安なことなど何もないから、何かの弾みでふと迫りくる夕闇のような暗い影を瞳に覗かせることなどなかった。

……あれはいつたいいことだっただろう。

もう何年も行っていないから、行き方を忘れてしまった。

天野は覚えているだろうか？ 目が覚めたら訊いてみてもいいかもしれない。

ひどく身勝手な話だが、答えを聞くのが少し怖い気もした。

「ヤエちゃんの家の分家筋だがな、北陸に一つだけ残っていることが分かった。今ご両親が滞在している場所の偶々、隣町ってところだな」

朝、昨日と同じように三人で食卓を囲んでいると、ジジイがそう切り出した。

「だからちようどいい。今回ご挨拶に伺うついでに、そちらも一緒に調べてこようと思う」

「親御さんたちの仕事も、その分家と何か関係が？」

偶々とは言いが、そんな偶然あるものだろうかと思っ、味噌汁をすすって尋ねる。

「それは分からん。向こうにも守秘義務がある。仕事の内容は訊いとらんからな」

ジジイは首を振った。

「だがまあ、元より霊力の強い血筋だ。仮に何の関係もなくとも、偶々このタイミングでそっちに引き寄せられてしまうことはあるんじゃないかねえか？」

そう言って山盛りの玄米をばくばくとかっ食らっていく。

俺たちの会話を、天野は横で炭火でじつくりと焼き上げたアマゴの塩焼きを頭からばりばりとかじりながら興味深そうに聞いていた。

うちでは週に一度ぐらいの頻度で玄米を出している。白米と比べてそんなに味がいいわけでもないが、たまに無性に食いたくなるのだ。消化に悪いので良く噛まないで胃腸が荒れたりもするから、ジジイのそれを気遣いながらではあるが、週一ぐらいならまず大丈夫だろう。何よ

り本人が一番この飯を楽しみにしているのです。さっきから何杯も食っている。

こりゃ昼は粥にした方がいいな。本人は食った気がしないと嫌がるだろうが。

献立はほかに、死ぬ程しょっぱい（塩が結晶になって浮き上がっている）自家製の梅干しと奈良漬、ナスとトマトの糠漬。

話に集中しすぎていたらしい天野が、無警戒にほぼ塩の塊のような梅干しを一口でぱくっと口に含み、案の定（××）みたいな顔になっている。

味噌汁は昆布出汁を引いた濃い味付けの赤味噌に、白ネギとぶつ切りの鶏肉をたっぷり入れてどんぶりサイズの木椀で出した。

鶏肉は先に皮に味噌を塗って、そこだけたたきの要領で火で炙った後、味噌汁の中で味を沁み込ませつつ時間をかけて加熱した。

例のごとく低温調理だ。これで肉の部分はほぼ生に近い食感とやわらかさを残しつつも、芯まで完全に火の通ったレアの味わいになる。俺は湯の温度を目で見て測れるので、たんぱく質が変性して内部の細菌が全滅するが、肉質が硬くはならないところにぴったり合わせるのは得意なのだ。

今はもうあまりやらないが、昔の討伐屋は刀から自分で鍛えることが普通だった。対化け物の専用刀だ。その名残りで、俺もガキの頃に一通りの作刀技術を仕込まれている。

刀を鍛える時は、炉で加熱した高温の刃を水に漬けて一気に急冷する「焼き入れ」での水の温度が一番重要だから、それをぱっと目で判断できるようにするのは特に徹底的に鍛えられた。ちょっとぬるめのお湯ぐらいがちょうどいいんだ。

もちろん狙いとする刀の性質によって細かいところはいろいろ変化する。一般論的には冷却が急激である程鋼の組織は硬く、しかし脆くなり、ゆっくり冷やせば鈍いが粘り強くなる。カミソリが欲しければ前者、頑丈な鈍器を作りたいなら後者だ。

昔の鍛冶場では、師匠の湯桶に手を入れて温度を盗もうとした弟子が腕ごとそれを切り落とされるなんて事件もあったらしい。恐ろしい話だ。

まあ今なら温度計を使えばいいだけなんだ。討伐屋は変なところで面倒臭がりなので、一々温度計を懐に入れて持ち歩いたり取り出したりする手間をかけるよりも、自分の感覚ですと済ませられる方が好きなのだ。

ちなみに玉露を入れる時も、湯温は熱湯ではなく60℃ぐらいが一番うまいので、この技能はとても役に立っている。

まあ温度計を使えばいいだけなんだ（二度目）。普通の人もアクションゲームやら格闘ゲームやらで実生活では何の役にも立たないスキルを何百時間もかけて磨くことはあるのだから、それに比べれば討伐屋の悪習など可愛いものだろう。課題を与えられれば攻略したくなるのは人の性だ。少なくとも飯を炊く時にはちゃんと役立っているし、あるかどうか分からないが、今後自分で刀を鍛えることがあっても役に立つはずだ。

出来栄を確かめるべく、どんぶりから味噌汁に濡れてキラキラと煌めく鶏肉を一切れ摘み上げ、一口かじり、噛み締める。……おお、すごい。店を出したら脱法スレスレの肉の熱で破壊されなかった濃厚な味わいがぷりっぷりだ。菌切れは温度を上げた場合ほど良くはないが、だがそこがいい。

その会心の鶏肉を天野が同じように箸で摘まんでかぶりつき、味噌のうま味がたっぷりと沁み込んだ肉汁ごと口の中で咀嚼すると、ノ(*√)／＼と心底嬉しそうな顔になった。うまかったらしい。良かった良かった。自分の作った飯をうまそうに食ってもらえると気分がいい。飯とも良く合うのだろう。香ばしい色をした玄米をぱくぱくと口の中に運んでいき、味噌汁とは別のどんぶりに山盛りよそっていたそれが見るうちに消えていく。おかげで十合は炊いていたはずのお櫃が既にほぼ空だ。もちろん俺も隣で同じようにたくさん食っている。うちの米の消費量はちよっとおかしいな。若い男は俺一人で、後はジジイと女だけのはずなのに、運動部の男子高校生が何人もいるご家庭みたいになっている。

追加で炊いておいたのを取ってくるか、とよっこらせと立ち上がる。

誰かが釜を見ていなくても、事前に水に浸しておけば食ってる間に炊き上がるのだから最近 は本当に便利だ。

天野はもう元氣そうだった。彼氏から聞いたかった言葉を、遅ればせながらも聞いたことで安心したのだろう。旺盛な食欲は、彼女が元氣いっぱいな時のそれだった。

あの場所のことは、結局まだ訊けていない。

俺は臆病な男なんだ。許してくれ。

飯を消化する時間も考慮して、今朝ははじめに軽く座学することになった。

十人分の席がある小さな講義室に三人で集まって、ジジイが黒板にカッカカッと板書をしていく。

たった三人でわざわざ講義室を使うことはないと言ったんだが、講師であるジジイが学業には（何が学業だ）生徒の気分が高揚^{アガ}る場所を選ぶことも重要だと力説し、天野が大張り切りで賛成した。女と老人には逆らえない。

はじめは法律関係の授業だ。討伐屋の仕事に関係する法令——有り体に言えば、どんな時なら化け物を殺して良くて、どんな時はダメかといったこと——をチョークを握ったジジイの指がすさまじい速さで次々と書き出し、それぞれの項目の関係や注意点を矢印で結んで説明していく。

何しろ詰め込みだ。時間がないから、大急ぎで天野に必要最低限の知識を身に付けてもらわないといけない。

彼女もはじめのうちは、必死の形相で、それでもどうにかジジイの話について行っていたが、「……は、はう」

と、そのうち知恵熱で頭から蒸気を噴き出しながら目を回してしまった。

こいつ、学校の成績もあんま良くなかったからな……と、隣でノートを見て、分かりにくそうなところを説明してやりながら思い出す。確か二次関数のグラフでもだいぶ苦労していたはずだ。数学と法学は同じようなものだ。どっちも矢印がある。

これが例えば二ナなどであれば、学業のかたわら教会の対吸血鬼のスパイなんぞをしているだけあってうちの国の法制度にも相当通曉しているんだろうが、完全に下素人な普通の女子高生でしかない天野にいきなり知識の洪水に晒されるのはキツかったようだ。

……そういえば、美名瀬の搜索を手伝ってもらっておきながら、あれつきり一度もまともに話していない。

そもそも俺が忙しすぎて全然学校に行っていないんだから当然だが。さすがに電話で気軽に話せる内容ではないし……一応、彼女がスパイであることは刑事さんたちも（何なら県庁の担当課の人や、この近くにある自衛隊の駐屯地の偉い人も）十中八九把握しているとはいえ、誰もが表向きは知らないふりをしておかないといけないという類のことなので。

彼女の提供してくれた吸血鬼疑いリストのおかげで無事天野の容疑を晴らせたようなものなのだから、今度ちゃんとお礼を言っておかなきゃな……

「ムッ——信ちゃん。今、ほかの女のことを考えてる気配がしたよ？」

なんで分かるのだろうか。

目をぐるぐるさせていたはずの天野が突然眼光鋭くこっちを睨んでくる。

俺は銃口を突き付けられたように両手を上げた。

「最初に吸血鬼を探す時に手伝ってもらったんだよ。本当にそれだけだ」

「むう……それならいいけど……」

なおも不満げに（可愛い）頬を膨らませていた天野は、そこでふと気づいたように目を瞬かせる。

「それって、もしかして二ナちゃん？」

「そんなわけないが……なんで分かるんだ？」

思わず声を裏返しながら俺は訊き返した。

「だって、みんなうわさしてるよ？ 二ナちゃんと良く似た背格好の人が、キラキラしたドレスを着て夜中にお化けと戦ってるのを見たとか、実は魔法の国から来たお姫さまとか、魔法少女なんじゃないか、とかって——」

都市伝説と化してんじゃねえか。スパイの身で何やってんだ、あいつ。

別に全然電話でも良かったわ。くそ、気を使って損した。

「そのこと、あまり人にしゃべらないでくれよ。ちょっとなんかするとあいつが急にいなくなつて、先生にあの子はおうちの事情でもう帰国しましたとか言われる展開になるかもしれないからね」

「はわわ。た、大変だあ」

天野が良く分かってなさそうな、それでも事の重大性だけは素直に受け取ったような声で言った。

こいつにとってクラスの女子はみんな友だちなのでいなくなるのは嫌なのだ。

「孫よ、法律の講義をしている時にそういう後ろ暗い闇の世界の話をするのはやめてもらえねえかな？ 俺たち合法的で遵法精神に富んだ民間事業者サマなんだぜ？」

「ごめんなさい」

ジジイが

（聞いてなかったぞ？）

という心の声を顔に浮かべ、そしてこめかみには太い血管をめりめりと浮かび上がらせながら実に不機嫌そうな声で言うので、俺は素直に謝った。

だがまあ、あの時は多少危ない橋であっても渡らざるを得なかったのだ。

「ヤエちゃんも、こいつみたいなのは絶対しちゃダメだぞ？ お化け退治だからって何やってもいいわけじゃないんだ。ちゃんと許可を取って、合法的な行為の範疇でやらないと、事の次第によっちゃこっちの手が後ろに回ることだってあるんだからな」

と、ジジイは俺の頭を反面教師とばかりに教科書でバシバシと叩きながら天野に告げる。

「はわわ、し、信ちゃんんくゝ〰〰」

天野は制裁を受ける俺をどうすることもできずおろおろとしていた。

かように討伐屋稼業は厳しいのだ。

別に討伐屋でなくたって最近規制とかに厳しいしな。緩めるところは緩めるが、これまでナアナアで済まされてたところは逆にルールが厳格に適用されるようになってきているというか。世の中進歩しているということなのだろう。

だが自己弁護をさせてもらうと、俺だってまったくの考えなしだったわけじゃない。俺は警察に没収されて困るような銃器ははじめから使えないし、もし万が一留置所に何日か放り込まれて刑事さんから頭を冷やせと言われる羽目になったとしても、今より世の中がずっといいかげんだった時代には、使えない若造をそういうグレーゾーンな役割へ当てがって逮捕され役にするなんていうヤクザまがいのことを討伐屋がやっていた前例もけっこうあるわけで、それで天野が助かるなら……うん、いや。

もうああいうことをするのは金輪際止めておこう。

これでも冷静なつもりだったが、俺も実は頭に血が昇っていたということだ。

久しぶりに本気で怒ったジジイのお仕置きを受けつつ、俺は今日のところは自分が天野の良いい教材になれたのだと思うことにした。

後、やっぱり電話も止めておこう。何かあった時にこっちがあっちと連絡を取り合っていたという証拠を残したくない。メールなんか間違っても厳禁だな。

しかし……ヤクザとスパイとは付き合うと言われても、そいつが友だちだった場合はどうすればいいのか。

世の中つてのはやっぱり難しいもんだ。

法律の授業の後は道場に移って、昨日教えた基本技を軽く復習し、いよいよ乱取りの稽古となった。

練習台は、もちろん俺だ。

「えい！ やあ！ たあ！」

柔道着に着替えた天野が、可愛らしい声を上げながらパワーとスピードだけはものすごい感じで一生懸命技をかけてくる。

俺はそれを軽くないなし、襟を強く掴んで背負いのふりをしながら体を捻り、相手が慌てて下がろうとした瞬間に振り返ってパン！と膝裏を刈り取ってやる。

昨日みたいに予想外の不意打ちを食らわなければ——はじめからどれぐらいの力と速度で来るか分かっていれば——これぐらいの吸血鬼初心者をあしらうのは、柔術の技を使えば実は簡単なのだ。

「きゃあー！」

すとーん、と天野がポニテを頭上へなびかせてお尻から勢いよく畳の上に崩れ落ちた。

激突の瞬間、背中側へと回転するように衝撃を逃がしつつ、最後に腕で畳を打っていた。

うん、ちゃんと受け身も取れてるみたいだな。良いことだ。

「ううー、全然投げられないよう……」

「そりゃお前、昨日始めたばかりの奴に投げられてたら俺の立場がねえよ」

目尻に涙を浮かべ、うめき声を漏らす彼女の前にしゃがみ込んで、俺は軽口を返した。

実際、彼女は大了なものなのだ。肉体が変容したばかりなのに、新しい力をもうほとんど使いこなし始めている。産まれたての赤ん坊がすぐに立ち上がってフルマラソンの大会に参加し始めるようなものだろう。野生の仔馬だってそんなことはしない。

たとえフォームが少々拙くても、そこは大目に見るべきだ。

「ヤエちゃん！ たとえ初心者でもヤエちゃんには時間がねえ！ たとえ無理やりにも今日中に何か一つ技をモノにするんだ」

が、後ろで腕組みをして見ているジジイがでかい声で余計なことを言う。

「もう少しマシな取り組みをみせてくれねえと、討伐には参加させてやれねえぞ！」

一つだけ覚えていったところで、それが実戦で役に立つ可能性なんてほとんどないだろうに。つたく、精神論華やかなりし時代の遺物め。

だが心の持ちようは実際大事なのだ。ひとまず負けん気だけは持っていてくれないと、後ろに庇いながら戦う時の危険度も次元が変わってくる。

ジジイが「何か技一つ」でそれを掴み取らせようとしているなら、こっちとしても合わせるに如くはないだろう。

天野がどんな状態でも守り切ってみせるつもりだが、それとわざわざ自分でハードルを上げるのとは別の話だ。

俺はどっちかというと褒めて伸ばす方が好みなんだがな。

そういうわけで、その後も天野は、ジジイに言われるままに掴みかかってきては、あっけなく俺に投げ落とされ、あるいは寝技で押さえ込まれることを繰り返した。

さっき軸足を後ろから払われる小外刈りを思いっきり綺麗に食らったばかりの天野は、それを必要以上に警戒してしまっている。

互いの袖、襟を掴んで組み合っている最中に、こっちが彼女の重心を後ろへ押し上げるように押し込もうとすると、そうはさせまいと腰を引いて踏ん張り、ついつい前のめりになりすぎてしまう。

だから俺はその状態で彼女の袖を掴んでいる左手を一気に下へ引き落として、ガクツ、と体勢を崩してやり、同時に右手を上から回して背中の腰帯を掴む。そこから体を密着させながら、脚を相手の内股に差し込んで刈り上げつつ、自分から後ろにひっくり返ってみせれば――天野の体が、短い悲鳴を上げながら、くるん、と宙に浮くというわけだ。

背後へ投げ倒して仰向けにしたところへ、横から覆いかぶさるようにして寝技へ移行する。華奢な肩の下に左右の腕を回して締め上げつつ、両脚を開いて抑え込む横四方固め。相手の上体で自分の上体を重ねて抱きすくめる形になるので、当然自分の胸板の下でとても大きくてやわらかいものを感じつきり押し潰される感触がした。

俺の下で拘束を逃れようと必死に暴れる天野は、こちらの股下に腕を差し込んですくい上げようとする。昨日教えた通りの、真面目に指導を受けていたことがよく分かる横四方固めからの脱出法だ。

だから俺もセオリ―通りに自ら腰を返して彼女の腕の力を外し、横倒しの姿勢になって、右の脇で相手の顎を押し上げるような袈裟固めへと連絡変化した。

天野の足の方に顔を向けているので、俺に大胸筋でプレスされていた柔道着に覆われた二つの膨らみがふたたびこんもりぷるんと盛り上がって聳え立つ光景をゼロ距離で目の当たりする。何なら彼女が腰や上体を跳ねようとするのを押さえ込むたびに横乳にこちらの口や鼻面を埋め込む形にもなった。ええい、でかすぎだ。いや、嬉しいけども。嬉しいけども、恋人としては！

一度体を重ねたからか、組み手や寝技の最中に手が当たっても天野はまったく気にする様子はないが（というか彼女はそれ以前から無防備に胸を押し付けてきたりしていたのだが）、俺は男なのでとても気になってしまう。

くそ、いま勃起するわけにはいかないんだからな。真面目にやっている天野に悪い。

その天野は、力^{りき}んで顔を赤くしながら、うゝん、と唸^{うなり}って、なおもどうにかして抜け出そうともがいていたが、押さえ込まれたまま一本になる20秒——甲冑武者、あるいは吸血鬼の心臓を短刀で決るのに十分な時間だ——が無情にも過ぎると、こちらの腕の中で、くた、と力を抜いて観念した。

立ち上がり、軽く汗を拭いて、ふたたび場内で対峙する。

彼女にとっても、俺にとってもある意味辛い時間が続いた。

「うう、信ちゃんん……」

「天野、今まで習ったことはひとまず忘れろ」

何十回目かの敗北で遂に心が折れ、情けなさそうな声を上げた天野に俺は言った。

「形に拘らなくていい。こいつは学校の柔道の試合じゃない。当て身、金的、目潰し、何でもありだ」

後ろのジジイに止める様子がないことを気配で確かめながらアドバイスを続ける。

「俺に怪我をさせるかも、なんて心配もしなくていい。お前が何をしてきてもかすり傷一つ負わず切り抜けてやる」

天野は優しい奴だ。体を動かすセンスはずば抜けてるのに、性格の方は殴り合いにまるで向いていない。

今も、劇的に向上した筋力で俺に怪我をさせまいとして、無意識に力を抑えてしまっているのが見て取れた。

それを取り除く必要がある。

「だから、どんな手を使っても俺から一本取ってみせろ。ジジイが見たいのは、それをお前が自分で考えて、戦いの中で実際に組み立てられるかだ」

「……」

果たして、しょんぼりと垂れ下がってしまった天野の眉（・ε・）が、次第にキリリ（・ε・）と持ち直し、何かの決意を秘めた表情で口を開いた。

「分かった。わたし、できることは全部やってみる」

畳から立ち上がり、ふたたび両手を構えながら彼女は言った。

「だから……受け止めて！」

「よし、来い」

通常の格闘技よりずっと遠い十歩の距離で向き合い、束の間お互いの目を見つめ合う。

次の瞬間、天野が畳を蹴った。

ドン！と足音を響かせ、背後で畳をたわませながらの吸血鬼らしい急激な加速。それ自体は、多少速くはなったものの、さっきまでと同じものだ。これなら柔道を少しかじった奴なら苦もなく取り押さえられる。

この程度だろうか？ まあ、いきなりやれと言われてできる奴は普通はいないので、そうだ

ったとしても天野が悪いわけではないが――

だがそう思った瞬間、彼女の体が突然視界の下に沈み込んだ。

ここから膝を取りに来るか!? 柔道からレスリングに切り替えた!?

目を剥きながらそちらに視線を合わせる。

外回り気味に旋回しながらの、普通の人間にはまず不可能な地を這うようなタックル。当初の単純だが極めて速い突進からの急激な運動方向の変化で、こちらの反応を一瞬遅らされた。並みの動体視力の持ち主だったら、完全に天野の姿が消えたように見えただろう。

カウンターの定番である膝蹴りは、届かない。中途半端に足を持ち上げれば逆にそれを刈られる。

だから俺は、天野の両手に掴まれる前に右足を頭上まで思いっきり振り上げ、躲すと同時に後頭部に踵落としを――もちろん寸止めはするが――打ち込もうとする。

だがその瞬間、天野は尋常でない反応速度で畳を叩いて跳ね上がり、振り上げたこちらの膝の裏側へと体ごと飛び掛かってきた。

「ええーい!」

「うおおおッ!」

気の抜けるような掛け声と、それと裏腹な凶悪な運動量が右脚にかかり、取っ組み負けたカブトムシのように視界を一瞬でひっくり返される。

吸血鬼に掴まれるとこうなるというお手本のような状況。躊躇いを外した天野の運動能力はさすがだった。髪の毛が畳をかすめ、文字通りの間髪で後頭部を強打しないために両手で畳を叩き、後ろに吹っ飛ばされながら空中でぐるんと一回転してうつ伏せに着地する。

「この!」

そこへ天野がすかさず足元から覆いかぶさってきた。こちらのウエストに背中からしなやかな腕が回され、腰の辺りに、むにゅん、と途方もなくやわらかい巨大な重量感が押し当てられる。それを楽しむ余裕もなく、伏せている状態からとんでもない馬鹿力で強引に後ろへ裏投げ――バックドロップ――気味に引っこ抜かれた。

体が浮き上がった。腰を起点に凄まじい勢いで振り起こされ、それだけで脳震盪を起こしそうだ。このまま背中を反らせて、俺を頭から後ろに叩きつければ文句なしに天野の勝利だろう。させるか。

俺は投げられながら天野の上で体を捻り、両脚を全力で振り回した反動を使って無理やり投げられる方向を斜めに逸らした。それで距離を稼いでる間に体を後転させ、無事両足から着地した。天野はふらつきながらも無理に逆らおうとはせず、裏投げの途中で自分もスネークシャフトのように体を回転させながら、俺の背中に上から覆いかぶさって腰帯を掴む形で体勢を取り戻す。

こっちも頭の後ろで天野の帯を掴んでいる。上半身同士が折り重なり、互いの体でアーチを

描くような姿勢に落ち着いた。

実は吸血鬼の体というのは、そのとんでもない筋力にも関わらず体重は人間とほとんど変わらない。

軽量化がものすごいのだ。だからこのあの恐るべき高速機動というわけだが、逆に投げ技の時に支えとなる自重がそれほどでもないので、相手がこちらを持ち上げたタイミングで暴れてやれば体勢を崩させることは意外と簡単にできる。

運動センスがずば抜けている天野も、体重の軽さだけではどうにもならない。毎日あんなに食べていても、そのほとんどはエネルギーとして消費されてしまう。俺の方が体重はずっと重いから、俺が思いつきり動いた反動を空中で抑え込むことができないのだ。

「ふぐう……」

バックドロップが不発に終わった天野が無念そうな声を漏らした。

「今のはけっこう良かったぞ」

うなじの辺りに大きな大きなやわらかいクッションが当たって、どんな高級枕よりも柔軟に変形しながら首や肩を包み込む感触を全力で無視しながら俺は軽口を叩いた。

「とはいえ、一本は取れなかったな。ちよつとツメが甘かったか？」

「まだまだ！」

からかわれたと感じたのか、天野がちよつと怒ったように叫び、ふたたび動いた。

「たあ！」

右脚で畳を踏みしめ、腕力に任せて強引に振り回すようにこちらの姿勢を崩してくる。その勢いに、「だがすごい進歩だ。この調子で次は——」と褒めて伸ばそうとしていた口を俺は慌てて閉じた。しゃべっていると舌を噛みかねない。

「やあ！」

俺が堪えると、今度は左足を踏みしめて反対側に引きずり回す。吸血鬼らしい臂力を最大限に活かした取り組み。それでも倒れないと見るや、帯を掴む手にぐつと力が込もり、踵側から煽るようにこちらの体を逆さに持ち上げてくる。

俵返し——いや、パイルドライバーか、これは！

俺は思わずカッと目を見開いた。

俺ががっちり天野の帯を掴んでるので、自分の体を反らせて背後に叩きつける俵返しでは投げることができない。俺の体を自分の上に被せる格好になってしまう。だから相手を抱え上げたら放り投げるのではなく、そのまま抱え込んで足元の地面に打ち付けるプロレス技のパイルドライバーで行くことにした。やはり……このあたりの天野の格闘センスの高さは、とても昨日までズブの素人だったとは思えない。

プロレスでやる場合はあくまでパフォーマンスで、本当に相手の頭を床に打ち付けたりはしない。自分の尻を相手の頭より下にすることで床に強く当たらないように保護している技だが、

今の彼女は本気でこちらの意識を刈りに来てる。そもそも格闘技を始めたばかりの天野に、パイルドライバーでの対戦相手の頭部の守り方など分からないだろう。したがって尻の保護はなく（天野のお尻ならとても良いクッションになりそうだが）、実に危険極まりない。

だが今はそれでいいんだ。覚えてほしいのは興行ではなく、相手を——時には生死を問わず——打ち倒す方法だ。これは実にいい感じだ。

こんな状況でなければ、さぞ気持ち良かっただろうやわらかい太ももに顔を両側から挟み込まれる。体を上下逆に抱え上げられた状態で身動きできないように拘束され、天野が足の支えを外して、彼我の体重を乗せながら脳天に畳が迫った。

気絶させられるわけにもいかないの、俺は彼女の帯から手を離し、逆立ち気味に手をついて頭を強打されることを避けた。

その瞬間、天野はすかさず自分もこちらの帯から手を離しつつ、後ろへ倒れ込む勢いを利用して体を反らせてバク転。畳に後ろ手に手をつくのと、左右の太ももで俺の顔をがっちり挟み込んだまま、なんとこちらの体を脚でふたたび持ち上げ、両手で二人分の体重を支えながら全身のばねを使って俺を自分の上でぶんぶんと振り回す。そして勢いをつけてカタパルトよろしく背後へとぶん投げてみせた。

こんな動きもできるのか！と、思わず驚嘆する。

ただ吸血鬼化して人外の膂力を手に入れたというだけではない。重心やバランス、自分自身の体の動かし方について深く理解していないとこういうことはできない。この短い訓練の間に、もうそれを飲み込んだというのだろうか。

さらに素晴らしいのは、天野がこれを他の技と組み合わせてみせたことだ。

両脚を使った投げ技も、俺が帯を掴んだままでは不発に終わるのは俵返しと同じだ。だから先にパイルバンカーを使った。つまり天野は俺の頭を畳に打ち付けることを狙っていたのではなく、それを俺に帯から手を離させるための布石として利用したのだ。

本当にこいつの格闘センスの良さはどうなっているのだろうか。やったこともない技を即興で繰り出したかと思えば、それをただ使うのではなく、こちらの行動を誘導するために利用して、他の技に繋げてみせる。

自分でジジイの狙いを解説してみせておいて何だが、そのとんでもない才能を実際に見せつけられるとちょっと信じられない気がする。

ジジイははじめから気づいていたのだろうか？ だからこちらが驚く程の熱心さで天野の討伐業参加を歓迎したのだろうか？

何にせよ、俺は彼女のこの力を最大限引き出すまでだ。

心の中で感嘆しながら空中で体を捻り、両足から着地した瞬間、目の前に天野の顔が迫っていた。俺を投げ飛ばすと同時に自分も起き上がり、走り出していたのだろうか。こちらはまだ足先が畳に触れたばかりで、体重をかけて踏ん張れない。そこへ体ごとぶつかるような勢いで襟

に掴みかかってくる。

こちら相手の片襟を掴む。胴着の胸元が開き、Tシャツに覆われた二つの魅力的な丸みが、ぷるん、と揺れるのが見えた。スポーツブラはつけていたはずだが、やはり大きすぎ、重すぎて、布地が動きを抑えられないようだ。くっ、真面目にやろうとしているのにどうしても気になってしまうな。

到底押し返すことはできない。突進の勢いが付きすぎている。

ぐらりと重心が揺れた。

後ろへ。

このままでは背中から畳に叩きつけられて一本取られる。天野の狙い通りだ。

だから俺は畳に触れたばかりの両足でふたたび、トン、とそこを蹴り、鎖骨を押してくる天野の力も利用して、くると空中でバク転することで襟を掴む天野の手を切り、一回転して今度は腰を沈めながら着地した。

この対応は予想外だったのだろう。回転に伴って流れていく視界の中で、彼女が魅力的な澄んだ瞳で目を丸くするのが見えた。

自分より上背のある俺を力任せに押し込もうとしていた。したがって前のめりになり、腕を突き出して、重心の浮き上がった無防備な姿勢になっている天野の襟を、今度は下から掴み上げて、右足裏を彼女の腰骨の辺りに当てて押し上げ、もう一回転の後転で巴投げを掛けた。

完璧に決まった。天野もかなり頑張った——今まで一番良かったが、完全に両足が浮き上がってしまった。もう吸血鬼の身体能力を発揮することもできない。これで終わりだろう。

そう思っていた。

「——このおとおおッ!!」

だが次の瞬間、天野が叫び、まだ畳に着いていた右足だけでそこを蹴って、俺の巴投げに逆らわず、逆に勢いを上乘せするように前へと飛び込む。そして空中でポニテを旋回させながらくると前転して、先程の俺と同じように俺の手を切り、こちらの頭の先に両脚を屈めて着地した。

おい、マジか。

俺は至近距離に沈んできた天野の尻を見上げながら目をばちくりとさせた。

いや、意味不明な動きをするな。あの姿勢、あのタイミングから、反動もつけずにほぼ足首の力だけでこのスピードでジャンプできるのか。猫か、お前は。

くそ、こいつの咄嗟の反応速度と脚力をまだ甘く見ていた。これはヤバイ——

ごろりと仰向けに転がって片足を上げた姿勢で啞然とする、体勢的にすぐに動けない俺と、逆に着地から瞬時に体を起こして振り向いた天野の視線が交錯する。

その瞳が、キラリと光った。

「チャーンズ！」

そしてすかさず飛び掛ってくる。

「ぐほおッ!？」

一直線に突っ込んできた天野の頭頂が体当たりのように腹腔に激突し、息が押し出される。下半身を棒倒しの棒よろしく押し倒され、腰が畳についた。

——ッ、ここから寝技に持ち込まれたらまずい。

下腹の辺りに正面から押し当てられる巨乳の感触を楽しむ余裕すらもはやない。俺は咄嗟に右腕で畳を叩き、天野の体ごとをひっくり返って彼我の上下を入れ替えようとする。

「させない！」

しかしそうしようとした瞬間、天野がこちらの下胴を抱きかかえながら凜と言い放ち、同じ方向に畳を蹴って入れ替わりかけた上下を元に戻した。

俺は即座に腰を跳ね上げ、右の手足で同時に畳を押してふたたび体を回転させる。

しかし自分が上になって抑え込む前に天野が再度上を奪い返す。

天野はまだ技術的に拙^{つたな}くて抑え込みがなっていないし、俺は俺で不完全な姿勢で寝技に入っ
たものだから吸血鬼の速度と筋力に対抗するのは分が悪い。

いや、寝技は確かに怪異を仕留める上で重要な技術なんだけどな？ 入り方が不味すぎるんだ、今は！

おかげでどちらも優位を取ることができず、何度も何度も上を取っては取り返されてを繰り返しながらごろごろと場内を転がり始める。

否、天野はむしろ積極的にこの状況を狙っていたらしい。

「うおおおッ、八重香ちゃんの必殺☆ローリング三半規管殺しだよ!!」

上を取って押さえ込むのではなく、むしろ吸血鬼の臂力でどんどん回転速度を増大させ、さらには上下左右への捻りまで織り交ぜていく。

どうやらスイカ割りの要領でぐるぐる回すことでこちらを酔わせたらしい。

何でもしろとは言ったが、こんなアホみたいな技をかけるな！と、俺は思わず心の中で突っ込みを入れた。

だがそれは確かに効果はあった。何度も何度も回転させられているうちに俺も次第に上下の感覚が怪しくなり、自分が上にいるのに背後の畳を叩こうとして手をバタバタさせて体勢を崩してしまう。

あ、しまった。

「今！」

その隙を天野が目ざとく見つけ、自分が上に入れ替わったタイミングでふわりと下半身を浮かせ、こちら目掛けて落下させてくる。

「たあああ！」

柔道着にびっちり包まれた彼女のぷりんっ、と丸い——そして気持ち大きめな——お尻が視

界いっぱいに広がり、ドォーン！と顔面にとんでもない威力のヒップドロップが炸裂した。

「どうだ！ 信ちゃんの大好きなお尻だよう！」

天野がこつちを振り向きながら得意げに宣言した。

いや、どんな姿勢を取ってるんだ、お前は！

突っ込みたいが声を上げられない。むっちり肉付きのいい尻が一分の隙もなく顔を覆ってくる。

うおおお、息ができねえ……ッ。

さらにこちらを動かすまいとして大事なところ——大事なところなんだよな？——をぐりぐりと鼻先にこすり付けるようにして圧迫する。

その状態でこちらの下半身の方に向き直り、胴に^の押し掛けながらわちゃわちゃと人の足を取り始めた。

「後はこうしてこうして！——あれ？ 上四方^{かみしほう}固めてどうやるんだっけ!? (㊤㊤㊤)」

回転しすぎたせいで自分も目を回したらしい天野が、目をぐるぐるさせながら当惑の声を上げた。

それは足を取る技じゃない。

その瞬間、俺は腹筋の反動で天野の体ごと自分の上体を跳ね上げた。

「ぬがあああッ!!」

「きゃああ!？」

間髪入れず天野の胴に腕を回して締め付け、立ち上がる。

先にも言った通り、吸血鬼は牛並みの筋力がある一方で、体重は人間とほとんど同じぐらいではない。天野ぐらいのサイズの女の子なら、一度動きが止まったら最後、こんな風に持ち上げることは鍛えた野郎になら簡単にできてしまうのだ。

「は、はわー……」

引き締まった細いウエストを両手で左右から掴んで、自分の体から離すと、逆さ吊りの状態になった天野は膝を曲げ、腕とポニテを地面の方に垂らしながら、為す術もないというような声を上げた。

実際、こうなると体重の軽い吸血鬼にできることは何もない。

俺は天野を少し持ち上げ、視線を合わせた。

「……惜しかったな」

「うう、もうちょっとだったのにいゝ」

天野は悔しげに言った。

だが一本こそ取れなかったものの、ここまでできるなら上出来だろう。

まあ、若干無茶苦茶ではあったが実戦への参加を認めてやっても——

その瞬間、決着がつくまでは辛抱強く試合を見守ってくれていたジジイの雷が落ちた。

「真面目にやらねえかッ!!」

「はわわっ」

慌てた天野がばたばたと手足を動かして、ずるり、と俺の手の中から滑り落ち、べちゃ、と上半身で畳に着地する。

その後、俺と天野は並んで正座させられてガミガミとジジイのお説教を食らい、天野は一度仕切り直して、一人で打ち込み稽古をすることになった。

「えへへ、怒られちゃったよう」

照れくさそうな、そしてなぜか俺と一緒に怒られたことが嬉しそうな表情で天野は言った。
「そうだろ？」

俺は疲れた声でうなずいた。

予備の帯を手には道場の隅へと去っていく天野の、柔道着に覆われたぷりぷりと揺れるお尻を慈しむ目で見送る。

なるほどー、あれがさっきまで俺の顔面に押し付けられていたのか。なるほどー。うーん、自分では巨乳党のつもりだったが、やっぱり乳より尻の方が上、なのかもしれない……

そんなことを考えていると、

「信之介え……」

と、背後から地獄の底から響いてくるようなジジイの声がして、思わず血の気が引いた。

「お前え、何ださっきの情けねえ取り組みは。始めたばかりのヤエちゃん相手にずいぶんと苦戦しやがって……ちよつと気合が足りてねえんじゃないか……？」

「いや、まあ、その……」

ぐりぐりと頬に人差し指を押し込んでくるジジイから目を逸らしながら曖昧な返事をかえす。
「お前は引き続き僕との乱取りだ！ お前が戦の心を取り戻すまで終わらんと思えい！」

くそっ、やってやろうじゃねえか。

昨日だってやれたんだ。たとえ天野の声援がなくてもジジイから一本取れるところを見せてやる！

そしてビターン！ ビターン！ ビターン！ と投げられまくり、最後にちよつと惜しいところまで行ったところで俺の乱取りは終了となった。

もう一戦続けていたら一本取れてたな、うん。だがジジイがこれで良しと言っているのだからここまでしておいてやろう。

汗を滴らせ、荒い息をつきながら畳に腰を下ろして休憩を取り、道場の端の方で一生懸命打ち込みをしている天野の姿をジジイと一緒に眺める。

彼女は熱心にやっているようだった。打ち込み用具——家の柱でやったら柱が折れるので鉄板の上に丸ポストぐらいの太さの鉄柱を載せる感じで自作した——に予備の帯をかけて、ビシ

ッ、ビシッ、と背負いの動作を繰り返して確認している。

その動きは、最初の頃と比べてもだいぶ様になってきているように感じた。

しなやかな肢体が鋭く動いたびに、ポニテが跳ね、透明な汗が弾ける。真剣な表情が愛らしい。柔道着越しにもはつきりと分かってしまう女らしい体の凹凸もなかなか魅力的ではあるが――

先の俺との取り組みで気持ちの持ち様に変化もあったのかもしれない。教えられた動作をただなぞるのではなく、どうすれば相手を倒せるのか考えながら体を動かしている。そんな印象を受けた。

ジジイの思惑は図に当たったというわけだ。彼女はここから急激に上達していくだろう。並みの野郎では到底相手にならない程に――

となると、ほかにやるべきことは後一つというわけだ。

「あのさ、じいちゃん」

既に息は整っていた。汗も引いている。

道場の中は照明もつけてはいるが、外では折良く夏の空にふたたび分厚い雲がかかっていたので、天井近くに小さな明かり取りの窓があるところの鎧戸を一か所だけ開いて外光を取り入れてもいた。

曇りガラスを通して畳に影を落とす、まだらでおぼろげな、吸血鬼でも火傷をしないで済むぐらいの薄明かりの中で動き続ける天野の姿を見守りながら、俺は言った。

隣で蹲踞の姿勢を取っているジジイが首で振り返る。

「おう。どうした、孫よ。急にあらたまって」

「もう一度鍛え直してもらいてえんだけど」

今日一日に限ったことではなく、これから何年もかけて努力し続けなさいといけないことのもりだった。

ちよつと言葉足らずだったが、意図は伝わったらしい。

ジジイは天野に向き直りながら言う。

「基礎練はずっと続けとったんだろう？」
うなづく。

「なら体も技もすぐに追いついてくるさ。お前はまだ若い。ここからまだまだ強くなれる」
ちよつと背中を屈めて、でかい手で自分の膝頭を掴みながら続ける。

「とりあえず当面は吸血鬼退治だ。自分の課題を探すつもりで戦ってみろ。それが終わったら

――儂とまた、本気の稽古をしよう」

「分かった」

ジジイがそう言ってくれたことに自分でも意外な程の子どものような素直な嬉しさを感じながら答えた。

一度は投げ出したことだが、今度は最後までやり遂げるつもりだった。そうでないと天野を守れないし、練習相手であり続けることもできないだろう。

結局のところ、約束を守るためには俺自身が強くなるしかないのだ。

一生かけて守り抜くと誓った俺自身が。

「えい！ えい！ えい！」

天野は打ち込みを続けていた。

だいぶ気合が入っているらしい。ポニテを弾ませながら、可愛らしくも元気いっぱいな声を発して背負いの動作を繰り返す。

そのたびに鋼鉄製の柱がたわみ、ギシギシと軋み音を立てた。

……おい、あれ大丈夫か？

「えーい！」

その瞬間、バコン！とものすごい音がして、金属製のボルトで固定してあったはずの鉄柱が吹っ飛び、とんでもない速度でくると回転しながら放物線を描いて——ズゴン！と、向かいの壁、その人間の頭ぐらいの高さのところに突き刺さった。

「はわわっ、し、信ちゃんん」^{⑤⑤}

やらかしたと思ったらしい天野が目ぐるぐる回しながら、おろおろと慌てふためく。

うん、今日が曇りで、かつ鎧戸の一部を除いて閉めたままにしておいて良かった。内壁にかい穴が空いても日差しが入ってこない。

彼女の助けを呼ぶ声に、もちろん俺はすぐに立ち上がり、駆け寄っていった。

午後、ジジイは背広にボーラーハットという出で立ちになり、俺と天野の見送りを受けながら玄関に立った。

「というわけで僕はこれからヤエちゃんのご両親にこのことを説明してくる」

靴べらで革靴に左右の足を押し込むと、こちらを振り返って告げる。

「明日の昼までは帰らん。これが何を意味するのか、お前たちには言うまでもないだろう」
うるせえよ、早く行け。

下世話なセリフを吐くジジイに、俺は思わず心の中で突っ込み、胸もお尻もえっちな体つきをしている天野は、ぼっ、と左右の頬を染めて手を当てた。

ジジイはまったく気にする様子もなく、ガシッ、と俺の肩を掴んで真剣そのものの表情で続ける。

「……あまりハメを外しすぎるなよ？」

俺は心底うんざりとしながら無言でこくこくとうなずいた。

戸が閉まり、ジジイの姿が視界から消えると、辺りが急に静かになった気がした。

俺も天野も互いから目を逸らし、言葉を発しない。

それでいてその場からは動かない。

むずかゆいような、なのになんと感じていたような沈黙が周囲に満ちる。

しばらくすると、つん、と天野が肘を触れさせてきた。

俺はそっぽを向いたまま、同じことを、彼女のいつもより体温が高くてやわらかい感じがする上腕にやり返した。

天野もまたこちらを振り向くことなく、しかしボディタッチに応えるように、ふたたび肘でつついてくる。

俺はすぐに同じことをやり返した。

何度か繰り返すうちに互いの小指が触れ、汗ばんだ手が絡み合う。俺のごつごつした指の中で、天野の小さくてやわらかくて、すべすべとした肌の手が熱く熱を持っているのを感じる。

そつと横目に振り返ると、無意味に壁の方を見ながらもじもじしているポニテの両側で、彼女が耳まで赤くしているのが見えた。

もう我慢できない。

俺は不意打ちのように勢いよく彼女の方を振り向き、華奢な腕をガシッと掴んで、少し強引なぐらいにこちらへ向き直させる。

天野は紅潮した表情で、はっと目を見開いて見上げてきた。愛らしい半開きの唇。桜色のそこから、ちろりと可愛い牙が覗いている。

そこを素早く自分のそれで塞いだ。

小さくてやわらかい体を、逃げられないように、壁に押し付けるようにして捕まえ、ぷるぷると湿っぽい唇の感触を存分に味わう。

天野はきゅっ、と目を閉じておとがいを上げ、こちらの接吻を受け入れていた。

束の間の強張りには、しかしすぐに解け、くたりと力を抜いて体を預けてくる。

彼女の細くびれた腰を、俺は片手で抱きかかえ、もう一方の手をポニテの結び目に引っ掛けるようにして頭の後ろに添える。

後ろに傾く天野の体を支えるふりをして、その実、彼女がキスを振りほどけないように力で拘束する。

そうやって少女の逃げ道を塞いで、俺にされるがままになるしかないようにしておいて、ひたすら唇の純潔を奪い続けた。

気が遠くなりそうなほど長い時間そうした後、やっと唇を解放すると、天野はもう出来上がってしまったような上気して、潤んだ瞳でぼうつとこちらを見上げ、はぁ、と熱っぽい息を吐く。

「あっ……信ちゃん……」

「天野」

たまらなくなってもう一度口を塞いだ。今度は貪るような接吻を交わしながら、左手でスカ

ートをたくし上げて大事なところまで指を這わせていく。

つるりとした感触のショーツは既に湿り気を帯び、中心がじつとりと濡れそぼっていた。

その事実にもうそれだけで射精してしまいそうなほど興奮した。

舌と舌を絡め合わせながら湿り気を中心をそつと撫でると、天野はぴくん、と体を震わせて、お互いの口の中でくぐもった嬌声を漏らす。そして嫌がることなく、それどころか、もつと、もつと、とせがむようにこちらに腰を押し当ててきた。

このままでは玄関でおっ始めてしまいそうだったので、口を離れた後、寝室に場所を移した。華奢で小柄なのに、おっぱいもお尻も量感たっぷりだ（特に前者は信じられないほど大きい）最高にえっちな天野の体。そこに無遠慮に手を這わせながらスカートのホックを外して足元に落とし、ブラウスを脱がせ、下着もすべて外させて、トレードマークのポニテを留めているゴム紐以外は産まれたままの姿にしてしまう。そしてその彼女を畳に敷いた布団の上で四つん這いにさせて、ぴっちり固く閉ざされた、しかし既に熱くぬめり、たっぷり愛液を漏らし始めている割れ目に、ガチガチに硬くなった自分のものを押し当てた。

肩越しにこちらを振り返る天野の黒い瞳が、ぼうつと期待と興奮で上気していた。

それを確認して、ゆっくりと腰を押し出した。

「ああッ！ んんんッ——!!」

天野はきゅっと眉を寄せて苦しげな呻き声を漏らす。

数日前に処女を失ったばかりなので、さすがに中は狭く、かなりきつい。最初のセックスの前まで、指より太いものは挿れたことがなかったそうだ。布団についた手をぎゅっと握り締め、肩を強張らせて、ぴくぴくとお尻を震わせる少女は、しかし亀頭がようやく半分ほど入り込んだあたりで追加の大量の潤滑剤が溢れ出してきたことで、そのぬめりに助けられて俺の一番太い部分が、ずりり！と一番狭い入り口を通過した。

「あああ！ んあああッ、あああーッ!」

華奢な背中を仰け反らせ、宙に叫び声を上げて、挿れられているだけでも息も絶え絶えといった様子で天野を気づかいながら、自分の中の獣性を必死に抑えて、彼女の中を少しずつ前へと進み続ける。

ずず、ずず……と、慎重の上にも慎重を重ねて、ほとんど処女に近い狭隘な膣穴を怒張し切ったペニスの先端で掘削し、1センチ、また1センチと茎を割れ目の中へと送り込んでいく。

それでも入り口を通り過ぎた後は、少なくともこっちはだいぶ楽だった。天野の膣襞が、まるで自ら男の侵入を望むかのようにうねり、窮屈ながらも大量の愛液を分泌させることで奥へと引き入れてくれる。

気の遠くなるほどの時間をかけて、やがて俺のものが完全に彼女の中に埋め込まれた。

「全部挿入^{はい}ったぞ、天野」

「ほん、と……？ 嬉しい……」

ふう、と息をついて、汗をぬぐいながら呼びかけると、天野は、はあ、はあ、と肩を喘がせて苦しげな息をつき、苦痛と歓喜がない混ぜになった表情で振り向いて、美しい瞳に涙を浮かべながら言った。

「わたし、信ちゃんの女ものになれた……？」

それが愛おしくて、答えるために左右の手を重ねるようにしてぎゅっと握りながら彼女の上に覆いかぶさり、肩越しに唇を重ねた。

「んっ、信ちゃん……」

「天野……」

そのまましばらく動かずに啄ついばむようなキスをお互いに続ける。

互いの性器を繋ぎ合わせたまま、彼女の愛らしい小さな肢体を己の肉体で覆い隠し、自分のものだと全力で主張した。

そうすると彼女の中でじわりと熱が広がり、炭にゆっくりと火が付くように体温が一層上がり始めた。焦らすつもりはなかったが、結果的にそうなり、やがて自分から物欲しげに腰を揺すり始める。

それを受けて、俺も少しずつ腰を前後に動かしした。

んっ、んっ……、と必死にこちらの唇に自分のそれを押し当てながらぐもった声を上げる天野の下の方は、依然としてひどく狭隘で、ぎゅうっ、と千切れそうなほどぎつく締め付けてくる。それでも徐々に慣らすように小刻みなピストンを何度も繰り返すと、最初にした時そうだったように、強烈に凝り固まっていた内壁の筋が段々と解ほぐれていき、愛液の多さにも助けられてスムーズに動けるようになる。

行けそうだと判断した俺は、上体を起こして、こちらに向けられた天野のむっちりとした大きな白いお尻を見下ろしながら、その少し上の辺りのきゅっとくびれたところを両手で掴んだ。

そして世界で一番愛おしい少女の中から、自分のものをゆっくりと引き抜いていく。

「はあああ……ッ！」

内側をカリ首でこそぎ落とし、陰唇をめくり上げながら太い血管の浮いた肉茎が姿を現すと、天野が長く熱っぽいため息を漏らす。

中から出てきたそれにたっぷりと愛液がまぶされていることを確かめつつ、笠の裏側が天野の入り口に引っ掛かるところまで引きずり出した後、ふたたび中に押し込んでいった。

「あああッ、んんッ——!!」

ほんの数日前まで処女だった少女は、自分の指よりも遥かに大きなものに体の奥深くまで侵入されて、尻や背中を震わせながら、やはり甲高く苦しげな叫び声を上げる。

綺麗な黒髪のポニテを振り乱して何度もかぶりを振る天野——

それでも、一回目よりはずっと楽に根元まで埋め込めることができ、俺はすぐに自分の逸物をふたたび引き抜き始めた。

「はああ！ ああッ、んああーッ!!」

徐々に天野の喘ぎ声が激しくなる。

濡れやすいあそこからはどぼどぼと洪水のように愛液が掻き出されて、布団の上に巨大な沁みを広げていく。

果たして、何度も抽送^{ピストン}を繰り返すうちに、彼女の叫びには明らかな快楽の色が混ざり始め、膣壁と亀頭の擦り合わせはますます滑らかになっていった。

「ああん!! んんん！ あはああッ——んんッ——んああッ!!」

押し込まれるたびに艶やかな朱の差した白い肢体をビクビクと震わせ、完全に熱を持っている吐息と嬌声を漏らす天野。

もう大丈夫だ——

そして俺も限界だった。

こんなに可愛くて、魅力的な天野に、延々とペニスを刺激され続けて、これ以上自分の中の欲望を抑えることができない。

「くっ、天野——ッ」

心の中で彼女に詫びながら、細いウエストを掴む手にぐっと力を入れて、一旦引き抜いた後、反動をつけて一気に根元まで突き入れ、子宮を打ち抜くような勢いで尻肉に、パン！と腰を打ち付ける。

「んあああんッ!」

天野が衝撃でたおやかな肢体を震わせ、ポニテを跳ね上げながら、甲高い悲鳴を上げた。

だが、やはりそこには十分な甘やかさと快楽の響きが滲んでいた。

それを聞き取った俺は完全に理性が弾けた。

自分の下で雌を感じ始めているのをいいことに、さらに勢いよく腰を打ち付けて始めてしまう。

パン！パン！パン！と、筋肉がやわらかい脂肪を打ち据える音が連続した。

「んああッ！ ああッ！ はああッ！」

四つん這いで体の奥を抉られている天野が懸命に腰をくねらせる。

ほとんど経験のない彼女に、容赦なく引き抜いては打ち付け、また引き抜いては打ち付けることを繰り返した。

たちまち天野のそこからは、じゅぶ！　じゅぶ！と泡立つような水音が溢れ出し、混濁したものがペニスの裏筋を伝って二人の体の下に滴り落ちていく。

「ああッ！　んはああッ!!」

亀頭が天野の中を強烈に擦り上げ、一番奥に突き当たり、そこをさらにどすどすと突き上げる。

獣^{けだもの}じみた激しさと犯され、美しい黒髪のパニテを振り乱しながら、泣き叫ぶように声を上げる。

げる天野は、しかしやわらかい頬を愛らしいバラ色に上気させ、瞳をいよいよ桃色の霞がかかったように熱っぽく、そして蠱惑的に潤ませて、まるでより一層深く繋がり合うことを望んでいるように自分から腰を振り始める。

「ああッ！ 信ちゃん！ 変だよう！ わたしのなか……信ちゃんが入ってくるたびにッ、おかしくッ——！ あんんッ——!?」

上体を支える両腕の間で大きな乳房をぎゅっと挟んで潰し、打ち込まれるたびにポニテを弾ませながら快楽を訴えてくる。

感じてくれている。

子どもの頃から知っているあの天野が、俺のもので、こんなにいやらしく……

「いいんだ。もっとおかしくなってくれ」

その事実にあたまらなくなつて、彼女の上腕を掴んで、ぐい、と引き起こし、後ろからぎゅっと抱きしめながら耳元にささやいた。

「……愛してる。俺は、天野のこと、一生大好きだから——」

「んはあんッ!? ——ッ!?」

その瞬間、彼女の中が言葉に反応してより一層強く俺のものを締め付け、それで自分の快感が増大してしまったように、ビクン！と豊かな肢体を跳ねさせた。

同時に俺はスイカのような大きさの乳房を片手で鷲掴みにしながら、もう一方の手で天野のおとがいを振り向かせて、快楽の悲鳴を上げようとした桜色の唇を自分のそれで塞ぐ。

その瞬間、彼女の中で快感が爆発したのが分かった。

俺のものを締め付ける膣壁が激しく痙攣し、むっちり肉付きのいい膝立ちの太ももがガクガクと震える。爆発は一度では終わらず、立て続けに連鎖し続ける間、腕の中で跳ねようとする小柄な肢体をぎゅっと押さえ込み、自分のものを奥深く咥え込ませたまま、俺は強く強く唇を重ね続けた。

時間の感覚がなくなるまでそうした後、そっと唇を離すと、銀色に輝く涎が糸を引いて二人の間を繋いだ。

「ああ……ッ！ 信ちゃん、わたし……わたし……ッ」

汗ばみ、とろん、と完全に蕩け切ってしまった表情で、はあ、はあ、と熱い吐息を漏らしながら、天野が喘ぐように絶頂を訴えてくる。

「好きだ」

その艶やかな黒髪をそっと撫でてやりながら、俺はもう一度告げた。

「愛してる。だから、もっと感じてくれ。天野の可愛いところ、ずっと見てるから——」

天野が頬を紅潮させて息を呑み、ごく、と喉を鳴らす。

そして恥ずかしげに俯きながら、こくり、とうなずいた。

彼女が覚悟を決めたのを見て、俺は腰の動きを再開した。

既に達してしまっている少女を、後ろからがっしりと男の力で抱きすくめながら、敏感になったそこをさらに激しく攻め立てていく。

ペニスを突き入れ、引き抜くたびに、カリ首が大量の愛液を掻き出し、どぷどぷとあそこから溢れさせて布団に沁み込ませていく。

「ああ！　ああ！　んああああッ!!」

もはや間違えようもない快楽の叫びを甲高く迸らせながら、天野は俺の腕の中で悶え、華奢な体を淫らにくねらせた。

「信ちゃん！　信ちゃんんッ——!!」

「天野ッ!!」

俺も何度も彼女の名前を呼びながら必死に腰を打ち付けた。

天野の嬌声はますます大きくなり、断末魔の悲鳴のように一続きになって、やがてふたたびビクンッ、と体全体を震わせると、彫像のように硬直する。

それと同時に俺も強烈な締め付けに襲われ、彼女の中でドク、ドク、と大量の精を吐き出していた。

「信ちゃん……」

「天野……」

何呼吸かじっと息を整えた後、互いを見つめ合って呟く。

「……悪い、一回だけじゃ満足できない。もう一度——」

「うん、わたしも……もっと、信ちゃんを感じていたいから……」

彼女が言い終える前に、中に深々と差し込んだまま、片手でたっぷりと大きな乳房をさすり、下からたぶたと掬い上げるように揉みながら、もう一方の手は陰核を撫でる。

ふたたび、天野が身をくねらせながら、可愛らしくも艶めかしい喘ぎ声を上げ始める。

それから何度も何度も、俺と天野はお互いを求め続けた。

お互いが満足した頃にはすっかり夜も深まって空に星が出ていた。

結局、夕飯を挟んでずっとやりっ放しだった……。ジジイの言いつけを守れたと言えるのかは定かではない。

まあハメは外したが、「すぎて」はいないから良しとしよう。三人で暮らしているという機会もあまりないからな。

ジジイには悪いが、若い二人にはこういう二人きりになれる時間も必要なのだ。

「えへへ。信ちゃん、六回もしちゃったねえ」

最後には腰が抜けて自分の脚で立てなくなってしまっていた天野が、布団の上に寝そべりながらこちらを見上げて言った。

「わたしの中、そんなに気持ち良かった？」

周囲に使用済みゴムを散乱させ、頬つぺたやその他全身に大量の粘液を貼り付けたままの姿でドヤ顔で尋ねてきた。可愛い。

なぜ女という生き物はこう、散々やり終わった後はこんな風に己の生物としての優位を確信したかのような余裕たっぷりの表情になるのか。可愛い。

やっぱり食虫植物が獲物の昆虫を捕まえてやっただけみたいな気分なんだろうな。ほんと可愛い。

魅了されてばかりいても仕方ないので、適当な上着を取ってきて彼女が冷えないように肩にかけてやる。

窓は汗その他で湿るので、している間も途中から開けっ放しにしていた。この辺りはほかに民家がないので（一応、化け物関連は危険施設だから、一般の住宅を建てていい最小距離が法律で決まっている）、どれだけ大声を出しても隣に聞こえる心配はない。

まあいつかの天野みたいに夜の診療客は来るかもしれないが、家の裏手なのでまず大丈夫だ。うちは無駄に広いのだ。

二階にある俺の部屋の寝室からは、夏の満天の星空が良く見えた。

月が出ていないので星がたくさん瞬いている。

一時よりは涼しくなったように感じる夜風も、決して冷えすぎることはなく、火照った肌にはちょうど気持ちいい。

土地を囲む遠くの山々の黒い影が、高く鋭い頂で星空を切り取るようにそびえ立っていた。

「えへへ、なんだか部活の合宿みたいだよ」

しばらく二人で身を寄せ合ってそれを眺めていると、天野がくすくすと肩を揺らして言った。

「そうか？」

「うん」

遠くの星に向かって手を伸ばしながら続ける。

「練習が終わって、みんなでごはん食べて、お風呂に入って。就寝時間になるんだけど、先生が電気を消した後も、友だちとこっそりおしゃべりして過ごしちゃうの」

星は掴めなかったので、手を下ろして膝を抱え、そこに片方の頬を載せながら、こちらに思わせぶりの視線を向ける。

「……でも、違うか。今は恋人同士だもんね」

「天野——」

「愛してる、信ちゃん」

「俺もだ、天野」

「——うん♪」

田舎の夜の星空に見守られながら、また唇を重ねる。

七回目は、それまでよりも大分長くなった。

次の日の朝はのんびりと過ごした。講師であるジジイがないこともあって柔術の稽古もなしだ。別に俺でも自主練に付き合うぐらいはできるが、回復力の高い吸血鬼とはいえ休みなしで高強度の訓練をさせ続けるのは良くない。天野には今日一日たっぷり休息を取っていったん全身の筋肉を癒してもらう。

というわけで、俺たちは寝起きにしばらく布団の中で裸で抱き合ったり、イチャイチャしたりしてまったりと過ごし、床を出ると二人で朝食の支度をして、いつもより遅い食卓についた。今朝は洋食にした。四枚切りの分厚いトーストのほか、二つ目玉焼きと焼いたウインナー、野菜と肝の煮込みのスープをつける。

天野は天然物のバターをたっぷり載せたふかふかのトーストを何枚も実にうまそうに食べた。乳製品は血液の代わりにいい。吸血鬼の食事療法の基本だ。脂肪？ 気にするな。天野の運動量からすればむしろ摂らない方が毒なぐらいだ。

ウインナーもフォークで刺しては、パキパキと小気味良い音を立てて何本も食べている。今朝は普通のやつだが、昼にはまたブラッドソーセージを出そう。

満面の笑顔でしあわせそうにトーストをかじる天野の口元に食べカスがついていたので、紙ナフキンでぬぐってやると、彼女はまた嬉しそうに笑ってくれた。しつぽがあったら千切れるぐらいブンブン振ってそんな勢いだ。可愛い。

「なあ、天野」

だから、俺は思わず言っていた。

「？」

天野はきょとん、とあどけない表情で目を瞬く。

「これからも俺を頼ってくれ」

優しく微笑みかけながら伝えた。

「迷惑だなんて思っていない。照れくさくて、ずっと誤魔化してたけど——本当はお前に頼れるのが嬉しいんだ、俺は」

「信ちゃん……」

天野は涙ぐみ、それから天使のような笑顔になって言った。

「うん……うん、ありがと。頼りにしちゃうね」

食後はまた合体した。

対面座位で抱き合って、昨日一日でだいぶやわらかくなったそこに根元まで俺のものを咥え込みながら、天野は紅潮した頬で荒い息をついていた。腰を揺するたびに小刻みに漏らし続ける甲高い嬌声が可愛らしい。その姿勢で何度も口づけを交わした。

昨晚に引き続き、天野は尻を震わせ、大量の愛液を流し零しながら良く感じていた。こちらにしがみつきながら何度も自分から接吻を求めてきた。

これぐらいの年の女の子は初体験からそうすぐには気持ち良くならない気がするんだが、元々感じやすい体質なのか、それとも俺への愛ゆえか。

後者だといいな、と何となく思う。

昼前には近所（田舎的な尺度での）の知り合いの農場に出かけた。何日か前に頼んでいた食材を受け取るためだ。

もちろん俺一人だった。空には雲がかかっていたが、山国の天気は変わりやすい。いつ何の弾みで日差しが出てくるかも分からないので仕方がなかった。お互いさみしくて（もう一瞬たりとも離れたくなかったのだ）、玄関で見つめ合いながら何度も指を絡めたが、最後には手を振って別れた。

帰宅した時にもまだ曇ったままだったので、出てくるかな、と思っていたが、思った通りだった。戸を開けた瞬間、家の奥から足音が響いてきて、ポニテをなびかせながら天野が飛び掛かってきた。

やわらかい体を抱きとめ、十年ぶりぐらいの勢いで泣きながら再会を喜ぶ彼女と（もつとも俺も同じ思いだった）何度もただいまのキスを交わして、やっと落ち着かせた。

もらってきたのはブラッドソーセージだ。初日に天野に食べさせたやつはもう食い尽くしてしまっていたし、後から通販で追加したやつも、そろそろ在庫が心もとなくなっていたので良いタイミングだった。

天野に見せてやりたかったので、玄関で荷物を広げる。

農場の奥さんが試食にと茹でてプラスチックの容器に入れてくれたものを出すと、天野が目を見て「あーん」と可愛らしい犬歯の生えた口を開くので、一本摘まんでそこに咥えさせてやる。

「ふへへ、おいひいよう……」

緩み切った表情でもぐもぐソーセージを咀嚼しながら天野は言った。

農場一家はほかにも様々な部位の豚や牛の内臓をおみやげに持たせてくれた。俺やジジイの知り合いというだけでなく、天野の家とも昔から付き合い合っていて、幼い頃の彼女をよく見ていたこともあって、吸血鬼になってしまったと聞いてひどく同情していたので、そのせいもあるだろう。奥さんも農場主さんも、精肉と肉料理を俺に手渡しながら、何度も天野の容体を尋ねてきた。

吸血鬼だからといって、誰もが討伐されたり、どこかに封じ込められなくてはいけなわけではない。こういう地域の人々との繋がりがあれば、天野はこれから先も、この場所で人間として生きていけると思う。

ちなみにハギスもある。羊の胃袋を使った料理だが、農場の先々代のお嫁さんがスコットランド出身で、先祖伝来の作り方を伝えてくれたらしい。癖の強い味わいだと言っていたが、試食してみたところ俺は好きだった。天野も気に入るだろう。

さっそくもらってきたソーセージや内臓を使って遅い昼飯を作る。ブラッドソーセージはフライパンで軽く火を通して厚めに切る。ハギスはチーズと和えてホットサンドにしてみた。これも農場主さんが教えてくれた。近頃のロンドンでの流行りだそうだ。向こうの親類が伝えてきたのだという。豚のレバーはトマトスープにした。後は作り置きのパテトサラダにアボカドとミニトマトを好きなだけ添える。

量はどれも多い。びっくりする程山盛りだ。まあ、俺も天野もたくさん食べるので大丈夫だな。

今朝潰したばかりだという豚のレバーはまったく臭みがない。あえて血抜きは控えめに注文をつけておいた。残った新鮮な血液がスープに溶け出し、トマトの酸味と混じり合って、複雑でまろやかなうま味を作り出している。その意外な味わいに天野も目を丸くして大喜びだった。

午後は居間で昼寝をしたり本を読んだりしてだらだらと過ごす——つもりだったのだが、体を重ね合わせてお互いの体温を感じたり、いたずらでくすぐり合ったりしてるうちに、二人とも変な気分になってしまい、結局またやってしまった。

なんかやってばかりだが、俺も天野もお盛んな年頃だから仕方ないな。二人きりで過ごす最後の時間を惜しむようにぎりぎりまで何度も何度も繋がり合っていた。

天野は今日これで何度目のシャワーだろう？ 人肌ほどのお湯を背中に浴びる彼女を、浴室でも後ろから貫きながら思う。一度はお互いすっきりしたと思って一緒に体を洗いに来たのだが、彼女の丸い艶やかな柔肌の上を流れる水滴を見ているうちに結局またむらむらしてきてこうなってしまった。二人とも健康的だし、飯もたっぷり食ってるので際限がない。

「信ちゃん、信ちゃん——」

天野が荒い息をつきながら振り返って呼びかけてくる。俺はまた昨日のように彼女の上体を腕の力で、ぐっ、と抱き起こし、豊かな乳房を揉みながら求められるままに唇を塞いだ。

たおやかな肢体がビクツと揺れた。いったらいい。それと同時に俺も天野の中で射精していた。

午後も深まってきたが、夏の日差しはまだまだ高い。

今度こそ何もせずに二人で昼で涼んで猫のつがいのようにごろごろしていると、程なくスマホにジジイから駅に着いたという連絡が入った。

「分家の方と会ってきたぞ」

背広から作務衣に着替えたジジイが座布団にどっかりとあぐらを掻いて言った。

俺と天野は暑い中老人を働かせて自分たちは二人で楽しんでいた罪滅ぼしとばかりに、肩を揉んでやったり、茶を出したりして機嫌を取る。

「さいわい覚醒の兆候はなかった。念のため、近くの診療所で定期検診を勧めてきたがな。あ

れなら放っておいても大丈夫だろう」

ジジイは満足げに俺たちの饗応を受け取りながら出張の成果を語った。

「だが、一つ気になることがある」

そう言って一冊の古びた和綴じの冊子を座卓に乗せた。

厚みは三センチ程で、表紙には何も書かれていない。だが妙な妖気を感じた。

「……そいつは？」

「ヤエちゃんの分家に代々伝わってきたものらしい。あちらも前から少し薄気味悪く思っていたそうで、吸血鬼のことを話すと儂に預かってほしいと言ってきた」

俺が思わず肩を揉む手を止めて尋ねると、ジジイは片手で古文書のページをめくりながら説明した。

「汽車の中ではじめの方を軽く読んでみたが、どうやらこいつはヤエちゃんの家系が吸血鬼と混血^{まざ}った頃に書かれた日記だ」

時代がかつているジジイは新幹線のことを汽車と呼んでいる。とつくの昔に日本中の鉄道が電化されても、まだ蒸気機関車^{きかんしゃ}が石炭でボイラーを焚いて走っていた時代の意識のままなのだ。そんな古臭い老人が、それよりさらに古い時代の話を思いがけず始めたものだから、湯呑みと急須の盆を畳に置いて、長卓の対面から古文書に興味深げな眼差しを向けていた天野も目を見開いた。

「儂はこれからこいつを解説しようと思う」

「確かに、どんな状況で混ざったのかは知っておいた方がいいだろうな」

俺はうなずいた。

その時の様子が古い日記に書かれているとは限らないが、せつかく手に入れた手がかりだ。活用しない手はないだろう。

「あ、あのね、おじいちゃん。わたし、わたし——」

天野が顔を上げ、言葉を詰まらせた。

ジジイは好々爺そのものの表情で優しく微笑んでみせる。

「なあに、ヤエちゃんが心配するこたねえ。こいつは儂と信之介の仕事だ。討伐屋はな、お化けに関することは何でも知っておかなきゃならねえんだ。全員が知っている必要はないが、事業所の誰かは知っているようにしておく必要がある。お役人に、何か訊かれた時に答えられるようにするためだ」

気安げな調子で続ける。

「それに、どうせ大した事情は書かれちゃいねえさ。誰それが誰それに惚れて、熱情抑え切れぬあまりうっかり姦^ヤっちまったとかそんなのだ。日本中、いやさ世界中にありふれた異類婚姻譚^{へんげ}で、それが偶々狐や狸の変化でなく吸血鬼だっただけのことよ。ただ、大したことは書かれてねえってことを、俺たちが自分で確かめておかなきゃならねえわけだ」

「こういうのを読むのにも専門知識が必要なんだ」

俺はジジイの後ろから後を引き受けて言った。

「それに、どうやら妙な妖気を纏っているから、慣れない奴が開くと手がかぶれるかもしれない。解読が終わったらどんな内容だったか知らせるから、それまで待っていてくれないか？」

天野は押し黙り、不安そうな瞳で俺とジジイを交互に見た後、こくりとうなずいた。

「……うん、分かった。よろしくお願いします、おじいちゃん、信ちゃん」

実際は、俺はまだ吸血鬼探しの仕事が残っている以上、知識面から言ってもジジイが主に解読を進めることになるだろうが、合間に手伝えることはあるだろう。

ありふれた内容であっても、過去を知ることとは今の自分を受け入れるための大事な一歩だ。これが天野にとって、これからの自分の人生を肯定的に捉える、そのきっかけの一つとなることを願う。

夕食の主菜はぶり大根だった。天野の心づくしだ。さっそく古文書の解読を始めた俺とジジイを労わる気持ちもあったのかもしれない。その出来栄えは、いつもよりさらにうまく感じた。読みにくい、かすれたくずし字を延々と睨み続けた眼精疲労も吹き飛ばような俺の大好きな甘辛さのそれを、白米に大麦を三割混ぜたほかほかの麦飯と一緒にかき込み、貝出汁のしじみ汁をする。

皿洗いを手伝った後、ジジイの書齋に戻ってくると、老眼鏡をかけたジジイがにこにここと迎えてくれて、作業を再開する前に軽く食後休みをすることになった。

戸棚に常備してある甘味と、緑茶を出してきたのをありがたく受け取り、一緒に楽しみながら雑談を交わす。

「ヤエちゃんが来てからよ、家の中が明るくなったと思わねえか？」

「そうか？」

湯呑みを傾けながら眉を上げた。

俺はもちろん浮かれ切っていたわけだが、俺以外から見てもそうなのかと思って尋ねる。

やたらと広いばかりで閑散とした家だから、そりゃ住人が二人から三人に増えればにぎやかさは1.5倍だろうが。

それが天野みたいな絶世の美少女なら華やかさも一入だ。

ジジイはうなずいた。

「ああ。飯の後、台所から誰かの笑い声が聞こえるなんて何年ぶりだか分からねえ」

それは確かに、と納得する。俺とジジイの二人で暮らしてた時は、皿洗いはどっちか一人だった。大抵俺で、ジジイが不器用にやってくれてる時もジジイ一人だ。それで一人で笑ってたらちよっとまじいだろう。

誰かが二人で台所に立つなんてのは久しくなかったことなのだ。俺は皿を洗いながら他愛も

ない話を振ったし、天野は洗い終わった皿を受け取ってせつせと水気を拭き取りながら、俺の話が心の琴線に触れるたびにころころと笑ってくれた。

その明るく仲睦まじげな会話の様子を、ジジイは感慨深げに回想してみせる。もちろんこちらは無表情で流したが、あらためて第三者視点で語られると丸っきり新婚夫婦みたいで、危うく聞いているこっちの耳が熱くなるところだった。

かと思うと、ふと遠くを見るような目になって続ける。

「この家もずいぶんと寂しくなった。昔は血が繋がってない奴も含めて大勢いた。それが一人死に、二人死に……とうとう儂だけが生き残っちゃった」

それはたぶん、この地をまだ蒸気機関が走っていたか、それすら走っていないかったような時代のことなのだろう。

どことなく、その言葉に、今はなくなった者たちに会いに行きたがっているような響きを感じたので、俺は口の端を持ち上げてやり返してみせる。

「まだ死に場所を探すなよ？　俺と天野がよろしくやってる間、誰かにひ孫を見てもらわないと困るからな」

ジジイは目玉をひん剥きながらこっちに向き直り、それから大笑いした。

「わははっ！　この孫はジジイを遠慮なくこき使いやがる！」

そして愉快げにパン！としわの多い手のひらで作務衣の膝を叩いた。

「よおし分かった、任されてやろうじゃねえか！　赤ん坊の世話は儂が全部見てやる。だからお前えらは十人でも二十人でも好きにこさえろ！」

「そんな犬や猫じゃあるまいしよ」

「なあに、お前もヤエちゃんもまだ若い。その気になりゃポンポン産めるさ」

「……まあ、天野がその気になればな」

それで一番苦労するのは天野なので、さすがにこればかりは俺の一存で決めることはできない。いやまあ、そりゃ彼女との子どもなら何十人でも欲しいぐらいだが。きっと巢にみっちり詰まった小鳥の雛のように可愛いだろう。

しかしちよっとトイレ、と断って書斎を立ち、廊下を曲がったところで、顔を真っ赤にしたご本人と鉢合わせした。

昼、大量に汚した（何で、とはあえて言うまい）洗濯物を取ってきてくれていたらしい。Tシャツやら下着やらシーツやらの折り重なった籠を抱えて、迫力のおっぱいが例のごとくその上に、どん！と乗っかって巨大な存在感を主張している。

……いかん、さっきのを聞かれた。セクハラだったか。

「あ、あのね、信ちゃん」

怒られるかと思っただけだったが、天野はしばらくもじもじした後、意を決したように顔を上げ、恥ずかしげに頬を染めた表情でこちらをじっと上目遣いに見上げてきたかと思うと、ぼそ

っ、と囁くような小声で告げた。

「——わたしはもう、すっかりその気だから」

一瞬、時が止まった。

昨日のタックルよりかはるかに強烈な一撃を食らって頭の中が真っ白になり、思考力は0に等しいところへ急落する。

……マジで？

やったぜ。これでもう俺の人生、成功したも同然じゃん。

「そ、それだけ！ もうっつ、早くお風呂入っちゃってよね！ ぶんぶんっ」

天野はそう言ってこちらに背を向け、ショートパンツに包まれた丸っこくて気持ち大きめな安産型のお尻をぷりぷりと左右に揺らしながら去っていった。

その後はジジイとは会話にならなかった。

早々に雑談を切り上げた俺は、天野に要求された通り風呂に入り、上がって、古文書の解読作業に戻るまでの間、呆然と彼女の後ろ姿——特にお尻の部分——の光景をひたすら頭の中で反芻し続けていた。

刑事さんからメールが届いたのはその日の夜のことだ。

俺は規定通りに自室に誰もいないことを確かめた後——ジジイは別にいいんだが、天野はまだ警察の資料を見ることがのできる資格登録がされていない——戸に鍵をかけ、メールに記載されていたパスワードを入力して県警のクラウドストレージからファイルをダウンロードし、中身を検める。

頼んでいた美名瀬の交友関係と、現時点での事件の調査資料だった。

後者はいくつか重要なところに黒塗りがある。『この中身は署で見ろ』とPDFにコメントが添付されていた。どうやら外には出せない情報らしい。

そっちは後で見ることにして、交友関係の方に目を通していく。

その途中で、俺はスクロールの手を止めた。

一覧に記載された名前の一つに視線が吸い寄せられる。

内坂俊三。

それは教会が吸血鬼ではないかと疑っている連中、その一人の名前だった。

第三章 「過去をよびさます！」

翌朝早く、天野はまだ眠っていたので、そのふわふわな頬にキスをして元気と嬉しさをもらってから、俺はWRに跨って家を出て、一度警察署に寄った後、山に入った。

俺に仕留められる夜まで美名瀬が潜伏していた場所が分かったからだだった。やはり吸血衝動が耐えがたくなった段階で人里を離れていたらしい。

十分ほど砂利道を走った後、左右の木々が途切れ、警察の立ち入り禁止の黄色いテープが見えてきた。

そこは背の低い草地に覆われた、森の中のちょっとした広場のようになっている場所で、右手には高さ五メートルの崖がずっと続き、残りの三辺を青々とした木々の森に囲まれている。入り口はそのうちの手前側の一边に開いていた。

まだ捜査は続いているらしく、何人かの警官が地面を指して何かを話し合っていたり、クリップボードに挟んだ様式にボールペンで確認事項を書き込んだりしている。

WRを停めていると、顔見知りの交通機動隊員がこちらに気づいて振り向き、おどけるように敬礼してくれた。俺も口の端を持ち上げながら眉の高さに手を挙げて同じ敬礼を返した後、ヘルメットを脱いで入り口に近づく。

刑事さんからは既に話を通っていた。駆け寄ってきた警官に促され、テープを潜る。

入り口からは見えなかったが、奥行きのある長方形の広場を先へと進むにつれて、右手の崖には地面から中程まで続く大量の横穴が空いていることが分かってきた。ここまで来る間も、通りの景色をどこかで見た覚えがあると思っていたら、県のHPでも紹介されている古墳跡だった。

古墳と言っても、有名な前方後円墳のような特徴的な台地状の盛り土があるわけではない。ただ天然の急な斜面に何百もの横穴が空いているというだけの地味な古代の集団墓地跡だが、造成された時期そのものはかなり古く、弥生時代の中頃らしい。最近できた県のHPからは、将来は観光地の一つとして盛り立てていきたいという担当者の意気込みが伝わってきた。

その横穴の一つに、美名瀬は隠れていた。

「ここです」

案内の警官がそこに近づき、入り口を手で示す。

大人の肩の高さに口を開いている一メートル四方ぐらいの大きさの四角い横穴で、足元には後世に築かれたと思われる乗り込むのに良さそうな短い階段が付いている。

中を覗き込むと、三メートルぐらい奥の突き当たりの暗がりの中に、美名瀬が使っていた寝袋が置かれていた場所を示すマーカーと番号札が残っていた。本来そこに横たわっていたはずの古代人の遺体は、とっくに風化したか盗掘に遭ったかで跡形もない。

警官にお礼を言っ別れ、一人墓穴の側に立ち、辺りを見渡す。

森に囲まれた、静かな場所だった。捜査中の警官たちも既に入り口近くに移動しているため、この辺りには人影がない。崖の斜面に生えたシダ植物やツルの葉が、夏の穏やかな風で吹かれ

て音もなく揺れていた。

太陽が高くなってきたても気温はさほど上がっておらず、木漏れ日が気持ち良かった。周囲の木立によって日差しが程良く遮られている。地面には、残っていた美名瀬の足跡を示す白い囲いが点々と置かれていたが、そこにさえ目をつぶれば、ただ佇んでいるだけで心が穏やかになっていくような空間と言えた。

なるほど、いかにも日差しや人間の追跡に怯えながらも、人間だった頃の習慣や価値観を捨て切れない新米吸血鬼が好みそうな場所だった。古代の墓穴の奥に入り込み、入り口に荷物を詰めれば、日光や野犬からも安全でいられただろう。

ここで、あの俺に殺された吸血鬼が、人生最後の——そのずっと前に人間ではなくなっていたが——数日間を過ごした。

しばらく美名瀬の気持ちになって、その行動を想像しながら歩き回ってみる。何か、警察は見落としているが、討伐屋である俺には分かる、捜査に役立つ物証でも残されていないかと思っただが——

不思議な感覚がした。

ただ気持ちが悪く着くというだけでなく、この場所を既に見知っているような気がした。最近県のHPで見たから、というわけでもなく、まるでずっと昔から何度もここに来ていたような、切なくなる程の懐かしさすらこみ上げてくる。

俺の弥生時代の遠い祖先がここに埋葬されていて、その記憶が蘇っているのだろうか？ などとおかしなことを考えて、首を捻った。

その瞬間だった。

幼い子どもの幻影が、楽しげな甲高い声を上げながら側を駆け抜けていった。

その後頭部でぴこぴこと揺れていた愛らしいポニテと、続けて現れて彼女を追いかけていたもう一人の子ども——少年——の顔にはっきりとした見覚えがあって、それで思い出した。

ここは俺と天野がよく二人で遊んでいたあの広場だ。

呆気に取られながら周囲を見回す。

森と広場の境に埋まった特徴的な形の大きな岩。不思議な曲がり方をした樹齢何百年という太い大樹の幹。苔に覆われた崖の、どこか人間の鼻のように見える、変わった輪郭の突起部——

すぐに分からなかったのも無理はなかった。あの時の俺は今の半分の背丈しかなくて、世界の見え方は今とはまったく違っていた。

崖をまだらに覆う草葉の広がり方も、周囲の森の木々の植生も、何もかも同じだったが、記憶の中のそれと目の前の光景がすぐには繋がってくれなかった。

俺はこの場所で、まだ幼い天野と追いかけてくをししたり、ボール遊びに興じたり、斜面の横穴を使ってかくれんぼを楽しんだりしていたのだ。

今にして思えば罰当たりな話だが、何しろ当時は墓場だとは知らなかったし、発掘されずに残っている土器棺や石棺を棺だと見抜く知識も、自分で開いて中身を見てみるような技術や発想もなく、ただの変な形の岩か腰掛けだと思っていたから、そうだと気づく余地もなかった。ここに漂う太古の霊たちも、仮にいたとしても、子どものすることだからと安眠を妨げることを大目に見てくれていたのだろう。

ひょっとしたら守ってくれてさえいたかもしれない。

長い死後の時間の暇潰しにと見守っていてくれたのかもしれない。

子どもたちが遊びに来て、家に帰るまでの間、危険な目に遭うことがないように、と――
当時は天野もまだ新居に引っ越す前で、彼女の家はこの山の裏手にあった。俺も、親父は討伐屋ではなかったので、親父が生きている間はジジイのところではなく、天野の家の隣家に住んでいたから、この近所の子どもだった。

隣と言っても広い畑一枚挟んだ田舎基準での隣だが、とにかく一番近い人家が天野の家だったのだ。

二人の家からここまで来るには先の砂利道ではなく、反対側の半ば獣道のような朽ちた狭い森のトンネルを通り抜けなくてはならなかった。だがそこを通れば正規のルートを辿るよりもずっと近道で来れた。頭上から覆いかぶさって生い茂る木々の枝は、大人は立ったまま潜り抜けられる高さではなかったから、そこは子どもたちだけの秘密の場所だった。

ああ、そうだ。世の中の大抵の幼なじみは自分たちだけの秘密の場所を持つもので、俺たちにとってはここがそうだったのだ。毎日、陽が傾くまで、ずっとここで古代の霊たちに見守られながら、二人で一緒に遊んでいた。

いったい、どうして忘れてしまったのだろうか。

もちろん理由は分かっている。俺が天野から離れたからだ。

二人で遊ぶことがなくなり、二人だけの秘密も意味を失った。ここへ来ることはなくなり、いつしか背も伸びて、トンネルを潜ることもできなくなった。秘密の場所は俺に対しても秘密となり、心の奥の封印の扉に閉ざされてしまった。

そうでなければ、たとえ互いの住居が変わり、ここから足が遠ざかったとしても、忘れてしまふことはなかったかもしれない。体が大きくなっても、年に何度かは二人の思い出を巡るために、一緒に砂利道の方を通って訪れていたかもしれない。

だが今やすべてを思い出していた。欠けていた自分の半身を見つけたような気分だった。

天野ともふたたび、当時と同じように、ところによつてはそれ以上に親密になれている。そのタイミングでこの忘れていた原風景に辿り着いたことは偶然だろうか。

きっとそうではないのだろう。彼女とふたたび正面から向かい合ったことが、俺をこの場所へと引き寄せたのだ。

我知らず笑いが吐息となってこぼれる。

ここまで帰ってきた。そんな思いとともに、泣き出しそうな程の懐かしさを心の中で抱きしめて、俺はもう一度周囲を見渡した。

天野はここを覚えていただろうか？　きっと覚えているだろう。引越してからも、俺と疎遠になってしまっただけから、つれない幼なじみとの過去を探して、一人でここを訪ねてみたこともあったかもしれない。

いつか、二人でまたここに来よう。

そして謝ろう。ずっとさみしい思いをさせてしまったことを。

幼い日々の思い出たちに囲まれながら、そう決めた。

そのいつかは、思っていたよりもずっと早く訪れた。

この日は、もう一つ嬉しいことがあった。

天野が吸血鬼化後はじめて高校に復帰できたのだ。

といってもリモートだし、まだ毎日というわけにもいかないのだが、復帰して、かつて自分が人間だった時の生活の一端に触れても、吸血衝動を抑えている彼女の精神状態に悪影響がないことは俺が主治医として太鼓判を押した。

天野は今とても前向きになっている。吸血鬼化という現実を受け入れ、その現実の上にこの世界における自分の新しい立ち位置を築こうとしている。及ばずながら俺もそれを手助けできていると思う。

ならばここで、いずれふたたび訪れる日常を経験しておくことは、彼女の成長をさらに促す良いきっかけになるだろう。

そういうわけで、役所に届け出を出し、学校の教師に連絡を取って、天野が友だちと会話する用の大画面タブレットを抱えて、俺は久しぶりに登校することになったのだ。

「いえーい、ヴァンパイア八重香だよー！」

教室の真ん中の自分の席に置かれた画面の中で、天野が両手でピースをして意気揚々と名乗りを上げた。歯を隠す様子もなく笑みを作る口、そこから可愛い歯が覗いている。

「ヤエちゃん、吸血鬼になっちゃったの!？」

「うそー！」

事情を知らされていなかったクラスメートたちがタブレットを囲んで口々に驚きの声を上げる。

担任の教師には、天野がうちに転がり込んできた翌日には彼女と俺がしばらく登校できなくなる事情を説明していたが、ほかの生徒にはしばらく伏せておくよう頼んでいた。

天野の気持ちや周りの状況が落ち着かないうちから騒ぎにしたくないというのが理由だったが、そのため彼女が吸血鬼化したことは今までは知る人ぞ知る事実というやつだったのだ。

今日はある意味、吸血鬼となった天野の、世間に対する最初のお披露目と言えるだろう。

例の農場の息子には、俺が家畜の血を求めて訪ねた時に例外的に教えていたが、その時にも周りに口外しないよう、親子ともども要請してある。この様子ではちゃんと秘密を守ってくれたようだ。クラス中が画面の中の天野を囲んで目を丸くする中で、そいつは一步離れたところに立ち、ズボンのポケットに手をつ込みながら、心の荷が少し下りたというような穏やかな表情でクラスメートの輪を眺めていた。

「はいはい、感動の再会で話したいこともたくさんあるだろうけど、今はそのへんでね。もう授業始めるわよ」

今年二十四になる黒縁メガネの担任教師がパシパシと手を叩いて呼びかけると、みんな「はい」と素直に応じてそれぞれの席に戻っていく。

一限目は彼女の担当する数学の授業だった。

俺は久々に袖を通した学生服に若干落ち着かない思いをしながら（大変良くない傾向だ）窓際の自分の席からそれを聞いていたが、天野はこの時とても張り切っていた。

「ではこの微分方程式が解ける人」

「はいはいはい！」

担任がチョークで板書した問題を示しながら尋ねると、家だというのにわざわざ転がり込んできた日以来のセーラー服に着替えている天野が、画面から身を乗り出すように手を上げる。

「はい、天野さん」

担任が当てた。

天野が元気いっぱい答える。

「 $y=x+2$ 」

「うーん、全然違います。不正解」

担任は渋い顔をしながら腰に手を当てた。

「ちょっとお、天野さん？ いつになくやる気があるから、てっきり休んでる間にものすごく勉強したのかと思ったのに全然じゃないの」

教室中が笑い声に包まれた。

天野は「てー☆」と大好きな人間にお腹をくすぐられた子犬のような笑顔で後ろ頭に手を当てた。

いや、勉強はしていたんだ、勉強は。本当にものすごく頑張ってた。

ただそれは討伐屋関係の法規制や怪異の性質に関する勉強で、学校の授業とは何の関係もなかったんだ……。

そんな風に弁護してやるわけにもいかず、俺は一人後ろの方の席で顔に手を当てる。

だが天野がさっそくクラスに馴染んでいるようで良かった。

元々クラスメートもいい奴ばかりなので、天野が吸血鬼化したからといってそれで陰口を叩

いたり、彼女を嫌いになったりもしない。心底同情するか、自分たちが暗い顔をしていては良くないとそれを押し隠して、一生懸命明るく振舞って話しかけてくれるかのどちらかだ。

休み時間のたびに、天野の席にはほかのクラスからの訪問客も含め、仲の良かった生徒（たくさんいる）の人だかりができていた。

担任に限らず、ほかの教師たちも普通だった。天野を特別扱いせず、以前からそこに座っていた時と同じように接してくれた。違いはと言えば、天野が板書をする時は黒板ではなく、家のペンタブレットと繋がっている横のモニターに書き込む必要があるということだけだ。

吸血鬼殺すべし、が信条のニナはこの光景をどう思うのだろう……とちょっと気になったが、何度か二つ左隣の席の様子を横目に伺ってみても、特に興味なさそうな様子で授業を聞いていた。本人も言った通り、郷に入っては郷に従えの精神で通してくれるつもりらしい。ありがたいことだ。

昼休み、俺は前から考えていた通りお礼を言うため、彼女に声をかけて、一緒に教室を出た。

「天野さん、元氣みたいですな」

人気のない階段の踊り場に来ると、パンやパック牛乳の入ったビニール袋を手に壁際に腰を下ろしたニナが、短い金髪を耳元で払いながら言った。

当の天野はほかのクラスからもわらわらと集結した大勢の友だちと一緒にリモートで食事を取っている。そのために今朝はわざわざ必要もないのに張り切って朝から弁当を作っていたのだ。今頃は、画面越しにおかずの食べさせ合いごっこをしていることだろう。

弁当は俺のも作ってくれた。もちろん早弁した。昼休みが来る前に弁当箱は空っぽになってしまったので、今持っているのは購買で追加購入した焼きそばパンだ。朝から働いていると腹が減って仕方ないので仕方がない。

「無事嫌疑も晴れたからな。ニナのおかげだ。ありがとう」

礼を言うと、ニナはこちらを横目に振り向いて、にこりと控えめに微笑む。

「友人の力になれるのは、わたしとしても嬉しいです。また何かあれば言ってください。……わたしにできる範囲であれば、協力しますので」

そしてはむはむとハムスターのように両手でパンを掴んでかじり始める。一口が小さい。

天野は男子の中でも体格のいい俺と比べればだいぶ小柄で華奢だというだけで、うちの学年の女子の中ではまあまあ普通ぐらいだ（胸は普通をはるかに超えた特盛っぷりだが）。だがニナはそれより拳一つ分ほど背が低く、運動能力も普通の人間の範疇なので、食も相応に細いようだった。

「悪いな。お互い、立場もあるのに」

隣に並んでしゃがみ込み、彼女の食べる早さに合わせてゆっくりと焼きそばパンを噛み、野菜ジュースをすすする。

ニナもアンパンをもぐもぐ咀嚼しながら首を振った。

飲み込んで、口を開く。

「大したことないです。吸血鬼狩りなんて、もうわたしたちの組織も半分惰性で続けているようなものですから」

「そうなのか？」

俺は意外に思っ眉を上げた。

『教会』は確かに日本でこそ吸血鬼の情報を集めて流すことしかしていないが、少なくともそこに関しては以前と変わらない熱心さと狂信性を維持しているものと思っていた。

「ええ。もう植民地主義で通せる時代でもありませんし、現地の官憲を無視して特定した吸血鬼を暗殺したり、拉致して回るなんてこともできません。わたしもほかの工作員たちも、今では上が義務的に殺せるかと訪ねてきても、『無理です』、『不可能です』、『現地社会との良好な関係を維持する必要上、損失を正当化できません』と答えるのがお仕事みたいなものです」

何しろ秘密の組織なので、この手の内部事情はなかなか外まで伝わってこない。ニナの話はとても興味深かった。

野菜ジュースのストローを咥えながら感心して聞いていると、ふたたびこちらを横目に振り向き、にこりと微笑む。

「ですので、安心してください。たとえ吸血鬼をとにかく殺したくて仕方のない異常者がこの地に現れたとしても、わたしや組織の人間が彼に天野さんの情報を提供したり、犯罪行為を唆したりすることはありませんから」

「……なんか、借りが増えていくような気がするな」

ストローから口を離して苦笑気味に言う。でも、友だちとのこういうやり取りは正直嫌いななかった。

向こうもそう思ってくれているらしい。ニナは穏やかな表情でゆっくりと首を振る。

「わたしたちの都合でそうしているだけですから、どうぞお構いなく。ああ、でも——」

途中で言い直して、こちらの顔を伺うように深い青色の瞳を向けてきた。

「もしそんなことでも、阿曇くんが恩義に感じてくれるなら……一つ、お願いしたいことが」

何だろう？ 俺は首を傾げて、視線で先を促す。

ニナは上目遣いにこちらを見上げながら、珍しくちょっと不安そうな様子で話し始めた。

午後の授業もすべて終わり、放課後になる。

以前ニナに会うために来た時と違い、部活動は全面的に中止されているようだった。小学校と違って集団下校こそ行われていないものの、生徒はなるべく複数人で行動し、日が傾く前に家に着くように言われて次々と校舎を出ていく。どうしても遅くなる奴については保護者や教師が車で送迎しているらしい。

俺は当然部活なんてやってないし（そんな時間はなかった）、吸血鬼になる前は体操部所属だった天野も、自分がこんな状態では部活どころではないのでどっちみちここで学校は終わりのだが、ほかの奴まで一斉に帰っていくのを見ると、今が非常時で、この場所にもその影響が及んでいるのだとあらためて実感する。

もつとも明るいうちは吸血鬼は出ない。そのことを分かっているから、下校中のみんなの表情もまた明るいものだった。かつたるい練習や委員の仕事がなくなってラッキー、と気楽に思っている奴も多そうだ。

俺と天野は、天野と特に仲の良かったクラスメートや、ほかのクラスの友だち連中二十人ばかりと連れ立って下校した。

本当はWRでとつとと帰るつもりだったのだが、誰かがもつと天野とおしゃべりがしたいし、せっくなのだから下校気分も味わいたいなどと言い出し、今日は時間の余裕も多少はあったので別にいいかと思っで一一緒に帰る奴を募集すると、たちまち人数が膨れ上がってしまった。さすが校内随一の人気者の天野と言ったところだ。

これでもだいぶ希望者を絞ったのだ。いくら単独行動は避けろと言われてるとは言え、あまり大人気で道を塞いでいると周りに迷惑だからと納得してもらった。

天野が学校に顔を出す機会はこれからはいくらでもある。当面は様子を見たり、討伐屋の手伝いをしてもらっていたりで欠席しがちになるだろうが、状況が落ち着けば、リモートなのは変わらなくとも、毎日ちゃんと授業に出てもらうつもりだった。

俺は討伐屋の跡取り息子（孫）だし、人手不足の業界では貴重な戦闘もできる人材なので、これまでもどうしても学校を休みがちになってしまっていたが、天野までそれに付き合う必要はない。

というわけで、タブレットの画面は点けっぱなし、家と繋がっている回線も開きっぱなしにして、女子を中心とした選りすぐりの仲良したち（および彼女たちに託された、残念ながら抽選にあぶれてしまった者たちの念のようなもの）とみんなでわいわい言いながら、周りが田んぼだらけの下校路を道が分かれるまで歩いて帰ることになったのだった。

天野と話したい奴にタブレットの画面やフロントカメラを向けるのは俺の役目だ。彼女の社会復帰に順調な滑り出しを飾るためなら、これぐらいの手間は何でもない。喜んでやった。

下校路を見張っている教師に見つかったら文句を言われるかとも一瞬思ったが、別に俺が画面を覗き込んでいるわけではないのだから、歩きタブレットには当たらないだろう。一応、大人の影が見えた時は肩越しに後ろの女子たちにタブレットを向けて、自分はちゃんと前を見えますよ、とアピールすることを心がけるようにしながら歩いた。

WRの方は両手が塞がっている俺の代わりに、一緒に来た少数の男子の一人が押してくれた。気のいい奴らだ、本当に。

俺に掲げられている天野の前には入れ替わり立ち替わり女子が現れては話しかけ、順番を待

っている面子は後ろの方でグループを作って自分たちで仲良しそうにおしゃべりをしている。その中にはニナの姿もあった。

昼休みに聞いた彼女の「お願い」というのが、もし今のようなことがあれば、自分を彼女たちに紹介して、一緒に下校させてほしいというものだったからだ。

殺る気はまったくないが、仕事しているふりをするために、天野の登下校の様子なんかを観察して上に報告できるととても助かるらしい。

あまり社交的な方ではない彼女だが、教室で何となしに（あるいはスパイらしく興味のないふりをしながら）天野たちの会話を聞いていて、こんな風に連れ立って帰ることもあるかもしれないと予想していたようだ。

もっともその時は必ずしも、今日にでもと思っていたわけではなく、またせいぜい五、六人のグループを想定していたようで、思いがけず祭りの山車の行列のような大人数になってしまったことだ。戸惑っていたが、結局ついてきた。

教室では一人で外の景色を見ていることが多い彼女がこういうことをするのはかなり珍しい事態なのだが、天野の周りにいるのはみんな同じぐらい明るくて人当たりのいい子ばかりなので、すぐに受け入れて打ち解けてくれたようだった。笑い声を上げながらくっついてくる女子連中に、戸惑った様子ながらも、俺でも見たことないぐらい素直な表情を浮かべている。

タブレットはほかの女子が俺から奪って自分のグループに持っていったこともあった。そんな時は、天野は俺と同居して普段の生活はどうしているのかとか、風呂はどうしてるのかとか、学校では訊きにくかった突っ込んだ話を訊かれていた。

「えっ、ヤエちゃん、阿曇と婚約しちゃったの!？」

「はわわ。せ、正式に、というわけじゃないんだけど、なんか、そんな感じのことを、一昨日にその……」

天野が顔を真っ赤にしながらごによごに言い淀む声が聴力の高い俺の耳に後ろから聞こえてきた。

プライベートルな事情もすっかり暴かれてしまったみたいだな。まあ仕方がない。天野が言っていると思うならいいのだろう。

「あの、もしかして、もしかしてなんだけど……しちゃった？」

「はわわっ」

際どすぎる問いかけに天野がきゃーと悲鳴を上げて画面から逃げ出す音も聞こえた。

「あ、こら」

「逃げるな」

「戻ってきなさい」

タブレットを覗き込んでいる女子たちがきょいきょいと声を上げる。

そして言霊に引きずられるようにおずおずとまた画面に顔を出した天野を質面攻めにしてい

った。

「あんた初めてでしょ？ 全部挿入^{はい}った？ 痛くなかった？」

「ちゃんと避妊したわよね？」

「生理来てる？」

「えへへ、大丈夫だよ」

天野はなおも頬を紅潮させ、それでも少し嬉しそうに答えた。

「ちよつとお、いつまで猥談してるの？ 次はわたしたちの番なんだから早く寄越しなさい」

「きゃー（*√△へ*）」

ぐらりと傾いたカメラに天野が可愛らしい悲鳴を上げて別の女子に運ばれていく。

女だけだと性についてあけすけな会話が飛び交うというのはほんとだな。

すっかりいない扱いになっていているらしい俺と少数の男子たちは、一固まりになってお行儀良く何も聞こえないふりをしながら、交代でWRを押して、当たり障りのない会話を続けたのだった。

「阿曇。すげえな、このWR。シリンドーもボアアップしてるし、タンク容量も拡大してるし、サスもスプロケットも交換して改造しまくってるじゃん」

「いいだろ？ こいつはバケモノの血も何体も吸ってるんだぜ……？」

「ひゅー（・ω・）、世界一イカれたWRだ」

暴走族という言葉はもう古生代の化石のようになってしまった時代だが、やはり男の子という生き物はバイクに興味津々らしく話が弾んだ。

まあ俺は乗れるものなら四輪の方がいいんだがな。雨風を遮れるし、荷物もたくさん載せられるし。クルマで入り込めない場所では、今後もバイクに乗り続けると思うが。

「いいなあ、俺も単車乗ろうかな」

「うちの高校ってバイク通学アリなのがいいよな」

そんな感じだ。

ちよつと男子の居心地が悪くなってしまうこともあったが、みんな明るく笑っていた。非日常の影を感じさせない明るさだった。子どもはこんな感じでいいんだ。

天野も、久しぶりに本来の明るさを取り戻せている気がした。笑ったり、恥ずかしがったり、友だちとふざけ合ったりしていた。まるで、以前の日常がそのまま戻ってきたかのようなだった。

足元が舗装路に変わった辺りの交差点で、みんなとは別れた。

ニナとは一瞬視線を交わした後、彼女が控えめに微笑みながら手を振って、俺も口の端を持ち上げて振り返す。

天野に「また後で」と言ってタブレットを鞆に収め、学生服にヘルメット・プロテクター姿で愛車に跨ると、家まではすぐだ。

今日は日差しが照りつけているので、天野は昨日みたいに玄関には出てこなかった。玄関に入って、しっかりと戸を閉めてから靴を脱ぐ。

長い廊下を抜け、さらにその突き当たりの戸も閉め、また別の廊下を通して、奥の一室に入ったところで、制服姿の天野が飛びついてきた。

部屋の明かりはつけていた。

だが日差しを完全に遮った屋内は、外の明るさに慣れた目にはどこか寒々しく薄ら暗い。空疎な人工の光の中で、儚いほどの少女の肢体をしっかりと抱き止める。

声はなかった。嗚咽も。

天野の華奢な体は、俺の腕の中で、ただ小鳥のように小さく震えていた。

「今日は画[面]越しだったけどさ」

彼女のポニテの後ろ頭をぼんぼんと撫でてやりながら静かに言った。

「いろいろな終わったら、みんなを家に呼ぼう」

「うん……うん……」

溢れ出す感情を言葉にし切れないように、なくしたものの大きさを捉え切れずにいるかのよう、か細い声で天野は何度もうなずいていた。

「昔は吸血鬼退治と言っても苦勞してな」

早めの夕飯の後、俺が夜に備えて妖刀を準備していると、いつもの作務衣姿でどっかりとあらを搔いて腕組みをしたジジイがそれを見ながら語り始めた。

「特に連中が渡ってきたばかりの頃は何が効くのかも良く分かってなかった。足軽を二百人ばかり集めて鎚でバツコンバツコン丸二日殴り続けても死なねえもんだから、えらい難儀したそうだ」

ここで言う鎚とは、要は手斧の柄をとんでもなく長くしたような武器のことだ。

普通の槍と同じまっすぐ突く穂先のほかに、下向きに生やした鋭い突起部分があって、長さ五、六メートルの柄を振り回してそこを叩きつけると、鉄兜にだって簡単に穴が空く。脳天にぶち込めば兜、頭蓋骨と一撃で貫通して、中身がぐちゃぐちゃになるというわけだ。

もちろん頭以外の箇所にあたってもとても痛い。鎧を着ていようが肉は弾けるし、骨も折れる。

「二百人がかりで囲んでボコったのかよ。酷っでえな、おい。ドン引きするわ」

思わず柄糸を巻く手を止めて突っ込みを入れると、ジジイは重々しく応える。

「孫よ、ご先祖のことをそんなに悪く言うもんじゃねえぞ」

やったの俺の先祖かい。

ということは目の前のジジイの先祖でもあるので、残虐で暴力的なのは納得だが、それが俺みたいな温和かつ穏やかな心を持った人間とも血が繋がっているというのは今一つ納得できない。

い。

「そんな大勢で殴り続けたらミンチになっちまうだろ」

「ミンチになっても生き続けてるから困ったんだよ」

ジジイは、ふー、と息を吐いて続ける。

「何しろ連中は生きている細胞がちょっとでも残っているとそこから再生しちまう。首を落としても死なない、腹を裂いても死なない。いったいどうしたら殺せるんだと酢に漬けてみたり糠に漬けてみたり——結局、再生を止める方法が分かるまでは、餓死するまで頑丈な檻に閉じ込めておくのが一番いいとなったな」

「糠漬け、おいしいよう」

そんな連中の子孫である天野が、ぱりぱりとお茶請けをかじりながら呑気に言った。

両手で温かい湯気の立つ湯呑みを持って傾け、一口すすって、満足げな息を吐く。

吸血鬼である天野の隣で吸血鬼を殺してきた歴史を聞かせるのもどうかと思うのだが、当人がこれから吸血鬼退治に参加するのだからやむを得ない。これも職業教育だ。

余談だが糠漬けも吸血衝動を抑えるのに効く。なぜかはまったく分からんが効いてしまうのだ。米には昔から霊力があると言われていたから、それがなんかうまく作用してるのかもな。

玄米飯を天野がうまそうに食っていたのも——まあ彼女はだいたいのものをうまそうに食うが——玄米ってのは要は糠がついたままの米のことだから、それが血の代わりになると本能的に理解したからかもしれない。

吸血鬼を殺す方法を探して、とりあえず糠に漬けてみた先祖の試行錯誤はある意味正しかったと言える。

酢は当時は高級品だったから飯にうまく行っても常用は難しかっただろうな。塩や酒は試さなかったのが気になるところだ。

蒸気船もなかった時代にヨーロッパからはるばる日本までやってきて漬け物扱いされた吸血鬼たちには思わず同情してしまうが、なんかよく分からなければとりあえず手当たり次第に何でも試してみるのが人間という生き物なのだ。

一応の方向性としては、糠や酢という解毒や殺菌作用のある物質を試していることから、吸血鬼のそれを毒か感染性の病気だと考えていたことも分かる。噛まれた奴もまるで伝染したように、吸血鬼になることからそう思ったのだろう。まあ、当たらずとも遠からずといったところだ。

結果的にそれはうまく行かなかったが、試行錯誤の過程で得た知識は無駄にはならなかった。吸血鬼の生態が解明されるにつれて、矢弾に刻んで回復を阻害する効果のある真言が新たに開発され、妖刀の類も続々と生産されていった。

後から宣教師たちが追ってきた頃には、既に自分たちなりの対抗策を一通り編み出してしま

っていたらしい。

極東の野蛮人が『奇妙な方法』で吸血鬼を狩り殺していることを記した当時の日記が残っている。おかげで布教が滞っていると何かとか。それまでは、吸血鬼の脅威に晒されている原住民に対抗手段を授けたり、彼らの前で吸血鬼を退治してみせることで、自分たちの神の権威付けに利用したり、支配階層に取り入ったりできていたらしいのだ。

自分たちの暮らしや命を脅かしているヤバい化け物どもを調伏する奇跡を見たらそりゃ感謝するし、信じてみようって思うよな。

うまい手だ。

「だがそのレベルの回復力を発揮できるのは人の血をたっぷり飲んだ吸血鬼だけだ。今のヤエちゃんではせいぜい手足をもう一度生やすぐらいしかできない。それでもただの人間よりは相当マシだが、ケガは基本的に避けた方がいい。戦っていると腹も減る。間食も絶やさないとするんだぜ？」

「はい！」

天野はカブの糠漬けに続いて昨日もらってきたばかりのブラッドソーセージの輪切りももりもりと食べながら、きりっと元気良くなるはずだった。

車庫代わりに使っている納屋の前で、起動したヤマハWRのエンジンがドッドドッ、と頼もしい駆動音を奏でる。

振り向いてうなずくと、防刃スーツを着込んだ天野がバイザー越しに嬉しそうに微笑んで後ろに跨った。

今夜の俺たちの出で立ちは見回りの時と変わらない。背中に白文字で『阿曇内科診療所』と染め抜かれた暗灰色の防刃ベストに、要所を保護するごついカーボン製のプロテクター、透明なシールド付きのヘルメット。天野は徒手空手だが、俺は妖刀をWRのサイドラックに固定している。

掬えも見回りの時とほぼ同じだ。一応、吸血鬼を殺しはしないが、再生がすぐには始まらない程度に攻撃力を強化しておいた。気分がアガったらしく、妖刀はケタケタと小さめの笑い声を立てていた。

今回は自分たちが討伐屋であることをアピールしながら近づくつもりなので、美名瀬を仕留めた時と違って一般人を装う必要はない。

これで刑事さんの資料にあった吸血鬼疑い人——内坂俊三にカマをかけに行く。

作務衣で腕組みをして見送りに立っているジジイに手で合図して、うなずいたのを確認し、俺は単車を発進させた。

まだそれなりに交通量のある国道の街灯の明かりが次々と後ろへ流れていく。

先日の見回りの時とは別の交差点で右折し、市街地の外縁に沿ってWRを走らせる。

カーブの向こうから現れては視界の後ろに飛び去る信号の明かりや標識を全体視の中で眺めやり、後ろに乗せた天野の体温を感じながら、俺は刑事さんの資料に書かれていたことを思い起こす。

内坂俊三は美名瀬のネット仲間だったらしい。付き合いはなんと二十年にも及ぶらしく、お互いが中学生の頃からM M O R P Gを中心に様々なゲームでパーティを組んできた。

そして美名瀬の転勤から遅れること四ヶ月、最初の事件が起こる一月前^{ひとつき}に、内坂もこの街に引っ越してきている。

それが美名瀬の件と何か関係があるのかは分からない。だが、最後に二人がログインしたゲームには、お互いが偶々同じ街に引っ越してきたことに驚き、そしてせっかくだから今度数年ぶりにオフで会おうと興奮気味に約束し合う会話のログが残っていた。

内坂の仕事は株のトレーダーだ。昼間はずっと家に籠りっきりで、夜、食料やたまに日用雑貨の買い出しをする時ぐらいいしか外には出てこない。

買い出しは日没後にスーパーに（前にも言ったが、こんな田舎でも二十二時までやっているところはあるのだ）行くこともあれば、深夜にコンビニで済ますこともある。典型的な——として人間社会にある程度まで溶け込んでいる——吸血鬼の暮らしだ。人と会うことは少なく、それでいて周りに不審がられることも滅多にない。

今回内坂が疑われたのは、奴が買い物の後、頻繁に『寄り道』をしていることが分かったからだ。

スーパーやコンビニを出た後、すぐには家——町外れの单身向けアパート——に戻らず、何時間も外を歩き回っている。徘徊場所は市街地のこともあれば、田園や雑木林の広がる郊外のこともある。

その行動は、内坂がこの町に引っ越してきた直後から続いていた。

ただの散歩かもしれない。引っ越しを機に少しは健康に気を使うことにした。まああり得ないだろう。

だがそれが教会の鼻につき、連中の吸血鬼疑いリストに載ることになった。

——何かを探している。あるいは『追跡』かもしれない。

それが内坂を調査した人間の受けた印象らしい。昼に学校で話した時、ニナが言っていた（彼女を個人的に頼るのは、本当にこれが最後の最後だ）。

人を襲った様子はなかった。内坂が人血を飲んでいるにしろ、それは狩り以外の方法で調達しているということだろう。

最後のでかい交差点を通過したところで、アパートの監視を頼んでおいた知り合いの討伐屋から連絡があった。内坂が近くのコンビニに入ったらしい。

警報が発令されたおかげで警察も討伐業者もわんさかこの街に集まってきた。協力を頼める目がそこら中にあるのはありがたい話だ。今回頼ったのも、見回りに参加中の業者の一つ

だった。

引き続き監視を依頼しつつ、コンビニから見えない場所に単車を停め、妖刀をサイドラックから外す。そして奴が店を出て、人気ひとけの少ない路地に入ったという連絡を受け、俺も天野とそちらに向かった。

田舎特有の、街灯のほとんどない暗い通りを曲がり——いた。

ワイシャツを着て、ジーンズを履いた痩せ気味な男の後ろ姿が見える。

その背中に追いつき、声をかけた。

「すみません、ちょっといいですか？」

内坂が振り返り、そして重装備のこちらの姿を映したその目に、一瞬緊張の色が走った。

緊張はすぐに消えた。自分が緊張したことをこちらに悟らせまいとする反応。犯罪の被疑者が、警察に対して掘りがちな墓穴、それと同じ種類のものだ。

別に緊張していてもいいのだ。警察であれ業者であれ、いかつい格好をしたお兄さんに真夜中に声をかけられて緊張しない一般人はいないのだから。だが疑われたくない奴はつつい自分ですそれを必要以上に抑えすぎてしまう。

俺は何も気づかなかったふりをしつつ、にこやかな笑みを向けた。

「内坂俊三さん？」

相手はうなずいた。

「ちょっと訊きたいことがあるんです。お宅が以前……先々週だったかな？ 燃えるゴミの日に出した、『血まみれのシャツ』について——」

その瞬間、内坂が脱兎のごとく駆け出した。

当たり前だ。

ただの人間にはあり得ない加速。こちらに向かって突っ込んでくる。

距離を取るのではなく、脇をすり抜けて逃げ出そうというらしい。

意表を突いたつもりか——後ろに天野もいるのは見えていたはずだが。ただの女の子と思つて甘く見たか、それともいつそ彼女を襲うそぶりでも見せれば、そちらを守る方に気を取られて、俺の判断が鈍るとでも期待したか。

いずれにせよ危害行為だ。そう見なせる。

そして相手がそうすることも予想していた俺は、互いの体が交差した時にはもう妖刀を振り終えていた。

内坂の右脚が膝の辺りで一瞬で千切れ飛び、三步も進まないうちに天野のはるか手前でもんどり打って倒れ込む。

「——ッ、これぐらいの傷——再生しないだろ!？」

正体を現した吸血鬼が口から長い犬歯を覗かせながら驚愕の叫びを上げた。

妖刀が小馬鹿にしたように哄笑する。

灰色の地面には一滴の血もこぼれてはいない。脚を斬り落とした端からすべて妖刀が吸い取ったのだ。

美名瀬の時のように、相手が干からびて瀕死の状態になってしまう程ではない。だが奴が間違いない期待していただろう新しい脚が生えてくるということもなく、ただ血が止まっただけの赤黒い断面をさらして地面の上でもがいている。

「こいつは村正と言ってな」

俺は脅しの意味も含めて、月明かりの中で妖しく煌めく刀身をひるがえしてみせながら解説した。

「斬りつけた相手の血を吸い取ったり、吸血鬼の再生能力を狂わせたりする効果を持っている。大昔の狂った刀工が、お前ら吸血鬼から抜き取った血を焼き入れの水代わりにして鍛えた業物だ」

最初にこの話を聞いた時は、さすがの俺もちょっとばかりゾットした。

吸血鬼の血を吸う刀なんでものを考えつくのもそうだが、それを作るために吸血鬼の血を使うという発想も普通じゃない。

大勢の吸血鬼が生け捕りにされ、囚えられ、拘束された連中は傷口が塞がらないように動脈に鉄管を刺されて血を採取されていた。

人間の血を吸うはずの吸血鬼が逆に人間に血を抜き取られているのだ。さぞかし意味が分かんなかっただろう。

水槽になみなみと湛えられた奴らの血は、奴ら自身の霊力を宿して、暗闇の中でも微かな燐光を発していたそうだ。

そこに狂気の刀匠が火床から引き抜いた灼熱の刀身を差し込む。

日本刀は鋼の硬度に傾斜をつけるために刀身に厚みを調整した泥の層を塗って焼き入れを行うが、その泥も吸血鬼の血を使って練ったらしい。

最終的にその刃には素材にされた吸血鬼たちの怨念が宿り、奴らの同族をもたちまちのうちに喰い殺す凶悪極まりない一振りが出来上がった。

村正という刀には、実は二種類ある。

一つは通常の方法で造られた通常の村正。数多くの戦国武将たちに愛された実戦向きの名刀だ。

もう一つは『吸血』村正。酒吞童子を殺した方のやつと区別するために血吸ではなく吸血と逆さにして書く。海の彼方から来訪してきた未知の脅威に遭遇した昔々の日本人が、それを確実に殺す手段を求めて鍛えた呪われた刃だ。

こいつは暴走すると相手が吸血鬼だろうと人間だろうと構わず襲い掛かり、大量虐殺をも引き起こしかねない。

吸血鬼に吸血鬼を喰わせるために相手が誰かなど分からないようにされているのだから当た

り前のことだ。刀に五感はない。

目も見えず、鼻も利かず、ただ血の飢えを満たし続けるだけの存在となった怨念の塊。警報発令中でもなければ、街中で持ち歩くことなどとても許可されなかっただろう。

狂おしいまでの哄笑を上げ続ける妖刀を右手に提げながら俺は冷酷に告げる。

「余計な抵抗はしない方がいいぞ。なに、命まで取る気はない。ただちょっと話を聞きたいだけだ」

「ヴァンパイアの生き血を、刀を打つのに使った……？」

脅しが効きすぎて後半の話をちゃんと聞いていなかったらしい。そいつは怖気にぶるぶると震えながらつぶやき、そして涙までこぼして絶叫した。

「お、お前ら、それでも人間かよおおおッ!!」

「やかましい、お前に言われたくないわ。この吸血鬼が。おらおら」

確かに俺もこの製法はちよつとどうかと思うけども。

「ぎゃあああッ、止めてくれえええッ!!」

俺がバスバスとさらに刀を入れると、内坂は地面をのたうち回りながら悲鳴を上げた。

「し、信ちゃん。いじめたらかわいそうだよお。許してあげよ？」

いかん、天野が怯えている。

勤務三日目でもうスプラッタな光景を見せるのはまずかったか。

「お、お前、狩人^{ハンター}じゃないのか!? 俺を殺しに来たんじゃ——」

手足が二、三本なくなってしまうった吸血鬼が、それでも元気に喚いた。

「人を襲ったかも分からねえうちからいきなり殺^やったりしねえよ。人間様ナメんな」

妖刀を鞘に収め——血が吸い足りないのか、何やら不満そうにキーキー鳴いていたが無視した——地面を這いつくばる吸血鬼の前にどつかと腰を下ろして続ける。

「さっきから言ってるだろう。ただ話を聞きに来ただけだ。まず……そうだな。お前と、美名瀬。それ以外にも、一匹、吸血鬼がいるだろう」

顔を覗き込むようにしながら、可能な限り感情を感じさせない声を心掛けて要求した。

怪異と交渉する時のコツは、決して弱気なところを見せないことだ。

相手は人間じゃない。ちよつとでも付け入る隙ができれば——付け入ることができそうだと思わせてしまえば——何をしてくるか分からない。

「そいつのことを知っているかどうかを聞きたい。答えろ」

だが、そこで予想外の反応があった。

「お前……まさか、まだ気づいていないのか!？」

地面に半ば突っ伏していた吸血鬼が、突然顔を上げてこちらを振り向き、かっと思を剥きながら叫んだのだ。

「——た、った、一匹、なわけがあるか！ 後五匹——いや、六匹はいるぞ！ もう少しで、かい、奴、

も眠りから覚める。お前たち人間も、それを警戒して、このところ戦力を増やしていたんじゃない……」

「……」

俺は気持ち臉を持ち上げながらそれを聞いた。

「信ちゃん……？」

何が起こったのか分からないのだろう。俺の沈黙の理由も。後ろで天野が不思議そうな声を上げた。

どうやら、思った以上にややこしい状況が生じているようだ。

「今夜一戦した時の映像です」

「はい、確かに受領しました。お疲れさまです」

俺がSDカードを差し出すと、感じのいい婦警のお姉さんがそれを受け取ってくれた。

ヘルメットにいつもマウントしているカメラのやつだ。

今回、俺は討伐計画書を提出していないし、警官の立ち合いもない。

警報発令中とはいえ、市街地で不必要に戦闘を行うことは歓迎されないんで、あくまでこちらは話し合いをしたかっただけが、相手が敵対行動を取ったのでやむなく応戦したのだと示さなくてはならない。

ドライブレコーダーと同じだ。最近トラックの運転手も仕事でずっとそれをつけている。何か問題が起きた時、法的に自分を守るために証拠がある。

デジタル機器の発展で、そのへんは昔に比べてずいぶん楽になったらしい。昔は現場を見たり、当事者から話を聞いた警察官の心証で違法適法を決めていたとか。恐ろしい話だ。

天野は俺の後ろに立ち、ちよつと落ち着かなさげに警察署の中を見回していた。

まあお利口にしていれば大抵の子どもは来る機会のない場所だからそれも仕方ない。剣道部や柔道部なら、署内の道場で警察官相手に稽古をつけてもらうこともあるので話は別だろうが。

「さすがだな、阿曇」

俺たちが警察署に入ってすぐに顔を見せた刑事さんが、ぼん、と肩を叩いてきた。

「でかい魚が釣れた」

「冗談じゃない。でかすぎるぜ。いや、でかすぎますよ、塚本警部補」

ほかの刑事課の人がいるので敬語で言い直す。

さすがの俺も刑事さんの部下の前で親戚のおじさんに話しかけるような態度は取れない。俺たちの視線の先には、開きっぱなしになっている取調室の入り口の向こうで小さくなっている吸血鬼・内坂がいる。

手足は妖刀の効果が薄れる頃に落ちてたものを拾ってくつつけたら繋がった。もっともまだ完全ではないのか、俺に斬られた部分を落ち着かなさそうにさすり続けている。

刑事さんの部下が、こちらに背を向けて内坂を尋問していた。

「お前以外にも五、六体いる。そう言ったそうだな。なぜそんなに多くの吸血鬼がこの町に集まっている」

内坂は左手で右腕の接合部をさすりながら視線を上げ、スチール机に下ろし、また上げて、口を開いた。

「『始祖』がいるんだ……その、あいつらがこの国に現れた時、すべての始まりの元となった奴が……」

「始祖？」

聞き慣れない単語に、刑事さんが怪訝そうにつぶやいた。

「現生吸血鬼の共通祖先のことです。彼らの吸血・被吸血関係を辿っていくと、いくつかの少数の個体に行き当たる」

俺は刑事さんに向かって説明した。

「普通は中近東で数千年から数万年前に生存していた祖先のことを指しますが、この場合は最初に日本に來航してきて、その後ここで仲間を増やしていった個体群のことでしょう。とつくに狩り尽したと思っていたが……まだ生き残っている奴がいたとは——」

「始祖とは、例の『でかい奴』のことか？」

尋問役の警官が正面に向き直って続けた。

内坂はうなづく。

「あいつらは、今この街に集まっている吸血鬼は、みんなそいつから産まれた——つまり、吸血して、されて、伝わってきた——子孫なんだ。今はまだ眠っている。封印されているんだ。大昔に、侍との戦いに敗れて……だけど、それがもうすぐ解け始める。あいつらはそれを待っている」

「待って、どうする」

刑事さんが口を挟んだ。

「始祖とやらを旗印に世界征服でも始めるつもりか？」

内坂は苦笑して首を振った。

「そんなじゃない。みんな、ただママに会いたいだけだ。先祖への郷愁で動いている。人間にだってあるだろ？　そういうの——」

「人間界に危害を加える気はないということか？」

尋問役の警官が後を継いで確認した。

「それは……」

内坂は視線をスチール机に下ろした。

躊躇いがちに口を開く。

「それは、その……そうとは言い切れない。あいつらの始祖は、とんでもなく強力な吸血鬼だ

ったと聞いている。ただ存在するだけで、広域に影響を及ぼす程の……。それが蘇れば、このあたり一帯の人間たちに何が起こるか分からない。人間たちがそれを恐れて、復活を止めようとすれば、当然子孫どもは妨害に出るだろう。ママとの逢瀬を邪魔するな、と……。だから結果的に、あいつらは人間に危害を加えている……。そう言うことはできる。それに——」

視線を上げて、緊張感の増した面持ちで続ける。

「あいつらはみんな、大なり小なり人間の血を吸ってきた奴ばかりだ。それで長い間、狩人^{ハンター}や、討伐屋に追われてきた。札付きということさ。……。もし始祖が復活したら、それを祝って、この街で『祭り』を始める可能性は高いと思う」

尋問役の警官は刑事さんと二言三言言葉を交わし合うと、ふたたび内坂に向き直り、質問を変える。

「『あいつら』についてはこれぐらいでいい。次はお前についてだ」

声の圧を気持ち強めながら詰問する。

「お前はなぜこの街に来た？ 『あいつら』の仲間なのか？」

「仲間じゃない。でも、理由は今言ったことと同じさ」

内坂は自嘲気味に言った。

「俺は嫌なんだ。今さら始祖が蘇ったり、子孫どもがそれに興奮して大暴れを始めたりするの——。せっかく人間社会に紛れて、静かに暮らしてきたのに、もし何か大事件が起きて、それで人間の吸血鬼^{おれたち}に対する敵意や警戒心が高まったりしたら……」

これまでの歴史と同じだ。人間側に何らかの英雄が現れ、そいつが軍勢を率いて怪異を掃滅していく。おそらくは、それなりに多くの巻き添え被害を生みながら。

「だから自分で『あいつら』の、この街に隠れている連中の居場所を突き止めて、誰か、腕の立つ討伐屋に駆除を依頼するつもりだった。けど、そういうわけにもいかない事情ができてしまった——」

「美名瀬十吾のことだな？」

これは俺の役目だと思ったので、俺は尋問役の警官が訊く前に口を挟んだ。

内坂は顔を上げて、泣き出しそうな表情でうなづく。

「『もしかしたら』って思ったんだ。最後に、電話で話した時の十吾の様子は明らかにおかしかった。それで、いつもように子孫連中の足取りを探っていた時、血の臭いと一緒に、あいつの声がかすかに聞こえて——」

「美名瀬の吸血現場を見に行ってしまった」

言い淀んだ吸血鬼の代わりに言っちゃった。

内坂はぶるぶると震えながらまたうなずいた。

「十吾は、俺のことが分かっていたと思う。もう何年も前だけど、一度顔を合わせたこともあったから——農具小屋の外から声をかけたら、あいつ、こっちを振り向いて、目を丸くしたん

だ。俺、落ち着かせようとした。けれど、あいつはいきなりこっちに突っ込んできて……俺を突き飛ばして、そのままどこかに逃げてしまつて――」

恐慌を来したように刑事さんや尋問役の警官に視線を向けながら叫ぶ。

「お、俺は『駆除』されるのか？ 俺は血を吸っていない。本当だ！ これまでだって、ずっと鳥や獣の血で我慢してきたんだ。十吾の狩りにも関わっていない。むしろ止めようとした！ 俺は偶々そこに居合わせたただけなんだ」

「農具小屋での吸血は、美名瀬十吾単独での犯行だと既に結論が出ている」

刑事さんが答えた。

怪異を駆除するのか、しないのか。どんな手段までなら使っているのか。それを決める規制側は向こうなのでこれでいい。民間業者の俺が勝手に個人的な見解を述べる場面じゃない。

「お前自身については人間に対する吸血行為は確認されていない。美名瀬の『親』も既に別の目星がついている。よつてお前は駆除対象とはならない」

これははじめて知った。

さすがに刑事さんたちはやり手らしく、俺が天野と呑気にイチャついている間にずいぶん捜査を進展させていたらしい。

「だからといって保護もしていないがな。人間にとつての脅威ではない以上、対吸血鬼用の武器の多くはその使用に強い制限がかかる。現実的に言つて、わざわざお前を仕留めようとする討伐業者はいないだろう」

「そ、そうなのか……良かった……」

刑事さんの半分突き放すような言葉に、しかし内坂は安堵のため息をついた。

そしておずおずと顔を上げる。

「あの……それで、十吾は――」

「奴は俺が殺した」

今度は俺が答えた。

短く。

内坂がこちらを振り向き、目を丸くする。

しかしそのまま視線を合わせ続けると、慌てたように目を逸らし、うつむきがちにわずかに犬歯を覗かせながら口を開いた。

「そ、そうか……いや、そうだよな。人の血を吸ってしまったんだ。駆除されても、仕方ない……」

その後も内坂の取調べは続き、多くの有益な情報が得られた。こいつは美名瀬の吸血現場に居合わせてしまつて、自分までその容疑者になつたと思つた後も、どうしようかと悩みながらも、始祖とその子孫たちの偵察を続けていたらしい。

まず『子孫たち』は市街地の西方に連なる山々、その山中にばらばらに分散して潜伏している。

一ヶ所に存在できる個体数の許容度が低い吸血鬼が、互いに融合——魔王変化^{へんげ}——を起こして、自我を失ってしまう（それは元の吸血鬼にとっては死と同じだ）ことを避けるためだろう。個々の距離を十分大きく取って——驚いたことに、潜伏場所の一つは、今朝立ち寄ったばかりの俺と天野の昔の遊び場、古代の集団墓地、そのすぐ近くだった。

墓地の周囲にはいくつか大きな洞窟があり——あるいは考古学者がまだ気づいていないだけで、それも墓地の一部なのかもしれないが——そのうちの一つに、少なくともつい最近まで連中の一人が暮らしていたのだ。

美名瀬に関する警察の捜査範囲からはわずかに外れていた。警官が横穴を調べ始めたのを見て、既に引き払ったか、あるいは近くで息を潜めて、こちらを見ていたかもしれない。あの時、当時を懐かしんでちょっと周りを探検してみようなんて気を起こさなくて本当に良かった。日陰の多い山の中で吸血鬼に不意打ちを食らうのは正直ぞっとしない。

美名瀬も一時期近くにいたことになるが、連中と何か直接的な関わりがあったというよりはただの偶然だろう。連中も迷惑に思ったに違いない。

千年以上前に活動を終えているが、元々は火山だったあの山にはほかにも底の深い洞窟があり、細かい場所は特定できないものの、他の子孫たちはそういった場所や、昼間にも日の差さない溪谷の窪地、野生動物の掘った巣穴といった場所に潜んでいるそう。

この街では、少なくともまだ血は吸っていない。『始祖』の復活を前に騒ぎを起こしたくなかったのだろう。その代わり、物資の調達係が一人おり、彼女——女だそうだ——が定期的に店で食料や生活雑貨を購入して、夜に山まで車で運搬している。おそらく人血もこの街のどこかに保管して、補給のたびに一々運んでいるのだろう。山の中では冷蔵しにくいし、夏場に常温の血は腐りやすい。

その物資の量を、内坂は吸血鬼四、五人分と見積もった。調達係を入れて合計五、六人。

ほかに美名瀬の『親』と天野、そしてもちろん目の前の内坂もいるから、最大九人。それだけの吸血鬼が今この街に集結していることになる。

まるで吸血鬼のバーゲンセールだ。一つの街に集まった数としては、間違いなくここ三百年程で最大規模のものだろう。

内坂は、吸血鬼同士の風のうわさで始祖の復活を知ったと言っていた。

本来、同族同士で群れることを嫌う傾向のある（そんなことが好きな奴は次々と魔王化してしまっただけで目立つのでとくに狩り尽くされて絶滅した）彼らだが、それでも吸血鬼同士の情報のネットワークというものはあり、人間の文明の発展に伴って携帯やインターネットでも連絡を取り合うようになっていく。

もちろん人間に尻尾を掴まれないために暗号化した通信だが——『教会』には、最近はその

を傍受するための専門組織もできていると、ニナが以前言っていた。

そちらについてはまた今度詳しく聞かせてもらおうとして、とりあえず今夜のところは内坂は帰されることになった。

逃亡の恐れはないし、そもそも別に人血を吸ったわけでもないので留置はされない。

一応、ないとは思いますが、子孫たちがこいつの存在に気づいていて、襲ってきた場合に備えて警官を何人かアパートの周りに配置することになった。

俺は見送りを兼ねて内坂と一緒に警察署を出た。

取調室の椅子から立つ時に、まだちょっと痛そうにしていたので、自分が負わせた傷ということもあって肩を貸してやる。

「腕や脚、大丈夫か？ 斬りつけて悪かったな。痛かっただろ」

「い、いや……こっちも、そっちの弱そうな子を人質にしようと思ってたから……」

内坂は戸惑ったようにどもりながら、後ろからついてくる天野に、ちら、と視線を向けて言った。

案の定か、こいつめ。

内心ちよつとイラつとしながらも、それを表情には出さずに微笑む。

「彼女は吸血鬼だぞ」

「何だって？」

内坂が目を丸くした。

「なりたてだがな。ちなみに俺の女でもある。いや違った、俺が鍛えてる。ただの女の子だと思って掴みかかったら、お前、ぶん投げられて痛い目に遭ってたぞ？」

俺の女、のところで天野がぼつと頬を染めてもじもじしていた。可愛い。

だが、実際俺が止めなければ危ないところだった。

天野が、ではなく、内坂が、だ。

吸血鬼同士の取っ組み合いはそれだけ危険なのだ。お互いが人間以上の速度で動いてるし、そこに人間以上の腕力を上乗せして投げ飛ばすことになる。その上、あの場所は地面がコンクリートだった。

しかも吸血鬼という奴は、筋力と素早さの割に、骨格の強度は実はそこまででもない。

鳥みたいなものだ。軽量化の代償だな。本来筋力相応であるべき肉体の頑丈さが、人間だった時からほとんど上がっていない。増大した筋力の動きを受け止められる最小限度だ。だから高速で動けるんだが。

天野も初心者だから、実戦でそうきれいに技が決まるとも限らないが、何しろセンスの塊のような奴だし、うっかりかかってしまう恐れは強い。

狩られるという恐怖に駆られて天野を捕まえようとした途端、まともに背負い投げを食らっ

て脳天から猛スピードでコンクリートの地面に叩きつけられ、ぐしゃ、と頭蓋骨が粉々に砕け、スプラッタな光景を展開する羽目になる内坂の姿が目に見えるようだった。手足を切り飛ばすだけでもだいぶ怖がっていたのに、うちの天野にあまりトラウマを植え付けようとしなくてもいい。

内坂は人間の血を吸っていないようなので、そうなっていたら再生できるかも分からない。取調べがややこしいことになるどころだった。

そういうつもりで伝えたのだが、内坂はぽかんと口を開けて呟いた。

「吸血鬼が……討伐屋をしているのか？」
首を振った。

「——いや、そうか。もうそんな時代なんだな」

俺は思わず変な顔をした。こいつだって人間とネットゲ仲間なんかをしていたんだろうに。妙なことを言う奴だ。

そんな変な奴ではあったが、パトカーに乗せられてアパートまで送られていく。

「どう思う、阿曇？」

入れ替わりに後ろから近づいてきた刑事さんが、隣に立って遠ざかっていくパトランプを見ながら言った。

「どうもこうも、もちろんマズい事態だ、刑事さん」

俺は頭に手を当てながら答える。

「『存在するだけで広域に影響を及ぼす』と言っていた。つまり、連中の言う『始祖』は魔王である可能性が高い」

魔王。複数の怪異が融合して発生した上位存在。

あまりにも目立つがゆえに人間の軍勢の標的となりやすく、今日ではほとんど見かけることもなくなった超生物。

それは弱さを意味しない。むしろ恐ろしく強く、したがって危険だからこそ徹底的に、いかなる犠牲を払ってでも狩り殺されてきたと言っている。

万物の霊長と思えば人間が、種を挙げて恐れる程の存在だった。

「目覚めさせたら最期、こんな田舎でも万単位で死人が出かねないぞ」

「……なるほど」

今後の方針を決めるためだろう。刑事さんは短くそれだけ言って、踵を返し、署に戻っていった。

俺も天野に声をかけようと振り返りかけた時、腰のポーチで携帯が鳴った。

液晶の表示はジジィからだった。何かと思ひながら耳に当てる。

『信之介か？ 例の吸血鬼がな、ちょっとまづいことになりそうだぞ』

開口一番に意表を突かれて、俺は目を瞬^{しばた}いた。

「なんだ、始祖の話がもうそっちにも伝わったのか？」

『何!? 「始祖」だと！ 始祖が出たのか!?』

——違う？

何かの予感が——不吉な何かが——胸の奥からこみ上げてくる。

「信ちゃん……」

俺の異変を察知したらしい。天野が後ろで俺を呼んだ。

ジジイにすぐに戻ると断って通話を切り、彼女を振り返る。

警察署に着いた時点で、もう戦闘の予定もないので俺たちはヘルメットを取っていた。

かすかな夜風が、いつものようにポニテにした天野の黒髪を、優しく、静かに揺らしていた。

背後にかかる大きな満月の放つ光の粒子が、金色の細かな砂が杯からこぼれ落ちるように彼女の髪に、そして体に移り、その輪郭を燐光のように輝かせていくのが見えた。

……幻覚？

俺は軽く首を振ってそれを振り払い、ふたたびヘルメットを被る。

「……帰ろう、天野。そろそろ夜が明ける」

「うんっ」

天野が頭の後ろの髪留めを外しながら駆け寄ってくる。

二人でWRに跨る。

そして走り出した。

家に帰った俺と天野は、夜通し働いて疲れていたこともあり、ジジイも夜更かしが続いていたから、互いの情報を交換する前に軽く仮眠を取るように指示された。

疲れた脳みそで考えても良い着想は得られないから、仕方ないことだ。

毛布にくるまり、昼着のまま、いつものように二人で抱き合って眠った。時間が惜しかったのでシャワーも浴びていない。天野の体からはかすかに汗の良い臭いがして、それが俺の気持ちを落ち着かせた。向こうも同じだと信じた。……ちょっと自信がないが。何しろ男の汗だからな。

抱きしめた肢体のぬくもりと、やわらかさも相まって、俺は短い時間ではあったがぐっすりと眠れた。

向こうはどうだろう？ こちらの胸板に額を押し付けるように寝ていたが、やはり人の心音を聞いていると安心できるのだろうか？

眠りながらそんなことを考えていたが、目覚めた時の天野の満足げな表情を見て安心した。

どうやら大丈夫だったようだ。

床から抜け出すと、遅い朝食を作り、腹に入れる。

量は少なめにしておいた。天野は物欲しそうにこちらを見て目を潤ませていたが、あまり満

腹になりすぎると頭が働かなくなる。心を鬼にして無視した。話はそんなに長くないはずなので、終わったら好きなだけ食べさせてあげよう。

食後に濃いコーヒーを淹れ、俺たちはそれをすすりながら座敷に集まった。

「まず農から話そう」

長卓の向こうにどっかりとあぐらを掻いたジジイが口火を切る。

「お前えらが『目撃者』を追っている間、農はヤエちゃんの家から譲り受けた例の日記の解説を進めていた。それで分かったことだがな」

俺と天野、双方を交互に見ながら言う。

「ヤエちゃんのご先祖——人間とまぐわった吸血鬼はまだ生きている。その可能性が高い」

ずいぶんと長生きだが、血が不足して衰弱したり、人間に狩られない限り、吸血鬼は何百年でも生き続ける。それ自体はあり得ない話ではない。

だがジジイの続く言葉は、より大きな衝撃を伴っていた。

「といっても、今は半分死んでいるような状態だ。当時の技術では、あまりに強力な吸血鬼だったそいつを殺し切ることができず、『封印』で済ませたそうなんだ」

どくん、と俺は自分の心臓が跳ね上がるのを感じた。

つい最近、同じ言葉を聞いていたからだ。昨夜捕らえたばかりの『目撃者』。吸血鬼・美名瀬十吾の、長年の友人だった吸血鬼から——

今はまだ眠っている。「封印」されているんだ。大昔に、侍との戦いに敗れて……

思わず隣を振り向く。天野も同じ考えに思い至ったのだろう。ジジイの方を向いたまま、彼女は目を見開いて固まっていた。

俺たちの様子を見て、何かを感じ取ったのかもしれない。けれどジジイはそれを口には出さなかった。

代わりに説明する。

「ここからが本題だ。この日記の問題の箇所が書かれたのは応仁の乱の直後の文明十年。西暦では1478年だ。そしてこいつには、封印を行った当時の術者が『封印の効力は五百年もすれば弱まる』と言っていたと、そう記されている」

長卓の上に載せた古びた日記、そこにでかくてごつい右手を置き、まっすぐにこちらを見ながら告げた。

「……もう、いつ蘇ってもおかしくねえ状態。そういうわけだ」

手を腕組みに戻して続ける。

「信之介。お前えもおかしいと思っていただろう。ヤエちゃんに、まだ未確定ではあるが、例の美名瀬とやらの『親』。同じ地域で、同時に二体もの吸血鬼が覚醒することなんぞ俺たちの

常識ではまずあり得ない。そのあり得ないことが起きた理由はなんだ？ 何がそれを促した？」

「魔王の覚醒に、そいつの人間側の子孫も反応した……？」

果然と、俺はつぶやいた。

それはあまりに現実味がなさすぎて、まるで他人が言っているように聞こえた。

だがその可能性は、確かに考えておくべきだったのだ。

もっと早くに。

「オーライ、オーライ！」

ゆっくりと旋回しながら後退し、車庫に進入してくる三軸の大型トラックのサイドミラー、そこから見える位置を取って左腕を煽りながら、俺は大声で運転席の先輩に向かって呼びかけた。

「はい、ストロップ！」

頭の上で両腕を交差させてバツ印を作ると、ブレーキランプが点灯し、トラックの大柄な車体がびたりと作業場の五センチ手前で停止する。

うちには日常の車庫として使っている古ぼけた納屋のほかに、母屋に直結した——日差しを浴びずに行き来できる——業務用の車庫がある。こちらは一般家庭の車庫というよりは、運送会社の発着場と言った方がたぶんイメージに近い。

正面の幅はトラック三台分で、重い荷物を上げ下げしなくていいように作業場の高さは荷台の床面に合わせてある。

密閉式の入り口のシャッターは、いったん下ろしてしまえば太陽光も入り込まない。

母屋側の通用口は作業場の入り口に向かって左端だ。

トラックの側から作業場によじ登り、壁際の鉄柱に設置してある操作盤のボタンを押してシャッターを下ろし、完全に閉鎖して日差しが遮られたことを確認すると、俺は母屋側の戸を振り向いて言った。

「天野ー、もう入ってきて大丈夫だぞー」

「うおおおお！ お、お邪魔するようー！」

自分を連れてちよつとある場所へ出かける、と言われて了解したら、何やら大事おおいじになってしまいビビっているらしい天野が恐縮しながらだばだばと姿を現わした。

外行きの明るいワンピースを着ていて、脚の動きに合わせて丈の長いスカートがひらひら翻っている。

彼女が駆け寄ってくる間に、俺はトラックの端のリモコンを使って荷台の電動扉を上下に開き、続いて現れた片開きの二重扉もハンドルを回して開ける。

扉の向こうは窓のない殺風景な鉄板張りの小部屋、その左右両側に向かい合わせに長椅子が設置されたような空間になっている。

こいつは討伐協会で所有している、吸血鬼のような太陽光に弱い怪異を搬送する時にも使えるように特別に設計された輸送車だ。天野を日中に外出させる必要がある、というわけで先輩たちに取ってきてもらった。

無理に動かなくても、日が落ちるまでおとなしく待つという手もあったが、これから先は何が起きるか分からない。半日もすれば事態が急変している恐れがあるので、知りたいことがあるなら早めに動いた方がいいだろうと、ジジイと相談して決めた。

荷台は損傷しても遮光が破れないように厚さ三センチの装甲板を、間に緩衝材を仕込んで二枚重ねた二重構造になっている。

化け物の死骸は討伐屋にとつては重要な証拠品でもある。うっかり太陽光が差し込み、輸送中に消えてしまったりでもしたら自分たちが殺人罪に問われかねない。

中の化け物が実はまだ死んでいなくて暴れ出した場合や、化け物の仲間が後から襲ってきた場合、はたまたうっかり事故って——化け物の怨念でハンドルを狂わされるなんてことも当然あり得るので——何かと激しくぶつかった場合にも、それなりに耐えるように作られている。

核燃料の輸送容器ぐらいの頑丈さはあるというわけだ。

天井には照明もついていて、死骸の変異の進行を抑えるための冷蔵冷凍機能も備わっている。長椅子は見張り役をつける時のための設備だ。

壁と床には化け物の死骸を固定するためのロープを張る金具がある。今回は使わないが。ご覧の通り内装は最低限だ。お姫さまを乗せる馬車としてはあんまりかもしれないが、きれいな調度品を設しつちえている暇はなかったので仕方ない。

そこに天野とともに乗り込み、内側のハンドルで内扉を、次いで遠隔操作で外扉を閉めて、彼女がちょこんと片方の長椅子に腰を下ろしたのを確認すると、俺は立ったまま運転席に通じている壁の通話機のボタンを押した。

「先輩、大丈夫です」

『おう、了解。んじゃ出発しゅつぱつするぜえ』

『僕は家のクルマで後ろから追いかける。先に本殿に入って待つとるんだぞ』

運転席に顔を突っ込んでしゃべっているらしいジジイが言った。

程なく俺の代わりにシャッターを開けてくれた音が通話機から響いて、車庫の中に荒々しい夏の陽光が差し込む気配がした。

松山先輩が西崎さんに何かを呼びかけている声も聞こえた。先に行けと言っているのだろう。吸血鬼である天野は危険物扱いなので、発火の恐れがある昼間に市街地を移送する時は警告灯をつけた先導車がつく必要がある。西崎さんはそっちの運転が役目だ。

天野にはこれから、この辺りで一番でかい神社に行ってもらおう。

そこに大昔のことを記憶していらいっしやる神さまがいるのだ。天野の先祖のことを知るために、その神さまと会わなくてはならない。

やがて足元にエンジンの振動が伝わり、俺たちを載せているトラックが動き始めた。
俺は壁の金具に掴まりながらそれを感じていたが、天野の方を見ると、彼女がまだ緊張して
ふるふるしているのが分かったので、その前に片膝について呼びかける。

「天野」

それで彼女が世界を拒絶するかのよういきゅつとつむっていた瞼を開いて美しい瞳を見せて
くれたので、そのやわらかい頬をそつと撫でながら微笑みかけた。

「大丈夫だ。みんな、お前のことを守ってくれる。特に俺が、な」

「信ちゃん……」

彼女が息を呑み、指先に触れている頬がぽつと熱くなり、そしてしあわせそうに微笑んだ。

「えへへ。うん、ありがと。頼りにしてるね」

その透明な笑顔に、胸が締め付けられるような思いがした。

まったく、なんて矛盾だろう。

俺の腰にはまた例の妖刀が差してある。こいつは彼女がもし暴走し、制御不能となった場合に、俺自身が『被害を抑制』するために持たされているというのに、だ。

だが俺には、口先だけで安心させてやるぐらいしかできない。

抑制剤の投与も、人血の代わりになる食事療法も所詮完璧じゃない。どれだけ手を尽くしても
どうにもならない時はある。

せめて今この時ばかりは、天野が安らいだ思いでいてくれることを祈るばかりだ。

思えば天野の緊張は、これから神と会うというのも理由の一つだったのだろう。

だが実はそんなに固くなる必要はないのだ。神さまと言っても、案外気安い女性^{ひと}なので、た
ぶん街の住人の中には子どもの頃にそれと気づかずに遊んでもらった奴も多い。

以前お会いした時は、自分でも時々神であることを忘れと言ってケラケラと笑っていらっ
しゃった。まあ、こっちは性格というよりは、神々という存在の持つ本質的な不確かさが原因
だが――

三十分程で境界を跨いだのが分かった。周囲の雰囲気が変わり、それが頑丈な外殻で覆われ
た荷台の中にまで伝わってくる。

通話機から先輩の声で、本殿に繋がった倉の一つに入庫させるとあり、何度かトラックが旋
回し、後進して、停車する。

吸血鬼に限らず、神社も日光に弱い魔物を鎮めたり、光を当ててはいけない呪物を仕入れる
ことがあるので、こういう構造の車庫がある。

普段は祭りの山車の保管に使われているけどな。今日はあらかじめ空けておいてくれたのだ
ろう。

はるか昔は武器庫だった場所でもある。時代は変わる。

神官や神人^{じん}たちがトラックの収まった倉を閉ざして、陽光を遮ってくれたのをふたたび通話機からの声で確認し、荷台の二重扉を開いた。

「さ、天野」

「う、うん」

家の車庫のような作業場はなく、下がすぐ地面になっているので、天野に呼びかけてその手を取り、リモコンでトラックの昇降機を下降させる。大した高さじゃないが、スカートで飛び降りさせるといふのもな。車の内装が貧相だったのでせめてものエスコートだ。

靴を脱いで、日光が入らないように内張りしてくれている、物の怪が通れる大きさの巨大な内廊下を、神官の案内で先輩も一緒に進んでいき、途中で西崎さん、ジジイとも合流する。

しばらく歩いて本殿の前に着くと、神官が戸に向かって拝詞を唱え、左右の神人がそれを開いた。

うちの道場程の広さの板間は無数の吊り灯籠で照らされ、中央で振袖姿で、見た目は小学校高学年ぐらい、前髪を真ん中で分けた垂髪の女性が楽しげに手毬について遊んでいた。

それを、浄衣烏帽子の長い白髭を蓄えた神主が、置き畳に腰を下ろして見守っている。

ほかに人影はなかった。俺たちは女性の七歩手前まで進み出て、膝について座った。

女性はそこではじめてこちらの気配に気づいたように、毬を持って振り返り、きょとんと首を傾げた。

神主がももごと白髭を動かして疑問に答える。

「ここに参りました者たちは、この吸血鬼の乙女の血縁について御身が何かしらご存知ではないかと考えているようです。世を騒がせ人を騒がせし吸血鬼は今や危急の件となり申し、吾^あよりも良いお知恵を賜りますようかしこみかしこみお願い申し上げます」

世界の境界に阻まれて声が届かないのか、女性――神さまは少しの間ぼうつとしていた。その澄み切った黒い瞳は、彼我の間に巨大な水の層が挟まっているように、こちらを捉えどころのない影としか認められず、細かな正体を掴むことに苦勞しているかに見えた。

しかしやがて焦点が天野に合い、ぱちくりと目を瞬^{しばた}かせる。

水の壁は取り払われた。

神さまは毬を置いて、見た目通りの小さな女の子のようにととてと駆け寄ってきた。

「あらあら、まあまあ」

驚いたような声を上げて腰を屈め、正座している天野の顔を覗き込む。

「はうう」

それを手で押しとどめながら、天野は畏れ多いとばかりに顔を逸らした。

「あらあら、まあまあ」

神さまはそちら側に回り込んで、また顔を覗き込んだ。

「はうう」

それをふたたび手で押しとどめながら、天野はそんなにまじまじと見られたら恥ずかしいとばかりに反対側に顔を逸らした。

ぐるん、と神さまが神主を振り向く。

「これは……成なっちゃってるわね！　この子……吸血鬼に！」

「そうなんですよ、実は」

ほほほ、と神主が朗らかに微笑み、さっきまでよりも砕けた口調で言った。

近所のちびっ子の面倒を見たがるのは世話好きで年嵩のお姉さんと相場が決まっている。それは神々の世界でも同じらしく、細々とした願い事で人間界に関わるのはこれぐらいのお年頃の女神さまであることが多い。

見た目は中学行かないぐらいだが、少なくとも二万年はこの世に存在しておられる方だ。

後は優しいお兄さん風とか、もふもふな癒し系動物のお姿とかだな。平時に人間の相手をしてくださる神々でよく見かけるのは。特に後者は自分の体を撫でさせてあげるだけで人間の悩みが解決することも多いのでいろいろ楽なんだそうだ。

これが天地がぶっ壊れるぐらい切迫した事態ならば——そして天地をぶっ壊すぐらいの勢いでしかるべき犠牲が捧げられれば——もつと強面でいかつい方々も出動してられることになるが（警察で言えば地域課の親しみやすいお姉さん巡査からマル暴刑事にシフトチェンジするようなイメージだ）、今はまだその段階ではないし、人間側もそこまでするつもりはない。

当初隣で見ていなくても伝わる程ガチガチに緊張して口元を引き結んで（∨／＼）いた天野も、どうやら怖い方ではないと分かったらしく、肩の力を抜いてリラックス（*∨／＼*）し始めているようだった。

「この者の先祖は五百年ほど前に当地に来訪した力ある吸血鬼だそうです。何か、ご記憶にございませんかな？」

「うゝ、ちょっと待って！　何か思い出すかもしれないから！」

神さまは左右のこめかみに指を当てて一生懸命記憶を手繰り寄せ始める。

郷土史の類も漁ってみたが、当時の記録は残っていないかった。戦国時代が始まったぐらいの頃の出来事だ。誰かがそれを書き止めていたのだとしても、戦乱で焼失してしまったのだろう。天野の分家の日記にも、詳しくは書かれていなかった。

言い伝えにも残っていない。このあたりの伝承は粗方把握しているはずのジジイや先輩討伐屋たちも知らなかった。魔王クラスの怪異の来訪ともなればそれなりの大事件のはずだが……どうやら、意図的に残さなかったのではないかと思える。

つまり、隠しておきたいことだったのだろう。

しばらく唸っていた神さまは、しかしやがてへにやへにやとへたり込んでしまう。

「だ、だめだわ。思い出せない」

こちらを振り向いて、腕をぶらぶらさせながら言う。

「ごめんなさいねえ。三百年前までは辿れるんだけど、そこから先はもう常世の領分になっちゃってるみたいなのよ」

常世というのは、まあ平たく言えばあの世のことだ。死者の霊や神さまたちの本体が住んでいる。

今日の前にいる女性の姿はその本体から現世へ投じられた影に過ぎない。

常世の本体は人の形をしていないことも多いらしい。手足はあるものの、一本だけだったり、逆に何万本もあったり、手しかなかったり、足しかなかったり――。ひどく巨大な、何かの怪物のような姿だとも言われている。

分かっていることは何もない。ただ強力な何かだということしか分からない。

その正体不明の力の塊が、この世界において女性の姿を取った存在は、俺たちと向かい合って座ると、底知れない黒い瞳でこちらを見据えながら告げる。

「常世の記憶にアクセスするには捧げ物が必要よ。あなたたち、それが何かはもちろん分かっているわね？」

もちろん分かっていたので、俺たちは担いできた荷物を準備する。

クーラーボックスの一つからバナナ、ホイップクリーム、ヤマザキのピコラ、冷え冷えのパフェグラスを取り出して、まずは床に置いたまな板の上でバナナを切る。そしてどかどかと氷を敷き詰めた冷凍物のボックスに収めていたチョコアイスをディッシュシャーで丸く削り取ってグラスに落とし、上から押し込んで潰し、そこにバニラのソフトクリームを同じく担いできた抽し器から巻き重ね、またチョコアイスを落として、軽く押し込み、床を作るようにソフトクリームを巻くことを何回か繰り返す。縞模様の嵩がグラスの淵近くまで上がると、ソフトクリームの土台の上にコーンフレークを散らして、大きめのチョコアイスの半玉を上向きに乗せ、グラスの縁に沿ってバナナとピコラを花びらが開くように挿していき、最後にアイスに寄りかからせるように白いホイップクリームをくるくると巻き上げる。

それをみんなで分担して、主な作業は俺がグラスを握ってやった。

ファミレスのパントリーでバイトがやっているような何でもない作業だが、神前となるとなかなか緊張するな。

もっともそんな俺たちの心境とは裏腹に、神さまの両目はお供え物が出来上がっていくにつれて、まるで少女のように（実際見た目は少女だが）きらきらと輝いていった。

ついに完成した渾身のバナナパフェをうやうやしく捧げると、「きゃー〇(*▽^*)」と歓声を上げてさっそく召し上がってください。

「甘っまりい！ そうそう、これよこれ！ 常世の門を開くにはこれが一番！」

スプーンを咥えながら神さまはとろけるような笑顔でそう言った。

前にも言った通り、神々にこの世で力を振るってもらうには代償がある。

捧げものは何でもいい。歌や踊り、豊穡の食物、酒に魚に肉に米、金銀珊瑚、豪華な料理、

狩りの獲物、羊や牛といった家畜。あるいは——人間。要は捧げる側が価値を感じてさえいればいいのだ。

神々はそれを捧げた人々が払う犠牲の大小に応じて常世と現世の境界を溶かし、願いを叶えることができる。

もつともどうせ捧げるなら相手の神さまの趣味にも合っていて、喜んでもらえるものもいいし、実際その方が力を振るう上でも効率が良いんだそう。

今日日人間の生贄なんかもらっても神さまも困ってしまう。だから近頃は食料や金品といったところに落ち着くことが多い。

一番分かりやすいのが金だ。何とでも交換できるので、後で飯を買うもよし、あるいは社の修繕の工賃にするもよし。人間同士の贈答品と同じで、もらっても一番困らない。後までずっと残るものを受け取り続けていると、それだけで境内の倉がいっぱいになっちゃうからな。

そして倉の維持費がまたけっこうかかるんだ、これが。

銭が犠牲に捧げられることが少なかった大昔は、倉に収められた物品を担保に借金をして日常の必要を満たしたりもしたらしい。原始的な兌換貨幣だな。

今回は甘いものが大好きな神さまなのでこういう捧げものになった。

この神さまは毎回こんな感じだ。

仮に魔王クラスの怪異を直接討伐してもらおうなんてすると国を一つ潰す覚悟がいるが、昔話をしてもらうだけならこれぐらいでもどうにかなる。

人類の少なくとも半分は甘味のためなら命を賭けられる人々なので、これはこれで案外馬鹿にならない。

そこから得たチョコバフェ一杯分ぐらいの情報をどう活かすかは、後は人間たちの機転次第というわけだ。

ふと横を見ると天野がちよっと物欲しそうな顔をしている。後で作ってやるからな。

「きゃー〇(*▽^*)〇」

そう耳打ちすると、天野はとても嬉しそうに歓声を上げた。可愛い。

「——はっ、『通った』」

その時、神さまが頬つぺたにチョコアイスをくつつけながら顔を上げた。

常世の本体から続々と送信されてきているらしいかつてのご自身の記憶を、底知れない深い輝きを宿す瞳の奥で覗き見ながら、いかにもアンテナがピンピンに立っていらっしやるといった様子でこめかみに指を当てて唸り声を上げられる。

「通った！ 通った！ 通ったわよ、願いが！ ほー、なるほどなるほど？ ふむふむ……あつたわねえ、そういえばそんなことが!!」

得心すると、空になったバフェグラスを傍らに置いて居住まいを正し、頬のチョコアイスはそのまま、こちらに向き直った。

「では氏子たちよ、心して聞きなさい。様々な伝承から失われた今は昔の物語よ！」

それは、こんな異種婚姻譚だった。

ある晩のこと、ここからそう遠くないある渚で、一人の侍が行き倒れの娘と出会った。彼女を介抱するうちに二人は恋に落ち、侍は娘を村に連れ帰った。

二人はしあわせだった。娘はとても食いしん坊で、昼間は屋敷から出たがらないという一風変わった性格の持ち主だったが、たいそう美しく、右の点を除けば氣立てもとても良かったため、侍は氣にならなかった。二人の間にはたくさんの子どもが産まれて、屋敷の中はどんどんにぎやかになっていった。

ところがしばらくして問題が起きた。子どもたちや、そのまた子どもたちの中から、次々と娘と同じように『昼間の日差しを怖がる』者が現れ始め、奇妙なことに彼らは『人の血を飲みたがる』ようにもなった。また娘が、何年経っても若い頃のように美しいままであることも次第に村人たちを不安にさせた。

遂にあまりにも多くの者が人血を求めるようになり、村人たちは侍に直訴した。

侍はもはや庇うことはできないと、彼女の心臓を刺し貫き、遺体を山奥の洞窟に葬った。

それ以来、村に人の血を飲みたがる者が現れることはなくなったという。

「わたしが知っているのはここまでよ。その後すぐ鳥居が焼け落ちちゃって、しばらく現世に顕現できなくなってたのよね。だから、二人の子孫がその後どうなったのかは良く知らなかったのだけど……」

宣教師たちとの諍いのことだ。焼け落ちたのくでりで、俺は反射的にそう気づいた。

一度鳥居が破壊されると、再建しても、ふたたび常世との門が開くには長い時間がかかる。百年か、二百年か――。『記憶を三百年前までしか遡れない』という最初の神さまの証言とも一致する。

あまりにも長い記憶はそれ自体が現世への干渉となるから、神さまのこの世における分身からも次第に失われていくが、それにしただって像がだんだんぼやけていくようなグラデーションを取るのが普通だ。ある時期を境にハサミで切り落としたように完全に欠落している場合は何か理由がある。

侍と娘は多産だったらしい。二人の子どもたちは嫡子を除いて、ほかの一般の村人の家にも嫁いだり、入り婿となったりして、短期間のうちにその血筋が拡散していく。

おそらく、何世代か後に宣教師たちがこの地を訪れた時には、村中が吸血鬼の子孫のような状態になっていたのだろう。彼らの信仰を集める社――九州一円でしばしば行われていたように、単純に異教を排撃するつもりだった可能性もあるが――それが吸血鬼の一大拠点かのように誤解されたとしても不思議はない。

……神さまの語った昔話には、いくつか重要な点がある。

『娘』が渚、つまり海辺に倒れていたこと。

彼女は間違いなく吸血鬼だ。おそらく、日本に吸血鬼が来訪し始めた最初期の——
吸血鬼狩りから逃れるために船に乗り、その船が難破か何かしたのでろう。ひょっとしたら
船上で追手と戦闘になり、不利を悟ってみずから海に飛び込んだのかもしれない。

夜のうちに保護されたのは運が良かった。自分で動けなかったということは、追手との戦闘
で深手を負っていたことを意味している。ほぼ間違いなく、教会の狩人が使う強力な聖別され
た武器によって。

朝までに誰にも見つからなければ、彼女の体は日に焼かれて完全に息絶えていただろう。

そして彼女が『侍』との間になした子どもや、そのまた子孫の中から次々と吸血鬼化する者
が現れたこと。

魔王と人間の子孫が覚醒する確率は、少なくとも魔王が封印されるまでは、通常の吸血鬼よ
りもだいぶ高いらしい。これは今のこの街の状況と一致する。——その時は、おそらくはるか
に深刻な状況だったのだろうが、遠からず現代でもそうなる可能性がある。

ジジイの懸念は大当たりといったところだ。

天野や、美名瀬の『親』だけじゃない。始原の『娘』の血を引いている人間は、おそらくこ
の街に何千人もいる。

早く魔王——昔話の『娘』を再封印しないと、そこら中に覚醒した吸血鬼が溢れかえりかね
ない。

最後に、『侍』が彼女の心臓を貫くと、子孫の吸血鬼化が収まったこと。

これは具体的な封印の方法を示している。

山奥の洞窟に葬ったらしい。だが、おそらく死んではいけない。仮死状態になっただけだ。魔
王である個体の耐久性は通常の吸血鬼よりもはるかに高い。当時はまだ対吸血鬼を想定して造
られた専用刀もなかったはず。ただ心臓を破壊して再生できないようにしただけでは殺し切る
ことはできない。西洋には、心臓に杭を打たれて意識を失ったまま、何百年も生き続けた吸血
鬼の記録が残っている。

内坂の言う『あいつら』——始祖の復活を祝うためにこの街に集まってきた吸血鬼集団も山
中の洞窟に潜伏している。これは偶然だろうか？

おそらく違う。十中八九、そこが封印の地。

物語の『娘』が葬られた場所——

「ああ、でも懐かしいわ」

どうしても発想が物騒寄りになってしまふ俺の頭の中は知る由もなく、神さまは穏やかな口
調で言った。

「わたし、あの娘とけっこう仲良しだったのよ。お空みたいな目の色をしていてね、当時はそ

れが物珍しくて、一日に何人もの人が訪ねてきた……。どうして今まで忘れていたのかしら」
遠い昔の風景を思い描くように視線を上げて虚空に見つめながら続ける。

「ある時、あの娘が青空を見れないことを悲しんでいたの。自分はどうして日の神さまに嫌われてるんだろう、って。どうしてみんなのように晴れの日を祝えないんだろう、って。わたし、言っただけだわ。『あなたは自分の瞳にお空を閉じ込めてるじゃない。きっとそれで十分だとお空の神さまが思ったのよ』ってね。そしたら彼女、とても嬉しそうに笑ってくれて――」
そつと瞼を閉じ、胸に手を当てる。

「わたし、その後すぐに倉からとびきりの鏡を出して、彼女の家を持って行ってあげたわ。彼女がいつでもお空を見れるようにと思って。榎八郎くん――あ、件のお侍のことね――はいっでも彼女の瞳を見れるけど、どうせなら二人で一緒に見た方がいいものね」
瞼を開いて過去に別れを告げ、まっすぐに澄んだ瞳をこちらに向けた。

「わたしが話してあげられることはこれで全部よ。参考になったかしら？」

「……ええ、とても」

ほかの面子と顔を合わせ、うなずき合った後、俺は神さまに向き直って代表して深々と頭を下げた。

「そう。良かったわ」

神さまはにこりと微笑んで言った。

そして天野の方にすり寄っていき、手で左右のやわらかな頬を包み込むようにして顔を覗き込む。

「……うん、確かに面影がほんの少し残ってる。瞳の色はすっかり変わっているけれど、口元が彼女にそっくり」

「は、はう……」

天野はまた目をまん丸にして緊張してしまった様子だったが、自分の祖先の話を教えてもらった親近感からか、もう顔を逸らさなかった。

「この子こそまぎれもなくあの娘の血を継ぐ者。良くぞ今日まで生き残り、血脈を伝えてきたわね。生き延びるのは大事なことよ。人も、吸血鬼にとっても。さもなくば殺し合うことすらできない」

神さまはそれがとても愛おしいことのように言って、優しく天野を抱きしめた。

「これから生き永ええ、子を成し、己の血脈を残し続けなさい。それがきつと、あの子たちが愛した証になるから」

それは言祝いでいるようにも、呪いのようにも聞こえた。きつと神さまにとってはどちらも同じことなのだろう。

必要な情報は得られた。

なら次は戦いの算段を立てる時間だ。

「信之介くん」

そう思っでみんなで本殿を辞す時、俺は神さまに呼び止められた。
振り返る。

神さまは振袖の胸元をきゅっと握って立ち、こちらを見ていた。

「もしなのだけれど……あなたが彼女をもう一度封印するつもりなら、その刀を使って、八重香ちゃんにも手を沿えてもらいながら心臓を刺し貫きなさい」

俺の腰の妖刀を視線で示しながら告げる。

「血族の手で封じられることが封印をより強固にする——加えてその刀なら彼女の蘇った力も残らず吸い取ってしまえるわ。今度はおそらく千年は目覚めることはないでしょう」

ここまで俺と、ジジイや先輩たちも考えていたことだ。神さまもたぶん、確認程度だったのだろう。

果たして神さまは本題を続けた。

「でもね」

うつむく。

「それで街は守られるかもしれない。でも……問題は、それだけじゃないでしょう？」
顔を上げた。

「八重香ちゃんを守らなきゃ、でしょ？ 八重香ちゃんの心を——」

神さまの訴えたいことは良く分かった。

天野は自分の手で始祖たる吸血鬼を封印した後、この人間の世界で生きていかなければならない。共にあるべき仲間もおらず、異種族の中で孤立した、絶滅寸前の怪異の一人として——

「守ってあげてね。きっとそれは、あなたにしかできないことだから」

難しい課題だ。無責任に自信があるなどとはとても言えない。

だがそれでも、何をすべきかははっきり分かっていたから、俺はまっすぐに神さまの瞳を見つめてうなずいた。

「はい。必ず」

「——うん、信じてるわ」

どのあたりに信用できる要素があったのかは良く分からなかったが、ともかくも神さまはそう言っで笑っでくれた。

「あなたっで、ここに遊びにくるちびっ子たちの一人だった時から、なんだかちよつと頼もしかったものね」

来た時と同じようにトラックに乗り込み、先導車をつけて、輿入れの行列のように我が家に戻ってきたところで、意外な来客があった。

呼び鈴に招かれて顔を出した玄関に立っていたのは、ショートカットにした金髪と、昔話の娘のような青色の瞳。

ニナだった。

ほかに男女のクラスメートが二人、付き添いで来ている。友だちの家に遊びに来た、という体裁を守ってくれているのだろう。

思わずジジイの方を見ると、大げさに驚いてみせる。

「おお、友だちが来たのか！ 信之介、ボサっとしてねえで茶でも出してやれ」

どうやらこれぐらいはセーフらしい。

ジジイ自身はこれから警察と話をしてくるとのことだった。魔王の再封印についての打ち合わせだろう。

そういうわけで、他の二人の相手は天野に任せて、俺はニナとともに自室に引っ込むことにした。

天野はこちらを気にしながらも、クラスメートとの久しぶりの再会に感動していた。

おさげ髪の女子の首根っこにかじりついて——もちろん比喩だ——泣き声を上げている。

「うわーん、会いたかったよお！」

「わたしもだよお、やえやえー！ ずっと会いたかったんだけど、来ちゃっても大丈夫かなって、迷惑だったりしないかなって思ってたんだけど、ニナちゃんが『大丈夫だから行こう』って言うってくれて——」

もう一人の男子は俺の方を見て「任せておけ」とばかりに片目をつむってくれる。

俺が討伐屋であることはクラスの連中はみんな知っているから、何となく事情を察してくれているらしい。

少女たちの涙まじりの会話を背後に残して廊下を案内し、部屋に入る。

「天野さんの容態が気になりました。その……元気にしているだろうか、と」

椅子がないのでどうかと思いつつも勧めた座布団に、それはもう見事なお姉さん座りで腰を下ろしながらニナは言った。

俺は今朝神社であったことを業務上秘密にしないでいい範囲で手短かに話した。

天野の先祖が強大な力を持つ吸血鬼だったこと。

この土地の侍との間に多くの子孫を残したこと。

そしてその直後に鳥居の焼失が起こり、神さまの記憶が欠落していることなどだ。

「そうですか……」

ニナはぽつりとつぶやくように言って、そしてつと視線を逸らしながら続ける。

「その……今からお話することはわたしの独り言です。夢見がちな思春期の女の子が、そういう設定の小説を考えているものと思っただけだよ」と

そういう体で勝手に話してくれるらしい。ありがたい。

以前はこいつのことを、スパイという職業に対する先入観もあって、どこか無機質で冷たい人間のように考えていたが、天野のことをきっかけに話す機会が増えて、実際はそんなことはまったくなく、むしろかなり情に篤い（もちろん、自分の職務に反しない限りにおいてではあるが）少女だということが分かってきた。単にこれまではそれを表現する機会がなかったただけだったのだろう。

ステレオタイプというのは良くないものだな。友だちだと思っていたのに、相手のことを何も分かっていなかった。

「この地で当時起きたことは『教会』でも把握していません」

少し間を置いて、考えた後、ニナは語り出した。

「数名の宣教師が辿り着いたことは分かっています。……小さな教会を建てたことも。けれど、現地に何らかの『危険な兆候』があるという報告を最後に、彼らはそれ以上の情報をもたらすことなく村人たちに皆殺しにされてしまい、彼らが書き残していたであろう記録も教会と一緒に焼けてしまいました」

それはこの土地でかつて起きたちよつとした宗教戦争だ。

拡大し続ける世界宗教と世界の果ての土着の信仰が接触し、前者の先兵が後者の神殿に手を出したことで敵意と反発を買い、怒り狂った原住民によって鎌や刀で惨殺され、拠点に火をつけられて焼き殺されていった。

当時の日本ならそこら辺の農民も普通に火縄銃を持ってたか。刀狩り前だからな。まったく、厄介な時代にいらつしやったもんだ。

死者の大半は宣教師と彼らが連れていた従者で、せいぜい十数人。本当にささやかな、国全体を覆っていた戦乱の規模と比べれば取るに足らないとすら言えるような事件。

だがそこに吸血鬼、そして彼らの魔王が関わっていたことが、少しばかり問題をややこしくした。

後を引いた影響は、数百年を経てもなお俺たちを動かし続けている。

「女の子が考えるにしては殺伐とした設定だな」

口の端を持ち上げながら合の手を入れると、ニナはにこりと微笑んだ。

「そういう話が好きなんです。性格、暗いですから」

平らな胸に手を当ててちよつと身を乗り出すようにしながら続ける。

「実のところ、わたしが当地に派遣されたのもその調査が目的なんです。といっても、ずっと前から続いていた前任の引き継ぎでしかありませんが」

「あの古道具屋の爺さんだな。中国人の」

「ご存知でしたか。さすがですね」

ニナはうなずいて続ける。

「この土地に何かがあることは分かっていました。けれど、それが何かはずっと分からないで

いた――」

「無理もないさ。地元の人間も何も知らなかったんだからな。伝承さえ一つも残っていなかった」

「きっと、吸血鬼の血筋のことは慎重に隠匿されていたんだと思います。彼らを守るために――」

俺はうなずいた。

偶々始祖の特徴を色濃く受け継いで産まれてしまった子どもは家の中に匿われ、決して表には出さない。

限られた年寄りと、領主しか見ることのできないわずかな記録だけがかつてあった過去を伝え、それも後の戦乱で失われた。

『教会』が当時、世界中で行っていた吸血鬼狩りを思えば、無理ありません」

ニナはもの悲しげな、どこか後悔しているような表情で言った。

「別にお前たちだけのせいじゃない」

友だちなので、俺は肩をすくめて慰めた。

何も事実を捻じ曲げてまでおべつかを使おうというわけじゃない。

だが、ある事実があるとして、それを伝えるかどうかは相手との関係性で決めていい。

俺はそう思う。

「俺たちだって吸血鬼に対していい感情を持っているわけじゃないからな。誰だって化け物の子孫だと思われるのは嫌だ。たとえそれを事実として受け入れていても、大っぴらにするべきじゃないことは世の中いくらでもある」

そう言うと、ニナはちょっと救われたような、困ったような表情で笑った。

もっとも『教会』の追跡が執拗で、容赦のないものだったことも事実だ。

それも無理のないことではあったが。

それだけ、こいつらがかつて吸血鬼から受けた被害はひどいもんだったんだ。

吸血鬼への恐怖と憎悪、その時植え付けられた記憶が、連中を突き動かしていた。

ヨーロッパで吸血鬼禍が猖獗を極めた理由はいくつかある。

火葬の習慣がなかったことや、キリスト教の蔓延で、それまでいくつかの地域・部族で信仰されていた太陽神が悪魔と見なされて駆逐され、その加護が弱まったこと。

さらに数度に渡るペストの流行で衛生状況が悪化し、国家権力も著しく弱体化したこと。

人間社会は疲弊し、奴らがどれだけ人を襲っても、もうそれをまともに取り締まることすらできない。

吸血鬼にとってはまるで天国のような理想的な環境だ。

一日に村が何個も全滅し、増えすぎた吸血鬼同士が融合を起こして、そこら中でポコポコと

魔王が発生しまくる。

最悪期には欧州の全人口の四分の一が吸血鬼化していたらしい。

それは「食料」である人間の血が足りなさすぎて、吸血鬼同士の共食いが横行するような凄惨な状況だったとか。

食料を管理するために——むやみに同胞を増やさないために——一部の強力な吸血鬼の中には、下位の吸血鬼や人間を広域に支配して、まるで「領主」かのように振る舞う者さえ現れ始めた。

吸血鬼の原産地であるはずの中東はそこまでの惨状にはなっていない。同じユダヤ教を源流とする一神教が広まり、旧き神々への信仰が失われたのは同じはずだが。まあ、やはり国家体制が堅固だったかどうかでかかったのだろう。ヨーロッパの情勢は相当警戒していたようだが。

もともと、人間も追い込まれると死に物狂いで対抗策を練り始める。力を失った世俗国家群に代わって宗教勢力が音頭を取り、欧州各地に吸血鬼狩り部隊が編成されていく。

何人もの英雄が生まれ、聖人に列せられた騎士や傭兵隊長たちが聖なる武具を振るって、吸血鬼の支配から人間の集落や都市を解放していく。

彼らの唯一神にはなりふり構わぬ犠牲が捧げられ、自分たちの土地やそこに住む人間にも深刻な後遺症を残しかねない程の強力な奇跡が乱発された。

ニナや彼女の同僚たちが属する『教会』が生まれたのもこの頃だ。

それはローマ・カトリックではない。ギリシャ正教会だとか、はたまたアッシリア東方教会でもない。そのどれでもなく、一方でそのどれとも関係がある。

複数の国家・教団に跨って活動し、複数の国家や政治家、民間・宗教団体から資金提供を受けている。

ローマ教皇庁の中に「吸血鬼対策課」のような専門機関があるわけではない。コンスタンティノープル総主教庁の下部組織でもない。

だが、その高僧たちのうちの何人かは確実に『教会』の協力者か関係者だ。

いかなる国家にも属さないスパイ組織。

あるいは世界最古のマフィアだと言う者もいる。シチリア起源のニューヨークの犯罪組織を非公式に「コーサ・ノストラ」と呼ぶように、吸血鬼を殺すために生まれ、吸血鬼を絶滅させるために活動し続けている——少なくとも外部からはそう思われている——正体不明の秘密結社を、自他ともに『教会』と俗称しているというわけだ。

彼らは通常の宗教活動や企業活動に擬態しているため、表からは実態が見えない。そのへんの花屋の店主や、普通の教会のただの人のいい神父だと思われていた人物が、実は『教会』と関係があり、ひそかに吸血鬼の情報を集めていた、ということがよくある。『教会』が生まれ

た時代は国家が吸血鬼に支配されているか、そこまでではなくても相当程度『汚染』されることが普通だったため、そのような活動形態を取る必要があったそうだ。

当初は一部の聖職者たちによる情報共有のための小さな会合に過ぎなかった『教会』は、吸血鬼狩りで功績を上げるたびにメンバーを増やし、活動領域を東欧、南欧、北欧へと拡大して、最終的には欧州全域で吸血鬼掃討作戦を裏から指揮するまでにのし上がっていった。ヨーロッパ大陸を人間の手に取り戻すことができたのは彼らの貢献が大きい。

あるいはそれこそが、あの時数多の犠牲と引き換えに乱発された、吸血鬼を滅ぼすための奇跡、その一つだったのかもしれない。

彼らが具体的に何を犠牲にしたのかはよく分かっていない。

捧げてしまったそうだ。その記憶ごと――

だから……彼らは自分の頭の中に『神を棲まわせた』——そのために脳のある領域を神への供物として捧げた——か、あるいは自分たちの存在そのものが『別の何かに切り替わる』ような、そんな犠牲だったのだろうと推測されている。

確かに、近代化された諸宗教の神々は人間の生贄を捧げられることを喜ばない。それはいわゆるアブラハムの宗教——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教——でも同じだ。

だがこいつらの神は、信仰のための犠牲は喜ぶという一風変わった性質を持っている。

征服者から社会との軋轢をもたらず教えを捨てるよう要求されてそれを拒み、拷問の末に惨殺される。他の神の土地までせせと出かけて行って布教に勤しみ、声高に現地の信仰を否定し、聖地を破壊して憎悪を煽り、報復を受けて焼き殺される。

殉教、と呼ばれる行為だ。

犠牲それ自体に価値があるため、殺されても殺されても彼らは信仰を証明するために殺される。

そして殉教者の肉体は敵対者によって切り刻まれ、あるいは火あぶりにされ、彼らの上げる悲鳴を耳にし、彼らの体から立ち上る煙を目にするたびに、父なる神は天にて嘉したまうのだ。これでは、ただ儀式の執行を異民族や異教徒にやらせることにしただけで、実質的には人身御供が存続しているのと何も変わらない。

討伐屋の中には、本当に神なのか疑っている者もいる。が、ここではその問題に深く立ち入る必要はないだろう。

神であれ、そうでないのであれ、彼らのそれはおそらく受け取ったのだ。

人間、少なくともその一部の贄を。

それによって捧げられた者たちはそれまでとは違うものに変容した。

実際、俺もたまに目の前の少女が妙な光の塊のように見えることがある。非常口や信号のマークにあるようなデフォルメされた人型の光体だ。

どこもかしこも化け物だらけだ。困ったことだな。

……俺を含めて。

形勢が逆転すると、吸血鬼たちは容赦なく狩り立てられていった。

それは古い時代にあったような、化け物を自分たちの土地から追い出せば終わる種類の掃討戦とはまったく違っていた。

吸血鬼たちが逃げても、逃げても、どこまでも追ってくる。ヨーロッパ中から吸血鬼を一掃すると、『教会』はそれだけでは終わらず、ヨーロッパの外部にも活動を広げ、わざわざ中東や中国まで出かけていってヨーロッパから逃げ出した吸血鬼や元々現地にいた吸血鬼を殺して回ることさえ始めた。あたかもそれは、吸血鬼は一匹たりともこの世に存在することを許さないかのような狂信性と偏執さだった。

なぜ吸血鬼がそんな目に遭わなければいけなかったのかだが、一言で言うとなら『やりすぎた』のだ。

人間を圧倒する能力を持ち、直接吸血によって瞬く間に数を増やし、吸血鬼に支配された領域ではヨーロッパ人は食料として管理されていた。

その時あまりにも強烈な恐怖心を植え付けてしまったため、追撃も執拗になった。

時あたかも大航海時代だ。ヨーロッパから逃げ出そうとする吸血鬼は帆船に潜んで世界中に広がり、それを追って吸血鬼狩りも全世界に拡大していった。

吸血鬼狩りは時に植民地化と結びつき、アジア・アフリカ・新大陸でのヨーロッパ人の諸帝国の支配力が強まるにつれて、『教会』は各地の植民地政府と協調してより組織的に吸血鬼を炙り出しては虐殺していくようになった。

この過程で吸血鬼たちはほとんど絶滅し、日本やチベットなどに逃れた個体がわずかに生存するのみとなった。

日本で吸血鬼が生き残った理由もいろいろある。

一つには、日本人は基本的に全員が太陽神の信徒なので、吸血鬼から見ると攻撃に常時特効が入っているような非常に相性の悪い集団だ。

血もかなりまずい。何なら薄っすら毒ですらある。

その毒に耐えられず、日本に逃げ延びてきた吸血鬼たちはさらに数を減らした。

『教会』に追い立てまくられ、ポロポロになりながら食うや食わずやでやっとな新天地に辿り着き、そこでようやく手に入れたと思った食料を口に入れた途端、ゴロゴロと下痢を起こしまくればそうもなるだろう。

しかも腹を下して体力を落としたところに、新参者を敵と認識した原住民が太陽神の加護山盛りで襲い掛かってくる。逃げ込んだ先は吸血鬼にとって地獄だったのだ。

毒に耐えられた者だけが生き残った。

まあコアラみたいなもんだ。

コアラの爪もけっこう鋭かったりするしな。

だがコアラの場合と同様、この土地は過酷であったがゆえに、彼らにとってある意味で楽園でもあった。

日本人にとって吸血鬼の脅威はそれほどでもなかったので、逆に積極的に絶滅させようという動機も生まれなかった。

せいぜい熊ぐらいなもので、こちらに危害を加えてきたら報復するが、そうでないなら放っておけといったところだ。

キリスト教の侵入も排除している。宣教師たちは当初全面的な駆除を（かなり真剣に）勧めたそうだが、初期の大名たちは大抵面倒臭がり（人間同士の戦争で忙しいのにそんな余計なことをしている暇はない）、後の時代には宣教師の方を敵と見なし始めたので、当然その助言にも従わなかった。

かくして吸血鬼はようやく追撃を免れることができた。

決して味方ではないし、保護を受けられたわけでもない。獣の血で飢えを凌いで細々と暮らしているうちは何もされないが、数が増えすぎて脅威を感じさせたり、人間を襲ってそのことが明るみに出れば（もちろん冤罪だった場合も含めて）容赦なく殺される。

それでも、絶滅を求められているわけではない。

ならば生きていくことはできる。

そんな感じで、何となく共生と言えなくもないような微妙な関係が続けて何百年かの時が過ぎた。

その過程で吸血鬼たちは大きく弱体化し、いよいよその存在は大して気にされることもなくなっていた。

互いを利用し合ったり、取引したりすることさえあった。こちらが米をやる代わりに、向こうから鳥獣を受け取れば、吸血鬼もそのへんのマタギと大して変わらなかった。実際、マタギや山伏の集団に吸血鬼が参加していることもあったそうだ。飢えた吸血鬼に握り飯を恵んでやったところ、金鉱の在り処を教えてくれて大金持ちになったなんて仏教説話も残っている。

近代化とともに拡大し続ける都市は、時に吸血鬼にとって山奥よりも良い隠れ家となり、夜間の人間の活動の増大はそこに吸血鬼が紛れ込むことを容易にした。

強すぎたがゆえに絶滅寸前まで追い込まれ、弱くなったゆえに生き延びることができた。

世の中つてのはほんと不思議なもんだ。

ジジイの外出はもうしばらくかかると連絡があった。刑事さんや、その上司と一緒に県庁まで出向いてお偉方の会議に出席するらしい。

俺は待っている間に天野の定期採血を済ませておくように言われた。

一緒に来た二人はもう帰っていたが、ニナは俺との吸血鬼談義が長引いて（マニア同士話出すと止まらんのだ）帰りそびれていたので、

「ニナも見学していくか？」

と、白衣を取りながら何となく尋ねると、彼女は少し躊躇った後、こくりとうなずいた。というわけで三人で診療所の方に移り、天野を椅子に座らせて、片方の腕に圧迫バンドを巻きつける。

「はう……」

採血が怖いらしく、天野はスライムのようにぷるぷるとしていた。

実際、こいつの体はスライムのようにやわらかいのだ。

つつくとぷにぷにとしている。

そこに針を入れるのは、毎回ちょっとした罪悪感だな。

「大丈夫ですよ、天野さん。ほら、わたしの方を見ていればすぐ終わりますから」

俺が血管の周りを消毒している間、ニナが優しくそう言ってくれた。天野は涙の浮かぶ瞳で彼女を見上げ、すがりつくような表情で見つめ合う。

おお、百合な光景だ。美少女二人がやると絵になるな。

ニナが天野の注意を逸らせてくれたので、その間に俺はささっと針を突き刺す。ぷす。

ちゅー……

採血管を三本交換して、採血は終わった。

「再封印の日取りが決まったぞ」

県庁のある隣町から帰ってきたジジイは、執務室に入るなりそう言った。

「明後日だ。並行して山中に潜伏している子孫どもの掃討作戦も実施される」

「……大急ぎだな。そんなに早いのか」

「県警の幹部は、最初は五日程の準備期間を置くつもりだったらしい」

それでもだいぶ早い。県が今回の件に抱いている危機感が分かる。

上が現場よりも「おい、ヤバイよこれ」と思っている状況というのは、大抵本当によろしくないのだ。

「だが儂らが『始祖』の情報を出すと前倒しされた」

背広を脱いでハンガーに吊るしながら続ける。

「特に奴が『繁殖』していた点が効いたらしい。吸血ではなく交配による個体数の増加、遺伝子の拡散となると、魔王クラスではヨーロッパでも前例がない。そいつが目覚めたら最後、この土地で何が起こるか分かん。最悪、街が丸ごと一つ吸血鬼に転化しかねない……そう伝えておいた」

要するにジジイははじめから討伐計画を前倒しさせるつもりだったということだ。

刑事さんとも申し合わせてあらかじめ台本を書いていたのだろう。このあたりの演技力のよ
うなものは俺には真似できない。

「もういつ、奴が目覚めてそこから中大騒ぎになるか分からねえからな。これ以上厄介ごとが増
える前にさっさと片付けた方がいいという判断だ。既に方々から討伐業者も警官も大勢この街
に集まってきているから、戦力的には十分可能だということもある」

事前に警報を出していたのも大正解というわけだ。

専門家の俺でさえちよっと前のめりすぎるんじゃないかと思っていたぐらいだが、結果的に
はそれがうまく働いた。今の知事はよほど運がいいか、とてつもなく仕事ができるかのどち
らかということになる。

運であれ実力であれ、危機に対処できるというのは良いことだ。結局のところ、権力という
やつはそれができなかった人間の手からはこぼれ落ちていく性質を持っているからだ。原発事
故への対処を誤った連中がせっかく手に入れた政権の座から転げ落ち、軍勢力を膨張させ続け
る独裁国家の隣で、自国の防衛費は毎年わずか500億円しか増やさないという驚くような国
防政策を十年にも渡って続けて我が世の春を謳歌していた「保守」勢力が、軍事面でより有能
な与党内左派によって総裁の椅子から蹴り落とされたように、この国でも政変はしばしば自然
災害や対外的な危機を引き金として起きる傾向にある。

こういう政治家とは、討伐屋としても仕事やりやすい。

自分の主義主張を偽っているあたり決して素直な人物ではないんだろうが、覚えておこう。
これから先、どこで関わり合いになるか分からない。

「そういうわけで少しばかり無茶をすることになる。信之介、お前えちよっと、子孫どもの物
資調達係を今夜、生け捕りにしてこい。連中を少しでも弱らせるとともに、明日中に尋問して
さらに詳しい情報を引き出す必要がある」

ジジイはそれがとても簡単なことのように軽く言った。

多少予想しないではなかったが、思わず訊き返す。

「俺でいいのかよ？ こういう大事なことはもっとベテランに任せた方がいいんじゃない……」

「農や協会の幹部連中は掃討作戦の準備で忙しい。さすがにそこまでは手が回らん」

ジジイはそう言って、ニヤリと笑った。

「それに『ベテラン』だと？ 何を言ってやがる。美名瀬を討伐し、内坂をとっ捕まえて、始
祖に関する情報を引き出した。お前えはもう、吸血鬼に関しちゃこの辺りで一番経験豊富な大
ベテランなんだぜ？」

洋風の格子窓の前に置かれた革張り椅子の背もたれにでっかい背中をもたれかけさせながら、
自信満々な表情で太い腕を組む。

「ジジイのひいき目じゃない。十分にやれると太鼓判を押しておいた。県警の幹部の皆さんも、

若いのに大したもんだと感心のし通しで納得してくれたさ」

……世の中ってのは、概してこういうもんだ。

まじめに生きているだけのつもりなのに、気がつくとかどでかい責任や期待を背負わされてしまう。

だが逃げるわけにもいかないし、実際俺以外に駒がないというのも事実なのだろう。腹を括って引き受ける以外になさそうだ。

「討伐計画書はもうできてんだろ？」

ジジイが尋ねた。

俺はうなづく。

「ひな形だけどな」

吸血鬼の物資調達係は、定期的に街で食料や日用品を買い込んで車で山に運んでいく。

内坂からの情報で、今日がちょうどその日だということは分かっていたので、今朝起きた時から頭の中で計画を立て始めていた。神社から戻った後、ニナや天野の相手をする合間を縫ってそれを書類にまとめた。

その時はまだ俺がやるとは決まっていなかったが、計画書は事情を一番分かっている奴が代わりに書くことも多いのだ。どうせ後で求められると分かっていたので、準備だけは先にしておくことにした。

この辺の手際の良さは子どもの頃から口うるさく言われていたので（討伐屋はせっかちなのだ）、もう体に沁みついてしまっている。

「十分さ。討伐人の名前だけお前に書き換えておけ。刑事さんは受け取ってくれる」

「天野も連れていくぞ？」

ジジイは歓迎するように両腕を広げた。

「もちろんだとも。血液検査の結果はどうだった？」

「問題ない。どの数値も許容範囲内だ」

「よし、そいつは儂にもコピーをくれ。明後日の再封印にも連れていくからな。別建てで出しておかなくちゃならん」

俺はうなづいた。

今回の作戦の要にして、最大の不確定要素が彼女だった。

魔王の再封印を確実なものとするために、その血筋の協力がいる。

天野は現在のところ討伐屋側で接触している唯一の覚醒済み子孫なので、当然、協力者としては第一の候補になる。

協力と言っても魔王の心臓を村正で刺し貫く時に手を沿えてもらう程度だが、その程度でも子孫を魔王に近づければ何が起るか分からない。意識を乗っ取られるか、魔王の妖力の影響でより強力な怪異に変異してしまうか……。もし少しでも怪しいところがあれば、計画は変更

――不完全になることを承知で人間単独で再封印を行うか、封印ではなく一か八かの殲滅を目的として近代兵器の大火力を叩き込むか（近所の駐屯地の自衛隊特科連隊が協力してくれるらしい）といった代替策を取る手筈だった。

だが今のところ、魔王の復活が近づいても天野の容態は安定していて、吸血鬼化の進行度も保護した頃と変わらない。

異化抑制剤が良く効いているのだ。これなら大丈夫というのが、彼女の主治医である俺の見立てだ。

一応、代わりの候補がいなくてもない。……美名瀬の『親』がそうだ。

だがこちらは俺たちに協力的な可能性は低いし、殴って言うことを聞かせるような形になるので、できれば避けたい。

刑事さんが引き続き追ってくれてはいるが、『親』を使うのは最後の手段だ。

日没後、俺と天野はふたたびWRに跨って出動した。

子孫たちの物資調達係は普段は市街地のマンスリーマンションに泊まっていて、仲間に食料を届ける時だけ外出してくる。内坂はその住所も突き止めていたが（大した探偵っぷりだ）、今回は寝込みを襲うことは避けた。

なるべく巻き添え被害を出したくないからだが、障害物が多いと単純に逃げられやすいというのもある。生け捕りが目的だから、一撃で確実に仕留めるという風にはいかない。粘られているうちに下水にでも逃げ込まれたら厄介だ。

昼間であれば、例えば水道管と両隣の家を重機でぶっ壊して逃走ルートとなり得る日陰をなくし、ねぐらに閉じ込めてから襲うという手も使えるのだが……あにく今日はずっと天候が不安定だった。

晴れたり曇ったりといった具合だ。吸血鬼にとってもこんな日に外出は嫌だろうが、討伐屋が迫っているとすれば躊躇なく飛び出さだろう。何事も背に腹は変えられない。

だから夜まで待って物資調達係をあえて出発させ、市街地を出てから、その道中で待ち構えるのが正解になる。

もともと奴がいつも使っている道路は、郊外に入ってから周辺に民家が割かし多く、それが途切れた頃にはすぐそこまで山が迫ってきてしまっている。襲撃に適したポイントは存外少ない。

いろいろ迷ったが、今回は途中にある農場を使わせてもらうことにした。

県道の山に向かって左手に広がる台形状の牧草地には十分な面積があり、牛舎やサイロ、人間の住居といった障害も存在するものの、基本視界が開けていて、獲物が逃げ出そうとした時に銃撃を浴びせやすい。この四隅に射撃班を置いて吸血鬼を閉じ込める。

ちなみに右手はサツマイモ畑だ。視界という点ではこちらも悪くないが、足場がやや柔らか

い上に、背後に大型の郊外型ショッピングモールが迫っている。避けるのが無難だろう。

奴がここに近づいたタイミングで道路を封鎖。正面と畑地側から勢力を押し立てることで牧草地の方に追い込み、そこで俺と天野が戦闘を挑む。

既に警報が出ているので、警察は治安活動のために市民の財産を接収できる。農場主の一家も避難済みだ。これで出た損害（家畜が死んだり、牛舎や貯水槽がぶっ壊れるかもしれない）はありがたいことに国が補償してくれるが、事が済んだ後で菓子折りを持って詫びとお礼の一つでも入れに行くべきだろう。

まったくの偶然ながら、天野のためにブラッドソーセージを作ってくれた例のクラスメートの一家の農場だ。今回も快く応じてくれたが、何とも心苦しい限りだ。これ以上面倒をかけずに済むことを祈る。

変に遠慮してもいけないので、天野には言わないでおいた。吸血鬼化するまでは廊下で何度か話しかけたことがある程度の相手だから（そう聞いている）、言わなければ分からないはずだ。

封鎖予定地点に近づくと、やがてヘルメットに装着したインカムから、ザザ、とノイズが走り、聞き覚えのある声が響いてきた。

『主役も着いたか。しばらくぶりだな、阿曇くん』

ドローン操縦士の土屋さんだった。既に農場の近くで待機してくれている。

ほかに元自の外村さんもいる。

ジジイも言っていた通り、討伐屋の主だった面々は明後日の作戦の準備で忙しい。そちらから十分な戦力を集めることはできなかったのも、またこの二人に頼ることになった。

手慣れている二人を司令塔に、警察の銃器対策班と一般の狩人をそれぞれ二十四人ずつ用意した。彼らが道路、そして農場を封鎖して吸血鬼の逃亡を阻止する。

警官の主な得物は外村さんと同じく豊和M一五〇〇、そのS A T向けモデルだが、何人かは接近された時の用心にサブマシンガン⁵を装備している。腰のホルダーに拳銃が入っているのはもちろん全員がそうだ。

狩人の方はライフルを持ってきてるのが三分の一、残りの三分の二はショットガンだ。こちらはショットガンと言っても接近戦のためではなく、ライフルと同じく狙撃用だ。弾も散弾ではなく一粒弾^{スラッグ}を使う。どのみち狩猟用の長銃身タイプなので接近戦での取り回しは悪い。

ほとんどのやつは銃身に腔線——銃弾を回転させるためのらせん状の溝——も切っていないので、たとえ翼安定タイプの装弾筒^{マガジン}を使っても命中率はライフルよりだいぶ下がる。夜間、吸血鬼相手に命中させるのは難しいだろうが、まあ景気づけだ。こちらの存在を吸血鬼に伝えることができるばいといと割り切っている。

ショットガンはライフルよりも規制が緩いし、鳥を撃つのに使えるので打ち手が多くて、こういう時に数を揃えやすいのだ。狩猟免許を取り立ての新人が日本で最初に持つことができる

銃だからな。ライフルは十年かかる。

狩人も、ライフルの扱いに長けているようなベテランは明後日の決戦に向けてなるべく温存しておきたい。今夜の捕獲ミッションは所詮、決戦に向けた支作戦だ。ここで主力を消耗させたり怪我をさせたりする意味はない。だから準備に余裕のありそうな人だけを選んで、後はショットガン撃ちで間に合わせることにした。

警察のように組織が一括で揃えている装備ではなく、猟師個人の持ち物なので、銃のブランドはウィンチェスターやレミントンなど様々だ。ミロクの上下二連を持つてきてる人もいる。ちなみにベテラン狩人の一人である橋部さんも、このあたりの山に詳しい名人としてほかの地方からやってきた討伐屋たちの案内をすることになっている。今夜はその打ち合わせのため不在だ。いてくれたら頼りになる人なので残念だが、仕方ない。

土屋さんと無線越しに二言三言言葉を交わした後、俺はそのままWRを農場に乗り入れ、シヤッターが開きっぱなしになっている納屋の一つに隠した。

鞘の中でケタケタと愉快そうな笑い声を上げている村正をサイドラックから取り上げていると、傍らに立つ天野が体を緊張させているのが分かった。

無理もない。おそらくこれが、彼女にとってのはじめての本格的な戦闘になる。

相手は吸血鬼だ。自分と同じ――

ポン、と小さな肩に手を乗せる。

「天野、いつも言ってる通りだ。お前は俺が守る」

はじめはただそれだけのつもりだったのに、なりゆきとは言え、いつの間にかずいぶん深く事件に関わらせてしまっている。

発端は天野の先祖で、それを封じる鍵も天野だ。

本人がそれを望んだのをいいことに、俺たちは彼女を都合良く利用しすぎているんじゃないだろうか？

本来はただの怖がりで優しいだけの女の子に過ぎない天野を、こんな荒事に巻き込むのが良いことなのかは正直分らない。

結局、天野と討伐屋としての使命を天秤にかけた時、俺は後者を選ぶことしかできないのかもしれない。

彼女がそれを許してくれるかは分からないが――俺はせめて前に出ながら続ける。

「そして頼りにしてる」

「……うん！」

果たして天野の表情に力が戻り、元気良くなるはずだ。

無垢な乙女が、こちらをすっかり信じ切ってしまったような、純粹そのものの輝きを瞳に宿して。

おいおい、そんな簡単に信用して大丈夫なのか？ お前の前にいるのは、お前を便利に利用

しようとしているだけの男かもしれないんだぞ？

心の中でそんなことを思う。

だが今さら撤回はできない。そんな暇もない。

ただ戦うのみだ。

『阿曇くん、目標の軽自動車が近づいてきた。もうまもなく接触する。五、四、三——』

果たしてインカムから土屋さんの声が聞こえた。

その秒読みが終わるとともに、離れたところから何度か銃声と、誰何の——^{ずいか}本当は相手の正体を知っているのだが、まあそうではないふりをしつつ——叫び声が響いてくる。

喧騒と、物騒な荒事の気配が、にわかに周囲一帯に充満し始めた。

『——予定通りだ。吸血鬼が農場に逃げ込んだぞ』

一瞬の騒動の後、ふたたび回線が開き、土屋さんがそう報告してきた。

『外村だ。首に一発入れたんだが、秒で回復された。いったいどうなってるんだ、あれは』

続いて、先の美名瀬討伐の時は回復される前に俺が妖刀で斬りつけたので、吸血鬼がその回復の本領を発揮するところを見ていない射撃の名手、外村さんが呆れたような声で言った。声と重なってボルトアクションの弾を再装填する音も聞こえる。

高倍率のナイトビジョンで撮影された射撃時の動画が、俺の持っているぐついミリタリータレットにも送られてくる。たぶん、外村さんが見たのと同じものだろう。着弾の瞬間、首がほとんど千切れ飛び、粉々に砕け散った頸椎の破片を撒き散らしながら、吸血鬼が頭部をぐらりと傾けさせる——しかし次の瞬間、文字通り首の皮一枚で繋がっていたその断面からふたとび骨が上下に伸びていき、椎間関節が繋ぎ合わされ、続いてその白い表面の上を赤い筋繊維と血管が這い伝って覆い、頭蓋を支え始める——その間、胴体はずっと手足を動かして走り続けているという、薬物中毒患者が見る悪夢そのもののような光景……

やはり事前情報通り、人血を吸っている。そう判断するほかない回復速度だ。

一応、封鎖組は車を運転しているのが吸血鬼だとは知らない設定だが、警察や軍隊ほど警告射撃に慣れているわけではない民間業者が警告のつもりで対象にぶち当ててしまうのは実はそこそこあることだ（本当はあったらいけないんだが）。偶然を装って一発命中させることに不自然さはない。

なので相手の回復力を測る意味もあって、事前のミーティングでは急所に当てることも許可していた。

結果は当たりだ。生半可な武器は通じないし、身体能力も先の内坂を（そして隣にいる天野も）大きく上回ると予想される。

予定通り封鎖組には積極的に仕掛けさせることはせず、俺たちだけで対処するのが吉だろう。素人が大勢で群がって、誰かが嘯まれてしまうのが一番面倒臭い。尋問したいのに一刻も早く目標を殺さないといけなくなってしまう。

「打ち合わせの通りだ。普通の銃弾は効果が薄い。全員対象には近づくず、農場の外から監視。対象が農場から出ようとした場合にのみ、狙撃で追い返してくれ。朝まではまだ時間がある。待ち構えてる側の戦力が多いと思ひ込ませることさえできれば、相手も無理に突破しようとは思ひないと思う」

『了解！』

『……了解』

土屋さんはハキハキとすぐに、外村さんはこちらが心配なのか、やや不満そうに応答した。吸血鬼の化け物っぷりをたった今日の当たりにして、その相手を子どもだけに任せようというのが、国民を守るように教育を受けてきた元防人としては内心忸怩たるものがあるのだろう。だが繰り返しになるが、ここで外村さん達を消耗させるわけにはいかない。明後日は五、六体もの魔王の子孫を相手取った大規模な山狩りになる。それ自体がそれなり以上の死闘と言えるし、運が悪いと途中で封印されていた魔王がうっかり目覚めてしまったり、子孫たちの方が何かの弾みで融合——魔王化することも考えられる。そうなった時にも対処できる（最低でも自力で逃げ出せる）だけの体力を残しておいてもらわないといけない。

俺と天野？

こちらは大丈夫だ。俺たちの決戦での仕事は、魔王の心臓に妖刀を刺し込むことと、そこに手を添えることに過ぎない。

周りを守る子孫たちは討伐屋のベテランたちや狩人、警察の皆さんが片付けてくれて、安全になったところを悠々と封印の間まで歩いていくだけの楽な役回りだ。

それに子どもは元気が取り柄だからな。よほど大暴れしても一晩も寝れば回復する。

ここで大怪我をすることも死ぬこともない。たとえ完全体の吸血鬼が相手でも、そう立ち回れるように鍛えられている。

天野はまだ経験は浅いが——俺が援護するし、こいつ自身、人の血は吸っていないとはいえ立派な吸血鬼だ。二人でじゃれ合っていて、時々「がおー♪」などと牙を剥く真似をしてみせるところなんぞ頼もしい限りだ。柴犬の子どもを育てている気分になるな。

だからジジイも賭ける価値があると判断した。もし取り逃がしても致命傷にはならないし、成功すれば本番がだいぶ楽になる。

つまり、俺と天野にとっては、今夜が実質的な正念場ということだ。

吸血鬼の足音が近づいてくる。

狙い通り、まっすぐに俺と天野が待ち構える納屋——WRを停めたのとは別の封鎖地点に近い方の建物だ。戦闘開始前に既にこっちに移っておいた——に向かつてきているようだった。

事前に、農場内の住居には一家の生活音に聞こえるように録音した音源を配置しておいた。

今頃、土屋さんの遠隔操作で「今、何か聞こえなかった？」「……銃声？」「ねえ、誰か見えてきて」などというふうなもつともらしい音声再生されている頃合いだろう。

だから俺は、妖刀を振り下ろす途中で咄嗟に目標を変え、刃の向きを切り替えて、心臓ではなくそいつが肩にかけていたポーチ、その背負い紐を断ち切った。

ついでに先走った切っ先がコートの脇腹をわずかに切り裂き、かすり傷をつける。

たちまちそこから吸血鬼の体内に村正の妖気が流れ込み、高圧電線に触れたようにそいつを痙攣させつつ、絶叫させた。

死なせてはまずいので、美名瀬の時のような最大出力にはしていない。——心臓を破壊した時に、その再生を一時的に阻害できる程度だ。それでも傷口に感じる痛みは頸椎を砕かれた時以上だろう。

だがそいつは激痛に身悶えしながらも、ポーチが地面に落ちたのを見てさっと顔色を変え、即座に拾い上げようと手を伸ばしかけた。

そこに天野が襲い掛かる。

「お前の相手はこっちだよ!!」

六尺半の長棒を両手で振り回し、叩きつける。慣れていないとかえって危なっかしいので刃物は持たせていない。だが吸血鬼の臂力ならばただの棒切れでも十分な威力だ。

柔術の鍛錬の後、追加でジジイに仕込まれた——実は幼い頃にちよっとかじってはいたらしい——棒術で、金属で補強された一方の端部を敵吸血鬼の後頭部に一閃。それを相手が咄嗟に身を屈めて躲すと、あらかじめ予測していたように瞬時に棒を旋回させて切り返し、もう一方の端部ですくい上げるように腹腔をえぐって、弾き飛ばす。

重量があるようにはできていない吸血鬼の体が軽々と宙を舞い、長い髪をなびかせながら反対側の壁まで吹っ飛ばされて、木板を砕きながらそこに叩きつけられた。

天野は地を蹴って追い打ちをかけ、体を起こした敵吸血鬼と打ち合いを始める。

おかげでその間に俺は奴が落としたポーチを拾い上げ、中身を検めることができた。頼りになる相棒がいるとこういう丁寧な戦運びができていい。

予想通りそこには瓶入りの人血がたっぷり詰まっている。

おそらくほかの地域から持ち込み、この街のねぐらの冷蔵庫か何かに保管していたものを仲間の下へ届ける途中、道路の封鎖に遭い、ほかの物資は捨ててもせめてこれだけはと持ち出したのだろう。

貴重な証拠品だが、奪い返されて戦闘中に回復されたら嫌なのでポーチを逆さにしてばらばらと地面に落とした後、ブーツの靴底で踏み潰し、瓶ごと砕いて飲めないようにしてしまう。土がむき出しの地面と、そこにまばらに散らばっていたまぐさに人血が沁み込み、濃厚な血臭が納屋の中に広がっていった。

臭いに気づいた吸血鬼が、天野の棒と素手で打ち合いながらはっとこちらを振り向き、

「そんな……ッ」

と、絶望的なうめきを漏らした。

正直、まだ何本か衣服の中に隠している可能性も考えないではなかったんだが、あの反応を見る限り心配しなくても大丈夫かもしれない。意外と迂闊な奴だ。

だが、これでおそらく目的の一つは達成したことになる。

血液も、それ以外の物資も子孫たちの下には届かない。山の中にも多少の蓄えはあるんだろうが、次にいつ補給できるか分からないとなると普段よりも節約して食べないといけない。

吸血鬼たちはこちらがいつ決戦を仕掛けるつもりか知らないからだ。物資の補充さえあれば腹いっぱい食えた飯を、明日のために半分残しておかないといけないとなれば、少しは体力を落としてくれるだろう。特に吸血鬼にとって血を失った影響はでかい。

後は、こいつをゆっくりと生け捕りにして、情報を引き出すだけだ。

「天野！」

「うん！」

後ろから駆け寄りながら呼びかけると、天野はタイミング良く横蹴りに地面を蹴って敵の正面を譲り、俺と入れ替わった。

人血を飲んでいない天野は、敵吸血鬼と比べて決して体力面で秀でているわけじゃない。ずっと打ち合いを続けさせれば押し負ける。誰かが適宜代わってやらないといけない。

天野の背中の方から現れた人間の女の姿をした化け物、そいつに肉迫し、けたたましい哄笑を上げ続ける妖刀を袈裟斬り、そこから切り返して薙ぎ払いと続けざまに浴びせかける。

敵は分厚い狩猟用ナイフを腰の鞘から引き抜き、こちらの連撃を立て続けに打ち払った。さらに別の手に鑢付きの特殊警棒を握る。二刀流がしたいらしい。

俺はその二つの得物と切り結びながら、敵を誘うように少しずつ後退した。

そうやって相手の背後の空間を広げてやると、そこに回り込んできた天野が入り込む。

これで俺たちの体力の消耗は半分だ。

絶对的に有利な態勢を作った上で、俺と天野は前後から一斉に切り掛かった。

こちらの妖刀を躲し、長棒をいなす、吸血鬼の表情に濃い焦りの色が浮かぶ。

銃撃に追い立てられて、目についた建物に逃げ込むと、そこに討伐屋が待ち構えていた。さすがにもうこれが畏だと気づいただろう。

別に名乗ったわけではないが、吸血鬼に特効のある武器を持ち、真っ先に吸血鬼にとっての回復アイテムである人血を奪ってきた。

そういうことをするのは討伐屋だけだ。

妖刀の一撃は食らうわけにはいかない。負傷したら最後、回復できない。

棒による打撲は回復できる。だがそのたびに体力を消費する。

そして体力を回復させる唯一の手段である瓶詰の人血はもうない。

追い詰められた吸血鬼は鋭い叫び声を上げると、渾身の力でナイフと警棒を振り回して俺と天野の得物を弾き、その隙に踵を返して真横に駆け出した。そして壁の手前で跳躍、全身で窓

をぶち破って外へと飛び出す。

「信ちゃんッ——！」

「天野、今のうちに飯食っとけ」

咄嗟に追いかけてようと腰を上げた天野を押さえ、俺はそう指示した。

「う、うん」

戦鬨の興奮で間食を取ることを忘れていたらしい天野が慌てて腰のポーチからブラッドソーセージを取り出し、ヘルメットの前方バーを開けて、女の子座りで地面に座りながらもりと頬張って、牛乳で流し込む。溶き卵も飲んでいた。ロッキーマイだが、新鮮な生卵は吸血鬼にとって良い血液代替食品なので、ここに来るまでWRのクーラーボックスに入れて持ってきておいた。

俺もその隣で吸血鬼の出ていった方を見張り、遠ざかっていく気配を追跡しつつ、軽く水分を摂って休憩する。

焦って追いかける必要はない。どうせ敵はこの農場からすぐに逃げ出すことはしない。

そしてこういう場合、消耗が激しいのは、こちらがいつまた仕掛けてくるか分からない敵の方だ。

こちらはじっくりと相手を追い詰めていけばいいのだ。

『阿曇くん、そこから飛び出してきた目標の姿を捉えた。北東の車庫——A車庫に逃げ込んだみたいだ。農場を出る気配はなかったから、銃撃はしていない』

「それでいい。引き続き監視してくれ」

果たして、上空を飛ぶ赤外線・暗視カメラ付きドローンから敷地全体を見ている土屋さんの声が耳元で響いた。

農場から逃げ出そうにも、既に四方を固められている。吸血鬼はそう判断したのだろう。鋭敏な感覚で、敷地の外周に沿って配置された射撃班の体温、鼓動を捉えたに違いない。

いつかは脱出しないとジリ貧だし、こちらは五十人程度の普通の猟師や普通の警官が普通の銃を担いでいるに過ぎないので、強引に突っ込めば突破することもできるはずだが、吸血鬼はまだそう決断できない。

吸血鬼はこちらが戦力を出し惜しみしていると知らない。こちらが明後日に決戦を決めたことを知らないからだ。

だから罠を張った以上は、それなりの戦力を揃えてきたはずだと考えてしまう。

農場を囲む戦力の大半は普通の人間のように見えても、その中に何人か討伐屋が混じっているかもしれない。さすがにそこまでは吸血鬼の感覚でも区別がつかない。

撃ち込まれる銃弾は、当たるまで普通の銃弾か、真言を刻んだ——一撃で吸血鬼の動きを止めてしまう——対化け物弾かは分からない。最初に首に食らった一発は通常弾だったようだが、それは本当に、偶々運が良かったただけかもしれない。次は分からない。

そしてそれを実際に当たってみて確かめるのは嫌だ。もし対化け物弾だったら、一発もらった時点で「詰み」だからだ。

だから奴は、いよいよとなるまでは農場に留まるしかないのだ。

ぎりぎりまで留まって、どうにかしてこちらの隙を探り出す——奴の今の思考は、そんなところだろう。

「食い終わったか？」

「うん」

しばらくして尋ねると、天野はこくりとうなずいた。

その頬に牛乳がついていたので、親指でそっとぬぐい取ってやる。

天野は黒っぽい防刃スーツ姿で「えへ」とくすぐったそうに、しかし嬉しそうに笑った。

親指の腹に触れた彼女の頬っぺたは、相変わらず突きたての餅のようにふわふわでやわらかかったので、触れさせてもらった俺も嬉しくなってしまった。業務中なので表情には出さないが。少ししか。

「じゃあ仕事再開だ。楽にやろうぜ。どうせこっちはもう半分勝ってる」

「うん！」

さっきまでよりもずっと緊張のほぐれた笑顔で、天野は元気良くうなずいた。

動き出したところでふたたびインカムから土屋さんの声が響く。

『阿曇くん、たった今警察から連絡が入った。目標のねぐらに捜査班が突入したようだ。冷蔵庫三台に大量の人血を発見、すべて押収したらしい』

「いい知らせだ、土屋さん」

『それと……吸血鬼が乗っていた軽自動車の中を確認した。食料や着替え、タオル、ほか生活雑貨。そしてクーラーボックスいっぱい瓶詰の人血。君に言われた通り、瓶はすべて破壊しておいた』

「了解。こちらもこれからA車庫に突入する」

『了解。気をつけて』

そして俺たちは納屋を出て、六十メートル程離れた車庫に入った。

ガラガラとシャッターを上げると、中にはトラクターなどの農耕車が複数台、通路の左右に並んで収められていて、入り口から入り込んできた星明かりを浴びて地面に薄く影を落としている。反対側の突き当たりに、そこから女吸血鬼が入り込んできたらしい窓が開きっぱなしになり、静かに夜風を受け入れていた。

俺は天野に背後を警戒してもらいながら通路を進んでいった。

車庫だけでなく倉庫としても使っているらしく、車両の代わりに干し草やワラが山積みになれている仕切りもある。

隠れるのに悪くはなさそうだが、あいにくどこにも吸血鬼の気配はなかった。

インカムで土屋さんに呼びかける。

「阿曇だ。A車庫に吸血鬼はいない。既にどこかに出ていったんじゃないか？」

『そんなはずは——いや、待ってくれ。その真下に用水路が通っている』

バサバサと土屋さんが紙の資料を広げる音が響く。

『姿を隠しながら、住居まで移動するつもりだったのか……？　今、奴が格子蓋を開けて出てきた。気が変わったのか——走って家畜小屋に向かっている』
なるほど、と得心する。

これが討伐屋の罠だと分かったので、方針を変えてせめて住人を人質に取るか、破壊された瓶詰の血の代わりにそのうちの誰かの血を吸って体力を回復させようと思ったのだろう。

だが討伐屋の罠なのだから、住人の気配や物音もはじめからフェイクだった可能性が高いと途中で気づいた。

敵はまだ混乱している。チャンスだ。

「土屋さん、吸血鬼にライフルを五発ほど撃ち込んでくれ。当てる必要はない。ちょっと焦らせてやれば十分だ」

『了解』

応答から一呼吸おいて、ガン、ガンと銃声が響く。

『今、D班が射撃した。目標の足元に着弾、目標が針路を変更した。だが家畜小屋に隠れる予定に変更はないらしい。回り込むように動いて、引き続きそちらに向かっている。今、到達。壁に張り付いてD班の方を伺い——窓を割って、中に入った』

「了解。ここからはふたたび射撃は吸血鬼が農場を出ようとした場合のみとする。すべての射撃班にそう通達してくれ」

誤射を避けるためにそう告げて、俺は天野と車庫を出た。

雲の切れ間からの星明かりが照らす、くるぶしまでの高さの牧草地の中を、妖刀と長棒、それぞれの得物を携えて二人、家畜小屋の方へと歩いていく。

東西に長い家畜小屋は、その大部分が成牛の牛舎で、西の端っこが鶏小屋になっている構造をしている。吸血鬼はその鶏小屋側から侵入したらしい。

西の突き当たりの壁の窓が割られているのを確認し、そこから南側に回り込んだところ（D班から見えている）にあるドアから中に入った。

鶏小屋に吸血鬼の姿は既になかった。牛舎側の引き戸が開いている。中からそちらに移動したようだ。

立て続けの侵入者に、壁の両脇の鳥棚から、鶏たちが何だ何だと首を突き出してはこちらを見て、盛んに鳴き声を上げている。

急な作戦だったので、すべての家畜を安全な場所に逃がしている余裕はなかった。一応、牛については、戦場になる可能性の低かった農場の隅の方、子牛用に使われている別の牛舎に移

動させてあるが、鶏たちは適切な避難場所がなかったのでそのままだ。驚かせてしまつて悪いが我慢してもらうしかない。

大量の鶏の甲高い鳴き声と視線に見守られる中を牛舎側へと向かう。

追いかけてこのようだが、先の銃撃で相手は心理的にまた一つ、追い詰められただろう。つまりここで仕掛けてくる可能性が高い。

牛舎に入った。

牛を移動させてもなお残る動物臭がきつくなる。

通路の左右の柵の向こうには、居住者のいなくなった敷き草の住まいがいくつも並んでいた。周囲を警戒しながら天野とともに進んでいく。

牛舎の中程まで来た時、それは起こった。

通路の側に積まれた堆肥の山が突然盛り上がり、中から吸血鬼が飛び出してきたのだ。

俺ではなく、後ろをついてきていた天野を狙つて。

最初に挟撃を食らった敵吸血鬼が、わざわざ自分から俺たちの間に割って入ってくるとはこのとき予想していなかった。敵も土壇場で意地を見せたということだろう。だから俺は、反応が一瞬遅れてしまう。

「天野、左だ！」

「――!?」

天野は驚きながらも咄嗟に体を捻って躲したが、敵は鋭い爪で彼女の腰のポーチを引き千切り、それを牛舎の窓目掛けてぶん投げた。

「わ、わたしのごはんがー!!（▽ムム）

ガラスが砕け散る音が響き、吸血鬼の膂力で彼方へと吹っ飛んでいくウェストポーチを見て天野が悲痛な叫びを上げる。

俺は内心臍を噛んだ。

まずいな、油断した。帰ったらジジイに大目玉だな。

人血を摂っていない天野は敵吸血鬼と比べてガス欠を起こしやすい。すぐに補給ができなくなったのは痛手だった。

衣服に回復アイテムを分散して携行させておくべきなのはこちらの方だったか、と若干後悔する。もつとも人血と違って、普通の飯で吸血鬼の体力を回復させるのにそれなりの量が必要になる。作業着のポケットに、他の物品と一緒に入れられる程度の食事を持っていたところで、どのみち大した違いはなかっただろう。

ここからは制限時間付きだ。

「取り押さえるぞ！」

「う、うん！」

二人で妖刀と長棒を構え、堆肥まみれの吸血鬼に左右から襲い掛かる。

二対一で有利なはずの時間は、長くは続かなかった。

敵吸血鬼も天野が同族だと気づき、腰のポーチに携行食を入れてしていると踏んでいたのだろう。それを奪ったからには時間稼ぎに徹して、なかなか隙を見せない。

果たして敵のその努力が報われる時が来る。

「はう。お、おなか空いたよう」(๖<๖๖)

俺とともに吸血鬼相手に激しい打ち合いを演じていた天野が、目を回してへたり込んでしまった。

「天野、お前は下がってろ！ここからは俺だけでやる！」

「う、うん……」(๖๖)

叫ぶように言って、後退を援護するために吸血鬼に向かって村正で斬りつける。

しかし相手の方もようやく天野を戦線離脱させ、一対一に持ち込むことができたのだ。ここが攻め時と残った力を振り絞り、それまでの防御を固める姿勢を一変させて、ナイフで、特殊警棒で、時には脚や爪まで使って矢継ぎ早に攻撃を繰り返してくる。

それを妖刀で打ち払い、受け流し、反撃の一撃を振るいながらも、敵の攻撃のあまりの激しさに、俺は次第に防戦一方に追い込まれていった。

——ここはいったん引き際だな。

そう判断した。

戦力が半分になった状態で無理に戦い続ける意味はない。WRまで戻れば荷台に予備の携行食がある。それを食べさせれば天野は復活する。一度撤退して、体勢を立て直してからふたたび挑んだ方が良い。

俺が吸血鬼の相手をしている間にまずは天野を後退させる。そして隙を見て自分も離脱する。自信はある。吸血鬼ならざる俺でも、短時間であれば、完全体の吸血鬼を相手に一対一で互角にやり合える。安全に、傷一つ負わずに撤退してみせる。

問題は、そのために手札を一枚消費する形になってしまうことだ。

その手札は一度切るともう使えない。今日中には回復できない。切り札を失った状態でふたたび挑んだとして——また何か不測の事態が起きた時、俺は無事切り抜けられるだろうか？

……ここが今夜の勝敗分岐点だったかもしれない。

暗い気持ちで、そう思った。

負けたとは言えない。少なくとも血は奪ったからだ。情報を引き出すのは余禄に過ぎない。尋問したところでこいつが素直に吐くとは限らないし、最悪なくても何とかなる。無理だと思えば撤退しても構わないと、事前にジジイに確認を取っている。

だが完全勝利も見えていた。途中までは、すべてが順調に運んでいたのだから。

自分の一瞬の油断と慢心でそれを取り逃がしてしまった。その現実はそのなり以上に重い。天野もはじめての本格的な戦闘で本当に良く戦ってくれていた。できることなら、この正念

場を上首尾に終えて、自信をつけさせてやりたかった。

だが、やむを得ないか――

そんな風に諦めかけた時だった。

「信ちゃん……信ちゃん……」

少し離れたところで、力なく地面にへたり込んでいる天野。彼女が、か細い声で俺の名を呼ぶのが聞こえた。

次の瞬間、場違いな程にけたたましい鳴き声と騒音が牛舎の内部に響き渡る。

どうやら吸血鬼が建物に押し入った時に、誤って鶏小屋の柵を壊していたようだ。物々しい気配にパニックを起こした鶏が一匹、隣部屋のケージから脱走し、こちら側に飛び込んできたのだ。

天野の視線が、もう夜明けが来たかのような勢いで甲高い鳴き声をかき鳴らしながら走り回る鶏の姿を捉え――その瞳にギリリと光が宿る。

そして側に落ちていた農場のナタを素早く引つ掴むと、こちらが止める間もなく、

「農家の人、ごめんなさい！ いただきます!!」

と叫びながら、吸血鬼の臂力で一閃。激しく動き回る鶏の首をパン！とまるで据え物切りかのように楽々刎ね飛ばし、頭部を失ってなおバタバタと逃げ回ろうとするそいつの体をガシッと両手で掴んで、逆さにして頭上に捧げ持つと、切断面からドボボボと勢い良くこぼれ落ちる大量の鮮血を大口を開けて飲み干していった。

鶏一羽分の血液が、瞬間にその首なし死体から失われ、天野の口に吸い込まれていく。

最後に、彼女が頬をいっぱい膨らませて含んだものを、ごっくん、と飲み干す音が、静まり返った牛舎の中に妙に大きく響いた。

「……動物の血を生で飲んだりなんかしたらダメだろ！ 吸血鬼だからって食あたりを起こさないわけじゃないんだぞ!？」

「ふえーん！ だってだって、おなか空いてたからあーッ!!」

俺が思わず入れた突っ込みに天野は泣き言を返した。

彼女の突然の奇行を、思わず俺と一緒に固まって凝視してしまっていた敵吸血鬼は、それで我に返ったように叫び声を上げてそちらに襲い掛かっていった。

まずい事態になったことに気づいたのだろう。

だが敵の突進を見た瞬間、天野の体が先程までの消耗が嘘のように俊敏に跳ね上がり、振り下ろされた警棒をサイドステップで躲けて、お返しとばかりに自分の長棒を雷撃のごとき鋭さで水平に一閃させた。

多少お行儀が悪くはあったが、鶏の生き血を飲んだ効果は確かに大きかったようだ。

完全に体力を回復させた天野の一撃は、警棒とぶつかるたびに大砲の射撃のような重たい衝撃音を打ち鳴らしてその威力を見せつけ、受け止めた吸血鬼の顔に、もう危険ではないと思い

込んで彼女を放置してしまったことへの後悔の念が浮かぶ。

こうなると敵のもくろみは崩れた。立て続けの天野の棒術の連撃。そこに俺も加勢し、敵はふたたび追い詰められていく。

そしてついに村正の切っ先が、そいつの回し蹴りとすれ違いざまに足首を捉え、それを熱したバターのように易々と切り飛ばした。

女吸血鬼は激痛に悲鳴を上げ、もんどり打って体勢を崩す。

そして自分が攻勢に出る最後のチャンスだと思ったのだろう。右足を失ってなお両手で地面を掴み、腕の力と残った左足の脚力で地面を蹴り飛ばして、奇声を上げながらこちらへ弾丸のような勢いで飛び掛かってきた。

例のごとく吸血鬼特有の訳の分からない高速機動。

手傷を負わせたとはいえ、敵の蹴りを躲しながらだったおかげで、こちらも妖刀を振り抜いた状態で体勢を崩している。今から重たい刃を引き戻しても迎撃には間に合わない。

だから、引つかかってくれると思っていた。

俺は両手を柄から離して、村正を放り出した。

そして顔に掴みかかってきた敵の鋭い爪の生えている右手首、それをこっちの左手で掴み取りつつ、同時に、念のため右の掌底を敵の顎下から突き上げて口を塞いでやる。そのまま右手で奴の襟首を握り込んで、左右のステップで自分の体を反転させて相手の懐に潜り込みながら、下から腰を一気に突き上げた。

たとえ片足でも、吸血鬼の速度はやはりさすがだった。本人が驚愕の叫びを上げる暇もなく、飛び掛かってきた勢いのまま猛烈な速さでそいつの体が回転し、こちらの筋力を上乘せして背中から地面に叩きつけられる。

その瞬間、対戦車地雷が起爆したかのような轟音が生じた。

吸血鬼の口から吐血が噴き上がり、激突点を中心に地面がクレーターののように陥没して、無数の亀裂が走る。

そして吸血鬼の動きが、一瞬止まった。地面に叩きつけられた衝撃で全身の関節がばらばらになったのだろう。

妖刀による傷ではないのでそのうち回復されてしまうが、実は脱臼は吸血鬼にとって四肢を切断されるより治りが遅い。組織そのものが大きく破壊されたわけではないため、肉体が自身自身の損傷に気づくのが遅れるのだろう。

その隙に俺は素早く上から飛び掛かり、そいつの体をひっくり返してうつ伏せにさせて、両腕を背中側に強引に捻じり上げる。

一手遅れて関節を修復した女吸血鬼が叫び声を上げ、拘束を逃れようと力任せに暴れ出した。

だが、外さない。

ここが手札の使いどころだ。

俺は短く息を吐き、全身の神経を手集中した。自分の両腕の筋肉がめきめきと盛り上がり、逃げ出すために持ち上がるようにしていた吸血鬼の腕を、ふたたびその背中に力づくで押し付ける。

吸血鬼の叫びに、人間の手を振りほどけないことへの困惑と混乱が混じった。

これが俺の「切り札」だ。短時間だが、人血を吸った吸血鬼に匹敵する筋力を出せる。

直近では天野との最初の鍛錬で、彼女の突進を躲すために使った。

とんでもなく疲れる上、一度使うと数日は回復しないため、連発はできない。万能とは到底言えない技だが、使いどころさえ間違えなければ、大抵の怪異を仕留めるのに十分な身体能力を発揮できる。

「天野、手錠!!」

俺は女吸血鬼の抵抗を片手で押さえつけながら、もう一方の手を背後に回して叫んだ。

「うん!」

天野の元気の良い声が応じた。

この体勢なら妖刀を取ってきて心臓に刺し込むより、そっちの方が早い。

それに村正では、妖気を抑えているから十中八九大丈夫だとはいえ、うっかり殺してしまう可能性がないではない。どうせなら確実な手段を選ぶべきだ。

天野が素早く靴から、行動阻害の真言を刻んだ、吸血鬼でも引き千切れない強度の高張力鋼製手錠を取り出し、手のひらに押し付けてくる。

俺はそれを掴み、軽く勢いをつけて相手の手首に打ち付けた。

鋼環の半分が勢い良く回転し、甲高い音を立ててその顎の内に獲物を咥え込む。

もう一方も残った手首に嵌め、敵の抵抗を完全に封じ込めた。

こうして、この夜の正念場は終わった。

その後、土屋さんたちに連絡して吸血鬼用の檻を載せた軽トラを農場に乗り入れさせてもらい、そこにこいつを押し込んで、俺と天野はようやく一息つくことができた。

成果は上々と言ったところだ。

敵の物資輸送を阻止し、調達係を生け捕りにできた。血は破棄ないし押収し、子孫どもに合流される恐れももうない。

途中、俺の判断ミスによるつまづきはあったものの、天野の機転で持ち直している。

天野は初陣にして本当に目覚ましい活躍ぶりだった。作戦がすべてうまく行ったのは彼女のおかげだ。後で褒めてあげないといけないだろう。鶏の生き血からカンピロバクターとかに感染していないか確かめてからだが。

そんなことを考えながら、家畜小屋の外の壁際に腰を下ろして吸血鬼の輸送を待っているう

ちに、こちらの肩を枕にしてすやすやと眠り始めてしまった天野の髪を撫でていると、土屋さんが近づいてきて、保留中のスマホを差し出した。

警察からだった。

保留を解除し、耳に当てる。

「刑事さんか？ 物資調達係を捕まえた」

『こちら美名瀬の「親」を確保したところだ』

朗報を告げる刑事さんの声に、それとは裏腹な暗さが滲んでいることに俺は気づいた。その理由はすぐに分かった。

『子どもだった。八歳の、な。猟師の家の子で、熊狩り用の檻に入れられていた。側にはその親——人間の父親の遺体が転がっていた。感染しないように、腕にチューブを刺して——どうやら自分の血を飲ませていて、うっかり飲ませすぎてしまったらしい』

「……そうか」

そういえば刑事さんにも子どもがいたな、と思い出す。我が子に人を襲わせないために、人に我が子を殺させないために、自分の血を飲ませて死んでいった父親の姿に、自分を重ねてしまったのかもしれない。

残念ながら刑事さんには子どもを守るために自分の命を差し出すチャンスはなかった。当時は別の町で発生した連続殺人事件の捜査で忙しく、この町をずっと離れていて、息子さんに迫る危険に気づいた時にはすべてが終わっていたからだ。

あの時は俺の親も死んだばかりで、刑事さんと知り合ったのはそれがきっかけだった。刑事さんがまるで、親戚のおじさんのように接してくれるようになったのも、親の死^れがきっかけだ。諸々汲み取って、俺には刑事さんの後悔を癒すことも否定することもできないから、せめてなるべく気楽そうに言ってみせる。

「まあそういうこともあるさ。あまり気にするな」

『……違うぞ、阿曇』

電話の向こうで苦笑混じりにため息を吐く音がした。

『そういうセリフはな、大人が言うんだ。俺が。子どもであるお前に、な』

「何だよ。化け物に関してはこっちが専門家だぞ？」

いいかげん、子ども扱いは止めてほしいもんだ。

せつかくの気遣いを無にされたことも込みでぶりぶり怒りながら、スマホを土屋さんに返し、天野の頭を抱いて夜空を見上げる。地面に置いた妖刀が、傍らでカタカタと物騒な物音を立てて笑っていた。

いつの間にか雲はすっかり晴れていた。俺たちの頭の上には、この土地を360度囲む山々の黒い稜線までをびっしりと埋め尽くすような満天の星空が広がっている。その中を、天の川が東から南へとおぼろげな弧を描く。

良い夜だった。

その後、俺たちは家に帰り、いつものように二人で抱き合ってぐっすりと眠った。

目覚めた時にはもう昼過ぎ。台所にジジイの書き置きがあり、『今日は一日ゆっくりしていろ』とのこと。『良くやった』とも。

少しくすぐったかった。

ジジイは明日に迫った作戦の準備と打ち合わせに出ているらしい。警察も今頃大忙しだろう。刑事さん辺りは仮眠を取る暇もないに違いない。

子どもである俺たちは、言われた通りのんびり昼飯を食って、腹がいっぱいになると幼なじみ同士並んで畳の上で横になっていたらと午睡を取り、そして暇になって道場に繰り出した。軽く体を動かしておく気になったのだ。

「えい！ えい！ やー！」

たっぷり寝てたっぷり食った天野はもうすっかり元気いっぱいといった様子で、打ち込み用の鉄柱に帯をかけて、また根元から引き千切りかねない（一応ボルトの数を増やして補強はしておいたのだが）勢いで背負いの練習をした後は、俺相手に乱取りも始める。さすがは吸血鬼といったところだろう。

それに付き合われる俺の方と言うと、昨晚は『力』を使ったこともあってさすがに若干の気だるさが残っていないではなかったが、態度には出さない。

俺はずっと天野にとって役立つ存在であり続けたいのだ。そのためには立ち止まっている暇はない。

そして二人で組み手を争い、投げ技に寝技にどたばたと絡み合い、最後は汗まみれになって大の字に転がる。

「はー、また負けちゃった。信ちゃん、強いから全然勝てないよう」

天野は肩で息をし、大きな胸を激しく上下させながら、なぜかそれがちょっと嬉しいというような表情で汗を滴らせ言った。

「お前なあ、こっちもけっこう苦労してるんだぞ？ 吸血鬼の腕力に付き合うの大変なんだからな」

「えへへ、感謝してます」

軽く文句をつけると、天野はくすぐったそうに肩を揺らした。

かと思うと、ごろごろと畳を転がってきて、ぴとりとこちらに乗っかり、体を密着させる。

お互い分厚い胴着を着ていても、その女らしい体の凹凸がはつきり伝わってきた。

そして黒曜石のような煌めきを宿す透き通った瞳でじつと至近距離からこちらを見つめながら、ふたたび可愛らしい唇を開く。

「……信ちゃんも、普通の人より力、強いよね。前からすごいな、って思ってたけど、吸血鬼

になった今はもつとはつきり分かるよ」

すりすりとお機嫌な猫のように俺の胸板に頬を寄せてくる。

「えへへ。信ちゃんはこの力を世の中のために使ってるんだねえ。えらいねえ」

その小さなやわらかい体を、俺はたまらず両腕の腕力でぎゅっと抱きしめた。

天野の玉のような肌と、艶やかなポニテと胴着からは、香^{かぐわ}しい汗の匂いが立ち上っていて、それを胸いっぱい吸い込んで堪能させてもらおう。

「はうう……信ちゃああん……」

自分からひつついてきたくせに、匂いを嗅がれるのは恥ずかしいらしい天野が可愛らしく頬を染めながら、それなのに決して嫌がってはいない感じに声を上げた。

こんなの我慢できやしない。

それから二人で繋がり合った。道場でおっ始めてしまうのだけはどうにか耐えたが（畳にあれの染みを残したりでもした日にはジジイに大目玉を食らわされてしまう）、道着姿のまま部屋に着くなりお互いの唇を貪り合い、着替えてもいなければ、シャワーも浴びなかった。

激しい運動をした直後の天野の体は体温が高く、舌を這わせると濃厚な汗の味がして、それがまた俺を興奮させた。

硬く勃起したこちらのものを何度も何度も奥まで突き入れると、そのたびに天野は形の良い尻を震わせて喘ぎ、良く感じていた。

お互いすっきりした後は二人で一緒に風呂に入った。

「ざっぶーん」

俺が先に漬かっている湯船に、髪を洗い終えた天野が波しぶきを立てながら入ってきて、そのままさっきまで繋がっていた時のように腰の上に跨る。

ふたたび唇を重ね、舌を絡め合う。

「……ねえ。吸血鬼と人間って、子ども、できるんだよね」

あたたかく心地良い湯の中で、しばしの間こちらにもたれかかって無言でお互いの存在を感じ合っていた時、ふと天野が思い立ったように言った。

うなずいた。それは間違いないし、だからこそ今ここに天野がいるのである。

「えへへ、そっかあ」

天野は上体を起こしてこちらを見下ろし、自分のつるりとした下腹を撫でながら、嬉しそうに笑った。

「そうなんだ……」

風呂上がりに軽く食事を取り、天野の採血を済ませる。

また針を怖がってふるふるしていたが、頑張って励ました。

結果は良好そのもの。吸血鬼化の進行度も、食中毒の恐れも何も心配なかった。明日の再封

印にも問題なく参加できるだろう。

夕方になって、警察から電話があった。

吸血鬼が口を割りそうだとのこと。ただし条件を出してきた。

どうやら、うちの天野と話したがっているらしい。

日が落ちるのを待って、俺と天野は対化け物用の収容施設がある県庁所在地の拘置所に向かった。

普段着でWRを駆るのは何だか久しぶりな気がした。ヘルメットは当然として、肘や膝に普通のプロテクターもつけてはいるが、堅苦しい防刃具や作業着とはやっぱり解放感が違う。

背中に天野の愛くるしい体温を感じながら国道と県道を乗り継ぎ、いったん中心部に入ってそこを通り抜け、ふたたび高層ビルの頂の群れ——といっても東京とか大阪とかの大都市に比べれば慎ましやかなものだが——から遠ざかる。

目的の拘置所は、山裾の田園の中にぼつんと存在している。

入っているのは大半が起訴された通常の人間の被告人や執行を待つ死刑囚だが、化け物絡みの事件の場合は、被疑者がそうだと確定した時点でここに移されて取調べを受ける。そこから先は警察ではなく法務省の管轄だ。

力の弱い化け物なら警察署の留置所に入れたまま捜査を進めることもできるが、強力な怪異の場合、妖気を抑える妨害装置だとか、万が一暴走しても閉じ込め続けることのできる頑丈な防護壁だといった設備がある場所に拘束しておかないと、何かの弾みで署が全滅することにもなりかねない。

そういう設備は人里近くには作りにくいのだ。どのみち化け物が裁判を受けることはない。人間にとって脅威だと判断されれば、通常は殺されるか、山に返されるかのどちらかなので矛盾はないらしい。

弁護士が争うなら、そいつが化け物だと決まる前の段階だ。

どこか威圧的な雰囲気のある四角い建物に入り、刑務官に案内されてエレベータに乗り込む。地下へとしばらく下り続けると、俺と天野の前の扉が開き、何度か鉄格子を潜った後、面会室に着いた。

分厚いアクリル板の向こうに吸血鬼は現れた。昨晚、俺と天野が捕らえたばかりの女吸血鬼

――
簡素な無地のシャツを着て、軽く化粧をしている。落ち着いているらしく、戦った時と違って髪を振り乱しておらず、敵意や憎悪で表情を歪めてもいない。戦闘中は気づかなかったが、こうして見ると、もちろん天野には数段劣るが、それなりの美人だと言えた。女としては背の高いモデル風だな。

アクリル越しに向かい合って腰掛け、しばらくお互い何も言葉を発しないうまま沈黙して過ご

した後、やがて向こうが口を開く。

「何か、訊きたいことはある？」

自分から呼びつけておいて女吸血鬼はそう言った。

怪訝に思わないでもなかったが、その方が話しやすいならと素直に乗ることにする。

「そうだな……まず天野と面会させれば、情報を提供してくれると聞いたが」

おかげで天野は俺の隣で緊張してカチンコチンになっている。

寝る前にもう一回ぐらいできるかと思っていたのもおかげで破算だ。

そうしてくれた理由を訊かないといけない。

「ええ、何もかも話すつもりよ。仲間の人数や居場所、それぞれの動機や性格、そして能力も」
女吸血鬼は美人らしい声で答えた。

つまり、子孫たちの情報は丸裸になるということだ。物資が届かなかったことで潜伏場所を多少変えるかもしれないが——それ以外は動かない。討伐屋たちは相手の特性に合わせて銃弾に刻む真言や妖刀の拵えを変え、最も効果的な装備で戦いに臨めるだろう。

明日の戦闘は、こちらが絶対的に有利になる。

「なぜ仲間を売る気になった？ 『始祖』の復活に立ち会うために危険を冒してわざわざ集まってきたんだろうに。何か心変わりでもあったのか？」

女吸血鬼は長い髪で表情を隠すようにうつむく。

「……正直ね、何だか、もう疲れていたの。——ずっと前から。吸血鬼であることを隠しながら、人間社会に紛れて暮らすことに……」

擦り切れてしまった者特有の底知れぬ暗さを感じさせる声で続ける。

「どこまで逃げても教会の連中は追ってくる。この国にいる限り、直接攻撃される恐れは少ないけれど——それでも、絶えず監視に晒されて、いつ頭のおかしい狩人^{ハンター}が襲ってくるかも分からない。毎日、目を閉じた次の瞬間には心臓に杭を打ち込まれているかもしれないと怯えながら眠りについて、そして日差しを浴びることのない夜中に目を覚ますのよ」

ここで言う狩人^{ハンター}とは、土屋さんや外村さんのような普通の動物相手の狩人ではなく、吸血鬼を専門にした——そして彼女の言う通り、ちよっと頭のおかしな奴らのことだ。

内坂の尋問中に刑事さんが言っていた通り、人間への危害が確認されない限り吸血鬼が相手であろうと戦闘用妖具の使用は許可されない。だがそれでも吸血鬼を殺したいと妖刀や真言弾もなしに普通の杭とハンマーでわざわざ危険を冒して討伐しようしたり、ルールなんぞお構いなしに、巻き添えも辞さず市街地で強力な妖具を解放したりする連中がいて、そいつらが狩人と呼ばれている。

つまり人間側から見ても犯罪者スレスレか、犯罪者そのものな奴らということだ。

動機は様々だ。身内を吸血鬼に殺されたことの復讐だったり、主に海外の吸血鬼狩り団体から支払われる高額な報酬に釣られての裏バイトだったり、単に吸血鬼を殺すこと自体が快樂だ

という連続殺人鬼^{シリアルキラー}だった。

そういう連中につけ狙われながら過ごす日々というのは、確かにそれなり以上のストレスだろう。

「そんな時、『始祖』のうわさを聞いたわ。わたしたちがこの国に存在することになった元凶……正直、なんでそんな——余計なことをしてくれたのか、ずっと分からないでいたけれど——彼女が蘇るなら……直接会って、文句の一つでも言ってやれるなら、それもいいかな、って。もうそれで終わりにしよう、って——そう思ったの」

前髪を揺らして顔を上げながら言う。

「ほかの連中も動機は似たり寄ったりよ。生きていることに疲れた奴とか、死ぬつもりで最後に一花咲かせようって奴とか。そんなのばかり」

要するに俺たちは吸血鬼どもの集団自殺に付き合わされたということだろう。

まったく迷惑な話だ。

「ああ、でも、本格的に頭のおかしい奴もいるけどね。ジュンヤは人間をたくさん殺したい快樂殺人鬼だし、亮子は革命家気取りのテロリスト。始祖が復活すれば世の中がひっくり返って、吸血鬼が人間を支配する時代が来ると本気で信じてるの。馬鹿よね、そんなわけないのに……この二人には気をつけなさい」

ふたたびうつむき、少し視線を逸らすようにしながら続ける。

「正直、一緒にいてずっと気に食わなかった。——わたしと同じであることが。どうして揃いも揃って、こんな奴らばかりなんだろう、って。だから仲間意識とか、庇おうって気持ち全然ないわ。こっちの要求が通るなら売り払ってもかまわない。仲間と言っても、所詮その程度よ」

ふとこちらを見て、不安そうに尋ねる。

「ねえ、わたしはこれからどうなるの？ 情報を出したら、人の血を吸っていても本当に殺されない？」

俺はうなずいた。

「形としては司法取引をしたことになる。捜査への協力と引き換えにお前への討伐依頼は取り下げられる。一生刑務所の中に作られた特別な一画で過ごしてもらうことになるがな。血液は必要量を飲ませてもらえるし、やることと言えば、定期的に怪異専門家が観察に来て、体調も管理されるぐらいだ」

「動物園の動物ってわけね。いや、研究所か」

女吸血鬼は自嘲気味に笑ってつぶやいた。

「少なくとも実験動物にされる心配はない」

「どうだか。ただの口約束でしょ？ 何か、そうならないって保証でもあるの？」

「ない。まあ、人間を信用してもらうしかないな」

「ふうーむ。まあいいでしょう。背に腹は変えられないわ」

女吸血鬼はつまらなさそうに息を吐いて、そして納得したのか口を嚙んだ。

俺は先を促す。

「それで？」

「なに？」

「要求はほかにもあるんだろう？」

「ああ、そのこと——」

気だるそうに言って、天野に視線を向ける。

隣で、彼女の華奢な肩がぴくんと揺れるのを感じた。

女吸血鬼は目つきを鋭くして、長い犬歯を覗かせながら、口を開いた。

「あなた、なんで人間に協力しているの？」

天野の唇が開き、何かを言おうとして、結局何も言えないまま、また閉じる。

「それが彼女の仕事だからだ」

俺は代わりに答えた。

「討伐屋が、吸血鬼を討伐するために協力し合う。何か問題でも？」

女吸血鬼の怒気を孕んだ声が返ってくる。

「ふざけないで。わたしたちが人間と共闘？ 冗談きついわ。討伐屋なら、尚のことお互い相容れない、交わってはいけない存在だということぐらい分かるでしょう？」

……はじめから、こうなる予感はしていた。

昨晚の戦闘中、こいつは明らかに天野の携行食を狙って動いたし、そもそもニワトリの生き血を一気飲みするところも見せてしまっている。血を好み、血を飲んで体力を急回復させる怪異が吸血鬼以外にも存在しないわけじゃないが——

その上で天野と話したがるということは、訊きたいのは、つまりこういうことだろう。

アクリル窓の影になっている膝の上で、守るべき少女の手をぎゅっと握る。

女吸血鬼はじっと天野と視線を合わせたまま、ふと案ずるような表情になって言葉を重ねた。

「……あなたも、吸血鬼なのよ？」

「あああう、えっとその、わたしは——」

「彼女は最近覚醒したばかりだ。それまでは人間として暮らしていた」

俺はふたたび口を挟んだ。

「俺の幼なじみでな。事件解決を少しでも手伝いと志願してくれた。討伐屋になったのは、そういう経緯だ」

「だからって、化け物に、化け物を、狩らせようとするなんて！ あなたもあなたよ。世間知らずの童貞坊やってわけじゃないんでしょう？ いったいどういうつもりで——」

その瞬間、女吸血鬼は不意に目を見開いた。まるで、自分の口走ったフレーズで答えを悟ったかのように。

なぜだか俺は、彼女の考えていることが分かるような気がした。

あの夜、人血を吸った吸血鬼であるはずの彼女が渾身の力を込めても解けなかった拘束。

『化物に化物を狩らせる』。

「……ああ、なんだ。そういうこと」

薄く紅を引いた唇がニタリと弧を描いた。

はじめて俺にも興味が湧いたといった様子で視線をこちらに向け、嘲笑うように続ける。

「何よ、化物なのはあなただって同じじゃない。単純なものよね、大王に忠誠を誓っただけでもう人間気取り？」

「——信ちゃん？」

話についていけない天野がこちらを振り返った。

「彼もわたしたちと同じってこと」

黙りこくっている俺に代わって、今度は女吸血鬼が説明してみせる。

「人知れず人間社会に紛れ込んでいた化物。いえ、人間の歴史が始まるよりもずっと前、この列島に到達した最初の『人類』と言うべきかしら」

忌々しげに表情を歪める。

「そして化物のくせに、いつのまにか人間どもの王に取り入って、その配下に収まっていた。それからのこいつらの八面六臂のご活躍ときたら、それはもう有名よ。一部は神話にまでなっているぐらい」

とびぎりの秘密、人の後ろ暗い過去を、面白おかしく告発するような声で続ける。

「当時の日本はね、稲作を始めたばかりで大勢の奴隷を必要としていたの。陸稲までなら昔から自分たちでも栽培できていたけど、水田でお米を作るには『お酒に弱い人たち』でないといけなかったから。巨大な船団を組んで、大陸まで繰り出しては、時に貿易で、時に戦争で、せっせと向こうの人間を狩り集めていった——」

アセトアルデヒド分解酵素が問題だった。

最近、中国の研究者が面白い発見をした。人体が摂取したアルコールを分解する時に発生するアセトアルデヒド、それをさらに分解してくれるアセトアルデヒド分解酵素の働きが弱い『下戸遺伝子』を持つ集団が、米の水耕栽培の広がりとともに東アジア全域に拡散していったらしいのだ。

本来、人類はアルコールを栄養源にできるように進化してきた。

冷蔵技術が存在せず、食料をそのまま長期保存できなかった時代には、穀物や果実に含まれる糖をアルコール発酵で酒に変え、そこからカロリーを摂取できることが、飢餓を免れるための必須条件だったからだ。

ところがアルコールを分解してエネルギーに変える時に発生するアセトアルデヒドは猛毒だ。こいつは人体の調整機能を狂わせ、摂りすぎると激しい頭痛や昏睡、吐き気、嘔吐を引き起こす。敵対的な野生動物の多い野外環境では致命傷だし、最悪はライオンやハイエナの手にかかるまでもなく凍死や自分のゲロで窒息死だ。このままではとてもアルコールを食料になんてできない。

だから人類は進化の過程でアセトアルデヒド分解酵素を獲得した。「毒」であるアセトアルデヒドを速やかに分解、無害化する。これで安全に酒をカロリー源にできるようになり、人類は飢餓を乗り越えられた。

そのアセトアルデヒド分解酵素を、ある時、人類の一派が捨てた。結果、そいつらは酒を飲むたびにすぐに悪酔いし、体内に猛毒のアセトアルデヒドが長時間滞留するようになった。

普通に考えれば進化の大失敗だ。

だがアセトアルデヒドは人体だけでなく、病原菌や寄生虫の類にとっても猛毒だった。本来人命を脅かすはずの微生物たちは、人体内部に滞留する猛毒に脅かされ、そこで長く生存できなくなった。

水田というのは本来、病原菌や感染症の温床だ。近代的な防疫管理が始まるまではそうだった。マラリアに住血吸虫——人工的に作られた沼地、泥濘、湿地帯である水田は、夏場の日差しによって温められ、豊富な病の源を育む。

本来の人類はそこで生存できない。体内に病原体に対抗するための毒を持たないからだ。沼地に一歩足を踏み入れれば、いずれそこに蔓延る微生物たちに体を侵され、病に倒れる。

だが、『彼ら』ならできる。

こうしてその一派は水田という環境に適応し、水稻を生産可能な唯一の人類となった。

そいつらとの戦争は簡単だった。友好的なふりをして酒を贈ってしこたま飲ませたり、宴会で酔い潰れた後を襲えば、大抵自分で立ち上がることもできない。安全に奴隷にできた。

そうなると分かっている、そいつらは水田という特殊な環境で生き残るために酒を飲まないわけにはいかないのだ。……笑ってしまう程入れ食いだった。

それが、後の時代(のち)に『弥生人』と呼ばれることになる人々だ。

奴隷は大量に導入され、国中に大量に増築された水田で働かされていった。

それによって瞬く間に経済は米への依存を深めた。穀物としての水稻の生産量と保存性は群を抜いていた。簡単に獲得できる奴隷たちの手によって水田で大量生産されるそれは、主要な食料の一つとなり、新たな通貨にもなった。だからそいつらを増やすことが経済的な成功を約束した。列島を分割するいくつものクニグニは互いに競争していたので、成長の手を緩めることはできなかった。

結果、そいつらは奴隷という立場の下で生物として空前の繁栄を遂げ、彼らを支配しているはずの者たちはいつの間にか米なしでは生きられなくなっていた。

何度かの衝突と、長い時間をかけて、二つの血は混ざり合い、いつしか互いを区別することも不可能になった。かすかに残った形質は民族を分かち特徴ではなく、ただの個性として片付けられるようになり、かつてそうでなかった時代があったことは忘れ去られた。

集団は一つになったのだ。

吸血鬼が速度と回復力への特化型だとすれば、俺たちは汎用タイプと言ったところだ。決まった名前も形もなく、ただ『鬼』とだけ呼ばれていた雑多な異形たち――

吸血鬼程のパワーやスピードは出せないし、回復力も弱い、代わりに弱点も少なく、日光を浴びても平気で、食事も普通の人間と同じでいい。……まあ、多量量はかさむが、成長期の男子高校生ぐらいの飯を食わせておけば人の何倍も働く。

軍隊風に言えば「運用上の柔軟性が極めて高い」というやつだ。

大勢で密集していても魔王化する恐れもなかったのも、当時は軍隊の構成員として重用されていた。おかげで先の渡洋戦争以外にも様々な戦役に動員され、武功を挙げることができた。

満つ満つし、というやつだな。大地に満ち溢れるような巨大な軍勢を讃える歌――

そんな俺たちの歴史を、女吸血鬼は皮肉と敵意を込めて要約してみせる。

「まったく、うまくやったものよね。はじめは倭の大王の親衛隊、その後は侍なんかもやってみたりして、今は討伐屋稼業？　こんなに上手に人間に化けてみせる化け物なんて、ほかに知らないわ。その手練手管で、今度はわたしたち吸血鬼まで人間どもの何かに取り立ててくださろうというわけ？」

「……俺たちは今の社会に完全に適応している」

俺はそう答えた後、一つ訂正する。

「それに化け物が人間の群れに紛れて人間のふりをしているんじゃない。俺たちこそがこの国の『人間』なんだ」

奇も街いもなく、ただ事実を指摘するだけの態度で俺は告げた。

「別に日本に限ったことじゃない。先祖を辿れば実は化け物だったなんて、今時珍しい話じゃないだろう。遣伝子工学の発展が、世界中で自分を昔からずっと人間だったと思い込んでいた人々の正体を暴きつつある。だがそれでいいんだ。ただ忘れていた過去を思い出しているだけだ」

習俗や集団の性格は時代とともに変わる。たとえ異民族や異文化が流入しなくても結局はそうなる。

もし今後、菜食主義者が世界の覇権を握って、あらゆる人類が肉を食わなくなり、かつて食っていた時代の記憶すら失われた後、彼らが何かの弾みで現代の人々の食事内容を耳にすればどうだろう。

きっと、それを恐ろしい異種族の風習だと思うのではないだろうか。

日本で言えば、かつて一般的だった入れ墨の習慣が、ある時期を境に非文明的――野蛮な行

いだと見なされ、次第に面積を縮小し、廃れていった歴史がある。

赤鬼、青鬼、黒鬼——それをそれぞれ一色ではなく、「赤を基調とした入れ墨を全身に彫った男」、「青を基調とした入れ墨を全身に彫った男」、「黒を基調とした入れ墨を全身に彫った男」と読み替えれば——何のことはない。縄文時代の自分たちのことだ。

当時はそれが珍しくもなかった。ヒトデやカサゴ、ウミヘビのような有毒動物に擬態して、サメのような危険な海洋生物から身を守るために、あるいは現代の人間が髪を染めたり、カラーコンタクトを入れたりして、より派手に個性を際立たせようとするように、彼らは全身に色鮮やかな文様を彫り進めていった。

鬼とは自分たち自身のことなのだ。

後の時代には怒りや病、死の象徴として扱われ、さも人ならざる精霊のように解釈されることもあったが、結局のところその生息は往年の習俗を反映している。

沖合いの小島に住んでいるのは当たり前だ。彼らは海洋民だったからだ。

人をさらっていくのは当たり前だ。彼らは奴隷貿易に関わっていたからだ。

強健と暴力性を謡われるのも当たり前だ。彼らは航海と戦争の民だったからだ。

あらゆる沿岸から富と財宝を集め、武威と栄華を誇っていたのだ。

しかし文字のない時代の記憶は長くは残らない。移動し続ける都が一ヶ所への定住を選び、習俗が変化するにつれて、自分たちがかつてそうだったことはいつしか忘れ去られた。

断片的な記憶は、他者の口を介して語り伝えられ、後の時代に、かつて自分たちがこの島国に連れ去ってきた人々の言い伝えから再構成したかつての自分たちの姿は、恐ろしげな怪物の姿をしていた。

だが雅やかな衣冠束帯を纏うようになって、結局は物語の聞き手も鬼の血を引く者たちだったのだ、心の底から怪物を恐れることはなかった。

時には自分でかつての自分たちを討伐する物語を思い描いて楽しむことさえあった。

鬼の子孫ならば、鬼をも打ち倒せると思えば当然だろう。

そういう物語は、世界中に無数にある。

「人類がはじめから人間と化け物に分かれていたんじゃない。ただ社会を築き、それに適応して、人間になった化け物と、それができずに荒野に取り残された化け物がいるだけだ」

そう言いながら隣に腰掛ける天野の肩を抱き寄せる。

彼女が大きな胸の前で左右の腕をきゅっと折り畳み、頬を紅潮させながら、目を丸くしてこちらを見上げてくる気配がした。

その視線を横顔で受け止めながら続ける。

「いずれ吸血鬼の中にも、俺たちの社会に適応する者が現れる。だがそれはお前じゃないし、八重香をお前の道連れにさせてやるつもりもない」

女吸血鬼はさも気に食わなさそうにじっと俺を見つめ、やがて嘆息した。

「……そう。ご立派ね。そうなることをわたしも祈ってるわ」
皮肉げな表情で天井を仰ぐ。

「まあ、でも、世の中絶対なんてないし？ そんな立派な彼君でさえ、うまくいかないことはあるかもしれない。そうだった時の保険は必要でしょう。だから、八重香ちゃん？」

両頬に頬杖をつき、そちらににっこりと笑みを向ける。

「もし彼でもうまく行かなくて、そしてもしその時あなたにその気があったら、わたしのところに来なさい。——いづれ消えゆく者どもの一人として、一緒に生きてあげる」

女吸血鬼との対談はそれで終わりだった。

彼女は情報提供を約束し、待ち構えていた捜査官たちがさっそく明日の作戦のために必要なことを聞き出していく。

俺と天野は役目を終え、拘置所の建物を出た。

帰り際、彼女がじっと意味ありげな眼差しでこちらを見上げてくることに気づき、振り向いて眉を上げてみせる。

天野は猫のような笑みを浮かべた。

「ああいう時は、信ちゃんも『八重香』って呼んでくれるんだねえ」

「……そりゃ呼ぶ時は呼ぶだろ」

「ふひひ」

「なんだよ、気持ち悪いな」

「あー、そんなこと言ったら怒っちゃうんだよう？ ふんふん」

「悪かったよ。冗談だ。本当は世界中で誰よりも可愛いって思ってる」

「えへ……」

しあわせいっぱいといった笑顔でこちらの腕に抱きついてくる。

その体のやわらかさとあたたかさを脳に刻みながら、俺は彼女と一緒にWRに向かって歩いていった。

日が昇り、早朝の影法師の背丈が小さくなるとともに山狩りは始まった。

大量の猟犬や警察犬、ドローンが木々の間に放たれ、その後を真言弾を装填したライフルを構え、腰には妖刀を提げた討伐屋の精鋭たち、同じくライフルやショットガンを携えた猟師、短機関銃や拳銃を握って彼らを援護する警官が続いていく。

この掃討作戦にはほかに陸自の三個大隊も参加していた。山岳を丸ごと包囲するにはとにかく頭数が必要なので、これは大助かりだった。さらにより大規模な部隊が、再封印が失敗に終わった場合に備えてこの地方を目指して移動中らしい。

吸血鬼問題が広域災害に発展する恐れがあると判明したのがやっと一昨日になってからなので、彼らは途中参加だったが、動員が間に合った部隊から順に送り込んできてくれた。ほかにも、大量の住人が一斉に吸血鬼化した場合に地域を丸ごと封鎖する準備を進めるなど重要な役割を果たしている。

長い間封印されていた吸血鬼の魔王が今にも目覚めようとし、その子孫どもが籠もる山を包囲した人間勢力は、一步一步前進して包囲網を縮めながら彼らを炙り出していった。

猟犬・警察犬の嗅覚とドローンの生体センサーが洞穴や茂みに潜む子孫を突き止め、そこに討伐屋を中心とする人間の混成チームが接近する。犬に追い立てられて物陰から飛び出した吸血鬼に、遠方から真言を刻んだ銃弾を撃ち込んで動きを止めると、近づいて妖刀で貫き、とどめを刺していく。

日陰が多く、複雑な植生や地面の起伏がある山岳地帯は本来、獣並みの身体能力を誇る吸血鬼にとって有利な地形だが、組織力と情報戦で圧倒的優位に立つ人間側は彼らにほとんど反撃の機会を与えなかった。

橋部さんたち地元猟師の案内で、土地勘のない他地方出身の討伐屋や陸自部隊も山の中を自在に機動し、そこに潜む子孫を一人また一人と仕留めていく。

山の裾野に開設された指揮所には県警のお偉いさんのほかに刑事さんやジジイも詰めて、それらの部隊に指示を飛ばし、事前に入念に調整された作戦を進展させていく。

昼過ぎには確認されたすべての子孫が山から一掃された。

というわけで俺と天野の出番だ。

「もう出てきて大丈夫だぞー、天野」

「——暑っっっい！ 息苦しかったようー!!」

魔王の眠る洞窟に入り、入り口の日差しから十分離れたところで地面に下ろされた人ひとりが入れそうな長方形の箱——ぶっちゃけ棺——の蓋をこんこんと叩いて呼びかけると、それが内側からガバツと開き、目張りした防護服を着込んだ天野が飛び出して、頭の部分の覆いを外して叫び声を上げた。

息苦しかったよう

息苦しかったよう

息苦しかったよう

……と、かなり奥行きがありそうな洞窟の中に彼女の声がこだまする。

俺たちの周りで、棺を担いでくれていた白装束の男たちが好意的に苦笑した。

昼間に天野を山の中をここまで運んでくるのにはそれなりの手間と苦労があったのだ。

いっそ夜まで待つという手もあったが、一刻も早く魔王を再封印したい（復活に伴う妖気の増大はいよいよのつびきならないところまで観測されていた）という政治サイドの要求と、もし子孫が何匹が残っていた場合（あの女が正直に情報を吐いたとは限らないし、あいつが知らない子孫が存在している可能性もある）、日が暮れたらかえってややこしいことになるという事情もあって、結局日中にトラックで行けるところまで行った後、二重の隔壁を持った棺型の容れ物に、もしもの時自分で走って日陰まで逃げる用の丈夫な防護服を着せた天野を入れてみんなで担いでいく運びとなった。

例の神主さんが、普段は山車を担いでいる担い手たちを引率し、先頭に立って山道を歩く俺の隣で祝詞を上げ続けてくれた。何かあった時に山の霊の加護を得られるし、魔王ともなれば時代が時代なら神と呼ばれていたかもしれないぐらいの存在なので、それなりの礼節も必要というわけだ。吸血鬼は単体では社会を形成できないが、人間の群れを支配したり、人間の国造りに協力することはある。

天野と一緒にお礼を言って、担い手たちが神主さんに連れられて来た道を戻っていくのを見送った後、ふたたび行く手に向き直る。

眠りから覚める寸前の魔王をなるべく刺激しないために、ここから先は二人で行くと決めた。

もっとも事前の偵察は済んでいるので危険はない。何体かの閉所探索用ドローンと、討伐屋の先輩たち、それに外村さんや警察・陸自の特殊部隊が、魔王の妖気に当てられないために時間制限をして交代で洞窟に入り、どこにも脅威が潜んでいないことを確認している。

要するに、ここからはただのピクニックというわけだ。

子孫たちは全員洞窟の外で人間の攻撃を待ち受けていたらしい。始祖に近づくのを畏れ多いと思ったのか、それとも戦いの喧騒で彼女の最後の安眠を妨げたくなかったのか。みんな殺してしまったので、真意は今となっては分からない。

天野が汗まみれの防護服を脱ぐのを手伝い、背負ってきたバックパックからタオルと替えのシャツを出して、汗をぬぐって着替えさせてやった後、歩き出す。

二人、手をつないで。

ここまでの行程とは打って変わった快適さも手伝ってか、天野は楽しげだった。

洞窟の中は多少湿っぽくはあるが、夏場でも程良くひんやりとしていて涼しく、地上の光の

届かない薄暗さも、偵察隊が残していつてくれたポータブル照明がところどころで灯っているおかげで、夜目の効く俺たち（さすがに吸血鬼である天野には敵わないが、俺だってなかなかのものだ）には障害にならない。

移動を制限されがちな彼女には、こんなことでも貴重な外出の機会なのかもしれない。

三十分ほど歩いて、封印の間に着いた。

一对の石柱にしめ縄を施された岩戸の傍らには侍の亡骸が——具足を纏ったまま白骨化した遺体が——転がっていた。

人ならざる妻を葬った後ここで力尽きたのか。

あるいは、ずっと一緒にいようと思ったのかもしれない。自分が死んでしまった後も……

石柱の間の地面を塞いでいた一抱え程の石蓋を天野と二人で持ち上げて外し、現れた階段をさらに下る。

突き当たりには人間の背丈の倍の高さの天井と、テニスコート程の広さの面積を持つ空間が広がっており——

——その中心に、魔王はいた。

なるほど西洋人らしい、当時はさぞ珍しかっただろう天然の金色の長髪。

何百年も、ことによると何千年も日光を浴びていないせいで、病的なまでに白い——しかし彼女を愛する者から見れば、十分美しいと思えたであろう肌。

瞳は晴れ空を切り取ったような色だそうだが、あいにくまだ眠っていて（本当に良かった）、閉ざされたままなのでこれは分からない。

内坂は『でかいの』と言ってたが、肉体の大きさ自体はいたって普通だった。どうやら彼女の体内に秘められた妖力を指してそう表現していたらしい。あるいは、本気を出すと肉体を巨大化させる怪異もいるが、彼女もそうなのかもしれないなかった。

その薄衣を纏った肢体が、背後の大岩に両手と、足から臀部までの下半身を溶け込ませるように封じられ、上半身を宙に突き出している。

確かに封印が解け、目覚める寸前であるらしい。心臓の位置から溢れ出る膨大な妖気が、血のような赤紫色の眩い光の帯となって可視化され、その鼓動とともに脈動して、空間を歪ませていた。

大岩の足元には、おそらく半世紀前までその回復を阻止していたのであろう霊剣が、錆だらけの姿となって抜け落ち、転がっている。

ぎりぎり間に合ったようだ。さっそく再封印に取り掛かろう。

腰の妖刀を抜く。

今回の拵えは、美名瀬を殺った時のやつをベースに、目釘の素材を高い韌性を持つ吸血鬼の牙に変えるなどしたゴリゴリの処刑仕様。宿した呪いの力があまりにも高威力すぎて、本来な

ら戦闘にもかえって使いづらい程の一切の抑制を省いた最大出力だ。

それでも魔王を殺し切るには足りない。基本的には神の奇跡が必要になる相手だからだ。だが、封印する程度なら十分すぎる。

魔王の妖気が引き起こす耳鳴り、それと張り合うかのような台風風の風切り音めいた村正の哄笑が周囲に響き始めた。

「天野」

「うん」

村正の切っ先を、大岩に括られている分、こちらから見ても少し高い位置にある魔王の心臓に突きつけながら呼びかけると、天野が柄を握る俺の手にそっと自分のそれを重ねた。

そして不意に——本当に脈絡なく——ぽつ、と頬を赤らめる。

「何だかこれって、『はじめての共同作業』みたいだよね」

「……ケーキ入刀に喩えるにはちょっと殺伐としすぎてないか？ 状況が」

こんな時でも天野の頭の中はピンク色で、恋だの愛だのに元気いっぱいらしい。たぶん良いことなんだろう。

気を取り直して村正を突き出していき、その切っ先が白い肌に潜り込む。

その時、魔王の瞼が薄く開いて、俺と目が遭い——そしてそっと微笑んだ。

たぶんだが、彼女は自分から封印されたのではないだろうか。自分と侍の子どもたちが、この地で生きていけるように——

束の間見つめ合いながら、俺はそんなことを思った。

彼女の瞳は、確かに俺と天野が後ろに置いてきた夏の空のような色をしていた。

刃が肉をかき分け、心臓に届く。

妖刀が歓喜の叫びを上げた。

周囲の妖気が収縮し、一気に刀の中へと吸い込まれていく。

魔王はふたたび瞳を閉ざし、眠りについた。安らかな表情で。

これ以降、俺たちの街で新たな吸血事件が起きることはなかった。

エピソード「幼なじみがくる！」

夜空を見ていた。あの時のような満天の星空……

周囲はにぎやかだった。着飾った男女や家族連れが行き交い、子どもたちの甲高い歓声と屋台の店主の威勢のいい掛け声が湧き上がる。

つまり、今夜はお祭りというわけなのだった。

俺は会場である神社の大鳥居の近くで天野を待っていた。

あれから街は平穏を取り戻した。

未確認の子孫の残党を警戒して二週間ほど様子を見た後、警報は解除され、方々から集まってきたいた警官や討伐屋たちは姿を消した。

人々は気兼ねなく夜外出できるようになり、吸血鬼の影に怯えることもなくなった。

猟師たちもそれぞれの地元に戻っていった。いろいろ世話になった外村さん、土屋さんとは、最後に再開を誓い合って別れた。

橋部さんはこの街の人間なので、今でも現場でちよくちよく顔を合わせている。今度、あの討伐のことで互いの思い出を語り合おうと、飯を奢ってもらえる約束になっている。

美名瀬の『親』——まだ八歳の子どもだった覚醒吸血鬼——の父親の猟師は、橋部さんの猟友会の顔見知りだったらしく、葬式には俺も一緒に出た。その後も何度か線香を上げに行っているらしい。

八歳児の方は既に処分された。殺ったのは先輩だが……俺と橋部さんはそっちの葬式にも出た。素直そうな、そして可愛らしい男の子の遺影が、仏壇に掲げられていた。

ジジイは出張に続く出張で、あちこち忙しく飛び回っていた。魔王復活と再封印の顛末は日本中で大ニュースになっており、刑事さんや県警のお偉いさんたちと一緒に、県庁や県議会、県公安委員会は元より、警察庁や法務省や防衛省、内閣情報調査室に総理官邸、果ては国会まで、化け物に関心と何かしらの責任を持つあらゆる官公庁に引っ張り回されては、説明や報告に追われているらしい。

近いうちに、再封印に当たって俺たちが取った作戦や戦術の効果を検証するための図上演習も、討伐協会と関係省庁の合同で開催されると聞いた。その準備も大変だろう。

結果的に被害を最小限に抑えられたとはいえ、それなり以上の大事件だったから、当事者の記憶が新鮮なうちにあらゆる関係者がそこから知識や教訓を引き出そうと群がってくるのは仕方ない。どんな戦も後始末に一番手間がかかるもんだ。

もつとも、それで忙しいのはどっちかというと管理職以上の面々だ。

俺も最初のうちはジジイの書類仕事の手伝いや説明用の資料作りで大変だった。だがこっちは、一度作ってしまった後はたまに入る修正をこなすぐらいで、することは少ない。

というわけで、ここしばらく俺と天野はまた家で二人きりの暮らしに戻っていた。

ジジイには悪いが、俺たちはそれをけっこう楽しんでいた。

朝ともに目覚め、二人で朝食を取り、俺は夏休みの補修で学校に行って（成績は問題ないの

だが出席日数が足りなかった)、家に帰ると天野がいて、また二人きりの時間を過ごし、夜は抱き合って一緒に眠る。

家にほかに人がいるとやりづらいことも憚りなくできる。声とか。声とか。

ジジイもいい大人だから、夜なるべく音を立てないようにする分には何も聞かなかったふりをしてくれると思うが、日も高いうちから発情期の猫のように騒々しくサカっていればさすがに文句の一つもつけてくるだろう。

ゆえに若い二人には、こういう時間とても重要なのだ。

時には討伐屋の仕事が入ることもあった。

と言っても、吸血鬼なんかと比べれば全然危険じゃない、野ねずみの妖怪(旧鼠というやつだ)が庭に住みついてしまっただけで飼猫が怖がっているだけで退治してくれだとか、公園の遊具がつくも神になって夜ひとりで動いていて、付近の住人から苦情が出ているので鎮めてほしい、というそこを管理している市の環境整備局からの依頼といった、他愛もない事件ばかりだ。

吸血鬼騒ぎがあつてみんな以前より怪異に注意を向けるようになったということもあるのだろう。討伐協会の広報によるとそういう細かい依頼は増えているらしい。

そういう時、俺は時には一人で、時には天野に経験を積ませる目的も兼ねて二人で出勤し、野ねずみは箱罠で捕まえて山に返し、つくも神の方は天野と二人でそいつらが満足するまで夜通し遊んでやって沈静化させ、帰って報告書をまとめて、後でジジイが読めるように印刷して書斎の机の上に置いておいた。

美名瀬討伐からこっち、ずっと慌ただしくしていたが、最近になってやっと時間が以前と同じ速さで流れ始めたような、そんな感じだった。

その日常が、それを天野と二人で過ごせることが、俺は嬉しかった。

さてそんな時に、今夜は夏祭りというわけだ。

例年神社で催されているものだが、今年は警報が発令されたせいで開催が危ぶまれていたところ、魔王が速やかに再封印されたことで今年もどうにか無事開催できる運びとなり、実行委員の人たちはずいぶん喜んでいて。地元の商店街の付き合いで俺もその会合に顔を出したが、大勢の大人たちから何度も握手を求められて、是非楽しんでいてくれと言われたぐらいだ。

もっともはじめは、家から天野と二人で来るつもりだった。

だが直前になって急な仕事が入ってしまった——これも全然大した事件ではなくて、何なら退治すべき化け物もないぐらいだったのだが——終わってから家に戻っていると花火の時間ぎりぎりになってしまいそうだったので、俺は現場から祭り会場にWRで直行し、天野は先輩のワンボックスに同乗させてもらって現地で合流することにした。

どのみち浴衣で単車は乗りにくい。先輩も家族で祭りに出ると聞いていたので、これさいわいと途中でうちに寄ってもらおうつもりだった。

結果的に天野一人を拾ってきてもらう格好にはなったが、こちらも仕事はどうにか時間通り

に片付き、待ち合わせの十分前には会場に駆けつけて、仕事道具と一緒に鞆に入れて持って出てきていた浴衣に着替えることができた。

さっき携帯にかかってきた話では、天野の着付けも先輩の奥さんが手伝ってくれたらしい。一人でやると、あの胸を浴衣の中にきれいに押し込むのはなかなか大変なのでありがたい。後でお礼を言わなくては。

天野はこのお祭りを本当に楽しみにしていた。何日も前からそわそわし通しで、俺が彼女の家から回収してきた浴衣を広げてみては始終にやにやしていたぐらいなので、仕事で行けない、なんて展開にならなくて本当に良かった。

家を出るところからお祭りだって？ それもその通り。幼なじみは行き帰りも一緒の方がいいに決まってるもんな。

昼の仕事もできれば断りたかった。だが立場上、そういうわけにもいかず――

と、そんなことを考えているうちに正面のロータリーに見覚えのあるキャラバンが現れ、停車する。

サイドドアが開くと同時に、先輩の一番下のお子さんが元気良く飛び出してきた。

「はううう、悠斗くん、走っちゃダメだよ」(๑๑)

それを後から出てきた天野が追いかけて、必死に抱き留める。

ぼるんぼるん、とんでもない勢いで揺れているでか乳に坊主頭を上から抑え込まれる形になった悠斗くんは、単純にそのやわらかい感触が面白かったというように乳くさい歓声を上げた。

こらこら、それは俺のだぞ。まったく……。

「んじゃ、俺は駐車場にこいつ停めてくるからよ」

「ありがと、あなた♪」

運転席の窓から言った先輩に、奥さんが日常生活で滅多に聞かないような甘ったるい声で応えて、頬にちゅつと接吻した。

キャラバンが発進し、天野が先輩を除いた先輩一家と一緒にこちらに歩いてくる。

その途中でこちらに気づき、ぱっと顔を綻ばせた。

「――信ちゃん！」

浴衣姿の天野が袖を摘まんでカランコロンと下駄を鳴らしながら満面の笑みで駆け寄ってくる。可愛い。

何となく予想しないでもなかったの、普通より三割方早く前に出ていたのだが、案の定彼女は慣れない下駄のせいで敷石の溝につまづいてすっ転びかける。

「きゃー(๑๑)」

悲鳴を上げた天野が倒れる前に、俺は踏み出してその体を受け止めて支え、ぎゅつと持ち上げて腕の中に抱き寄せた。

「は、はうう……」

狼狽と恥ずかしさと、たぶん俺に抱きしめられた嬉しさ（可愛い）で顔を真っ赤にして湯氣を立てた天野の頭を、ぐりぐりと優しく撫でる。

「気をつけろよー、天野。けっこう人も多いんだからな」

束の間、浴衣越しに彼女の体のやわらかさを堪能させてもらった後、少し体を離して続ける。「それと——待たせて悪かったな。今夜はもうずっと一緒にいられる。浴衣、きれいだよ」

「信ちゃん……」

いつもより少し大きめな薄紅色のリボンでポニーテールをくくった天野が、頬を染めて、透き通った黒い瞳を潤ませながら腕の中からこちらを見上げてくる。

灯籠や提灯の橙色の明かりに照らされた黒髪の艶やかな輝きと、薄っすらと紅を引いたぷつくりやわらかそうな唇に、俺は胸の奥がどきどきした。

——いかん、もうノックアウトされてしまいそうだ。

なんで俺の天野はこんなに可愛いのか。

俺のポーカーフフェイスを破壊しようとする神々の陰謀に違いない。

「もー、やえかお姉ちゃん、走っちゃだめだよ」

とてとてと駆け寄ってきた悠斗くんは、さっきの意趣返しという風でなく、真剣にそう思っている様子で言った。たぶん、自分よりも天野の方をおちよこちよいで守るべき対象と思っているのだろう。

いい子だな。

そこに奥さんと上の二人の兄妹も追いついてくる。

「あらあら、阿曇さん。主人がいつもお世話になっています」

「いえ、こちらこそ先輩には世話になりっぱなしです。今夜も、天野のこと送っていただいてありがとうございます」

やわらかな物腰で会釈する奥さんに、こちらもぺこぺこ頭を下げてあいさつを返した。

「わたしたちは家族で回っていますので、お二人もどうぞ二人きりで楽しんでくださいな」

「ばいばい、お姉ちゃん」

訳知り顔で、ほほほ、と笑う奥さんと、顔を見合わせる上の兄妹、小さな手を振る悠斗くんに手を振り返して、俺と天野は手を繋いで祭りの会場に入ってしまった。

境内の敷地や参道を利用して開催されている祭りの会場は、毎年そうであるように無数の出店と大勢の人々でにぎわっていた。

そこにいるだけで気分が楽しくなっていくようなその場所を、天野と二人見て回る。

そういえば、彼女と祭りに来るのはいったい何年ぶりだろう。

小さい頃は毎年楽しみにしていたはずだ。天野とここに来ることを。親に小づかいをねだり、

二人でたっぷりと遊んで、ふわふわとした興奮の余韻に包まれながら、来年もまた一緒に来ようねと約束を交わし合っていた。

疎遠になる前の最後の年に来た時もそうしたはずだ。

その時は破ってしまったが、結局何年越しかに約束を果たせたことになる。

当時と比べるとずいぶんと背も伸びて、見た目も所作も女らしくなってしまった幼なじみの隣に立ち、あの時と同じように射的や金魚すくいを楽しむ。

食い物に関しては――あの時と同じではまずいだろうな。

俺は何度目かの屋台の前で立ち止まり、鉄板の上で焦げ音を立てる焼きそばを示した。

「大丈夫か？ 腹減ってないか？」

「もうっ、信ちゃんってば、さっきからそればかり！ わたしのこと、いつも何か食べてばかりいる女の子だと思ってるんだから」

気を使ったつもりだったがお冠らしい。

天野はぷりぷりと頬を膨らませて（可愛い）言った。

「いくらわたしでも、せっかくのお祭りデートの時にまでそんな食い意地張らせたりなんてしないよう」

そして大きな、とても大きな胸をまたバルンと揺らしてドヤ顔で胸を張る。

「それに、今日は途中でお腹が空かないようにと思って、うちを出る前にお茶漬を五杯も食べてきたんだから。今夜はもうお淑やかな女の子が準備万端です」

五杯ということは、おそらく茶碗ではなくどんぶり換算だろう。確かにそれぐらい食べばしばらくは持つ気もするが……

ダメだな、どうしても天野のこととなると必要以上に心配性になってしまふ。

気を悪くさせてはかえって悪いから、自分でもなるべく抑えるようにはしているのだが……。

「そのカップルさんたち、イカ飯どうだい！ おいしいよー!!」

その時、隣の屋台のおっちゃんが片手をメガホンにしてそう言い、ぱたぱたと団扇を煽いだ。そして網の上で焼けるイカの香ばしい香りがおっちゃんの立てる風に乗ってここまで漂ってきた瞬間、ぐぐうううう……、と地獄の底から這い上がってくるような重低音が、浴衣に包まれた天野の可愛らしいお腹から、祭りの会場中に轟かせるかのような大きさを響き渡ったのだ。

「ううー、ごめんねえ、信ちゃんー。お祭りデートの時までこんな食いしん坊な女の子、嫌だよねえー」

天野がしくしくと涙を流しながら串に刺されたイカ飯をもりもりと頬張っていく。

とりあえずそいつを五人前と、焼きそばやた焼きもどきと買ひ込んで、俺たちは人混みから離れた木立の側の腰掛けへと退散してきた。

「いや、大丈夫だって。そういうこと考えるのはたぶん女だけだ。男の方はそんなに気にしてないから。少なくとも俺はな」

そう慰めながら、ベンチに腰掛けている天野の前に膝をつき、口元の食べかすを手ぬぐいでぬぐってやる。

「うう、信ちゃん——」

それでもまだ落ち込んでいる天野の不意を打って唇を重ねた。

彼女の指から力が抜けて落としてしまったらまずいので、左手で一緒にイカ飯の串をそっと握ってやりながら。

イカは香ばしく焼き上がり、中の飯はスミで味付けされているだけでなく、たっぷりの肝まで使って一緒に炊き上げてあるようだった。

正直縁日の屋台飯とは思えない出来栄えだ。今度家でも再現してみよう。

イカスミにはうま味成分であるアミノ酸が大量に含まれている。もちろん肝も吸血衝動の抑制にとっても良い。

今夜の天野の唇は、その味がした。

人が来ないうちに唇を離し、天野のまん丸に見開いて上気する瞳をじっと見つめる。

「信ちゃん……」

「好きだぞ、天野」

いつかの夜のようにぼうつとした表情で頬を赤らめている彼女を見上げ、その頭を優しく撫でてやりながら俺は言った。

「愛してる。こんなにきれいで可愛くて、たくさん飯を食べてくれる天野のこと、全部な」

「……うん」

一瞬空腹も忘れた様子で、真っ赤になってうつむきながら、天野は答えた。

「わ、わたしも愛している。信ちゃんのこと——」

言い終えて顔を上げると同時に、夜空に大輪の花が咲き、美しく紅潮した天野の微笑を様々な彩りの光で色鮮やかに照らし出した。

どうやら意外な穴場だったらしい。周りに人気がない割に、ベンチに並んで腰掛けると、正面の木立ちの間からは次々と打ち上がったのは夜空を染める花火の輝きが良く見えた。

屋台飯を食べ終えた天野は、びたりと体をこちらにくっつけて、肩に頭を預けてくる。

その体温と、体のやわらかさが浴衣の上から感じられて心地良かった。

華奢でふわりとした肩を抱きながら、一緒に花火を眺める。

咲き誇ってはすぐに消えてしまう色とりどりの光たちを。

しばらくの間、どちらも言葉を発しなかった。

互いの存在だけを感じていたというように、黙々と花火を見ていた。

この時、天野は何を考えていただろうか。

夜空に咲く光に照らされるその横顔に、純情な乙女のような恥じらいと機嫌の良さ以上の感情は伺えない。

俺とのこと。これまでのこと。これからのこと。

彼女のことから、ただ無心に花火の美しさと俺の体温を味わっていたのかもしれない。

俺は――

結局、天野を救うことはできなかった。

――そんなことを考えていた。

先程の天野の様子を思い出す。

人の血を求め、けれどそれを飲むことはできないから、すぐにお腹を空かしてしまう彼女。

魔王を封印しても、既に覚醒した血は元に戻らない。

天野は吸血鬼のままだ。

本当は、少し期待していた。

予想ですらない。本当に、ただの夢想、願望でしかなかったのだが……

通常、吸血鬼と混血した人類が覚醒する確率は小さく、魔王の復活に伴うそれはさらに前例がない。

人類はそれについてほとんど何も知らないに等しい。

だから、俺たちが気づいていない何かの因子がどこかに存在していて、それが働くことで、

魔王の再封印を果たしたら、天野を人間に戻せるのではないか、と――

そうすれば天野は吸血への誘惑に怯えることもなくなり、ただの人間の少女に戻って、ふたたび日差しの下を歩けるようになり、以前と同じ日常を送っていいのではないか、と――

もちろん、そんな都合のいい現実などどこにもなく、あの後も彼女の血液検査の数値は残酷なまでに何も変わらなかった。

あたかも、最初に覚醒への刺激を受けた後は、魔王と天野は完全に別々の個となってしまう、互いに何の影響も及ぼさなくなったかのように。

だから……結局、俺にできたのは彼女の嫌疑を晴らすところまで。

その後はただ巻き込んで、逆にこっちが助けられただけで、彼女のためにできたことは何もなかったことになる。

何度か夢を見た。

朝目を覚ましたら、人間に戻った天野がカーテンを開けていて、眩い日差しの中でこちらに微笑みかけているのだ。

これから先、決して見ることはできないだろう光景。

そして現実で目を覚まし、嚴重に目張りして雨戸を閉め切った部屋の中で、天野が暗がりの

中で愛らしい両目を輝かせて微笑んでいるのを見て、どこか絶望的な気分になりながら、それを押し隠して微笑み返し、唇を重ねる。

あたかもこれが、かつて彼女を突き放した自分の過ちに対する報いであるかのように。本当はもっと、光の中で彼女を見ていたかった。

輝く日差しの中で、その髪を、瞳を、笑顔を輝かせる彼女を見たかった。

奇跡はなかったのだ、天野はこれからも太陽の日差しを浴びることはできず、リモート以外では学校にも行けず、夜間も外出には討伐屋の監視を兼ねた同行が必要で、決して癒されることのない血の飢えに苛まれ続ける。

そしていつか、何かの間違いで人の血を飲んでしまった時は――

それで理性のない怪物になってしまった時は――

討伐屋に――おそらくは俺に殺されるのだろう。

――彼女が望んだ通りに。

魔王は……仮に封印されたのが本人の意思なのだとしたら、自分の子孫と人間について、どんな関係を期待していたのだろう。

どんな風に生きていけると思ったのだろう。

最近よくそんなことを考える。

彼女を再封印した後すぐ、郷土史の研究者と話をする機会があった。

昔からこの地域の古い土豪の屋敷跡からは、地下に座敷牢を建設している事例が異常に多く見られたらしい。

今まではその理由が分からなかった。ここではそれほど多くの私刑監禁が行われていたのか？　だが他の地域に比べて特段治安が悪化していたようには思えない。しかも、なぜわざわざ地下に――

魔王の件を討伐協会から伝えられて、すぐに合点がいったそうだ。

昔の座敷牢、既に遺跡となっているそこで採取されたDNAを分析した結果、繋がれていた人物の多くは、平均的な日本人にしては、色素が薄かったことが分かった。

間違いなく魔王の血統。今よりもずっと血が濃かった時代に、運悪くその形質を多く受け継いで生まれてきてしまった者を閉じ込めておいたのだろう。

彼らは吸血鬼として覚醒次第、あるいは兆候があればその以前から牢に入れられ、決して表には出されない。

懸命になって存在を隠そうとしたのだろう。日差しと人目から――。彼らが、そして自分たちが、当時世界中で猛威を振るっていた吸血鬼狩りの標的となることを避けるために。

神さまの昔話ではあたかも封印を境に完全に覚醒が止まったかのように語られていたが、それは昔話的な簡略化だ。現世への干渉を最小限にするために、神さまはそのようにしか遠い過

去を語れない。村の翁媼が代々語り継いできたおとぎ話という体で人間に聞かせるのだ。

たとえ魔王が封印されても、覚醒確率が普通の吸血鬼のそれと同じぐらいまで下がるだけで、最初の何世代かのうちはそれなりの確率で覚醒する者が生まれていた可能性が高い。

そしてそういう者は、高い確率で、魔王と同じ金髪碧眼をしていたのだろう。

政治的判断というやつで、人間が魔王と交わっていた事実は当面の間、関係者以外には隠匿されることになった。八歳の男児が吸血鬼化した理由は不明、ただし警察が吸血痕を見逃していた可能性はある——そう公表された。

つまり覚醒したのではなく、誰かに囁かれてそうなったのだと世間が考えるように誘導したってわけだ。

そりゃ当時は子孫たちや内坂のような吸血鬼が大勢この街に集まっていたし、可能性だけならいくらでもあるので嘘は言っていない。いずれにせよ遺体は防疫の観点から速やかに火葬されてしまったので、誰かが今から真相を暴こうと思っても不可能だ。

今度、県警の捜査に問題がなかったかについて世間様と公安委員会に申し開きをするための分厚い報告書も出るそうだ。いつも貧乏くじばかりだ、と刑事さんはボヤいていたが、結局は政治の要請に従った。

先の研究者も、今後十年間は学会や論文発表を控えてくれるらしい。討伐協会との情報保全契約でそうなっているんだとか。魔王の交配について情報提供を受けた見返りだそうだ。

永遠に隠し続けることはできない。だが、人々の耳目が集まる時期を避け、情報を衝撃が伴わないように小出しにしていけば、関心を持つ人間を最小限にすることはできる。

ジジイの出張でもそのところは限られた人間にしか伝えていない。一度国会中継を見物してみたが、一度も繁殖の件には触れていなかった。おそらく野党にも、それに関する質問はないよう事前に根回しが行われている。

覚醒吸血鬼が一体だけなら、それは通常の確率の範疇だ。

それが起きたのは偶然であり、魔王復活のタイミングと重なったのもただの偶然であり、復活の影響は——あったかもしれないが、そうでなかった場合と明白な差異が認められない以上、憶測の域を出ない。

だから……人々が自分や隣にいる誰かが、ある日突然吸血鬼になるかもしれないなどと恐れる必要はない。

天野の存在は宙に浮き、吸血鬼の魔王とこの国の人間の間にかつてあったいかなる過去とも関連はなく、ただ不運な少女が一人いただけだと片付けられた。

重要なのは、不運なのは一人だけだということなのだ。

魔王の判断は正しい。

結局のところ、覚醒しないことがすべてなのだ。吸血鬼として目覚めさえしなければ、吸血鬼の子孫であっても人間として生きていける。

この土地には天野以外にも魔王の血を引く人間が大勢いる。

彼らは今後も生き続けるだろう。自分たちの祖先に、強大な力を持った吸血鬼がいたとは、夢にも思わずに――

では、既に覚醒してしまった者は？

駆除されるしかないのだろうか。美名瀬の『親』――自分の父親によって血を与えられていた少年のように。

それとも過去の魔王の子孫たちのように、座敷牢かどこかに閉じ込められて、監視されながら、昼の日差しを避けて生きていくべきなのか。

魔王の吸血鬼側の子孫――吸血鬼に噛まれて吸血鬼化した人間が、また別の人間を噛むことで連鎖と伝えられていくもう、一つの血統――は、どうやって生まれたのだろうか。

魔王が噛んだのだろうか？ 血の飢えに耐えられず、あるいは何かの戦闘で負った傷を癒そうとして？ そして吸血鬼化した獲物をあらためて殺し切っておく余裕もなくて、そのまま野に放ってしまったのだろうか？

それとも人間側の子孫の中の一人が、ある時、地下牢を抜け出し、不運な誰かを噛んでしまったのだろうか。そこから吸血の系譜が広がっていったのか。

その場合は『始祖』は魔王ではなくそっちだということになるが……長い時間の経過と歴史の混乱で、吸血鬼たちの間に自分たちの起源が誤って伝承された可能性はある。

封印する前に、それぐらいは訊いてみても良かったかもしれない。少なくとも一人は、それを気にしている奴もいたのだから。

けれど、だいぶ切羽詰まっていたことを考えると、やはり訊く時間はなかっただろう。

拘置所での対談で、女吸血鬼は人間と自分たちを『交わってはいけない存在』と言った。

それはまあ、その通りなのだ。結局は将来に禍根しか残さない。

だが、やってはいけないと言われること程ついついやってしまうのも、人間の性というやつだろう？

さもなくばこれほど多くの禁忌破りの物語が生み出され、語り継がれることはなかったはずだ。

神さまは血筋を残せと言っていた。さもなくば殺し合うこともできないから、と。

だから――きつとそれでいいと思っていたのだろう。

大いに禍根を残し、今回みたいな大騒ぎを起こしながら、流血と惨劇にまみれた歴史を紡ぎ続けていくがいい、と。

それでも神さまたちは、きつと人類が大好きだから、と――

天野はもう人間には戻らない。

だがそれは俺にできることが何もないことを意味はしない。

ひとまず子どもはたくさん作ろうと思う。

天野もそれを望んでくれるからというだけでなく、何をするにも、将来何が起こるとしても、彼女の味方になってくれる人間は少ないよりは多い方がいいからだ。

もちろん天野にはたくさんの友だちがいる。気にかけてくれる多くの知り合いがいる。

だが、彼らは皆人間だった頃の知り合いだ。

吸血鬼と人間では流れている時間が違う。今どれほど気にかけてくれていても、彼らはいずれ寿命で天野よりずっと早く死んでしまう。

それは俺も変わらない。人間になる前から、ただの鬼の寿命は人間と大差なかった。ジジイを見る限り、八十歳ぐらいまではびんびんしていられるんだろが、百二十を超えることはないだろう。

そうなれば、後は天野には吸血鬼になってからの知り合いしか残らない。

持ち前の人当たりの良さでそちらと深い友情を結ぶことも決して不可能ではないだろう。それでも、やはり寿命の違いという不利は大きい。日中外を出歩くこともできない、同じ時間を共有できないのでは、親しくなるにも限界がある。

そんな時、血の繋がりがあり、産まれた時からお互いを知っていて、同じ家で暮らしているという事実の助けがあれば、その限界を多少なりとも超えやすいのではないかと思う。

天野を守る防壁も必要だ。子どもたちが、そのうちの何人かが討伐業を継いでくれれば、そしてそれを何世代も繰り返していけば、自然とそれが「ちょっと頭のおかしい連中」や、他の脅威に対する抑止力となり、防波堤となるだろう。

産まれる前から将来を決められているようで申し訳ないが、そのための大量生産だ。十人二十人と作っていけば、確率的に言って、何人かは討伐屋が面白いので家業を継ぎたいという子どもや、自分で進路を考えるのは面倒臭いので親が決めてくれる方がありがたいという子どもが産まれるはずだ。

『教会』も今はやる気をなくしているそうだが——これからずっとそうなのかは分からない。備えなくてはならない。いつか起きるかもしれない危機に。

実はそのことに關して、今日一つ動きがあった。

ニナの上司の人——つまり、日本のこの辺りに教会が張り巡らしたスパイ網を統括する大物スパイと会食することになったのだ。

紹介状の差出人は日本国政府外務省。

何でも某国の大使館経由で話が来て、魔王の再封印の件で借りを作ってしまったので断

り切れなかったのだそうだ。

胡散臭い微笑みを浮かべる香港出身だというスーツ姿の糸目美人と、見るからに不機嫌そうな様子の我が国のでっぷり太った巨漢の政治家先生と料亭の座敷で向かい合い、スパイと付き合うとはこういうことかと思い知りながら胃の痛い時間を過ごす羽目になった。

糸目美人側に同席した二ナが、とても申し訳なさそうな表情でこちらを見ていたのが印象に残っている。

会談の内容自体はいたって普通だった。向こうは我が国の討伐業界に興味を持っていて、普段どんな仕事をしているのだとか、これまでどんな仕事をしてきたのかといったことを質問してきて、俺が答える感じだ。

今日は顔見せのつもりだったのだろう。特に面倒な話をされということもなく会食は終わった。

料亭を出る時、大物スパイはとても満足そうな表情で『あなたの人柄が知れて良かった』と言っていた。

収穫があったお礼のつもりだろうか。もし天野を狙う、非合法な何者かの動きを教会の情報網が察知した時は、二ナかほかの工作員を通じて必ず連絡するとまで言ってくれた。

巨軀の政治家先生が不機嫌そうに言うには、これについては信用していいそうだ。

親切すぎて逆に胡散臭いが、この際、利用できるものは何でも利用するべきだろう。

そして利用し続けるためには……やはり天野には、血の繋がりが必要だ。

存在し続けるものが。

未来へと受け継がれていくものが。

世代を超えて彼女を守り続けてくれる何かが。

そして人類の歴史上、そんなものは宗教か血族ぐらいしか存在しないのだ。

俺と天野の間に子どもが産まれて、やがて孫もできて、その孫がまた子どもを作って、天野の血筋をどんどん増やしていく。ジジイの言葉に乗せられたわけではないが、ふたたびあの空っぽの家を人の声と気配で溢れさせていこうと思う。

たとえ俺が死んだ後でも、親戚の数にだけは不自由しないはずだ。

そう願っている。

それでも、体流れる時間の違いが、天野と彼らの間にいつしか分厚い壁を作ってしまうこともあるかもしれない。

そんな時は同じ吸血鬼として、彼女が話し相手にでもなってくれればいいと思う。

遺伝子の系譜か、吸血の系譜かという違いはあるが、どちらも同じ魔王、少なくともそれに近い者から発生した裔^{すえ}同士だ。何かしら通じ合うものもあるだろう。

保険は必要——確かにその通りなので、彼女の申し出は俺にとっても渡りに船だった。

あの女がこれから先、何年生きられるのかは分からない。だがあの様子なら、これからも相当長く生き続けるだろう。動物園の檻の中の動物は、大抵の場合、野生動物よりもずっと長命な傾向がある。

ともに生きてほしいと思う。もしも、何もかもがうまく行かなくて、俺が失敗した時は。するつもりは、さらさらないが——

「……ねえ、信ちゃん」

その時、天野が、こてん、とこちらの肩に頭を乗せてきて、俺は考えるのを止めた。

「わたし、今とてもしあわせだよ？　大好きな人が側にいてくれて、一緒にこんなきれいなものを見れるんだもん」

俺は振り向いて、微笑みかける。

「そっか」

「うん」

満ち足りた表情で顔をすりつけてくる。

結局、救われてるのは俺の方なのだろう。

天野が笑ってくれるから自分が間違った方向に進んでいないのだと確かめられる。

天野がしあわせそうにしてくれるから、自分のしてきたことにも意味があったのだと信じられる。

天野の存在が進むべき指針をくれる。

もう一度、唇を重ねた。

夜空を彩る色とりどりの花火たちに照らされながら、俺たちはいつまでも互いの体温を感じ続けていた。

花火の後も、俺たちは二人で手を繋いで、夜店を見て回った。

祭りの会場にはたくさんさんの知り合いの姿があった。

一番多いのはやっぱり天野の友人たちだ。

うちの高校の生徒はほとんど全員来ているらしく、友人同士で、あるいは恋人たちで会場を練り歩いて、天野と出会うたびに歓声を上げ、一緒に買い食いしたり、スマホで記念の写真を撮ったりしていた。

いつかの下校中に天野に際どい質問をかました女子グループは再会できた喜びのあまり代わる代わる彼女を抱きしめ、危うく子どもをさらっていく悪戯な妖精のように俺の元からどこかへと連れ去ってしまうところだった。

WRを押してくれた男子たちは男子同士で金魚すくいやヨーヨー釣りを長いこと熱心に楽し

んで過ごした後、やがて別の女子グループと出くわし、そのまま意気投合して、一緒にご当地アイドルが出場中だという野外コンサート会場の方へと歩いていった。

家畜の血のソーセージに、女吸血鬼との決戦場の提供にと度々便宜を図ってくれた農場の一人息子は自分の家の屋台を手伝っていた。俺と天野はあらためて彼にお礼を言って、農場で潰したばかりの家畜を使っているという新鮮なモツ煮を買った。

次いで俺の仕事仲間。

橋部さんはお孫さんらしい小さな男の子が自分の真似をして射的をするのを見守りながら、地域の討伐屋の代表であるうちのジジィ（代表なので、今夜も少しでも顔を出す時間をどうにか捻り出した）と談笑していた。

西崎さんはモテないと言っていたくせに、ちゃっかり会場でナンパを成功させたらしく、はじめて見る妙齢の女性と一緒にかき氷を食べて口の周りをメロン色にしていた。

先輩が無事合流したらしい先輩一家とすれ違った時は、先輩と奥さんがこちらの仲睦まじげな様子を見て揃ってウインクしてくれた。

忘れてはいけない、吸血鬼退治中、何度も一緒に仕事をした警察の人たちは、今夜も祭りのため要所／＼で交通規制や雑踏警備をしてくれていて、俺と天野の姿を認めると、にこりと笑って手を振ってくれたり、意味ありげに眉を上げたりしてくれた。そのうちの一人は俺に、刑事さんが最近俺に会えずにさみしがっているから、今度一緒に飯でも食ってやってくれと教えてくれて、うっかり開きっぱなしになっていた無線で聞いていた刑事さんから小言を言われていた。

ニナの姿も見かけた。うちに連れて来たのがきっかけで仲良くなったらしく、あの男女のクラスメートと一緒に、浴衣姿で、たぶんはじめて参加する祭りの会場のにぎやかさに目を丸くしながら夜店を回っていた。

神さまはいつものようにちびっ子の集団を引き連れ、思い思いのお面をつけて遊び回っていた。全国全幼児のお姉ちゃんを称する女神から手ずから屋台での遊び方を教えてもらった子どもたちは、型抜きの様子を見物して歓声を上げたり、自分も挑戦してみたりしていた。

「それからね、八重香ちゃん。お父さんたち、帰ってこれるそうよ」

一緒にあいさつをしに行った時、神さまにそう言われて、天野は目を丸くした。

「向こうでの仕事が終わって、お祭りに間に合うって」

天野が、ぱっ、とこちらを振り向いた。俺は笑ってうなづく。

二人で神さまの下を辞し、踵を返して、会場の入り口へと向かった。

来た道を舞い戻る間も、天野の歩調は少しずつ速くなっていった。それに合わせながら、いくつもの緑日の屋台、幾人もの人々の間を通り過ぎ、遂に鳥居の向こうにそれが見える。

ふわり、とポニテが揺れた。

「パパ、ママぁー！！」

天野が泣きながら駆けていく。
彼女がまた転んでしまわないように、
そうなった時はすぐに支えてあげられるように、
俺は後を追いかけた。

了

本書の画像はすべて Stable Diffusion「WAI・ANI・PONYXL」(https://civitai.com/models/404154/wai_ani_ponyxl?modelVersionId=1767402) を使用して作成されています。